

289-038



1200500732272

9
38



始



KI 4S-54

289
0.38



和一郎先生傳



學過子歲
術魁第人



幸一題





正三位勳二等 東京帝國大學名譽教授 醫學博士 故岡田和一先生

岡田和一先生遺墨



昭和六年十一月廿二日入澤博士歸國に



大正十五年四月廿一日日本醫學會紀念會爲め





明治廿八年一月二日清日戰役從軍當時の先生



明治三十一年一月六日伯林に於ける先生



明治廿九年三月廿六日歐洲留學を命ぜられた直前の先生



明治十四年十一月三日先皇及御家一族



大正六年三月二日回洋行當時時に青にて 先生りよ左 清三郎氏、和子さん



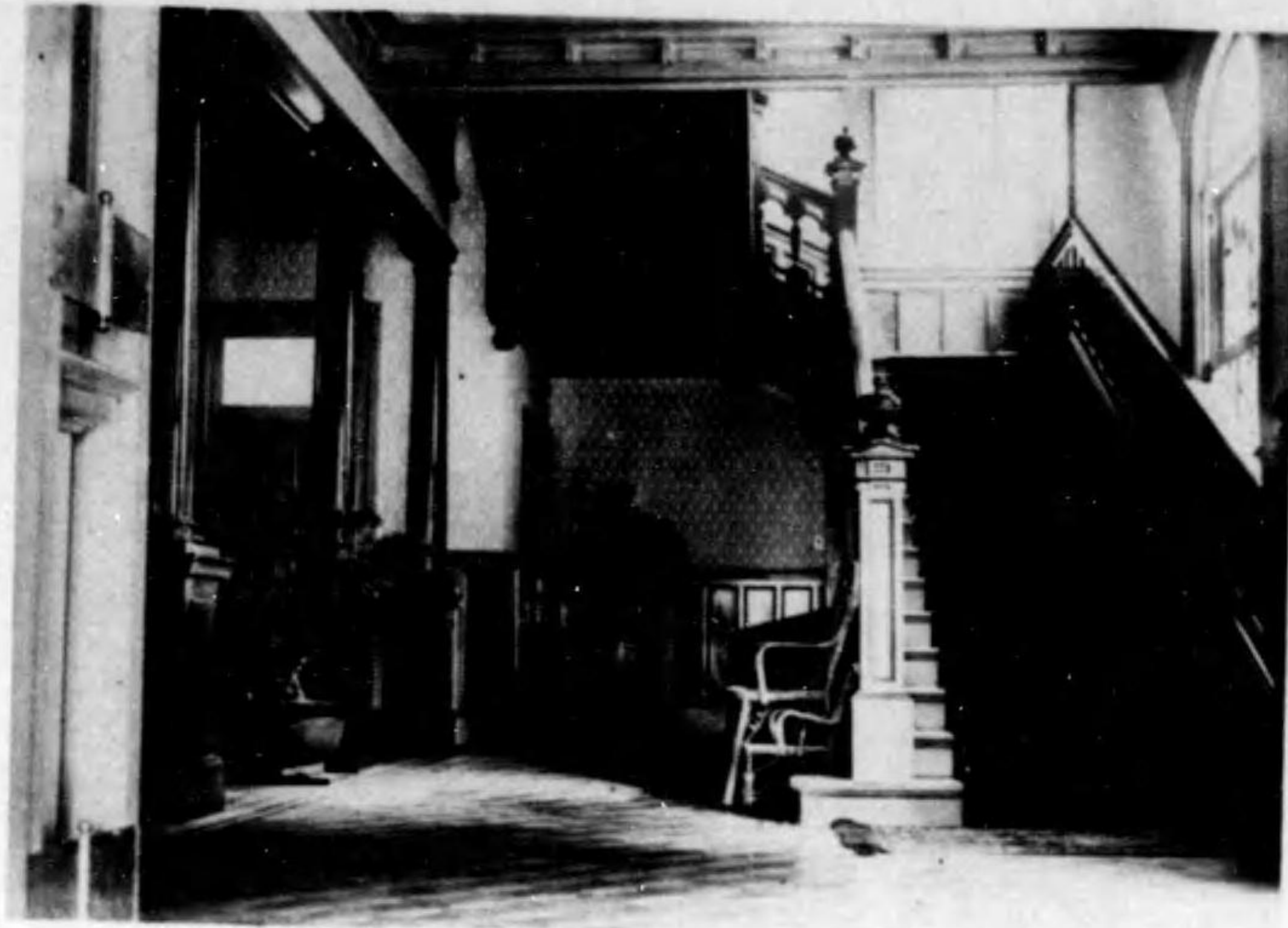


影撮念記の時當宴夜御皇天正大年三正大



妻夫御生先月四年五和昭





(工竣年三正大 工起年元正大) 邸本御の町麴



序

東京帝國大學名譽教授正三位勳二等醫學博士岡田和二郎先生が昭和十三年享年七十五歳を以て薨去せられてより茲に五年。先生の我國醫界の先達泰斗として本邦文化の黎明期を善導し明治大正昭和の三代に亘り國家並に學界に貢獻したる功業は其專攻とせる本邦耳鼻咽喉科學の開祖權威として斯學をして磐石の重きに置き今日に見る如き燦然たる盛況を現出せしめたる功績と共に世人の普く知る所、斯學の今日あるは之れ一つに先生の多年に亘る薰陶と指導との賜に外ならないのである。

されば先生七十有五年の生涯は本邦耳鼻咽喉科學の發達の歴史そのものであり又宛然本邦醫學發展の歴史の觀がある。

先生は元治元年伊豫西條に生れ明治十二年志を立て、東都に上り當時の東京大學醫學部に學び二十二年其業を卒へ直に醫科大學助手を命ぜられて第二醫院に入り佐藤三吉教授の下に外科學を專攻二十八年助教授に任ぜられると共に翌二十九年耳鼻咽喉科

の主任候補に推され歐洲留學を命ぜられてフレンケル、ルーツエ教授等に師事研鑽すること三年、三十二年歸朝直ちに耳鼻咽喉科講座を開いて三十五年教授に陞任爾來大正十三年停年退職に至る迄實に二十八年有餘の長きに亘つて我東京帝國大學耳鼻咽喉科教室を主宰し又屢々歐米に派遣されては其得意とする自家考案の新手術法式を發表して彼我學者間の親和を圖り又内に在つては大學の研究の傍ら明治三十五年以來薨去に至る迄三十有七年の長きに亘つて大日本耳鼻咽喉科會の會頭として本邦専門學會をよく統率して今日に見る如き蔚然たる一大學會を爲したのであるが、教授退官の後には又昭和醫學専門學校を興して自ら其の校長として後進を導き醫育に盡瘁せられたのであつた。此の外先生が醫育醫政は勿論其他各種の國家的社會的事業に盡されたる事蹟も亦多大であつて弱冠にしては東京醫學會の創立を圖り壯年にしては日本醫學會を興す等其他各學會の創立に當つて先生の關與せるもの十指を以てするも尙ほ足らざる有様にて就中我日本醫學を東亞の隣邦に光被せしめて以て善隣和衷の實を挙げむとして創設せる同仁會の如きは其身自ら理事長の要衝に當つて具に辛酸を嘗め能く其大を致

せるものであるが、東亞復興の業着々としてならむとせる今日、之が夫の我大陸文化工作の主要な國家的事業となれるを想へば先生の達見一つとして正鵠を得ざるはなしと言ふべきである。先生は單なる學究に非ずして世を救ひ國を醫するの眞の國手であつて平常偷安を屑とせず人生死す迄活動す可きをモットーとし、實踐躬行時も休む間もなく國家社會將た學界の爲めに盡瘁せられたのであつた。而も其間人の言を能く聽き清濁併せ容れて常に春風駘蕩先輩知己の世話後進子弟の薰陶に多忙の身をも顧みず盡されたのである。

茲に追慕の念止み難く先生を師父として敬親せる門弟一同相諮つて先生の偉大なる足跡を記録に留めむと議決し特に先生の親友たる近藤次繁博士を煩して其主班に戴き以て本刊行會を成して先生の傳記刊行の業を起し其資料を未亡人の保存せる文書並に東京帝大醫學部圖書室所藏の諸雜誌に據り其編纂を日本醫事新報社に託して以て此處に本記の上梓をみるに至つたのである。然るに先生活動の明治大正昭和の三代の長きに亘れると又其活動領域の多角的なると更には編纂期間の短時日なりしとは編纂者の

氣付かざる遺漏なきを期し難くこゝに大方の諒恕を乞ふ所以である。
茲に本書成るに當つて敢て蕪言を列ね以て刊行の辭となす次第である。

四

昭和十七年五月

岡田和一郎先生傳記刊行會

岡田和一郎先生傳 目次

扉題字	侯爵 大隈信常氏
題字	侯爵 木戸孝一氏
序文	一—四

第一章 出生とその環境

一 誕生と家系	一
二 嚴父と家族	五
三 西條氣質(地理的歴史的環境)	六

第二章 幼少時代

一 幼年時代	一五
二 立志時代	一六
三 上京から豫備門入學まで	一六

目次

一

第三章 東京に於ける學生々活

- 一 東京大學醫學部豫科時代……………一九
- 二 東京大學醫學部本科時代……………三二
 - 1 嚴父の死と臥龍館時代……………三三
 - 2 東京大學醫學部より帝國大學醫科大學へ……………四六
 - 3 大學の後半期……………五三

第四章 醫科大學助手時代

- 一 第二醫院勤務……………五六
- 二 東京醫事新誌編輯長就任……………六二
- 三 森鷗外氏との論争……………六七
- 四 先生の結婚……………七九
- 五 濃尾大震災と先生……………八三
- 六 和子嬢の誕生と第三回學士會學術通俗講談會の講演……………九四
- 七 尿道カテーテル兼ブージの發明……………九八
- 八 コカイン局所浸潤麻酔の業績……………一〇五

第五章 醫科大學助教授時代

- 九 象皮病研究と「外科手術關鍵」の譯著……………一〇九
- 十 日清戰役と先生……………一一四

- 一 助教授拜命と耳鼻咽喉科主任候補の交渉……………一二〇
- 二 留學の途次紐育にて異彩を放つ……………一二五
- 三 獨逸留學……………一三八
- 四 第十二回萬國醫學會出席……………一四三
- 五 留學下半年期の研究……………一五六
- 六 獨逸留學時代の先生……………一八五
- 七 歸朝開講……………一九一
- 八 本邦に於ける耳鼻咽喉科學の歴史……………一九五
- 九 日本耳鼻咽喉科學の發達と教室の變遷……………二〇三
- 十 陸軍軍醫學校並に東京盲啞學校出講……………二〇九
- 十一 學位授與……………二二三
- 十二 日本聯合醫學會の設立……………二二七

第六章 醫科大學教授時代

- 一 教授拜命と第一回日本聯合醫學會の開催……………三二七
- 二 大日本耳鼻咽喉科會々頭就任……………三三一
- 三 同仁會の創立……………三三六
- 四 ガルシヤ氏喉頭鏡發明五十年祝賀會……………三四六
- 五 東京同仁醫藥學校の設立……………三六〇
- 六 根岸養生院の經營……………二六三
- 七 三井(泉橋)慈善病院の設立と癌研究會の創立及コッホ歡迎會……………二六八
- 八 大日本耳鼻咽喉科會の發展と地方會の創設……………二七四
- 九 教室の移轉擴充、ゼモンの來朝歡迎會とフレンケル追悼會……………二七九
- 十 後岡清三郎氏を和子嬢に迎ふ……………二八七
- 十一 先生の諸業績と著述……………二八九
- 十二 改元前後に於ける斯界の狀況と教室の歴史……………二九四
- 十三 大正期に於ける先生とその初頭の活動……………三二七
- 1 東京大正博覽會主任審査官囑託……………三八
- 2 東京帝國大學醫科大學講習科の創設……………三三〇

第七章 大學辭任後の先生

- 3 聖路加國際病院の設立……………三三三
- 4 陸叙高等官一等、大學教授のミリオネア……………三三七
- 十四 第二回の洋行……………三八
- 十五 大日本耳鼻咽喉科會創立二十五年祝賀會……………三六五
- 十六 在職二十五年記念謝恩會……………三七二
- 十七 第三回の洋行……………三七四
- 十八 大震災前後……………三九二
- 十九 停年退職、名譽教授に推さる……………四〇四
- 二十 在職二十五年記念祝賀會……………四二二

- 一 大學辭任後の心境と其活動……………四二二
- 二 第七回日本醫學會開催前後……………四二五
- 1 第六回極東熱帶醫學會と日本聾口話教育普及會副會長就任……………四三四
- 2 第七回日本醫學會副會頭……………四三六
- 3 同仁會中國醫師講習會……………四三九

- 三 共立病院組合の設立と昭和醫學專門學校の創立……………四三六
- 四 昭和醫學專門學校長時代……………四三九
 - 1 昭和醫專と先生……………四三九
 - 2 醫專教育論と先生……………四四四
 - 3 教育家としての先生……………四四八
- 五 自治體への寄與……………四五三
 - 1 麴町區に於ける諸活動……………四五三
 - イ 先生と麴町區公(區)民會……………四五四
 - ロ 先生と麴町區衛生組合並に醫師會……………四五六
 - ハ 麴町區青年訓練所後援會長、その他……………四五八
 - 2 東京市會に於ける活動……………四六〇
 - イ 麴町區理想選舉團の結成……………四六〇
 - ロ 中立俱樂部の組織……………四六七
 - 六 醫師會並に醫學士會に於ける活動……………四七一
 - 七 社會事業方面に於ける貢獻……………四七六
 - 1 大日本婦人衛生會・精神病救治會・愛國婦人會、その他……………四七六

第八章 先生の薨去とその餘榮

五二〇

- 一 薨去前後……………五二〇
- 二 榮ある餘榮……………五二五
- 三 壯麗なる葬儀……………五三八
- 四 遺徳碑の建立その他……………五三五
- 五 赤十字社、東亞衛生普及協會、その他……………四八一
- 六 育英事業と郷土への寄與……………四八四
- 七 古稀壽の前後……………四八八
- 八 晩年の著述及活動……………四九六
- 九 京濱耳鼻咽喉科醫會の創設と日本耳鼻咽喉科醫會の設立……………五〇四
- 十 東京醫學會創立五十週年記念會と第十回日本醫學會、その他……………五一六

第九章 先生の性向と爲人

五四〇

- 一 先生の人格……………五四〇
- 二 先生の趣味と嗜好……………五四九

1 世話好き……………五五〇

2 社交性……………五五五

第十章 先生の交友とその家庭……………五五九

一 交友、知己、門下……………五五九

二 その家庭……………五六三

岡田和一郎先生年譜……………一七

第一章 出生とその環境

一、誕生と家系

先生の幼名は市松、元治元年正月三日、岡田喜惣太の長男として伊豫國西條藩の城下町、新居郡西條町本町（現愛媛縣新居郡西條町本町一丁目）に呱呱の聲を挙げられたのであつた。

素と、岡田家は清和源氏に出づるといふ。その家系を尋ねるに、清和源氏の始祖經基より四代、頼義の三男新羅三郎義光の嫡子佐竹相模守義業、その子同信濃守昌義の六男親義、信濃國筑摩郡岡田邑に在つて、岡田冠者を名乗りしに始まる。元祖岡田冠者親義、木曾義仲に従ひ、越中倶利伽羅山に平家の大將三河守知度と戦ひ、壽永二年癸卯五月十二日に討死す。その子同小次郎久義、頼朝の西征の軍に従ひて功あり、長門國に六千石を領す。かくて、十三代光宗に至り、將軍足利義晴の第五子一條院覺慶に従ひて南都に住す。その子第十四代岡田主水常寛、幼にして親に別れ、母方の祖父一條院典樂武田法眼信高の家に養はる。永祿八年、將軍義輝自害し、舍弟たる南都一條院覺慶還俗して義昭と稱するに及んで常寛祖父法眼一同と共に之れに勤仕す。同十一年、義昭、信長に迎へられて將軍たり。然るに、義昭、信長の威望日に熾なるを忌み、之を除かんとして天正元年秋七月信長と戦ひて利あらず、敗れて若江城に蟄居す。こゝに將軍家足利氏の幕府遂ひに滅ぶ。これ實に建武二年、尊氏の斷起よりして二百三十有九年なり。而して、義昭、同五年秋七月、毛利輝元に迎へられて、備後鞆津に假御殿を設けて移る、里人之を稱して公方御所といふ。御供には武田法眼、仁木平藏、岡田主水以下二十人之れに奉仕す。かくて、慶長二年八月二十八日、義昭公治世五年にして年六十一歳にて薨す。

こゝに於て、岡田主水常寛止む處なく、輒津に浪人住居中、天正六年、信長中國征伐の軍を起して、秀吉をして播州姫路に下向せしむ。姫路の城主小寺藤兵衛政職、如何なる所存にや、羽柴筑前守諸軍勢を引具して下着しけるに、その前日姫路の城を出で、輒津に岡田主水の幽居を訪ね來り同居す。それより伯州久米郡に移る。かくて後ち、水野左金吾の推舉により徳川家に仕へ、武功に依り旗下に召出されて五千五百石を給はる。

これより先き、常寛の兄、常左衛門光賢、その子光重は六郷信濃守と同勤にて秀吉に仕へ諸侯に列し、その子光尙は秀頼に仕へて武功あり、慶長二十年五月七日大阪に討死し、後を斷つ。

かくして、常寛の次子常滿は井伊直孝に仕へて大阪冬陣に偉功を立て、その弟、岡田家第十五代の祖、隼人常信は藤堂宮内に仕へ備後國輒津より伊豫國今治に移り、日吉村に住して二千石を拜し代官職を勤む。而して、常信追々武術に達し宮内殿より大守高虎に推舉され、進士の列に入る。

慶長十三年、大守勢州津に國替へになるに及んで之れに従ひ、伊賀國名張之陣屋に轉じ、同十九年大阪冬陣に四天王寺筑山に出張せるも、不幸大筒の火毒にあひて眼疾を患ひ、暇を乞ふて後を弟常房に譲り、古郷豫州今治日吉村に幽居す。

寛永十四年十月十四日、行年五十三歳にて卒す。法名は、光照院殿薰譽淨西大居士といふ。常信に三子あり、常宗、信次、信益といふ。常信歿後、兄弟三人の中、信益は幼少にして母は病身なり。勢州の叔父常房より屢々迎へを受くるも行くを肯んぜず、日吉村清右衛門の親切なる庇護の下に成長し、後ち、兄、久右衛門常宗は母一同と先祖の舊地なる備後輒津に移り、次男信次は伊豫西條に住し、三男信益は伊豫小松に居る。

これ立身の時を期して、母兄弟を迎へ一同に住す可きを約して、かくは三ヶ所に別るゝなり。然るに、西條に在る信次商賈に下りて大いに立身す。明暦三年四月、大守一柳監物直興公入國の際、數々の献上を致し、爾來藩の御用達を承り苗字帯刀を許さるゝに至り、これに於て、母兄弟を迎へとり、一門西條本町西側に永住することゝなれり。

かくて、第十六代岡田久右衛門常宗は、養嗣子仁風、孫常壽一同を引具して、備後輒津より伊豫西條の地に移る。これ伊豫西條の岡田宗家の初代とす。

宗家初代の常宗、名は久右衛門、宗圓と號し、生來舞樂を好み、一柳公御入國の際には時々召し出されて小鼓を打つを常とし、隱居の故を以て特に御藩醫格を以て遇せらる。岡田一族にては、これを、次弟信次と共に、宗圓、道圓と並稱せしといふ。

かくて、その孫、第十八代常壽に至りて初めて、元祿九年三月、横町に店を開きて、専ら商を業となすに至る。この小七郎常壽、商賈に下りて獨立するに當り、輒津より差し來りし津田越前守助廣作の大小を賣拂ひ、これを資本として開業せしかば、末長く繁昌せしといふ。この故を以て商號を輒屋と名付け、合印ニツ引、足利家より傳はる梅鉢の紋形を用ふ。次ぎの宗家第四代は、下岡田なる信次の子、東町初代岡田與左衛門安信の六男熊五郎、三歳にして入家し之れを嗣ぐ。これ第十九代喜右衛門常陳とす。

常陳、生來慈悲心に富み、孝行の譽れ高し。養母並びに義叔母品女、輒津志賀屋吉左衛門方に嫁つきけるを志賀屋斷絶後、引取りて長年介抱し、お上より孝行に就きお褒めの文言を給はり、また公儀の官板「孝寄録」にも夫婦の名記載さるといふ。

その子、第二十代常蕃、通稱を彦藏といひ、剃髮隱居して唯唱と號し、若年より敷島の道を嗜み、その後妻喜代女亦當所に於ける歌道の達人なりしといふ。

西條岡田宗家の中興の祖ともいふべき、第二十一代千右衛門常護は、喜右衛門常陳の末子、兄彦藏に子なきを以て養子となつて相續し、また代和舍余遊と號す。常護、大いに資財を積み、寛政四年二月、年四十二歳の時、御掛屋喜藏代となつて本町に移り住む。常護、生來談理を好み本心豊島學に志し、金銀の出し入れ、番手等は殊に手堅く勤めたるに依り、

世人一同大いに之れを尊敬し、また藩主よりも度々お褒めに與る。寛政七年十二月二十七日、町年寄格に申付けられ、文化六年四月朔日、御掛屋を喜藏に引渡し、横町に隠退して、同七月十七日に卒す。

常護、御掛屋勤務中は數々の大功あり、嫡子常隆の世に至るも、父常護の勤功に依り、取扱ひ難き御用をも屢々許され家運益々繁昌すといふ。

第二十二代岡田仙右衛門常隆は啗交と號し、文化七年正月廿六日、年二十三歳の春、町年寄見習を仰付けられ、父常護の歿後、家産を傾むくも特に藩の取配ひにて借財一切相濟まし、文政十一年には魚屋町年寄を仰付けられ、また天保三年二月、御掛屋定衛門病身の爲その後見を仰付けられ、魚屋町年寄は御役御免となるも、格式の儀はその儘となり、翌四年六月、再び町年寄に復職さる。かくて、天保七年十月以來の病氣に依つて年寄役御免を願上げ、爾來隠居し、名も鶴齋と號し専ら風月を楽しみ、天保九年三月廿九日、行年五十一歳にて歿す。

この間、常隆藩主松平侯の親任極めて厚く、旅に出でては大阪等にて殿のお伴を仰付かり、或は御陪食を給はり、または御手づから御酒を賜はる等數々の知遇を忝けなくすると共に、また家族一同も御殿に召されて御目通りを仰付けられる等の殊遇に浴すること屢々なりき。

第二十三代謙次郎常足は幼名常三郎、十六歳にて前髪をとり良助と改名す。天保六年、殿久々の御入國の際には、年十五歳にして、御茶菓種の御用仰付けられ、同九月には前髪のみ御殿のお庭にて御目通り仰付けられ、また翌七年正月には御座所にて御酒を賜はり、同十二月には、年十六歳にて町年寄見習に申付けられる等、幼少の折りより殿の知遇を受くるも、壯年に至りて家事治まらず、子無き儘に弟鶴吉に家督を譲りて、嘉永三年、藝州尾道に身を引く。

かくて、岡田家第二十四代は、第二十二代仙右衛門常隆の子鶴吉、兄謙次郎常足に代りて家督を嗣ぎ、名を喜惣太と改む。これ、岡田家第二十四代、西條岡田宗家第九代の當主にして、實にこれ我が岡田和一郎先生の嚴父に外ならないのである。

ある。

二、嚴父と家族

こゝに明かな如く、先生の生家、西條の岡田家は、元和偃武の頃、東豫の地に居を移し、商賈に下りて以來、西條岡田宗家として代を重ねること九代、二十四代の家系を完ふせるが、その間、代々同地の豪商として、御掛屋役——または御量家ともいひ、年收二百石以上の田地所有者の中より之れに當る——を勤めては西條藩の財政に貢献し、または町年寄役を仰付かつては西條町政に寄與する處勢からず、代々藩主一柳公及び一柳氏除封の後には、松平公の信任を得、世々該藩の殊遇を受け、藩政並びに町政に重きをなすと共にまた入りては風流雅趣の道を嗜んできたものであつて、藩主の入國に際し、年一回の藩内視察の途次には、岡田家の前に駕籠を下して、家族一統に目通りを許し、また當地唯一の誇りとせる伊曾乃神社の祭禮には、御神輿を岡田家の前に降ろして祝詞を上げるを例としたといふ如く、先生の生家は、代々同地の名士名門の家としての譽れ高かつたのである。

かくて、先生の嚴父喜惣太の代に至るも亦、西條松平藩の御量家を勤め、藩の通貨と國幣の兩替事務を掌握し、また町年寄を勤めては町政を牛耳つて名望愈々高く、明治初年の廢藩置縣に際しては、藩知事松平頼英公に扈從して東都に上り大いに見聞を廣めて、戸長として町政の改革を圖り、或は舊來の寺小屋教育を刷新しては、他町村に率先し、新式小學校の設立を企圖して以て育英事業に専念努力する等、西條町の爲めに盡瘁する處勢からざるものがあつた。

かゝる中に、元治元年、その第二十五代を繼ぐべき西條岡田宗家第十代の和一郎先生の誕生をみたのであるが、然し、嚴父喜惣太翁は、このやうに一面には、格勤精勵、身を持するに嚴にして、終始一貫、一點の私心なく町政に盡瘁せるといふも、また反面には頗る慈悲の心に富み、義侠の心に厚くして、人の苦難するあれば之れが世話をなし、その在世中に

ても實に身投者を救ふこと四十七組に及ぶといふが、實以て、寛仁大度、敦厚温良の慈父なりしといふ。爲めに、市井の子供等己が慈父の如くに之れを慕ひ、その役所よりの歸りを樂しみにして待構へしものといふ、故に世人、喜惣太翁を呼ぶに「今良寛」の語を以てすと傳ふ。

先生の生母は小野氏、名をつね子といひ、温和恭謙の資にして、夫喜惣太の町政に献身し、世務に多忙なるによく内助の功を致して家事を收め、以て後顧の憂へなからしめて子女の教育に専念す。

その家庭に、長女くに子、長男和一郎、次女小秀（後ちゆき子と改む）の一男二女を儲く。

かくて、上に威あれど子煩悩なる寛容の父を戴き、貞淑温良の母の膝下にあつて、先生等三人兄弟はその仲も睦しく、極めて平和なる家庭を營めるも、明治元年、生母つね子、腎臓の疾にて年未だ三十二歳の若きに他界す。時に、長姉くに子十一歳、先生五歳、妹小秀四歳。こゝに繼母とよ子迎へられて、子女の教育に當り、後ち異母弟鍋雄を生む。

而して後ち、長姉くに子は、松山藩稻葉の豊田家へ嫁し、妹ゆき子は小松藩吉田の青野家に迎へられ、また末弟鍋雄は後ち熊本醫學専門學校を卒へて鐵道病院に勤務し、先生の薨去と同じき昭和十三年一月に逝く。

三、西條氣質（地理的歴史的環境）

かゝる家系にあつて、かうした家庭に生育された先生が、資性明敏潤達にして、長ずるに及んでは、寛恕の徳を以て衆を率ひ、一方の長として喧々譁々の言を爲し、率先躬行しては東奔西走し、席の温まる暇もなくして、研究に教務に刻苦勉勵、致々として倦む處なく活動し、また世塵の中にあつては、友人知己の面倒をみ、或は先達後進の一身一家の爲めに盡瘁し、將又その優れたる政治的才幹を縦横に揮つては、學界諸團體の設立經營に力を致されたるも宜べなりといふべきであらうが、その爲人の全班を知る上には、更らにかゝる家庭的環境のみならず、その生育した地理的、歴史的環境をも

知る必要があらう。

そこで、先づ「伊豫史精義」の著者の言葉を借りて伊豫人士一般の傾向を窺へば――

「纏つて惟ふに、我が伊豫の國は山川秀麗風光明、氣候亦温和なる結果として、古來文學上の秀才輩出したるのみならず、俳諧の如きは地方的平民娛樂として盛に行はれ、古來文化の發達をみたる土地にして、「一朝志を立て邁往勇進して、敢て顧みざるが如き、或は機を見る事敏にして策を卒爾の間に劃し、以て萬全の功を獲るが如きは、伊豫人士の動的長所と謂ふべく、之を遠くは、河野通有に、近くは日露の役に於て鑑ることを得べし。又その心情温雅詞藻に富み文章に巧みたるは伊豫人士の靜的長所と謂ふべく、遠くは本間游清に於て、近くは正岡子規に於て、之を見ることを得べし。」

と。こゝに先生の性向並びにその營める事業の足跡を窺へば、その一朝志を立て、は勇往邁進して他を顧みず機を観るに敏にして、卒爾の間に策を劃する等の動的長所といひ、また心情の温雅にして、文筆に巧みなる靜的長所といひ、誠に以て示唆深きものがある筈である。

されば、こゝにその地理的状況を「日本地理風俗大系(11)」についてみてゆかう。

地理的區劃

愛媛縣即ち伊豫は、東方阿波及び讃岐の國境から西々南に延び、土佐と背を合せ、漸次南に廻り、太平洋に面して切れる。そして國內に多くの小地方を形づくつてゐる。

縣を大きく區分すると、北部と南部に分れる。北部は平坦な、變化の少い瀬戸内海の海岸線に限られ、その西は佐田岬の突端でつきてゐる。そしてほゞ中央に高繩半島が突出して、澁灘と伊豫灘の水面を分けてゐる。故に北部は高繩山塊によつて、自ら東部と西部とに別れ東部は東伊豫で、西部は中伊豫である。そして佐田岬以南を南豫の地とする。

されば、次に東豫地方並びにそこに於ける西條の位置する處をみてゆかう。

地勢概説

東豫は高麗山地を境とし、それ以東の地方である。阿波の池田町から、伊豫の上分町に通ずる街道は、吉野川縦谷の方向に延びる狭い低地に沿うてゐる。この方向を西に追跡すると、そのまま東豫の山麓線となつて走り、後に「さくら三里」を通つて、松山平野の南界をなす山麓線となる。

上分町から西方の小松町に至る約六〇キロの山麓線は、殆ど直線に走り、一見して断層線であることを想はす。この線上に北面する急斜面は断層線としては標式的のものである。

直線的な山麓線上に整然と並ぶ三角端面は、まだ蝕削が進まず、その間を切つて出る谷々の形も鋭く、扇状地も形成の途上にある。三角端面の上端から後方につゞく山脚も、見事に分水嶺に上つてゐる。分水嶺上の所々には、原表面と思はれる平坦面が保存されてゐる。これ等のすべては、断層のまだ極めて新しいものであることを物語る。そしてこの断層の北に二つの地塊が切離されて松林に掩はれた小丘となつて横はり、それ等の間を埋めて、狭長な東豫の海岸平野が断層する。

断層面の造る分水嶺と、四國山脈の主脈との間には、別子銅山附近に、水源を發する銅山川が、縦谷となつて東流する。

この東豫の平野は降水量が夏に少く、背後の急斜面であることと、分水嶺が海岸に接近しすぎることのために、到るところ夏の水に不足する。殊にそれは新居濱以東において甚だしく、附近の水田は一枚毎に一個の灌水用井戸を持つてゐる。

産業的景觀

東豫一帯、殊に新居濱附近には、古來新居芋と呼ばれる里芋が多く田に作られ、稲田と里芋の畑が交互に並ぶ。それは夏の乾燥が稍よ

りも芋を選ばせたためである。

またこの地方は、断水のため、夏季、製紙業の休業する例もある。

高麗山地に近づく、平野は廣くなり、分水嶺は遙か後方に退いて、山も深くなる。従つて断水は幾分減じ、美田が打ちつづく。

加茂川は西條町附近で燧灘に入る河であるが、この平野に出る附近の市ノ川鎮山は、アンチモーニの世界的美品を出して知られる。

加茂川の上流は四國山脈の懐深く食ひ入る峡谷で、伊豫富士、瓶ヶ森、石鏡等の水を集めてゐる。その結晶片岩の變化に富む多彩と、

壯年山地に特有な多くの瀧、及び深々と茂る原始林との交錯した峡谷美は、推賞に値する。

平野の米と里芋に對して、山地は原始林と銅山川流域等の殖林の見事な外は、平野に接する濫伐跡の松林が見られるのみ、山麓線に沿ふ一帯の傾斜地には三極が多く、下の平野では製紙が行はれる。そして伊豫としては珍しく果樹園が少く、桑園もまた乏しい。

東部寄りの、乾燥の甚だしい、殊に洪積層臺地では、一帯に竹藪を交へる叢林の断片が多く、森に囲まれた農家が多い。かうした色彩の中に、發達せる都市は、川之江、新居濱、西條、小松壬生川、今治等が代表する。

然らば、西條とは如何なる處であらうか、「日本地名大辭典」の記す處に據つてその概略をみておかう。

「西條」は、愛媛縣伊豫國新居郡の西北部。東北は新居濱市に接し、北は燧灘に臨む、東北部新居濱市との境界部には讃岐山脈の西端部に當る高さ約一〇〇米の丘陵ありて東西に延び、南部には石鏡山脈の瓶ヶ森山の山脚の末端部たる高さ二〇〇米の丘陵あるの外は、石鏡山脈断層の北側崖下に室川、加茂川、中山川等の作りし東西に帶狀をなす沖積平野の一部にて土地平坦低卑、田畑よく拓け、全有耕地の七五%を超え、農産に米の産最も多く、麥、蕎麥、甘藷、鶏卵を出す。また綿布、和紙(チリ紙)等の工業も榮え、沿海には鯛、鰯等の漁獲も多い。

町は松平氏三萬石の舊城下にて現在は東豫地方の商工業の一中心地をなし、大阪、若松間の内海航路——汽船の寄航地たり。道路には讃岐街道は町の南方を東西に走り、今治街道はこれより岐れて西北方に向ひ、鐵道には省線豫讃本線また東西に通じて大町に伊豫西條驛(大正十年設置)を設け交通上にも一中心をなす。また石鏡山登山口の一つに當り大町にその拜殿あり。

此地古くは和名抄新居郡神戶郷の地(但し島山の邊は島山郷の内ならん)中世、新居西條庄に屬せしより町名起る。而して其名の起原は大化改新の班田收授の法の條里制に基き、新居郡東部を東條と云ひ西部を西條と云ひしに因むと云ひ、今に條里の跡を存す。西條城址あり、鎌倉時代河野氏ここに館し、河野氏衰へて後、寛永十三年一柳直重ここに居城し三萬石を領す。寛文五年紀伊徳川頼宣の次男松平頼純この地に封ぜられ子孫相承け明治維新に至る。明治四年廢藩置縣に際し西條縣を置きその愛媛縣に入る。大正十四年、田津村、大町村神拜村を合し町制を布く。かく本町は城下町として發達せしが、瀬戸内海航路及び陸上交通の便利を以て、近年特殊的發展をなせし新居濱より古く郡内の中心邑をなせし所にして、もと郡役所の所在地。いま區裁判所、警察署、稅務署、營林署、縣立中學校、農業學校、高等女學校等あり。八堂山の麓、加茂川の清流に臨みて武夫櫻の名所あり、京都嵐山の風光に似たるを以て東豫の小嵐山の稱あり。

西條城 本城はもと伊豫の豪族河野氏の居城たりしもの如く、豫章記に、源頼朝に従ひ功ありし河野通信その軍功に依りて伊豫の守護職となり、新居西條庄を賜はるとあるは、恐らく通信當城を居館とせし始めならん。愛媛面影に、河野益男、その子實勝、新居西條を居館とし西條御館と稱すとあり。のち河野氏衰へ美濃に來りて守護土岐氏に仕へ一柳氏を稱ふ。一柳監物直盛、慶長五年關ヶ原の役、家康に従ひて功あり、伊勢神戸城を賜ふ、寛永十三年その子直重西條城三萬石を與へられしが、その子直興に至り、故ありて領地を召上げら

れ、寛文中紀伊徳川頼宣の次男松平頼純來り治し、子孫相傳へて明治維新に至る。

このやうに、西條は東豫西條平野の中樞の地を占め、北は風光明媚の瀬戸内海、懸崖に臨み、南背面に標高二千米に垂んとする四國山系の峨々たる連峰を背負ひ、主脈漸くこの地に於て高きを増し、別子銅山の背後に於て平家平(一六九三)冠山(一七三二)、笹ヶ峯(一八六〇)等の連嶺をなして、更に高きを加へ西進しては寒風山、伊豫富士、瓶ヶ森等、一九〇〇米に近き高峻雄峯屏風の如くに聳へ立ち、主峰石鎚山に近づけば、その石英粗面岩及び粒狀安山岩より成る怪奇な峻嶺に天狗岳を生じて、その巍峨たる山頂は實に海拔一九八一米の尖峰をなして山頂の眺望亦雄大、四國第一と稱せられ、その深き溪谷は岩に激して奔流するもの、東しては雄大なる吉野川縦谷をなし北しては加茂川峡谷をなす。

されば、この地の人情氣質に於て、溫雅寛容の性情をみるとはいへ、他面に、僻遠にして山地多く、その地勢險峻にして、峻嶺高峯の蟠居せるは、その人心をして、他の地方に比して著しく特異ならしめ、その氣象の穩やかならざるものゝあつて、敢て人後に屈下することなく發揚蹈厲の志の多きは世人の等しく之れを認むる處であり、「西條誌」の著者も既に之れを指摘してゐる如くである。

石鎚、瓶ヶ森に此笹ヶ峯を合せて、これを御領分の三山と稱す。……此三山吾が西條の封内に突元たれば、領分鼎峙の三高山とのみいひたるは猶淺し、いまだ石鎚の四國九州中國に秀るを聞ずや、瓶ヶ峯の二岳これに亞ときは、三山は四國、九州、中國の諸山の及ばざる所にして、此三つ皆我西條封内に濶ときは、諸國に向ひて誇べき事にあらずや、斯る名山秀氣の蒸出せる故を以てや、古より文武の士、踵を接て輩出す、何ぞ封地の廣狹を論ぜん、然れ共其輝耀嵯峨の精靈を受けてや、人の氣象も平穩ならず、敢て屈下するの心乏く、發揚蹈厲の志多し、これ誠に賞すべきが中に、亦戒むべき所あり。

君恩の風化、三思を用らるべき御事にあらずや。

而も、かゝる地理的環境に加ふるに更に亦西條藩の擔ふ歴史的事情が、先生の性向の主要なる一面をなす處の、人後に屈するを潔しめぬ、向ふ氣の強い、負けず嫌ひの、所謂西條氣質の形成に與つて大なるものがあつたのである。

この點に就ては、先生の同郷の後輩なる眞鍋嘉一郎氏の、岡田先生の追憶の中に觸れる處があるからして、それをこゝに引いておかう。

(前略) 先生は會合がすきでよく若い學士や學生をあつめて會をいたしましたして、愛媛縣醫學士學生會をつくつて居りました其時、在京の愛媛縣の先輩としては岡田先生、大西克知先生、岩井三三先生の三人でありまして、大西克知先生も岡田先生に劣らず向ふ氣の強よき先生でありまして、この三先生があつると何れも勢のよい激勵談を聞かされ、つねに活氣づけられて居りました。由來私共の郷里の間はなか／＼負けぬ氣がつよいといふ事が特長でこれが西條男兒の特徴であります。まだその當時頼屋の和一ッあんの外に西條名物も一人ありました。それは高橋の初ッあんであります。これは今晩は此席に御臨場の町田參議や俵孫一先生の御關係遊ばされて居る憲政會後の民政黨の岡土高橋秀臣(幼名初太郎)氏のことです。すなはち頼屋の和一ッあんと高橋の初ッあんは相並び稱へられたる西條名物であります。此二人とも負けぬ氣に於いてはおとりまさりのない好一對でありました。但し岡田先生の負けぬ氣の活躍……小池博士の詩には長廣乍兼敵愾心とありますが、恐らく敵愾心とはこの岡田式負けぬ氣のことであらうと思ひます……その活躍についてかつて田代義徳先生が(中略)私に向ひ何故西條の人は意氣軒昂として負けぬ氣があるか、一體何か共通的原因があるかと御尋ねになりましたことがあつた。その時西條人の意氣込の由來を申しました。すなはち西條藩松平左京大夫は御高三萬石であるけれども松平家は紀州徳川家の御分家である、故に將軍家に於て御世嗣がなく、三家三卿に於て將軍家をつぐ人がなかつたならば、西條から出て行つて將軍家をつぐ資格があるのであると云ふ其誇りを西條人一般に言ひ傳つて居る、それであるからたとへ御高が三萬石である小藩なれども其意氣に於ては他に劣らぬの概がある。この氣性と思想とが傳統的につたわり西條人の氣風を作つて居るのである云々と田代先生に申し上げたところ、田代先生も大變興味をもたれ、さもありませんと首肯せられ、いつかも二月十一日の聖路加病院の招待會の席上に於て、田代先生が岡田先生はじめ私共郷黨の士の氣風を唱へて右由來記の首肯すべきことを諸論交りに述べられたことがありました。誠に同郷の士にて岡田先生の學界に於いて高橋秀臣氏は政界に於いてともに負けぬ氣を示した好一對であります。

そこで、こゝに西條の地の歴史を顧みれば、既に明かな通り、西條人士の氏神として崇拜し、敢て誇るに憚らざる式内大社伊曾乃神社の成務の朝に鎮座しますと傳へる如く、この地の文化古くより開け、その地名も大化改新に於ける班田收授の法による條里制の名残りを止どめてをつて、下つて鎌倉時代に西條庄となり、伊豫守河野通信居館の地となるも、

承久三年、義時追討の院宣に應じて通信忠戦し、爲めに奥州平泉の地に流謫、所領没收の後は、轉々として一定の領主を得ず、南北朝時代には、伊豫の河野氏と讃岐の細川氏の間に介在して交戦の巷となり、足利時代に入つては石川氏高時根據つて新居、宇摩の兩郡を支配せるも、應仁亂後、世は群雄割據の時代となつて、争鬭止む時なく、細川氏に次で阿波の三好氏、土佐の長曾我部氏相次いで侵入し來り、天正十三年秀吉、毛利氏をして伊豫を征せしむるに當り、小早川隆景、吉川元長の爲めに征せられ、この地の豪族勇士悉くその跡を斷ち、新しき伊豫の歴史がこゝに初まる。

戦後、小早川隆景、伊豫の領主となるも、間も無く他に移封、福島正則、小川祐忠、藤堂高虎(今治)、加藤嘉明、蒲生忠知、松平定行(松山)と、僅々五十年の間に七姓の主を代へるに至つたが、寛永十三年、一柳氏西條領主となつて此地に來り、城池を築いて城下町を開き、今日の西條町の基をなしたのであつた。

一柳氏はもと伊豫河野氏の庶流に出で、河野氏中興の主通信十三世の孫宜高に至つて伊豫を去り、美濃土岐氏に仕へて一柳氏と稱す。

その孫伊豆守直末、秀吉に仕へ、天正十八年小田原征討の軍に従つて功あり、山中城攻撃の際に不幸銃丸に斃れ、弟監物直盛兄に代つて手勢を提げ即日城を屠りて名聲を擧げ、秀吉の命に依り家督を嗣ぐ。然るに後ち關ヶ原役、大阪陣には徳川氏に従ひ、戦功あつて伊勢國神戸に五萬石を以て封ぜられたるも、伊豫國は累代先祖の領したる地なれば轉封を乞ひ寛永十三年六月聽許され、更らに一萬八千六百石を加封され、八月就封の途次大阪城にて卒す。

かくて、長子丹後守直重、家督を繼ぎ、西條三萬石を領し、次子美作守直家は川之江二萬八千六百石(内一萬石は播州)三子藏人直頼、小松一萬石を夫々分領し、こゝに近世伊豫西條の歴史が開かる。

直重、治世十年にして江戸に卒し、長子監物直興家督を嗣げるも、施政宜しからず、銀納事件、四忠士諫死事件、京都女院御所修造事件等繼起し、遂ひに寛文五年七月除封、加州前田家に御預けとなり、こゝに西條藩一柳氏は三代三十年に

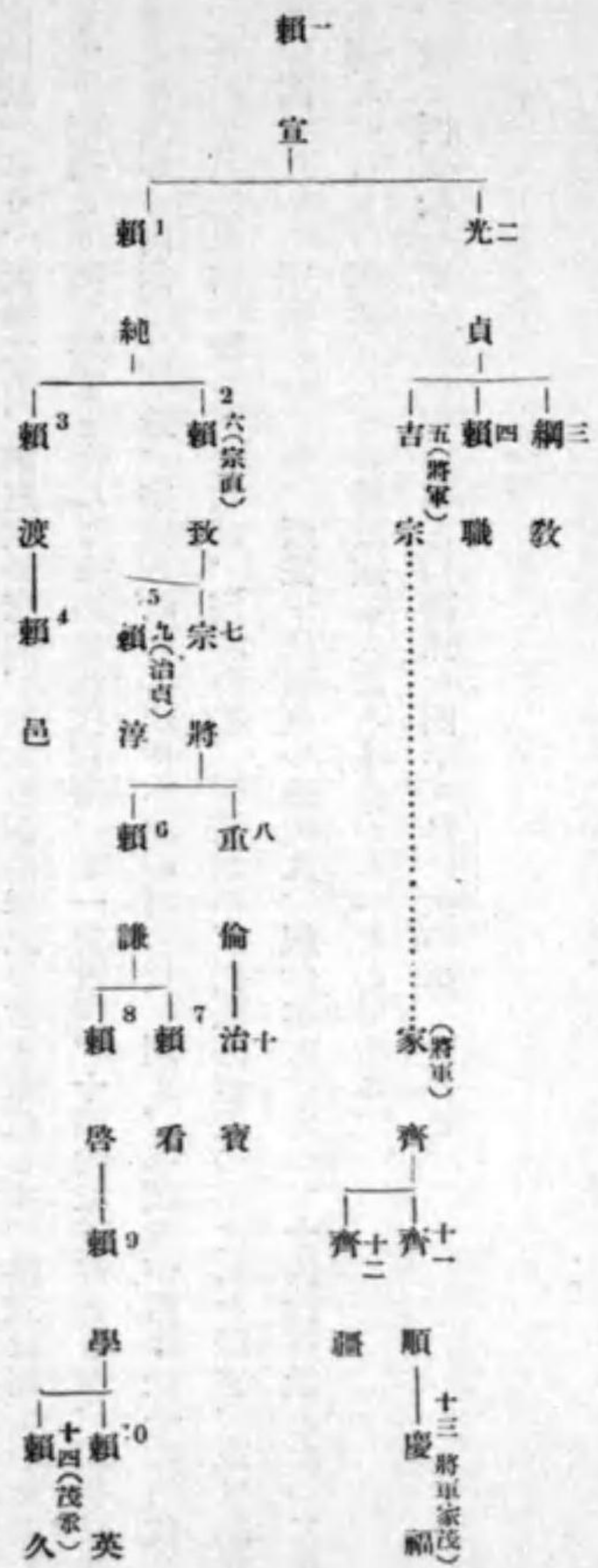
して亡び、一時松平阿波守、或は代官小島孫右衛門の預所となるも、寛文十年二月、紀伊大納言頼宣の次男松平頼純西條三萬石を領す。

かくて、松平氏は十代二百年、明治二年版籍奉還に至る迄この地を領し、西條は城下町とし、東豫の名邑として繁榮したのであるが、藩主松平氏は、定府にして常に江戸に在り、その十代の中、この地に入部せるは、初代頼純(寛文十年、元祿十一年、同十五年、寛永五年)の外、二代頼致(正徳五年)、三代頼渡(享保十年)、九代頼學(天保六年)、十代頼英(明治元年)の五君八回にすぎなかつた。

このやうに、西條松平氏は紀伊徳川氏の分家であつたのみならず、紀伊家に世嗣ぎなき時は西條より出て之れを嗣ぎ、また西條に缺く場合は紀伊家より入つて之れを繼ぐ等、その關係は終始一家の如く親密にして、また西條三萬石と雖も紀州より二萬石の合力米があり、録高は微少なりと雖も、從四位下、左近衛少將兼左京大夫の任にあつて、江戸城中にあるも大廣間詰であり、國持大名、御三家の庶流、表大名四品以上の者と相伍して、格式は高かつたのである。

かくて、紀州より出て將軍となるものは八代吉宗、十一代家齊、十四代家茂があるが、紀伊五代吉宗が入つて八代將軍となるに及び、西條二代頼致、宗直と改めて紀伊本家の第六代を嗣ぎ、弟頼渡が西條松平の三代を襲ひ、また紀州七代宗將、その子八代重倫の後ち第九代は、宗將の弟、西條家第五代頼淳が入つて之れを繼ぎ、或は紀州第十三代慶福、十四代將軍家茂となつて宗家をつぐや、西條十代頼英の弟頼久、紀伊本家に入つて十四代茂承となつて後を繼ぐ等、西條松平家は小藩ながらも、親藩としての勢威頗る大なるものがあつたのである。

今、茲に西條松平家と紀伊徳川家との關係を圖示すれば次の如くである。



〔註〕一・二・三等の和數字は紀伊徳川家の代を示し、1、2、3等の洋數字は西條松平家の代を示す。

されば、西條藩士の、小藩、微祿なりと雖も、氣位の高く、霸氣の昂然として、敢て人後に屈するの性情に乏しく、堂々天下の士に伍して劣らず、負けぬ氣の強く、向ふ意氣の荒い西條氣質が、その間自づと西條人士の幼きよりして養はれるに至りしといふも謂なきことではあるまい。

されば、先生の見識高邁にして、一方に寛仁大度の人徳を備へ、衆を率ひては人の長となり、又、喧々譁々の論議を以てしては、敢て人後に屈せず、負けぬ氣の霸氣滿々たるの氣概を以てしては、致々として倦む處なく、奮闘努力の生涯を終りたるも、亦その家系を尋ね、或は此の地の山川草木を顧み、將又、その生育の地の歴史に徴するも敢て異とするには當らないであらう。

第二章 幼少年時代

先生の幼少時に關しては單に負けず嫌ひな利かぬ氣な子供として、幼にして明敏頓悟の資性が傳へられてをるのみであつて、何ら語るべき逸話も見出されず、また具體的資料も残されてゐないが、幸にして、先生自身の筆になる自叙傳、その他一二のものにそれが述べられてゐるから、それをこゝに掲げて、以て當時の面影を偲ぶ縁としよう。

第一、幼年時代



幼少年時代の先生

私の生れたのは元治元年甲子正月三日 (O. H. 1864に當る) で、出生の場所は愛媛縣伊豫國新居郡西條町本町一丁目である。父は岡田喜惣太、母はつね子。岡田家は商家で時としては煙草を商ひ、又或る時は酒類の販賣などをした。そして父は商人ではあつたが郷土で名望が高かつたため、三十四五歳の頃から戸長に擧げられ毎に町政を掌映した、従つて長男と生れた自分もその頃から政事的の趣味を知らず識らず覺え込んだのである。生母つね子は不幸にして私の五歳の時腎臟病で没し、その後は繼母とよ子の手によつて育てられた。私は生來どちらかといへば、蒲柳の質であつたから生母繼母に哺育上からぬ苦勞を掛けた事と思ふ、扱て斯様な譯で身體が強壯でなかつたから私の父は私に學問で身を立てさせてやらうといふ考へを持ち私もその意に従つて學問をせやうと云ふ考で、六七歳の時に寺小屋弓山塾に入つて習字を始め大久保悠久先生に四書の素讀を學んだ、斯くする内に明治七八年の頃、父は戸長として時代の風潮に従つて小學校設立の必要を唱へ之を實施して開校したから、私もすぐに私塾から正規の小學校に轉じ現代的の教育を受けるやうになり十三歳の時に小學校の科程を終へたのである。

第二、立志時代

私が小學校を卒業した年に父は郷里西條に町立西條病院開設の計畫を立て、院長として當時松山病院に副院長として在勤せる今井巒氏を迎へて院長として開院の運びに到つた、今井巒氏は當時四十歳位の人で大阪醫學校の出身であつた、そして私は十四歳の時その病院の用度課に備はれ院務に携り、その時の私の仕事は瓶洗であつた、何故瓶洗が必要かといふと、その頃までの投薬は丸薬、散薬、煎じ薬等であつたが、西條病院では新規軸を出して現代式の水薬を投與したからである。今でこそ特別の投薬瓶はあるが、その頃の薬瓶は西洋酒の空瓶を用ゐてゐたので私とその空瓶を集めたり洗つたりする役目を仰せ附かつて僅か斗りの給與を貰つて居たのであつた。斯くして居る間に子供心で不審に耐へなかつたのは院長の所得である。當時院長は俸給七十圓で父は戸長として月額七圓、同じ人間でありながらその所得の差が十倍といふのはどういふ譯か、之は醫者がえらいからであるといふ點に氣がついたのであつた、そこで自分も今井院長位の醫者になりたい野心が燃え出したから、或る日今井院長に醫者になるには如何にしたら良いかと尋ねたら、松山に往つて松山の醫學校を卒業する事が良からうと説かれ、父にその旨を願ひ出した所、當時は僅か十三里しか離れて居らぬ松山へ修業に出すといふのは大事で父も容易に許さなかつたけれど、再三懇望して漸く承諾を得て松山へ修業の第一歩を踏み出したのであつた、之は私が十五歳の時で、私は松山に當時松山病院院長渡邊悌次郎醫學士（渡邊洪基氏の令弟）の門を叩き食客となつて松山醫學校へ入學の準備に取り掛つた。然るに此渡邊院長は義の今井院長より更にエライ人で、俸給は三百圓貰つて居つたから私は醫者にも色々の階級のある事を知りどうせ勉強して醫者になるなら渡邊院長位の人にならねば張り合ひが無いといふ一段進んだ考を起し、或る日渡邊先生に伺つたらその希望を満足さすなら東京の大學を卒業せねばならん、又東京の大學に入學するには獨逸語を知る必要があると云はれ、そこで渡邊院長の紹介によつて當時松山に住居せられた石川清忠氏（後の濟生學舎々監）に就て獨逸語の初歩を學び初め、傍々近藤塾に通つて日本外史、唐宋八家文、文撰等の漢籍を學び一ヶ月間は主として大學へ進むべく豫備教育を受けた、要するに私が醫者になるといふ志を立てたのは十五歳の時であつて、その刺戟は今井・渡邊兩先輩によつて與へられたのである。

第三、上京から豫備門入學まで

當時松山への入學さへ容易に許されなかつた私が更に東京へ往くといふ事は私の家としては非常な大事件で有つた、然し私は堅い決心を以て父に懇請してやつとその難關を切りぬけて上京する機運に際會したのは私の十六歳の時であつた。笈を負ひ郷里を出發したのは明治十二年の秋で丁度其頃西條の町から程遠からぬ舊藩士の居住する明屋村の村長伊藤晴雄氏は令息二人を東京に出す事になり、私もその仲間に入れて貰つて郷里から一步踏み出した。同行は四人、村長伊藤晴雄氏を始めとしてその長男主計君（當時十七歳）次男桑馬君（當

時十五歳、後の大倉桑馬氏、現存）と私の三人は同じ年輩の腕白小僧、之を引率せられた伊藤氏の恩には今でも感佩して居る。此頃の行程は松山から神戸までは内海汽船、神戸から横濱までは玄海丸といふ外輪汽船で運ばれ横濱で始めて汽車といふものを見た。斯くして私は初めて東京の地を踏んだのである。東京へ着いてからは最初に本郷臺町の獨逸學校に入學し獨逸語を習つて居る間に、當時大學の本科生であつた中目忍氏が主となり笠原親文・小此木信三郎氏等が本郷の妻戀坂に別個の獨逸語學校を設けたからその方へ轉學した。そしてその傍、湯島の大根畑に居られた岡松養谷先生の私塾へ通つて漢學と洋式數學とを習つた。此期間が丁度約一年で今日の中學程度の教育を受けたのである。

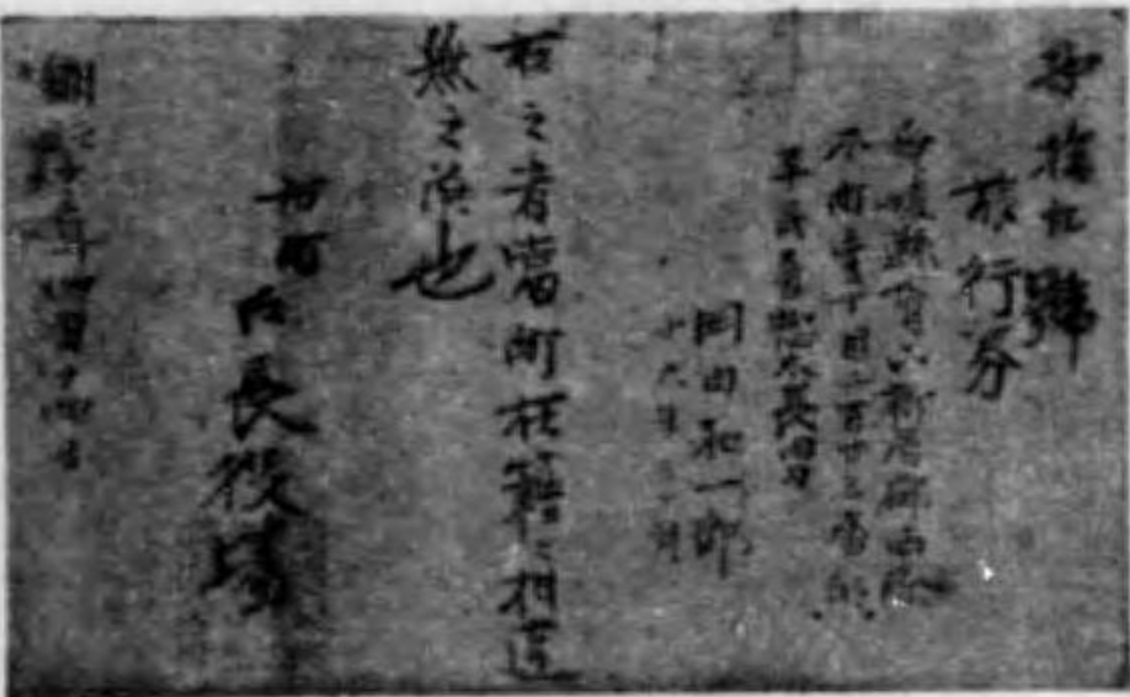
尙ほ、この外、先生の年少時を偲ぶ縁となる僅少の資料として、「谷口長雄傳」に寄せられた先生の追憶の中にそれが語られてゐるから、それをも次に引いておかう。



明治九年(1876)年三十歳
西條小學校時代の先生

故人（谷口長雄氏）は余と同縣の出身であるが、南豫宇和島藩告森家の三男として生れ……幼にして宇和島藩の御殿醫であり、且つ醫界の先覺者として令名のあつた谷口泰庵先生の養嗣子に迎へられ、先づ彼地に於て四書五經の素讀を初め、後松山中學校に入りて普通教育を受けたのであつた。……而して余は同じ縣下でも、宇和島を東方に距ること約三十里の小藩西條町の一商家に生れたのであるから、故人と余との年齢は殆んど同じであつても、其幼年時代は全く未知無關係の間柄であつたのである。然るに不思議にも亦奇妙にも吾等兩人には此未知の幼年期に於て已に互に他日一致結束して苦樂を共にすべき因果關係が不知不識の間に機構されて居つたのであつた。即ち故人も余も共に當時十四五歳の腕白小僧であつたのであるが、故人は當時白鶴生なる名稱を用ひて、其時已に日刊新聞として、松山市にて發行されて居つた海南新聞紙上に頻に投書して、或は時代の自由民権論を唱へたり、或は本邦青年としての覺悟を論じたりして居つたのを視て、余は其の何人の筆に成るかを知らざりしが、余も亦當時已に政治論や人生觀やに就て大に興味を抱いて居たのみでなく、土佐同志社派の演說會の如きは毎回必ず出席を怠らなかつた位であつたので、海南新聞紙上に登載されたる白鶴生の投書には、或は共鳴したり或は反對したりして、度々同

新聞紙上に余の論文を寄送したことがあつた。特に當時青年の處世策として、文事を尊ぶべき乎將た武事を選ぶべき乎に就ては、數回を重ねて互に論戰を交へたのであつた。斯くして故人と余とは互に何の交渉もなく、又關係もなく全く獨立的に決心して、明治十三年相前後して俱に齡十六歳の時斷然志を立て、郷關を後にして上京したのであつた。而して上京後の故人は北川乙治郎、中西龜太郎氏等と前の中學校教師山崎忠興氏等の世話になり、獨逸學校にて獨逸學を學び、余は私塾周得舎に入りて漢學を、又醫學豫備校に入りて獨逸學を學び、俱に明治十四年東京大學醫學部豫科の入學試験に及第して入學することになつたのであるが、この新入豫科學生約五十餘名中に愛媛縣出身者として、故人の外に同く宇和島出身の林暉禮氏と余との二人があつたので、茲に特に同郷人としての交際を始めたのであつたが、此時偶然余等は前に海南新聞紙上に於て論戰を交へたる論敵白鶴生なる投書家が故人であつたこと、又白鶴生に共鳴したる投書家が余であつたことを知得して、互に「あれは君であつたのか」と驚き且つ大に笑ひ合つたのであつた。是れ兩人の幼年期に於ける偶然の出來事であつたのであるが、それが契機となつて終に永久に易らざる盟友となつたのであるから、兩人の間には夙に天與の奇しき因縁が結ばれて居つたものと思はれるのである。



これを以てみるも、先生の在郷當時の動靜、風采と、年少にして早熟、己に老成せる才氣煥發の面影躍如たるものが窺える筈である。

かくて、先生は、年齢十六年と三ヶ月、數へ年十七歳の春、明治十三年四月十四日、旅行券の下附を受けて、思ひ出多き幼少時代を過ごした西條の郷里に訣別を告げ、笈を負ふて東都に上り、こゝに青雲の志を遂ぐ可き刻苦勉勵の生活が開かれることゝなつたのであるが、その上京の年即ち、明治十三年の十一月、大學豫科（後ち大學豫備門と改稱）入學と共に、先生の、困苦多けれど、希望に充ちた東京に於ける學生々活が始まつたのである。

第三章 東京に於ける學生生活

一、東京大學醫學部豫科時代

このやうにして、先生はその上京の年の明治十三年の十一月に、年來の志望とせる東京大學醫學部豫科の入學試験に應募受験して、幸にも日頃の勉學が酬ひられ、こゝに美事一回でパスして、最下級の五等の乙に編入されたのであるが、當時は、成績の如何によつては級を飛び越して進級することも出來たので、一二ヶ月の後には、先生も臨時試験に獨逸語の成績優等の故を以て、五等の甲に一躍進級せられたのであつた。

こゝに、當時、先生と共に受験し入學せられた先生の盟友近藤次繁博士の當時の思ひ出があるから、それを次に掲げておかう。

故人岡田君と私はですな、これは度々外の所でもお話し致しましたことで、或は御承知のことかとも思ひますけれども、君は元治元年の一月生れ、丁度私と一つ違ひで、私は十二月生れで君は前年一月生れだから大略二つ違ひみたいな兄さんです。そして當時の東京大學醫學部豫科に、同じ時同じ入學試験を受けて同じ級、即ち一番下級に入りました。私は晩生れの十六歳、如何にも尙小供で、東京へ勉強に來ても肩上げをしてるやうな都合だつた。岡田君はその時分から一廉の大人であつたので同時に同級に入學した者六十五人ありましたが、岡田君はあゝいふ總ての點に世間馴れたる才氣煥發の人であつたから——尤も入學試験の詮衡が充分でないものだから、その頃の習慣として一時先づ或る級へ編入させて、其後學術優秀の人は臨時に上へ上げるやうな制度になつてをりました。その頃醫學部の豫科は一級、二級、三級、四級の甲乙、五級の甲乙と別れて居つた。之れを一年宛やつてゆけばそれだけでも七年かゝつた、尤も入學試験成績で優等の者を四等の甲へも入れた。此時の詮衡法は恐らく數漢の點で入否を定め、そして獨逸語の成績で入れる級の上下を極めたので

あらうと思ふ。私と共に一番下級の五等の乙に編入された岡田君は、入学前も勉強したらうが、入学してから非常に勉強した。君も貧乏だつたさうだが私も貧乏だつた。二圓五十銭で一月やつたといふ話をした。私も二圓か三圓でやつた。兎に角入学してからも非常に勉強した。字引を誦誦して来て先生を苛めた事がある。さういふやうなことで入つてせいふ、二月許りで之も誤つて最下級に編入された外國語學校二級生だつた某氏と共に上級に編入替された。それから結局終ひまで私は追つ附けなかつた。さういふ様な縁故がある。随分古い、私の十五の年からでありますから大變な古馴染です。級が離れてをりましたけれども、岡田君はその時分から死ぬ迄あの人は終始一貫活動して暮した人で、従つて私ら級が違つてをつたけれども、岡田君のことは眼に附いて居つた。大學に職を奉じてからも、助手時代から教鞭を取られる時分からも、息を引取るまで御交際したやうな次第です。君の臨終の時私はそれとも知らず見舞に行つたが其時將に最後の時であつた。

(岡田和一郎先生を偲ぶ「日本醫事新報第九二四號」)

尙ほ當時、醫學部豫科の入学試験には百二十名の募集人員に對し六百名からの志願者があつて五對一の割合であり、試験は近藤博士の談話にあるやうに、數學と漢籍で之を決め、獨逸語の出來如何によつて之を四級に分つたといふ。當時の入学試験科目を參考迄に掲げると次の如くである。

入学試験科目

科目	學部別	
	醫學部	別課醫學
讀書	日本外史	史記白文調點講義
算術	分數小數比例	分數比例
獨逸語	作文反譯	眞片假名交リ文章
書格	同	同
體格	同	同

而して、當時の東京大學醫學部の學制編成をみれば、本學部は醫學本科、預科、別課醫學、製藥學科及醫院より成り、大學の課程は預科、本科前後を通じて都合十ヶ年を以つて完了することとなつて本科、預科は共に修業年限五ヶ年之を一等より五等に分ち、最上級を一等と稱し、最下級を五等と稱して、各等を一年と爲し、更に一學年を獨逸流に夏學期及冬學期に分けたるを以て、各等は更に上下の二級に分けられたのである。

かくて、學年は十二月一日に始まり、翌年の十一月三十日に終り、冬學期は十二月一日より翌年五月三十一日に至り、夏學期は六月一日より十一月三十日に終る。

今、各科の課程を表示すると次の如し。

醫學預科課程 (明治十三年乃至十四年)

等	級		學科	並	授	業	時	間
	上級	下級						
第五等	上級	下級	讀書	字	術	方	六	時
	上級	下級	讀書	字	術	方	六	時
第四等	上級	下級	文法	文法	地理	分數	六	時
	上級	下級	文法	文法	地理	分數	六	時
第三等	上級	下級	獨逸語學	術	地理	幾何	四	時
	上級	下級	獨逸語學	術	地理	幾何	四	時
第二等	上級	下級	獨逸語學	術	地理	幾何	四	時
	上級	下級	獨逸語學	術	地理	幾何	四	時
第一等	上級	下級	獨逸語學	術	地理	幾何	四	時
	上級	下級	獨逸語學	術	地理	幾何	四	時

第一等	下級	獨逸語學	八時	羅旬語學	四時	動物學	八時	代數學	四時
第五年	上級	獨逸語學	八時	羅旬語學	四時	動物學	八時	代數學	四時

醫學本科課程 (明治十三年乃至十四年)

等級	學科	並	授業時間
第一等	物理學	物理學	四時
第一等	植物學	植物學	四時
第一等	動物學	動物學	四時
第一等	解剖學	解剖學	十二時
第一等	各部解剖學	各部解剖學	六時
第一等	組織學	組織學	四時乃至六時
第二等	物理學	物理學	四時
第二等	化學	化學	四時
第二等	實地解剖學	實地解剖學	十二時
第二等	顯微鏡用法	顯微鏡用法	六時
第二等	生理學	生理學	十二時
第二等	實地演習	實地演習	六時
第三等	外科總論	外科總論	四時
第三等	內科總論	內科總論	四時
第三等	藥毒學	藥毒學	六時
第三等	生理學	生理學	十二時
第三等	實地演習	實地演習	六時
第四等	外科各論	外科各論	六時
第四等	內科各論	內科各論	六時
第四等	外科臨床講義	外科臨床講義	六時
第四等	內科臨床講義	內科臨床講義	六時
第五等	外科各論	外科各論	六時
第五等	內科各論	內科各論	六時
第五等	外科臨床講義	外科臨床講義	六時
第五等	內科臨床講義	內科臨床講義	六時
第五等	外科手術演習	外科手術演習	六時

抑も、當東京大學醫學部は、舊幕下の「醫學所」の明治の新政と共に復興されて「醫學校」と改稱されしもの、後ち「大學南校」―「南校」となり、尋いで明治三年「東京醫學校」として獨立し、更に明治十年、舊開成所の後身たる「東京

開成學校」の法理文三學部と共に東京大學に歸併せられて成立せるものであつて、三學部とは自らその成立の由來を異にするのみならず、その所在地も亦ひとり本郷加賀屋敷跡にあつて異なるを以て、同じ東京大學の下に包括せられると雖もその實殆んど別個の學校たるの觀があり、舊東京醫學校の事業をそのままに繼承して、醫學本科を本學部の骨子と成し、その準備教育の機關たる豫科を合せて一體を成すものであつた。

當時一般學制未だ完全に施行せらるゝに至らず、醫學本科に入るに適當な豫備教育を施すべき處未だ成立せず、本學には豫備門の附設ありと雖も、これ法理文三學部の豫備教育機關たるに止まつて、本學部の準備機關としての作用は全く之を缺き、爲めに、こゝに豫科を設くるの止むなきにあつた所以であり、前掲の豫科學科課程をみれば明かな如く、豫科の科目は獨逸語及羅旬語等の外國語に最も重きを置き、之に數學、動物學、礦物學等、醫學を修むるに必要な學科を授けて以て本科に入るの階程たらしめてゐたのであるが、當時の醫學本科は既に専ら獨逸醫學を獨逸人教師に依つて教授せられてゐたのであるから、外國語に重きを置くも當然といふべきである。

當時の本學部の方針は明治十三年に制定せられた教旨一編に明示せられてゐるから、之を次に掲げて參考に資しておかう。

教旨

夫レ醫學ノ本旨ハ生民天賦ノ健康ヲ保全スルニ在リ而シテ之ヲ教導シ之ヲ擴充セント欲スルニハ二箇ノ目的ヲ有セサルヘカラス一ハ學業ヲ專修スルナリ一ハ技術ヲ練磨スルナリ甲ハ則チ勉メテ醫學ノ窮極スルヲ謂ヒ乙ハ則チ實際ノ醫療ニ卓絶ノ功績ヲ企望スルヲ謂フ今此兩歧ニ就テ生徒ヲ教育スルトキハ各其弊ナキ能ハス例之ハ甲ニ偏スルトキハ唯其理論ニ拘泥シテ實驗ニ微スルヲ須ヒス終ニ其技術ノ拙劣ヲ免レズ乙ニ偏スルトキハ徒ニ自家ノ經驗ヲ臆信シテ學說ノ何物タルヲ知ラス今日之ヲ不明ニ付スル病因ハ持シテ數年ノ久シキニ至ルモ曾テ之ヲ發見スル事ヲ得サルカ如シ

現今本邦政治ノ變移スルニ隨ヒ醫ノ職タル齋ニ察病ノ一端ニ止ラス裁判衛生等ノ如キ治民上ニ於ケルモ亦頗ル參與スル所多シ因テ日下

ノ急務トスル所ハ許多ノ醫生ヲ養成シ普ク之ヲ全部ニ配置シ治療審査及ヒ健康等ノ事項ニ準備スルニ在リ然ルニ今一箇ノ大學ヲ以テ此全部ニ配置スベキ無數ノ醫生ヲ養成スルハ極メテ難事ニ屬スルカ故ニ本部ニ於テハ他ノ醫生ヲ教導シ醫學ヲ擴充スルニ適應セル人材即チ醫學士ヲ養成スルヲ以テ要務トナスヘシ
現今本部ニ於テ進行スル所ノ教則ニ生徒ノ未タ本科ニ達セサル前ニ當ツテ踐修セシムル課程アリ乃チ語學數學及ヒ動植物學礦物學等ニシテ之ヲ預科ト稱ス

本邦ノ醫學尙ホ歐米ノ法ニ則トルノ今日ニ在テハ羅何學及英佛獨等ノ各國ノ語學ヲ兼修セサルヘカラス何トナレハ本部ニ在ツテ專ラ獨逸語ヲ學ヒ既ニ卒業スルノ後ニ於テ偶他邦ノ醫事ニ新發明アルノ報告ヲ得ルモ其語ヲ解セサルトキハ直ニ之ヲ了讀シテ其可否ヲ實驗ニ試ムル事能ハス亦醫學ヲ擴充スルノ一障礙タレハナリ然ルニ目今本部ニ招聘セル教師ハ盡ク獨逸人ナレハ生徒ニ教フルモ亦專ラ其國語ヲ以テテ固ヨリ一國ノ語ヲ學ヒ自ラ足レリトスルニアラス蓋シ已ムヲ得サルニ出ツ

數學及動植物學礦物學等ノ高尚ナル中學課程ヲ踐修セシムルハ畢竟生理病理二科ノ基礎ヲナス者タリ而シテ進テ上級ニ達シ理科ニ入ルトキハ其修ル所ハ乃チ理學化學及解剖學生理學等ニシテ後來醫學ヲ擴充スルノ大眼目タリ故ニ勉メテ之ヲ講窮セサルヘカラス譬ヘハ夫ハ農學者ノ地質ヲ研究シテ百穀播種ノ適否ヲ豫知スルカ如ク眼科ノ學ヲ擴充スルニハ先ツ光線反射屈折ノ理ヲ明ニシテ其他解剖生理ノ二學ヲ以テ病理學ノ基礎ヲナスモ亦同一概ナリ

既ニ本科ニ達シ其修ムル所ノ學課ハ内科外科及藥劑科等ノ諸科ニシテ從前講習スル所ヲ以テ之ヲ實地治療ニ經驗スル者ニシテ畢竟技術ヲ練磨スルニ過キス今ヤ人ヲ教導シ學術ヲ擴充スルヲ以テ目的トスル者ハ宜シク意ヲ理科ニ留ムヘシ

目下醫生ヲ養生スルノ急ナルニ當ツテ本部ニ於テハ將來醫學士ニ適應ス可キ人材ヲ募集教育スルハ論ヲ俟スト雖モ或ハ就學年限ノ久時ヲ費スニ由テ其素志ヲ遂クル能ハサル者アリ或ハ疾病事故等ニ由テ中道ニ廢學スル者アリ是ヲ以テ十年ノ課程ヲ踐修シ了ルハ容易ナラス故ニ別ニ邦語ヲ以テ普通醫學ヲ教授シ其就學年限僅ニ四ケ年ヲ以テ疾病ヲ治療スル一般ノ技術ヲ通曉スルノ方法ヲ設ケタリ(即チ別課醫學士是ナリ)蓋シ此法ニ據テ教育スルノ生徒ハ羅何學及各國ノ語學等ノ預科ヲ教ヘサレハ專ラ醫學本分ノ諸科ヲ修ムルニ十分ノ時間ヲ費スニ由テ其技術ヲ練習スルニハ固ヨリ遺漏アル事ナシ而ルニ此生徒ニモ亦理科ニ屬スル諸科ヲ其初ニ授クルト雖モ是レ此科ニ入ルノ地ヲナス者タリ譬ヘハ解剖學ノ如キハ外科手術ニ方ツテ其部ノ脉管神經等ノ分佈スルノ狀ヲ審ニシテ其執刀ノ際疑似スル事勿ラシムルノ主旨ニシテ恰モ引港人ノ港水ノ淺深及暗礁等ノ有無ヲ熟知シ入津ノ船舶ヲシテ安全ナラシムルガ如シ進ンテ醫學本分ノ學科ニ入

ルノ日ハ内外治術藥劑等ノ諸科ヲ研究シ親シク病者ニ接シ之ヲ處置スル事ヲ學ハシム夫ノ疾病ヲ救療スルノ技術ヲ實際ニ練磨スルヲ以テ目的トスル者ハ宜シク意ヲ當科ニ留ムヘシ

而して、當時は、學制も初期の混亂状態を漸く脱却して整調し、順調な發展の途上にあつて、明治八年本郷元富士町舊前田藩邸の地に起工せられた本學部屋舎の建築結構も、同十二年春にはその全部の完成をみ、陛下の御臨幸を仰いで開業式の舉行をみ、又同年秋には最初の本科卒業生を出して、第一回の學位授與式舉行せらるる等、いはゞ東大醫學部の創業發展時代ともいふべく、この木の香も新しき本學部に、年來の志望を達して籍を置かれた先生の得意や蓋し思ふべきであらう。

かくて、明治十四年六月には東京大學職制の改正があつて、從來法理文三學部綜理の外に本學部に置かれたる綜理を廢して、本學部も同じく東京大學總理の管掌下に立つこととなり、三學部と同じく學部長を置いてその事務を管理せしむることとなつたが、長き傳統は一朝にして改め難く、舊東京醫學部綜理池田謙齋を東京大學總理心得に任じ、同じく綜理心得石黒忠應に東京大學醫學部出勤を命じて、同醫學部教授三宅秀が兼任にて醫學部長の職にいたのである。
今、當時(明治十四年九月—十五年八月)の本學部關係の教職員表を録すると左の如し。

東京大學職員

總理	加藤弘之
總理心得	池田謙齋
總理補助	石黒忠應
東京大學幹事	服部一三
醫學部長	三宅秀

東京大學醫學部教員

教授

兼脚氣病院審査委員

病理學
外科臨床講義
外科論理
生理學
外科臨床講義
内科臨床講義
解剖及組織學

外國教師

内科臨床講義
生理學
獨逸語數學算術
解剖學、組織學
獨逸語、羅何語、地理學初歩
外科及眼科
化學、製藥學、藥劑學
動植物學
物理學

助教授 (奏)

御用掛講師 (准奏)

御用掛職員 (准奏)

三宅秀
橋本綱常
足立寛
永松東海
桐原眞節
櫻村清徳
田口和美

エルウキン・ベルツ
エルンスト・チーゲル
アントン・オイゲン・ゼレステ
ヨゼフ・ヂ・スセ
アドルフ・グロート
ジュリウス・スクリパ
イ・エフ・エイキマン
松原新之助
村岡範爲

助教授 (判)

化學、製藥學
獨逸語
解剖學
内科臨床講義兼醫員
外科臨床講義兼醫員
産科兼醫員
藥物學兼醫員
物理學
化學製藥學兼脚氣病院審査掛
化學製藥學
眼科臨床講義兼醫員
製藥學
生理學
眼科臨床講義

准助教授

准講師

三浦義純
熊澤善庵
川上正光
今田東
岡野玄
宇野郎
櫻井郁二
印東玄
飯盛挺
下波順一
丹波敬三
井上達也
丹羽藤吉
片山國嘉
須田哲造
菅沼慎一
吉田謙次
片山吉則
玉越興平

調劑學
動植物學
教員

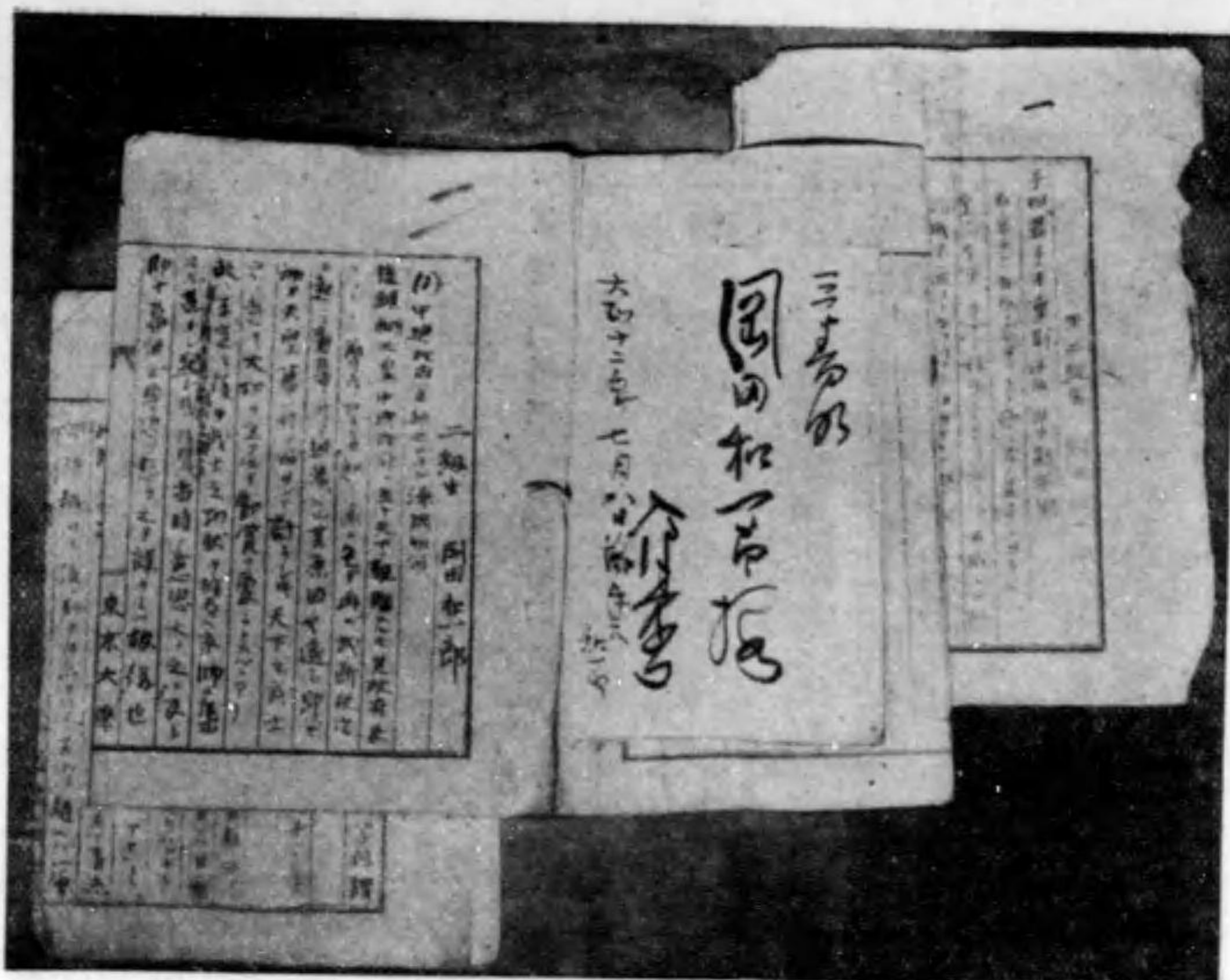
勝山 忠雄
練木 喜藏
大石 秀實
生田 秀則
前田 秀村
川口 一雄

〔註〕 尙ほ、外國教師擔當の外科及眼科は從來教授シユルツの擔任せる處なるも、シユルツは十四年四月八日解任歸國その代員として招聘せるジュリウス・スクリババ六月六日來朝して之に代れるものなり。その他同年には、十一月二十一日教師フンボルト、同ヂユデルライン、同三十日教師シエンデル、同ランゲ何れも解任。十二月一日和蘭人イ・エフ・エイキマンを以て化學・製藥學・藥劑學教師となす。

かくて、この本學職制改正の際、豫備門の職制も亦改正せられ、從來三學部綜理補兼豫備門主幹たりし服部一三、法學部長兼豫備門長に任せられ、次いで翌十五年二月東京大學幹事に轉じて、杉浦重剛之に代つて豫備門長に任せられたのであるが、醫學部の預科は依然學部直屬として存立してゐたので、翌十五年六月醫學部預科を豫備門に合併することとなつて、從來の東京大學豫備門を本費と稱し、合併された醫學部預科を分費と稱することとなり、當時在學の生徒の等級を左の如く改稱し、校舎は神田一ツ橋に移さるゝこととなつたのであつた。

舊稱
豫備門一級
醫學預科一等
豫備門二級
醫學預科二等

改稱
本費第一級
分費第一級
本費第二級
分費第二級



豫科二級生時代の先生の手書（上記は案答の氏入澤は案答記上）
豫科二級生時代の先生の手書（品珍しれらせ贈寄に生先れさ見發りよ中持長古の室務事部學醫に）

豫備門三級
醫學預科三等
分費第三級
醫學預科四等
分費第四級
醫學預科五等
分費第五級

これ實に明治十六年、先生の豫科二等生の時のことであつて、こゝに於て法理文醫四學部を打つて一丸となし東京大學總理の監督下に立つこととなり、東京大學は初めて完全な統一體となるに至つたのである。

而して、當時、先生の同級には、伊藤隼三氏を初め、平井純太郎氏、筒井八百珠氏、坪井連水氏等の諸氏があつて、互に席次の覇を競ひ、當時珍らしい秀才揃ひのクラスであつたが、またその上級には田代義徳氏、入澤達吉氏等の錚々たる先輩がをり、その下級には近藤次繁氏、土肥慶藏氏等の傑物が控へてゐて、而も先生の同級には、また先生を初めとして谷口長雄氏、北川乙治郎氏等の三羽鳥が刎頸の交をなして行動を共にする等、いづれ劣らぬ一騎當千の活動家揃ひであり、空前の政治家揃ひであつた。

その間にあつて、先生は、豫科在學中より漸次家道

衰へ、仕送りも漸く滞滞し、學業を續けるにさへ困難を感ずるに至つたが、天性の負けじ魂はかゝる貧窮の中にあつても凡ゆる困難をも甘受克服して、相變らず孜々として力以上の努力を爲し続け、頑張家の本領を愈々發揮して、卑下し、卑屈になる處もなく、一方には友人間に親交を結んではよく談じよく遊ぶと共に、また他方には學業に勤んでは漸次學友を擢んじていつたのである。かうして、明治十七年、先生の年二十一歳の時、明治十三年十一月醫學部豫科五等の乙に入學して以來、在學四ヶ年にして、東京大學豫備門分費を卒業して醫學部本科に進んだのであつたが、當時、先生の同級生として共に卒業した人々は左記の四十六名であつた。

明治十七年東京大學豫備門分費卒業生 (五十音順) (第一高等學校同窓) (會員名簿による)

- | | | | |
|------------|-----------|------------|------------|
| 安倍朝五郎(岡山) | 吾妻慶治(秋田) | 井上穂藏(兵庫) | 伊藤隼三(鳥取) |
| 大高信藏(大阪) | 大村秀敏(滋賀) | 太田未夫(石川) | 岡田和一郎(愛媛) |
| 神村兼亮(山口) | 北川乙治郎(滋賀) | 北村精造(東京) | 栗本秀二郎(東京) |
| 近藤橋太郎(大阪) | 渡邊祐尙(東京) | 下平用彩(石川) | 白江規矩三郎(長崎) |
| 鈴木徳男(兵庫) | 鈴木文雄(東京) | 關場不二彦(北海道) | 田村貞策(宮城) |
| 竹村一詮(新潟) | 谷口長雄(愛媛) | 筒井八百珠(三重) | 坪井連水(岐阜) |
| 鶴田頑次郎(佐賀) | 戸田成年(福岡) | 遠田清(東京) | 中澤信四郎(兵庫) |
| 中村桃次郎(岐阜) | 永井壽(東京) | 林暉禮(愛媛) | 平井誠太郎(三重) |
| 平松駒太郎(和歌山) | 逸見文綱(富山) | 町田茂太郎(兵庫) | 丸茂文良(山梨) |
| 三島通良(埼玉) | 水野欽(静岡) | 山口秀高(東京) | 山田常太郎(和歌山) |
| 山本慎(三重) | 湯原元一(佐賀) | 吉村源太郎(静岡) | 和辻春次(兵庫) |
| 若杉喜三郎(新潟) | 渡邊恭三(宮崎) | | |

尙ほ、先生の卒業當時の擔任教師並びにその擔當科目を参考迄にその卒業證書に依つて示すと次の如くである。



修身學	東京大學豫備門長	杉浦重剛
和漢文學	東京大學豫備門教員	岡松亮谷
獨乙語學	東京大學豫備門教諭	大石秀實
獨乙語學	東京大學豫備門教員	川上正光
羅甸語學	東京大學豫備門教員	ドクトル・ア・グロート
數學	東京大學豫備門教員	ドクトル・ア・グロート
物理學	東京大學豫備門教員	飯盛爲造
化學	東京大學豫備門教員	丹羽藤吉郎
動物學	東京大學豫備門教員	松原新之助
植物學	東京大學豫備門教員	松原新之助
金石學	東京大學豫備門教員	藤澤善庵
地理學	東京大學豫備門教員	ドクトル・ア・グロート
史學	東京大學豫備門教員	田中稻城
史學	東京大學豫備門教員	オット・セン
畫學	東京大學豫備門助教諭	狩野友信

二、東京大學醫學部本科時代

かうして、先生は、明治十七年豫備門分費を卒業すると同時に同十二月いよ／＼待望の醫學部本科に入學することゝなつたのであるが、この大學時代こそ、先生の人生への門出とも稱す可く、

對社會的な活動を開始した時期であつて、その青春最も華やかなりし活氣横溢せる時代であつた。

惟ふに、豫備門時代は、學業の精勵に追はれ、その幼少時代を邊僻の地に過ごし、而も正規の教育を受けざりし爲め、人後に遅れざるの努力に汲々乎として、眼を他に移すの暇もなかつたといふべく、こゝに於て漸く、餘裕を見出すと共に人生への活眼を開くの時期に立ち到つたともいふべきであるが、而も、この時期たるや、先生の内外漸く多事多端にして、蟬集し來たる人生の困苦はいよゝ／＼先生の眞面目を發揮せしめて、その内外の凡ゆる困苦を超刻しつゝ、内個人にあつてはその窮乏に毅然として刻苦奮勵、自己の研究勉學に孜々として之れ務むると共に、又外に向つては衆を率ひて東奔西走して自己の所信に勇往邁進、以て大學内外諸般の氣風の刷新改革に努め、一方に當局の企圖せる授業料の値上げを阻止すると共に又他方には學生自體の氣風の刷新を計つて、學生制服の統一制定を圖り、更に一步進めては東京醫學會の設立を劃策し、出でては長谷川泰氏の濟生學舍に對抗し私設醫育機關の設立を目錄む等、雄姿颯爽、内外への雄飛活躍の時代ともいふべく、男子の本懐之れに過ぎたるはなき、思ひ出多き青春の一時期といふべきであつた。

1. 嚴父の死と臥龍館時代

この多彩なる大學本科時代の劈頭に當つて、先生は實に思ひも寄らぬ家庭的な一大不幸に遭遇することゝなつたのであつた。それは、先生の嚴父の突然の長逝であつて、先生が豫備門を卒業し、將に大學本科一年生として新しき學生々活に入らんとする明治十七年十二月のことであつた。

その郷里西條に在りし嚴父の心臓性喘息症による突然の急死は、先生をして悲歎と絶望のどん底に墜し込むと共に又その前途の甚だ暗澹たるものゝあるを思はしむるものがあつた。殊にも先生は幼時五歳の時その生母に死別し、今またこゝに實父と永別することゝなつたのであるからして、今や全く

孤獨の身となり、その哀愁の甚だしきものと共に、剩へ、嚴父の急死はその乏しき學資金の融通の途すら杜絶せしめて、一時は大學生活をも中止せざるを得ないやうな、頗る憂慮すべき状態にあつて、前途への失望も亦想像に餘りあるものがあつたのである。

かくて、液分曉漢の親戚仲間にあつては、この際先生の學業放棄を力説するものもあり、或は歸郷就職すべきを主張するものもあつて、先生今後の身の振り方に就ては、一時前途暗澹として頗る悲觀すべきものがあつたのであるが、先生本來のもつて生れた不撓不屈の精神は、かゝる困難のさ中にあるも決然俗論を一蹴し、學業完成の意を決して歸京、僅か三百圓の資金を以て大學に進んだのである。

さなきだに餘裕なかりし先生の生活の困苦は當時物價の如何に安かりしとはいへ甚だしきものゝあつて、一日僅かに二錢を以て暮さねばならぬことの屢々にして、燒芋を以てその糧に當てたといふ如き逸話もこの間に生じたものであり、これを以てするも凡そその全般を窺ひ知るを得る筈である。



明治十一年三月
前年八月
東代平
京左太
大ヨ郎
醫學後谷
部伊列長
生

然るに、先生のこの窮乏とその困苦裡にある勉勵ぶりとは、間もなく友人間の知る處となり、就中、先生等の所謂三羽鳥と稱する盟友、谷口長雄氏、北川乙治郎氏等が相寄つて、援助の手を差し延べ、先生の生活を補助することゝなり、こゝに本郷森川町に一小家屋を借り受けて、之を臥龍館と名付け、共同自炊生活を營むことゝなつたのである。

かくて、こゝに宛然梁山泊を現出し、此處を中心として、學内刷新の問題を初め、醫學社會の實際問題等に就てまで談論を風發し、ひいては共同試練に依つて、他日大に國家的に活動貢獻するの素地を涵養し、またそれを實踐に移しては一

致團結、衆を率ひて意氣衝天の活動をなし、種々奇想天外の事件を畫策しては極めて意義あり、且つは心樂しい、思ひ出深い生活を送られることゝなつたのである。

されば、この臥龍館時代の事共を先生自身の筆になる「森川町の臥龍館時代の回顧」によつてこゝに紹介してみよう。

森川町の臥龍館とは何乎、是れは今を去る五十年前、余は余の十九、二十代に於て殆んど同一年輩で然かも常に意氣投合して所謂刎頸の交りを経て居つた故北川乙治郎及び谷口長雄の兩氏と共に或る動機を爲めに、本郷區森川町一番地の宮脇の一地點を卜して一小屋を借り受け自炊生活を營んだ時の寓居に名付けたる稱號である。(中略)而も之を回顧せば其存在時期は僅かに明治十七年秋期より同十八年の末に到る一年餘に過ぎなかつたが、それでも二十前後の腕白盛りの向ふ見ずの三青年が自炊共同生活の第一歩を邁んだので、その時代の事跡の中には極めて滑稽な事、大膽な事、又た甚だ生意氣であつた事等多々あつたのである。今此等の事跡を悉く茲に記述することは甚だ不適當であると信ずるので、其内臥龍館開催の動機と最も大膽であつた事二つを述べて、當年吾人の有して居つた書生氣質の一端を示して「スモーキングルーム」の材料に提供することにす。

一、臥龍館開設の動機 明治十七、八年頃余等三人は大學豫備門を卒業して東京大學醫學部に入學した。腕白時代であつたが互に意氣投合して刎頸の交を結んだのみでなく、一夕杯を擧げて義兄弟を約したのであつた。而て北川氏は近江の資産家の二男坊で、相當に豊富な學資に恵まれて居り、又谷口氏は伊豫宇和島の名家の出であつて、彼れも亦學資に富んで居つたに拘らず、余は五歳の時生母に死別し爾來繼母に育てられたが、父の慈愛厚き教育に依りて漸く長ずるに及んで上京して大學豫備門に入學することゝなつた。而て父は地方の名望家で、多年間西條町の戸長に推薦されて其職に在つたが、生來人格高潔で金錢に冷淡であつたので、人の爲め又世の爲めに私財を投ずること甚だ多かつたが、子孫の爲めに財産を遺り美田を遺すことを圖らなかつたので、余の上京後の學資金は毎月五圓乃至七圓の少額に過ぎなかつたので、兩氏の上品なる學生生活に似ず余のみは常に破れたる衣服に拵じみたる袴を着けて極めて不體裁な學生生活を營んで居つた。併し余は此時でも生意氣に且つ極めて瘦我慢の強かつた者であつて徒らに前途の大望を夢みつゝその境遇に甘んじて苦學を續けて居つたのであるが、大學一年生となつた時に國許に在りし慈父は突然喘息の爲めに長逝せられたので、斷腸と失望との極度に陥つた計りでなく、忽ちにして彼の少額の學資金も全く途絶するの悲運に到達したのであつた。そこで一時は已を得ず休學せねばならぬかと考へたが、此時にも例の敗ん氣に引き立てられて時に親類縁者等から不定的に恵まれる資金にて或時は日に二三回焼芋を喰ひ、又或時は牛肉煮込みの一錢飯を喰ひなどして不屈不撓、同志者と共同の學業に従つて居つたので、於之、北川と谷口の兩氏は特に余の此状況に

同情を寄せられ、且つ曾て苦樂を共にすべく盟つた間柄なるの故を以て、兩氏の出資にて一家を借り受け、三人の自炊生活を營むべく計畫したので、余は出資に酬ひる爲めに其家の番頭方と臺所役との勞働に服すべく約して森川町の一小屋を借りて三人の自炊生活を營むこととなつて、而て三人合議の上で此小屋に臥龍館と名付けたのであつた。それ故に此臥龍館開設の動機は全く北川、谷口兩盟友が余の當年の窮狀に寄せられたる同情に在つたのである。(下略)

而して、この臥龍館時代の生活振りは先生の「谷口長雄傳」に寄せられた追憶の中に詳しいから重複を厭はずこゝに紹介しておかう。

(イ) 本郷區森川町一番地に開設したる自炊寮「臥龍館」の事

明治十八年春三月、故人(註一谷口長雄氏、以下同じ)と北川氏と及び余とが協議の上本郷區森川町一番地の宮側、一小平屋建の日本家を借りて、そこで共同自炊生活を營むことゝなしたので、余等は之を臥龍館と名づけたのであつた。而して故人と北川氏とは素より學資金に恵まれて居つたので自由の下宿生活を續けられたに拘らず、今好んで此不自由であり不便である自炊生活を斷行するに至つた其動機は余の不幸なる境遇に同情を寄せられて、極めて義侠的に余を援助されんとしたが爲に外ならなかつたのである。即ち余は故人等と共に大學豫備門を卒業して將に大學本科一年生として新しき學生生活に入らんとするに先だちて、明治十七年十二月郷里西條に在りし實父が、突然心臟性喘息症の爲に急死されたので、余は其愁と失望との爲に大に前途を悲觀せざるを得なくなつたのである、殊に余は幼時五歳の時生母に死別して今また實父と永別したのであるから、全く孤獨の身となり、學資金も杜絶してしまつたので、一時は大學生活を中止せざるを得ないものと憂慮したのであつた。そこで故人と北川氏とは余に同情を寄せたる結果として、借家料と米代等は全部兩氏より支出されることゝなし、其代りに臺所の世話や、食料品の買出しや、家内の掃除等は全部余が引受けるべく約束して、此自炊生活を開始したのであつた。而して此宿舍は女氣の無い極めて無味淡白の自炊生活を營む所であつたが、それでも余等は皆前途に大望を抱懐せる青年のみの集團であつたので、故意に之を臥龍館と名づけて大に得意がつて居つたのみでなく、開始後同級生中の仲の良かった連中特に伊藤華三、坪井速水、平井毓太郎、關場不二彦等の如き豪傑連が、日夜此所に集つて故人等を中心として盛に天下國家を論じたり醫界の時弊に就いて憤慨したりしたので正に和製梁山泊の集會所となつたのであつた。従つて次項に掲げる如き種々大膽なる畫策の起つたのは、概ね此の臥龍館を策源地として發せられたのであつた。而して此自炊生活の初期の内は余も大に緊張して「男世帯には蛆がわく」と云ふ諺があつても、余は必ず蛆は發生させないと云ふ意氣込にて、余の責任上特に勉強して早く起床して御飯を炊いたり、寢具を片付

けたり、又家の内外の掃除をしたりしたのであつたが、一二月を経る内に前夜遅くまで談論で時を過ごしたり、或は學科勉強の爲に夜半過ぎまで就寝しなかつたりしたときは、往々翌朝寝過して御飯を炊く暇がなく、三人共寒中震へながら、空腹の儘登校せざるを得なかつたこともあつたのであつた。それでも兩兄は決して余の違約を咎むることなく、互に笑ひ合つて登校後「パン」などを取つて其日を送るのを常として居つたのであつた。そこで如斯状態が度々反覆されるのが臥龍館附近の人々の間に評判となつたものと見えて、斷然何人の所爲と云ふことを知らせることなく、全く陰德的に余等三人が冬期早朝寝具を其儘に放置して、朝食をも取らずに震ひながら登校するが如きの無邪氣なる書生々活を見て、之れに同情を寄せられたものと見えて、余等が打ち揃つて登校するのを見計つて、余等の留守宅内に這入つて、寢具を疊みて片附けたり、室の内外を掃除したり、又屢々白米を洗ひ釜に移して置て呉れたりする様になつたので、余等は心陰かに大に助かつて、難有き救け舟であると感じ其親切に對して合掌して深謝したのであつたが、併し飽くまでも敗けぬ氣の余等は如斯不意の援助あることに對して、斷じて依頼心を起してはならぬ、又如斯援助のあるが爲に横着氣を出してはならぬと申合せた結果一層奮發心を起して早朝の飯炊きも家内の掃除等をも必ず怠らないやうに努力したので、其後は附近の人々も遠慮して留守中に掃除に入り込むことを止めた代りに公然と折に觸れて午後のお茶菓子や夕食の惣菜等を附近家庭の夫人の名前にて贈らるゝやうになつて、益々其親切に對して難有感謝せざるを得ないやうになつたのであるが、それでも余等は此等の家庭に訪問をもせず、唯毎日の日課に勉強することゝ



大學生時代の谷口氏(左)と先生

梁山泊の集會所としての活動とにのみ時を消して居つたのである。而して余等は如斯自炊生活を毫も苦勞に感ぜざるのみならず、却つて有益の修練であるとして樂しく繼續して居つたのであつたが、開始後約一年有半即ち本科二年生の中頃に到つて、偶々三羽鳥の一羽盟友北川氏が、自費にて獨逸に留學することに決定して、時の陸軍々醫監石黒忠惠先生の洋行さるゝの好機に會うたので、先生に願うて隨行することゝなつたのと、又他の一羽盟友故人は養家谷口家の長女ヒサ子嬢と結婚され、家庭生活を営まれることゝなつたので遂に合議の上漸く佳馴れた臥龍館を閉鎖して共同自炊生活を解散することゝなしたのであつた。併し後に残された一羽即ち余も亦此時故人の斡旋紹介にて、故人の同郷

の先輩たる朝野新聞の主筆末廣鐵腸先生に願つて、獨逸の新聞雜誌等の中から政治上、社會上又は學術上に有益と認められた事項を迅速に翻譯して、之を同新聞上に登載することを引受けまして貰つたので十分に下宿料を支辨し得らるゝことゝなつて、安心して下宿生活に轉向したのであつた。そこで此解散に際して、余等三人は向ふ三軒兩隣りの諸家庭を初めて訪問して前年來余等に陰德的に與へられたる同情的厚意に對して深甚の謝意を表したるに、皆余等の移轉を惜んで哭れたが、余等は必ず成業の上再會することを約して別れを告げたのであつた。

かうして、先生自身の云ふ「余等三羽鳥は意氣衝天の活動期の頂點に在り」、「余等に取りて最も有意義の時代であつた」この臥龍館時代前後に於て、こゝを策源地として、學内氣風の刷新、醫學研究及び醫學教育の向上等、種々意想外の極めて大膽な而して又意義ある事件を畫策されたのであつたが、この期に於て先づ回顧せられるものには、本科一年生當時に於ける月謝値上げの反對運動がある。

是は、時の文部大臣森有禮氏が大學々生の月謝五十錢を改めて二圓五十錢に増額することにしたので、先生を初め、谷口長雄、北川乙治郎氏等の諸盟友相謀つて、同級生を總動員して反對し、少くも現在學生の既得權は擁護すべしとなし、之れに向つて大いに闘ふ可決議して、陳情委員總代として、同級生中より、先生並に湯原元一氏の兩人が選出され、文部省に當時の専門學務局長濱尾新氏を訪問して交渉し、終にその目的を貫徹して、その當時在學中の學生に對する増額は斷然實行せざることゝなつたのである。當時若年にして既に一方の口利きとして、氣骨稜々、辯説も爽やかに東奔西走せる先生の得意や思ふべきであらう。

また當時は大學が一つ橋より本郷へ移つて來た當初の頃のことゝて、本郷臺上俄かに賑かとなり、運動競技の漸く盛んにならんとする頃であつたが、平生醫學學生の多くが嘗つての長袖者流の亞流的存在として、懦弱にして進取の氣魄に甚だ乏しきを憤慨してをられた先生等は、先づ體育の向上を期せんが爲めに上級の同志者を促してボートの購入を計り、端艇會を組織して墨田川に浮べ大に英氣を養ひ、又一定時をみては競漕會をも催したが、之れがひいては他の分科學部にも波及し、之を見習つて漕艇の興味を覺えしめ、更に進んでは之れが大學の運動會に發展するの契機ともなつたのである。

かくて又、當時醫學部は、本科と別科とに分れてゐて、別科には有福な家庭の子弟や醫家の代診等をして學資の餘裕のある學生が多く、その服装の如きも相當贅澤であつて、一般學生の企て及ぶ所でもなく、又その爲めに色々の弊害も生じ、就中絹の衣服に嘉平次平の袴を着けた華美な軟派的色調は先生等の嫌厭する處となり、剩へ本科學生も亦、尙未だ制服の制定なきまゝ、各人各様の服装にて大學々園に出入するに、學生としての品位を害ひ、且つは活氣乏しきを甚だ遺憾として先づ先生等三人が首唱して、大學々生制服の制定を學校當局に進言する處あつたが、その容易に容れられざるに憤慨して、當時の獨逸人教師ヂツセに獨逸の大學々生の服装の事等を聞き訊し、之を參考にして、角帽、制服を先づ私的に調製し、之を斷然同級生に着せしめて以て他の軟派者流と峻別せしむべく先づ範を垂れたのであつたが、この先生等の私的制服の制定が動機となり、聽て一年餘にして、今日にみられる如き黒地金ボタンの詰襟服と角帽とが公然大學生の制服として決定され、先生等の本科二年生時代からは之を着用することゝなつたのである。従つて、現今の學生の制服は先生等の創意に成るものとして世に誇るも毫も不都合はないのである。

その他、この本科一、二年生頃の先生の臥龍館時代には尙ほ記念すべき種々の活動が多々あるが、就中特記すべきは内にあつては東京醫學會の創設と、外に向つては刀圭社の設立とがあり、臥龍館時代にあつて、先生を初め、谷口、北川の三雄を繞つて畫策された尤なる事業の一つとして、こゝに再び先生自身の言葉を以て述べておくことゝしよう。

此時代に計畫されたる事跡中最も大膽なるものとしては、時代の私設醫育機關としての王座に在つた長谷川泰先生の濟生學會を向ふに廻して同区内追分町の奥田邸の一部に校舎を新築して醫學校を開設した事である。余等の臥龍館には余等三人のみでなく同級生の伊藤平三、平井純太郎氏等も折りに觸れて來りて恰も梁山泊の集りを爲して、或は學業を語り或は時事を議して、屢々口角泡を飛ばして夜を徹したのであつたが、就中當時の私立醫育機關の不備なるを憤慨した末、醫學校を建設して此梁山泊連皆な一定の學課を分擔して教鞭を取ることを議し、主として北川、谷口兩氏の出資にて前記の場所(今の一高前)を卜して二階建の校舎を新築して、差當り物理學、化學解剖學、生理學の教授に要する教材を設備して生徒を募りて約三十人の入學者を得た。余等は皆な大學一年生であるので朝に大學に在つ

てヂツセ、チ！ゲル、エーキマン、大澤、村岡、久原等の諸先生に就て解剖學、生理學、化學、物理學等の講義を聽きて、夕に此私設學堂に入りて此等の諸學課を講演するといふ如き極めて大膽なる事業を開始したのであつた。併し此學校は其後約一年有餘にして北川氏の私費洋行となり、余等の大學に於ける學業の繁忙となつた等の爲め、已を得ず閉校せざるを得なくなつたけれ共、それでも此校の開設のあつた爲め濟生學會の長谷川先生は大に之を憤慨されて、一日同校全學生を集めて大學の「青二才」共が本校に立て衛いて、醫學校を開いた由であるが、本校は爾今益々設備を充實し教師を精選して諸氏の醫育の向上を計るべきであるから、諸氏斷じて此青二才等に誘惑されるゝことなかれと演説されたとのことであつたので、幾分此時代の私設醫育機關に興奮劑ともなり、又刺戟薬ともなつたかの様に思はれた。實際其後濟生學會は日を遂ふて改良に改良を加へ、擴張に擴張を重ねて遂に一大私立學校となり、余も亦大學卒業後、一時外科學の教授として教鞭を取ることもあつたのであつた。

之を要するに此等の計畫を今より回顧せば誠に無謀なる又た極めて大膽なる馬鹿氣たる計畫を爲した事とすべきであるが、併し當年の青年として、當時の私設醫育機關の不備なる事を觀破し、是を憤慨して此無謀大膽なる事業を敢て斷行した如きは、當年の青年の意氣の旺盛であつた事と、其着目點の現今の青年學徒のそれと大に異なる所あつた事は、蓋し立證する事も出来ると思ふのである。

この本郷追分町に先生等が華々しく旗擧げた私立醫學校は「刀圭學會」と名付けられて、その教員としては、谷口氏が物理學を、伊藤氏が化學を、北川氏が生理學を、平井氏と先生とが解剖學を夫々分擔したといふがこれは實に「當時私立醫學校として最も隆盛を極めて居つた長谷川泰先生の濟生學會に特に反抗せんとしたのであり、唯彼が獨占的位置に在つて多々益々弁ずなる態度に於て千人内外の學生を包容しながら、校舎も不完全にして恰も大道に於て公開講演をなすが如き觀あり、隨つて臨牀實習も餘り良く徹底して居なかつたやうに感じたので、少くとも彼等をして獨占的位置から離れしめて、余等の與へたる刺戟に依つて改良の途に上らしめ得たならば結構であると云ふ位の考にて、極めて無邪氣に之を計畫したのであつた。」

之を以てするも、當時僅か二十二、三歳前後の先生等「青年の抱きたる思想が、全然現今の青年と異りたる國家的又社會的に立脚せる雄々しき剛勇なる氣象の發露を示すに足るものであつたことだけは斷言することが出来る」と思はれる。

尙、この明治十八九年の頃「臥龍館内に於ては、大學に於て教授先生と學生との間の關係が唯講堂内に於て聽講する丈では甚だ不満足であるから、何とかして教授學生協同にて學會を組織して、度々互に接近するの機關を構成せしむべきであるとの説が盛んとなり、

當時の上級學生であつた三浦謙之助、芳賀榮次郎、大澤長太郎、山崎三郎、多田貞一郎、笠原光興等の諸氏に、故人（谷口長雄氏）の外に北川、伊藤及び余等が参加して種々協議を進めたる結果、當時教授助教授の諸先生丈で醫學集談會が已に組織されて居つたので、之を改革擴大して學生をも之に加入せしめて、東京醫學會となすの適當なるを認められたので、其實行に向つて故人等は上級諸氏と共に、時の學長三宅秀先生、教頭大澤謙二先生等と數回の交渉を重ねて、遂に之を實現せしめて、明治二十年其第一回學會を、時の解剖學講堂に於て盛大に開催することとなり、次いで其機關雜誌として會報を發刊することとなつたのが、即ち現時の東京醫學會及び東京醫學會雜誌との基源となつたのである。

抑々、この東京醫學會は明治十八年の春、學生有志者によつて成る東洋醫學會の發展せるものであつて、十九年の秋には之に教授諸氏の参加をみて東京醫學會と改稱し、更らに十九年の末頃、同じく十七年秋以來教授助教授諸氏によつて組織されてゐた集談會との合同の議が起り、二十年の初頭に於てそれが實現し、當時唯一の權威ある學會として華々しくデビューし、二十二年の春には特に宮中より金二百圓の御下賜金を賜はつた程であるが、昭和十二年十一月二十日にはその五十週年を迎へてその記念講演會の開催をみる等、我が國最古の權威ある學會としてその存在を誇つてをるもので、こゝでは同記念講演會の席上で試みられた、當時の創設委員の一人として奔走した先生の「東京醫學會初期の回顧」の一部をこゝに掲げて當時を偲ぶ縁としておかう。

今日は唯此の機會に一番初めに本會の創立された時の状況に就て申上げ、且つ當時本會の創立に盡力されたる先輩及び同僚諸氏の姓名を明示して置くのが多少の御參考になりはせぬかと思ひます。殊に本會の成立は外の學會のやうに同學の學者が澤山出來て、其の澤山出來た學者が集つて而して互に學問の報告をし合ふ、學問上の討論をする、相共に打寄つて而して此の國家及び學問界に貢獻しやうと云ふ意味に依つて出來たものならば世間普通の學會の成立であります。近來出來る専門學會は殆ど皆それでありませぬ。所が本會が五十年前に出來た當時の状況は現代の學會の創立と殆んど全く違つて居つたこと、即ち此の學會が五十年前即ち明治十八年に出來た當時は全然當時の學生の首唱と努力に依つて成つたと云ふことが特筆すべきであると信じます。私共は當時學生の中でも一番尾つ子であつたのであります。其の時には二年生でありました。本日御臨席の芳賀榮次郎君とか三浦謙之助君の方々が四年生、それから入澤君や笠原君や田代君は

三年でありました。私は二年でやつと解剖や生理を聞いた位な若い未熟の學生でありましたけれども、併しながら學問の趨勢を觀、又日本醫學の將來を考へ、どうしても一つ學會を拵へて、それで互に學問上の意見の發表もしようし、又討論もしやうし、又互に學術研究の獎勵の具に供ふと云ふ目的で先づ學生で一つやうといふやうな具合で、學生が一番初めに會を計畫したのであります。勿論學生が之を計畫したといふのには理由があつたのであります。其の當時三浦君の「クラス」から近藤、土肥、吳等諸氏の「クラス」に至るまでは所謂本科生であります。現在の大學の學生と同様でありました。本科生と云ふものは皆其の當時は獨逸の教師に就て獨逸語の講義を聽いて居つたのであります。でありますから一番初めの解剖の教師は「ドクトル」ドイツ先生で日本から歸つた後は獨逸のマルブルグ大學の解剖學の正教師になつて隨分多くの學問上の貢獻をなした先生でした。又生理學も私等の初めの教師は「ドクトル」チーゲル先生でありましたが、此の教師は後ち直に任期満ちて歸られたので、日本人としての一番初めの本科生教授として多年の留學を終り歸朝された大澤謙二先生がこのチーゲル先生の後を襲いで生理學の教授に就任されました。又臨床科の方に於ては内科は「ドクトル」ベルツ先生外科は「ドクトル」スクリバー先生に依つて授業されて居りました。併し當時は尙ほ場合に依つて産科、婦人科、小兒科或は眼科と云ふ風な諸學科もこの兩先生に依つて擔當されて居つたのであります。是が本科の大體でありました。それでありましたからして當時本邦人で本科に入つて來られた教授でも、例へば物理學を教へて居られた村岡範爲先生でも、植物學を擔任された松原新之助先生でも、非常に苦し相であつたけれども、獨逸語で講義をしたのであつた。我々は困つたことがあつたけれども兎に角獨逸語ばかりの講義を聽て居つたのであります。それ故に私共は本科生として修學上甚だ苦しい場合もあつたが、併し終始一貫獨逸語で講義を聽いて段々醫學を習つて來たやうな次第でありました。併し當時でも日本人の教師即ち教授は其他に尙ほ澤山居りました。即ち三宅、田口等の如き諸先生なども教授でありました。それから臨床科に於ては橋本綱常、佐藤進、片桐眞節、櫻村正徳等其他多數の教授があつて多士濟々でありましたが、斯くの如き日本人の教授は此時代に於ては悉く皆本科生の教授でなくて、其の當時速成を目的として別に拵へてあつた別課生と云ふものがありまして、その方の教授でありました。是は日本語で講義をするのであります。それ故に當時の醫科大學には日本語で講義を聽いてやる別課生と、それから獨逸語で教育をされる本科生と二つが併存して居りました。而して此二つの間には我々の方は本科生であること云ふ風に考へて、多少そちらから離れて居つた。又別課生としても我々は醫者として早く世の中に出るのだと云ふやうに醫學上の方面では其の方はずつと早く進んで行つたやうな具合で、さうして我々と全く離れて教育されて居つたのであります。それでありましたから自然我々本科の學生は日本人の先生即ち別課を擔當せる教授、助教授の諸先生に接近するの機會は甚だ少かつたのであつた。然るにこの教授

助教の諸先生達は矢張り時代の趨勢に鑑みて、互に寄合つて學問上の話をしやう、即ち實驗研究したものを互に話して報告し合ふ。それから又未だ未ださう進んで居ない世の中であつたので、獨逸やアメリカあたりから來た醫學に關する文献が其の時已に相當に澤山に來て居りましたから、其の文献を讀んで其内で有益であると感ぜられたものを抄録する。現今でも各教室で抄録會を催して居る様に報告して、會合者は皆それで互に智識を分け合ふと云ふことをやつて居りました。斯くして所謂集談會と云ふものが盛んに催されて居つたのであります。それで此集談會は教室内で毎週一回づゝ開いたが、或る時には表へ行つて開いた様であつた。眼鏡橋の所に萬代軒と云ふ西洋料理屋がありましたが、この萬代軒あたりで集談會を開いたと云ふことを記憶して居ります。此會は學生の入る所ぢやないと言はれて居つたけれども、私共は無理に頼んで一二回傍聴に行つたこともありませう。其の集談會では教授助教の先生方は盛に論議をするし、學問上の報告をも爲したと云ふ風なことで、矢張り其の時代の教授助教の方々も學問上に相當に活動して居られたけれども、學生は近附けぬと云ふ風なことだから、そんなら自分でやると云ふやうなことで、實に其の當時各「クラス」の學生ばかりぢやない、其の時已に卒業試験に掛つて居つた猪子吉人君の「クラス」、或はそれに近い坪井次郎君、又村田謙太郎君とかの先輩が参加して大に授けて呉れたのであつたが、兎に角學生側で一つの集會をしやうと云ふことで催したのが此の學會の前提であります。即ち初めの内は矢張り學生だけでやると云ふやうなことでやつたのであります。其の時の名前は私はちよつと忘れて居つたが、三浦君の歴史に書いてありますから、それに依ると、一番初めの學生の拵へた會を東洋醫學會と云ふ名前を付けたと云ふことであります。それが明治十八年の春であります。それから半年経ちまして十八年の九月頃になりますと、どうも學生ばかり寄つたのでは何となく物足りぬ、隔靴搔痒の感がある。どうしても教授と一緒にやつて、假令別課の教授、助教であつても先輩であるし、我々は尊敬して居るのであるし矢張り一緒に御出でを願つて、而して御話を聴き又我々の言ふことも聴いて戴くと云ふやうな具合に、どうしても教授諸君と一緒に居るのを爲さぬと云ふことが學生會の間に起りました爲に、實は其の時の我々學生の團體としては或は多分此處に御臨席の芳賀君が入つて居つたと思ひますが、芳賀君、笠原君、それから私は若輩であつたけれども随分其の時分の理窟家の一人であつて、同時に向ふ見ずの闘士の一人であつたので、何か掛合事でもあるときには往々引つ張り出されて閉口したのであつたが、此時にも亦矢張り私も加はつて集談會側に交渉を初めたのであります。其の時の集談會の方は矢張り三宅先生が牛耳つて居られた。會長と云ふものがなかつたと思ひますが、先生は學長でありましたから牛耳つて居られたのでしよう。兎に角三宅先生と大澤先生とに御願ひして成可く此の東洋醫學會の方と一緒にやつて頂いて、さうして教を請ひたい、又親睦も圓りたいと云ふ風なことを申込んだので先生の方に於てもそれは固より結構である、我々の望む所であると云ふ

風なことで、十八年の下半期に於きましては此の東洋醫學會の方に教授諸君も参加されて御話下さる事になつたのであります。併し東洋醫學會と云ふ名前は餘り大き過ぎる、どうか東京醫學會にしてはどうだと云ふことを言はれた。多分先生方の御意見であつたと思ひますが、兎に角其の時から東京醫學會と名前を變へてやり出したのであります。併し我々學生が拵へた東京醫學會は教授の参加を得ただけで其の儘ずつと繼續して居りました。當時本科生側の日本人教授として唯大澤謙二先生一人でありました。勿論他に物理學の村岡先生等があつたけれども、是は醫學の方に直接關係がないので大澤先生だけが關係して居た。さう斯うする中に解剖學の小金井先生や衛生細菌學の緒方先生等が「ドクター」になつて歸朝されて本科の教授になられたが、兎に角前驅時代の醫學會時代には大澤先生のみが教鞭を執られて居つたのであります。そこで我々學生は大澤先生に接近する機會が非常に多かつたのみでなく、丁度同志中の一人笠原光興君は大澤先生の縁類に當るのであります。此方面からも特別に接近する機會があり、且つお世話になりました。それで笠原君や芳賀君、私共が大澤先生に度々交渉して殊に御盡力を願つて、この前驅期の醫學會の更生に向つての御盡力を願つて出來たのであります。それ故に一番初めの會長として大澤先生を推薦して御指導を願つたのであつて、事務所も當時寄宿會があつたから、其の當時は今丁度内科の建つて居る所に寄宿會があつたから、この宿舎の中に事務所を置いて用を足して來たのであります。又集談會は集談會で相變らず盛に集會して學問上の智識の交換をして居て、十八年から十九年に掛けての當時は兩會併立して居つたのであります。所が其の當時の我々の方の醫學會は未だ今日の醫學會とは違つて居りました。教授は副であつて學生が主である。故に先生達は御客様で來て居ると云ふ位な意味であるからして、未だ未だ今日の學會とは違つたものであります。貧弱な東京醫學會でありました。併し演説をする者なども随分あつて大抵は今の學生諸君もやるだらうが、折に觸れては時事問題を話して見たり、哲學や歴史に關することを言ふて見たり、或は雜誌などを見てそれを抄録して我が物顔に豪ら相なことを言ふて見たりと云ふやうなこともあつて、兎に角學生が互に話し合ひ、又諸先生方と會する機會を造り出したのであります。併し又時には茶話會もやり、懇親會もやり、又た遠足もやつて最初の前驅期の東京醫學會を經過させて來たのであります。會費は矢張り取つたので、一回十錢づゝ、今では年額八圓とか十圓とか云ふやうな會費でありますけれども、其の當時は一ヶ月十錢づゝの會費を取ると云ふやうなことで、其の代り缺席しても取る。其の取つた十錢づゝの會費で毎會の費用のみでなく、雜誌發刊費や茶話會の茶葉料、或は遠足の補助金を辨じて其の當時を經過して來たのであります。所が明治十九年の末、十二月頃になりまして、どうも東京醫學會と集談會と同じ學内に於て二つあると云ふことは宜くない、殊に教授は兩方に跨つて居ると云ふことも餘り感心しない、結局之を合同して一つになした方が宜からうと云ふ説が起りまして、而して合同説が大分強しまして、集談會の方が

らは大澤先生と小金井先生と、それから村田謙太郎君が委員となり、それから又學生側の醫學會からは三浦君、芳賀君、多田、笠原と云ふやうな人々以下私も加はつて九人だけの交渉委員を拵へて、さうして双方の合同交渉委員會と云ふものが出来ました。而して先づ第一に合同すると云ふことを決議し、合同するならば會則を一つ改めぬといかぬと云ふことで、そこで整然とした會則を作りまして、先づ第一は年に二回と改まつて来た。但し東京に居る人は毎月の例會にも出席することが出来るし、又始終接觸して智識の交換も出来るが、地方に居る方はさう云ふ風なことには参加出来ないので、東京在住の會員は二回だが、地方の會員は一回五十錢、それから學生はどうも免除する譯には行かぬから半額の一圓と云ふことにして、兎に角教授、助教、それから學士學生と、それだけを打つて一九として會費をとることになりました。それだけで東京醫學會と云ふ一つの醫學會が成立致しました。それからこれまでは東京大學に關係せる者に限られて居たのであります。赤門を閉めてしまつて、所謂赤門主義をやつて来たのでありますけれども、其の時から學問にはそんなに境界を置くべきものではないと云ふ議論があつて、遂に赤門を開放して、而して日本中に入會勸誘の手紙を出したのであります。其の入會の勸誘などに付ては私なども矢張り其の衝に當つて微力を致した。さう云ふ風なことが忽ちにして數百人の會員を得た。それで明治二十年一月に今日の會の第一回の會が開かれたのでした。此第一回の發會は其の時の解剖學教室で開いたのであります。即ち是が本日の此の合同後の會の最初の發會式でありました。それで其の發會式の時には新規則に依つて石黒先生の座長にて會頭の選舉をした。所が是は矢張り豫め色々協議した結果、其の時の東京大學醫學部の部長であつた三宅秀先生を會頭に選び、それから又二十一年には最早緒方正規先生が歸朝して細菌學教室を開いて居られましたので、緒方先生を副會長に擧げ、それから前に色々發起人として運動し、合同委員として骨を折つた者が幹事として會務を執ることになりました。それ故に此當時でも尙ほ學生が主となつて凡ての仕事をして居つた。其の期間に最も學生として骨を折つて居られた人では先づ第一に多田貞一郎君を擧げねばならない。同君は入澤君と同級であります。多田君は眞面目に能く働いた。随分骨身を惜しまずにやつて呉れたので、極くうるさい會計主任に當られたのであつた。それから新規則に依りまして其の時からして雜誌を發行することになつた。一月二回づゝ、五日と二十日。初めのは極く小さな雜誌でありましたが、兎に角毎月二回づゝ雜誌を發行することになりました。是は費用は掛るけれども、從來は十錢づゝの會費でありましたので一向資金がない。資金がないけれども會の將來の爲に必ず定期に會報を出し且つ之を各方面に普及さして而して會員を募集すると云ふ風なことで、苦しくとも必ず會報を定期に出すと云ふことを一つのモットーとして努力致しました。其の際に會報に關係した人としては今逝くなつた笠原光興君、即ち後に卒業後京都帝國大學内科の教授となつて命名あつた笠原君、及び私の同級生であつた谷口長雄君、即ち後ち熊本病院長となり熊本醫

學專門學校創立者となつて現在の熊本醫科大學の基礎を拵へた人の兩君が編輯主任となつて、毎月二回の雜誌を編纂發行したのであつた。併し其外に芳賀君や私などは矢張り前線に立つて凡ての會務に就て働かなければならぬ位置でありました。即ち幹事となつて仕事を致しました。それ故に雜誌發行に就ても資金不足の爲めに其印刷所としては日本橋區本石町に極めて小規模の三間々口の小屋内で手摺り活版機にて印刷所を開いて居つた高後徹氏の義侠心に依頼して印刷せしめたり、又雜誌の材料を蒐めたり、それから毎月二回づゝ演說會を開く。所が當時は演說者が無くて困つた。中興の時代には演說者が多過ぎて困つた時代もありましたが、初めには中々演說者がない。従つて雜誌の材料がないので大に閉口したことも度々ありました。随つて芳賀君や我々は各方面に向つて材料の蒐め方もやるし、又演說會の時には演說者を依頼もして廻る。それから又時に依つて愈々演者がなければ自分等が立つて其の缺を補ふと云ふやうなことでやつて、結局二回の雜誌發行と二回の例會とを滞りなく續けて参つたのであります。(中略) 左様なことにして兎に角初めの時期を經過して参りましたが、併しながら是が決して徒勞ぢやなくして、初め學生から出来て、而して雜誌も發行し又例會も舉行して来た爲に今日の盛大を成した。愈々正式の本當の合同した會になつた時からして雜誌の體裁も變るし、内容も充實すると云ふやうなことになる、又本會事務所も本郷區龍岡町に新設されて事務員を雇ひ入れて専ら會務に當らしむることになつて段々進んで来たと同時に、學生であつた人々が皆卒業されて教室生活をする。それから教室生活をして居る間にその内の多數は官命又は私費にて海外に留學せられるといふやうなこととなり、又以前から留學して居られた諸先輩が續々成業歸朝されたので、小金井、緒方兩先生に次で禰、濱田、青山、佐藤、高橋、隈川、弘田、河本等諸先生の教室が開設せられ、是等の諸先生が教室に於て青年學徒の指導や研究に當られると同時に本學會の指導者の位置に立つて演說もされるし、教室員をして研究成績を報告せしめたりして、本會は段々盛になつて、一時は例會の演說者が有り餘つて困る始末となり又毎年秋期に開く總會も多數の演說者があつて、而して醫學界に雄飛の實を擧げ得る様になつたのであります。(下略)

尙ほ最後に、本會の創立前後に参畫盡力された諸氏の姓名を擧げれば次の如くである。

教 員

- 石 黒 忠 真氏 (最初の創立協議會に坐長として指導獎勵されたり)
- 三 宅 秀 氏 (當時醫學部長にて第一回本會々頭に就任されたり)
- 大 澤 謙 二氏 (當時教頭に於て明治十九年一月以降前編期東京醫學會々長に就任され、又た集談會々長であつたが爲め兩會併合に際して特に盡力されたり)

小金井良精氏 (當時新歸朝の解剖學教授であつて集談會代表者の一員として創立に参劃されたり)
 緒方正規氏 (當時新歸朝の細菌衛生學の教授であつて本會の副會長なりき)
 村田謙太郎氏 (當時内科教授にて後ち皮膚病科教授候補として留學を命ぜらる。歸朝後暫時にして他界されたり)
 坪井次郎氏 (當時細菌衛生學の助教授なり)
 猪子吉人氏 (當時藥物學の助教授なり)

鈴木文太郎	三浦謙之助	芳賀榮次郎	大澤岳太郎	入澤達吉	田代義徳
平井政造	山極勝三郎	笠原光興	多田貞一郎	梶田恭一郎	村田豊作
後藤武彦	岡田和一郎	平井毓太郎	關場不二彦	北川乙治郎	谷口長雄
湯原元一	伊藤隼三	高田明安			

2. 東京大學醫學部より帝國大學醫科大學へ

是れより先き、舊東京醫學校の後身たる本醫學部は、明治十年舊東京開成學校の法理文三學部と共に東京大學に歸併せられて、その一學部を成すに到つたことは既述の如くであるが、爾來、明治十四年六月の職制改正をみたといへば東京大學の内實は、尙ほ且つ各學部各個に獨立して、各々舊來の事業を繼承して發展せるのみならず、その所在地も、三學部は神田一ツ橋にあり、本學部は下谷和泉橋の舊藤堂屋敷より移つて、本郷臺上にあつて、各々その所を異にしてをり、未だ眞個の統一體とは成つてゐなかつたのである。が、明治十一年の秋より、三學部も本郷舊加賀屋敷跡に校舍の新築に着工し、十七年にはその新築工事も略竣工し、一ツ橋より本郷に移轉して、先生の學部入學頃より漸く本郷臺上も學生街としての殷盛を極め初めたのであつたが、更に明治十九年、先生の本科二年生の春、三月一日勅令第三號を以て帝國大學令が公布せられ、帝國大學は舊東京大學の事業を繼承して、こゝに綜合大學としての統一が全く成つたのである。

かくて、從來の總理は總長となり、同時に法科大學長がその職務を兼ねる事となつて當時の學長渡邊洪基氏が之に就任し、また學内編成を大学院及法醫工文理の五分科として、各學部を夫々科名を冠らせて何科大學と改稱し、その各分科大學に長、教頭、教授、助教授、舎監及書記を夫々置くこととなつて、學制こゝに漸く整ひ、從來の東京大學醫學部は帝國大學醫科大學と改稱せられるに至り、これに伴つて諸般の改革が行はれたのである。

かくして、學年は九月十一日に始まり翌年七月十日に終り、學年を分つこと次の三學期としたのであつた。

- 第一學期 (九月十一日—十二月二十四日)
- 第二學期 (一月八日—三月三十一日)
- 第三學期 (四月八日—七月十日)

また、各學級の稱を、從來の五等—一等を一年級—五年級に改め、更らに同七月にはその教科課程の改正を行ひ、解剖學、局所解剖學、生理學、藥物學、病理學、内科學、外科學、眼科學、産科學、婦人科學、皮膚病微毒學、精神病學、小兒科學、衛生學、裁判醫學の十五學科とし、從來本科で教へてゐた物理學、化學、動物學、植物學等の諸學科は之を高等中學校で教授することとして、從來の修業年限五ヶ年を四ヶ年に短縮することとなつたのである。

こゝに當時の改正學科課程を参考までに掲げてみよう。但し、この十九年の改正學科課程は更らに翌二十年の各分科大學課程改正の際、一部改訂をみたのでこゝには重複を避けて、明治二十年の改正學科課程を掲げておくこととする。

解剖學	第一	一年	六時
解剖實習	第一	一年	六時
組織學	第二	一年	六時
組織實習	第二	一年	六時
生理學	第三	一年	六時
生理實習	第三	一年	六時
藥物學	第一	二年	六時
藥物實習	第一	二年	六時
病理學	第二	二年	六時
病理實習	第二	二年	六時
外科學	第三	二年	六時
外科實習	第三	二年	六時
眼科學	第一	二年	六時
眼科實習	第一	二年	六時
産科學	第二	二年	六時
産科實習	第二	二年	六時
婦人科學	第三	二年	六時
婦人科實習	第三	二年	六時
皮膚病微毒學	第一	二年	六時
皮膚病微毒實習	第一	二年	六時
精神病學	第二	二年	六時
精神病學實習	第二	二年	六時
小兒科學	第三	二年	六時
小兒科實習	第三	二年	六時
衛生學	第一	二年	六時
衛生實習	第一	二年	六時
裁判醫學	第二	二年	六時
裁判醫學實習	第二	二年	六時
物理學	第一	三年	七時
物理實習	第一	三年	七時
化學	第二	三年	七時
化學實習	第二	三年	七時
動物學	第三	三年	七時
動物實習	第三	三年	七時
植物學	第一	三年	七時
植物實習	第一	三年	七時

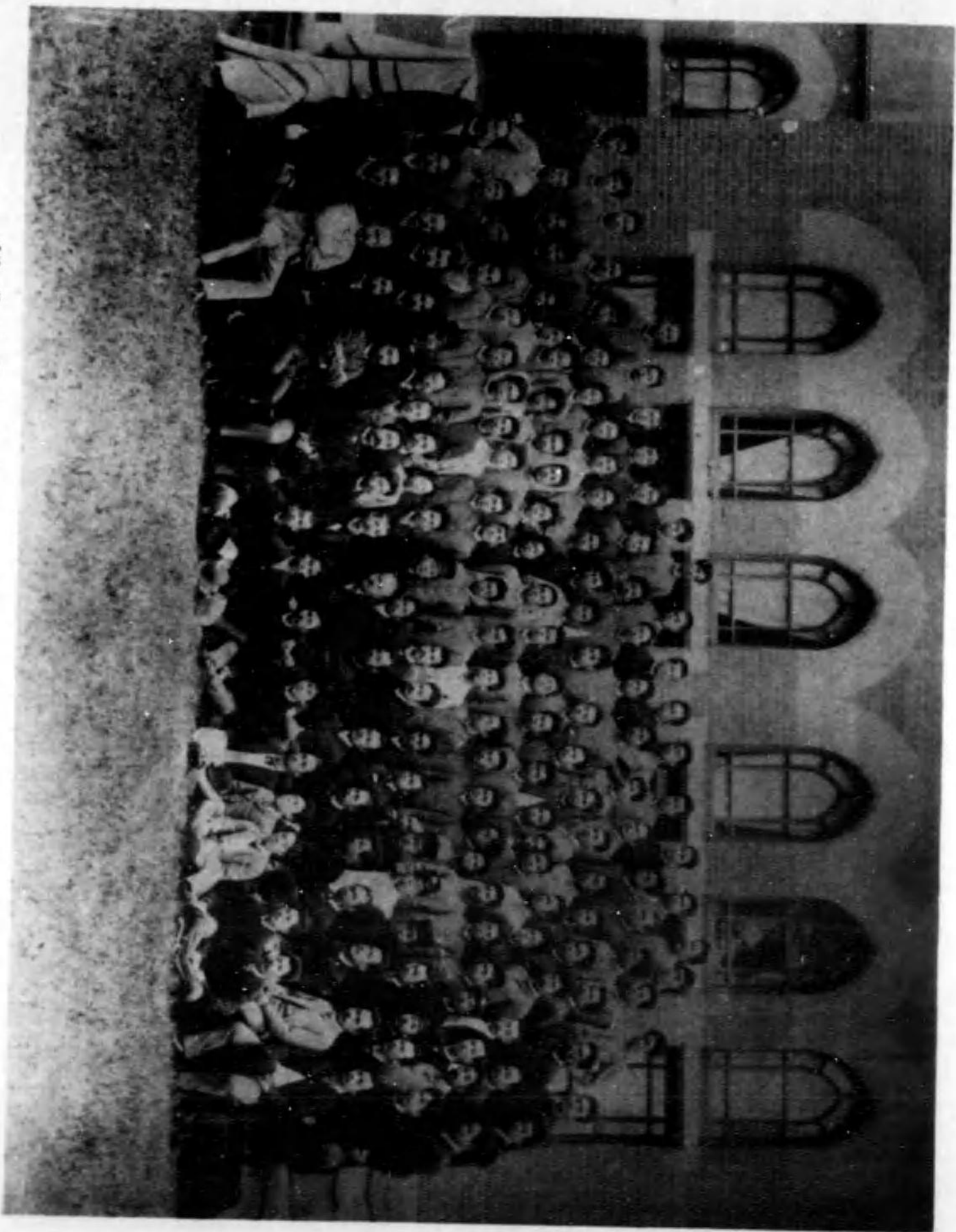
明治二十二年六月	河本重次郎	任教授	眼科學
〃	弘川長	〃	小兒科學
〃	猪子吉人	任助教授	藥物學
〃	東	病死	
十一月	助教 今田		

これによつても明かな如く、先生の在學當時は、醫學部は幾多變遷に變遷を重ねて、その教職員に就てみるも、豫備門當時より較ぶれば、新舊の異動甚だしく、就中外國教師と邦人教師の對比の如きに至つては僅か十年足らずの中に隔世の感あるものがあり、正に一大轉換期にあつたともいふべきであらう。

されば、當時、先生等のクラスを回想し、「余らは過渡期の學級なりき」として、先生の同級なる高田畔安博士が、特に本記の爲めに寄せられた追憶をこゝに掲げて、當時の就學課程の模様を具體的に示しておかう。

予は明治十七年十一月大學豫備門分發全科の試験を受けて及第し、同年十二月に授業を開始せられし東京大學醫學部五等生（伊藤年三氏、岡田和一郎氏等の級）に編入せられたのであつた。其の時の講義は、村岡範爲助氏の物理學（分り易き獨逸語で簡明に説き、次で實驗を示して予等に興味を覚えしめた）エイキマン氏の有機化學（後日關印に於て鷄に白米を與へて脚氣様症狀を起し、次で玄米を與へて之を治したる人、同氏は毎回先日の所講要領を繰返し、次で新事項を講じた）松原新之助氏の動物學であつた。新歸朝の久原躬茲氏はエイキマン氏に代りて有機化學を講じ（要領を極めて簡単に説示した）又分析法の實習を始めた。（予等は興味を以て之を行つた）。又ヂツセ氏の解剖學及組織學の講義ありしが、新歸朝の小金井良精氏に代り、且つ胎生學をも講じた。解剖學及組織學の實習は今村助教授が主として之を指導した（充分の新屍を供給せられ、予らは各部の筋肉靱帶、動脈管、神經及内臓を剖驗するを得た）。又大澤謙二氏の生理學緒方正規氏の衛生學の教授あり、又新歸朝片山國嘉氏の法醫學、禰俣氏の精神病學の講義があつた。又ヂツセ氏の病理學の講義は新歸朝の三浦守治氏に代り、且つ病理學教室が開かれた。（其の以前には病體局處剖檢は解剖學實習場の片隅で行はれたのであつて、一日予の解剖實習時附近に一人の病屍が運び込まれ、ベルツ氏指導の下に約十人の上級生が局處剖檢を行つた、其の際執刀者は河本重次郎氏であつた。）

第三年頃から予等の級は一等生（三浦謙之助氏等）及二等生（平井政造氏等）と同教場に於て、同時に聽講する事と成り、一等生は下



（先生が口入七十九と左列五等）代時學在年十二治明

段にして教師の附近に坐し、二等生は下段の他部及二段に坐し、予等三等生は三段以上に坐したのであった。内科學の講義及臨床講義はベルツ氏之を行ひ、外科學の講義及臨床講義はスタリバ氏之を行つた。(予等は先進三學級——明治廿年卒業組(猪子吉人氏等)廿一年組(三浦氏等)及廿二年組(平井氏等)の卒業臨床試験を傍觀するを得た。)ベルツ氏の擔當せし産科婦人科講義は新歸朝の濱田玄達氏之に代り先づ Beckenhe の名を以て教授を始めた。又スタリバ氏の擔當せし眼科學は新歸朝の河本重次郎氏が代つて之を教授した。又新歸朝の弘田長氏は小兒科の講義及教室を開いた。又新歸朝の青山胤通氏は診斷學の講義を以て教授を始め、次で新歸朝の佐々木政吉氏は診斷學及内科學の講義を始めた。又新歸朝の佐藤三吉氏は外科學の講義と臨床講義を始めた。又宇野朗氏は洋行から歸りて細菌學の教授を始めた。叙上の如く予等の學級は比類罕なる經驗を享受したのであった。

3. 大學の後半期

是れより先き、先生等盟友の梁山泊となせし本郷の臥龍館は、その本科二年級の中頃にあつて前述の如き、北川乙治郎氏の洋行や谷口長雄氏の家庭生活に入るを機として解散され、先生は谷口氏の斡旋に依つて、谷口氏の同郷の先輩である朝野新聞の主筆末廣鐵腸氏の下に、同紙上に獨逸の新聞雜誌等から政治、社會、學術等の諸分野に亘るニュースを翻譯紹介することとし、以て學資並びに衣食の料を得て下宿生活に入ることとなり、また後には、同縣人なる東京醫事新誌の二神寛治氏の慫慂によつて、同誌上に學報摘録と海外通信との一部をも執筆することとなつて、學業の傍、かうした原稿稼ぎに専念して衣食の道をつけると共に、また一方には、持つて生まれた不撓の精神と口八丁、手八丁の活動性によつて漸次當時の醫事ジャーナリズムの世界にも雄飛するやうになられたのであるが、先生の同郷同級なる林暉禮氏の談話によると、當時、東京醫事新誌は、先生に二十字十行詰め原稿一枚に對し五十錢を以て酬ひたといふ。

因みに、當時の物價は蕎麥もりかけ八厘、湯錢八厘、牛鍋四錢、飯二錢で、中等の下宿で一日十錢、朝食二錢、晝食四錢、夕食五錢位で、入澤達吉氏の記述によるも當時最も高價な贅澤な下宿にても一十月四圓五十錢、最低は二圓五十錢位

からあつたといふことであるからして、先生は是等の稿料を以て安んじて下宿生活に入ることが出来たであらうと共に又それだけ、その執筆には多忙を極められたことと思はれるが、何分、口に行くとして可ならざるなき先生の事であるから、當時ベルツ氏も先生を目してシュライバライ Schreiberai と稱し、同級の佐藤勤也氏の大酒飲みと併稱された位能くその健筆を揮はれたものといふ。

かうして、下宿生活に入つた先生の内外の生活は漸くに多忙を極めると共にまた學業の方に於ても、聽て後期の臨牀科に入つて日々の聽講と臨床實習とに忙しく、また級友も夫々各自の専門的問題の研究に没頭するやうになつて、従來の如き外面的に華やかなる活動ぶりを發揮するやうな機会は尠くなつたのであるが、それにも拘らず、活動的な先生に於かれは、瞬時も安閑として内に在ることなく、三年級の時には、學生の學術演說會を開いて、その研究發表の機關を設け、その研究心を刺戟助成する處があり、當時、山極勝三郎氏は大澤謙二教授の教室で蕎麥の消化に就て研究した成果を發表すると共に、先生も亦高橋教授の教室で、猪子吉人助教授について收めた「ピロカルピン」が「ヤポランヂン」に變化して効力を失ふ研究を發表する等、多忙な生活の中にあつても、相變らずの活動ぶりを發揮して、孜孜として勉學に之れ努め敢て怠ることはなかつたのである。

かうして、先生は一方に於ては、幾多學友の間に伍して、健筆を執り懸河の辯を振ひ、衆を率ひては諸事改革の先頭に立ち勇往邁進、以て所信を貫徹し、衆の爲めに圖る處あると共にまた持つて生れた人情深い義侠心を以てしては、友人仲間の世話助力に遺憾なきを期し、また自己自身に於ては、衣食の途の自給自足に多忙を極めると共に、學業の方に於ても些の遲滞なく益々精勵努力、之れ努める處あつて、遂に三年級より四年級に進級する時に當つては、全級中の二番となつて、特待生たるの名譽を贏ち得られるに至つたのである。

當時、先生のクラスに於ては、首席は常に伊藤隼三氏が成績優等で之れを占め二、三番を毎々坪井速水氏と先生とが鎗

を削つて互に争つたものであつたが、卒業の時には、また三番に蹴落されて、明治二十二年七月、無事その全課程を卒へ更らに同年秋卒業試問に合格して同十一月十一日卒業證書假書の下附を受けて苦難多き思ひ出深い學窓生活に別れを告げ

醫科大學卒業受験生

岡田和一郎

優等ニ付次學年中

特待學生トス

明治廿二年七月十日

醫科大學

多幸なる社會への第一步を印されたのである。

當時、醫科大學は、修業年限は四個年で、七月に終るのであつたが、更らに暑中休暇の後卒業試問があつて、之れが九月より翌年の三月にかけ、解剖學及病理學、外科學及眼科學、内科學及産科學の三大科目に亘つて行はれ、學生を數組に分けて、第一大科目より第三大科目に至る迄、順次試問を受けしめる制度であり、この受験生を「卒業受験生」といひ、この卒業試問が全部終つてから卒業式が舉行されるのであつて、この九月より翌年の三月までの卒業生を一括して、同七月に發表してゐたので先生も翌明治二十三年の七月に卒業證書を授與されたのである。

そこで、明治二十三年七月發表の先生同窓の醫科大學卒業生の氏名を記すと左の如くである。

明治二十三年七月卒業生(四十四名)

- | | | | |
|-----------|-----------|-----------|-----------|
| 伊藤隼三(鳥取) | 坪井速水(岐阜) | 岡田和一郎(愛媛) | 高田研安(京都) |
| 若杉喜三郎(新潟) | 平井健太郎(三重) | 筒井八百珠(三重) | 鶴田順次郎(佐賀) |
| 谷口長雄(愛媛) | 鈴木文雄(東京) | 丸茂文良(山梨) | 三島通良(東京) |
| 下平用彩(和歌山) | 吉村源太郎(静岡) | 關場不二彦(青森) | 戸田成年(福岡) |
| 宮島滿治(神奈川) | 神村兼亮(山口) | 大高信藏(大阪) | 渡邊恭藏(宮城) |
| 舟岡英之助(福井) | 北村精造(東京) | 安倍朝五郎(岡山) | 和辻春次(兵庫) |
| 高島吉三郎(石川) | 林暉禮(愛媛) | 逸見文綱(富山) | 吾妻慶治(秋田) |

外科各論、外科臨床講義
 產科模型演習、產科婦人科臨床講義
 眼科、檢眼鏡用法、眼科臨床講義
 內科 臨 床 講 義
 精神科 臨 床 講 義
 衛生學、生理學 實 習
 裁判醫學 實 習
 小兒科 臨 床 講 義
 病理解學

醫科大學教授 醫學士
 醫科大學教授 醫學士
 醫科大學助教授 醫學士
 醫科大學教授 醫學士
 醫科大學教授 醫學士
 醫科大學教授 醫學士
 醫科大學教授 醫學士
 醫科大學教授 醫學士
 醫科大學教授 醫學士
 醫科大學教授 醫學士
 醫科大學教授 醫學士

佐藤 三吉
 濱田 玄
 甲野 次
 河本 重
 青山 胤
 神方 正
 緒方 規
 片山 嘉
 弘山 長
 三浦 守治

第四章 醫科大學助手時代

一、第二醫院勤務

かくして、先生は、明治二十二年の十二月に優秀な成績を以て卒業試問に合格し、こゝに多年の刻苦研鑽の勞が酬ひられ、無事帝國大學醫科大學を卒業して、醫學士となり、一個の醫師として社會に巢立つを得たのであつたが、當時、學校出の醫師等といふものは誠に以て寥寥たるものであり、而も、最高學府を卒へたる醫學士といふものゝ如きに至りては、



明治二十二年大學卒業前
頃（左）の先生と兄

正に曉天の星にも比すべく、社會の注目の的となり、世に渴仰されたものであるからして、多年の希望をこゝに達した先生の喜びと得意とは蓋し察して尙ほ餘りあるものがあつたらうと思はれる。

當時、先生は、その郷里なる愛媛縣に於ては大學出身の醫師としてはその第二人目であつたが、かつての松山藩の御殿醫岩井禎三氏は別課出身であつたからして、大學の本科出身の醫學士としては正に先生がその最初の人であつたのである。

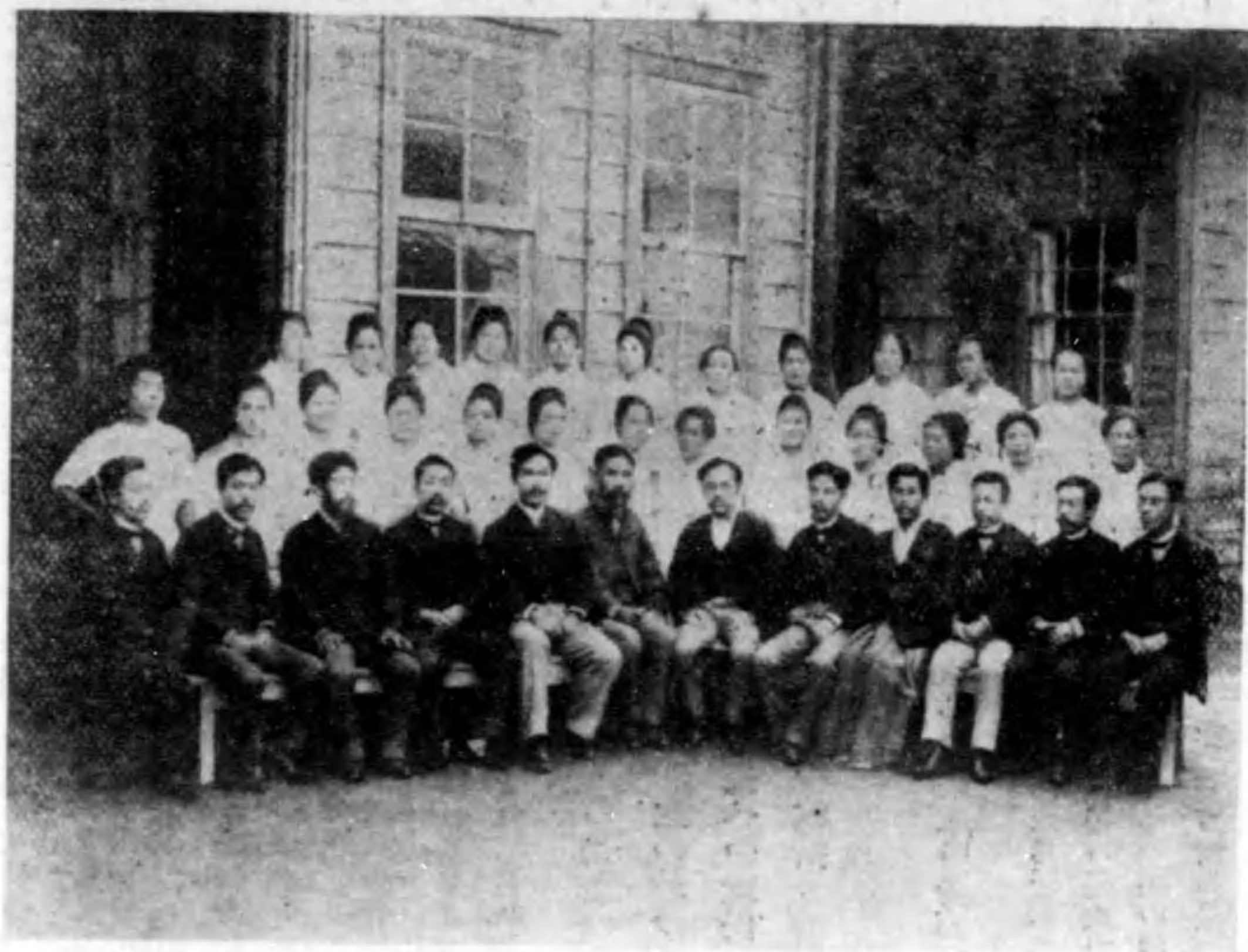
されば、先生の親戚縁者は勿論その郷里にある人々の喜びといふものも譬へるにもなく、その卒業當時の歸省は、文字通り、故郷に錦を飾つたものであつて、當時の有様は、眞鍋嘉一郎氏の追憶の中に彷彿としてゐるから、それをこゝに掲げておかう。

私が小學校の生徒であつた頃、岡田先生が大學を卒業して醫學士となつて西條へ歸られました。そのときの郷里の歡迎は大變なもので今にして言へば宮様か何かと御出でになつた様な歡迎ぶりです。私も小學校の生徒として列をなして御船手（港のこと）まで出迎へに生まれて花火が打ち上げらるゝ、軒並に提燈をさげ、大歡迎會が妙昌寺と云ふ寺にて舉行せられまして、紅提燈が山がたに澤山つるさ大變な賑ひでありました。あいにくその日は雨ふりの日であつたと思ひますが、西條の周圍三里四方の近郷近在より多くの人が是非岡田先生の顔を見たいとて、泊りがけに見物に來た様な次第でありました。私が子供心にもこの光景を見まして、成程お醫者になるとこれ程尊敬せられ偉い人になれるのかと云ふ羨しい考が浮んで參りました。もともと私共の郷里の西條には其當時少年の目標となるべき偉い人が出身して居りませぬので、和一ツあんが唯一の偉い人の目標でありました。目下愛媛縣でも松山あたりには軍人に偉い人が出て居りましたから、松山の少年は軍人を目標として澤山軍人が出ましたが、西條には少年美望の目標として和一郎先生のみでありました。それ故私もいつとなしに醫者になつて見ようかと云ふ心が湧いて來ました。若し私が今日醫者となつて自分として其所を得たものとするならば、全く岡田先生の御蔭であると云はなければありませぬ。これが私として岡田先生に感謝する次第であります。

これをもても明かな通り、當時、醫學士としての先生の存在は世の羨望、崇拜のままととなり、且つ郷土人士の矚目する處となつたので、その卒業の前後には、かつて先生の幼少の頃、俸給三百圓をとつて、先生をして奮然東都に笈を負はしめ、立志發奮の機を與へた郷里の縣立松山病院長への就任の交渉があつたのである。而してまた先生の方にあつても、天下孤行の貧書生としての長年の生活の後とて多少食指も動いたであらうが、斷然それを斥けて、盟友谷口長雄氏を極力推して之れに就かしたものであつた。

その間の事情を「谷口長雄傳」に寄せられた先生自身の追憶によつてみよう。

（前略）此卒業少し前であつたが、郷里縣立松山病院長島居春洋氏洋行の志あつて辭意を漏らしたので、縣から其後任につきて余に交渉があつて、是非共郷里の病院の爲に、余と故人（谷口長雄氏）と兩人打ち揃つて同院の首腦者の位置に就かしたと、切に勸誘且つ懇願されたのであつた。是れは同病院が縣立であつても、縣の中央松山市に在る爲其經營に關する豫算案が縣會に附議さるゝ際には、南豫字和島方面より選出されたる議員は、常に字和島市方面の患者には、遠隔の爲、病院の恩恵を受けること甚だ少いと云ふ理由で、又



明治二十五年十月、帝國大學第二院に於て
前列中央右佐藤教授とその隣先生

東豫西條町方面より出たる議員等も亦同地方の病者に其診療上の影響を與へること甚だ僅少であると云ふ理由にて、俱に大に削減を主張したり、中には斷然廢止説を主張したりする者があつて、縣理事者と病院々長とは毎年そのために苦き經驗を積んで來たのであつた。それ故に此際、此等の反對意見を鎮壓して、病院を泰山の安きに置かん爲には是非南豫出身の名望家故人と及び東豫出身の余とを同時に招聘して、經營の衝に當らしむるに如くものなしと評議一決の上、申出でられたのであつた。そこで余は郷里の爲でもあり、且つ余の如き貧生が深山の月給取りになるのであるから、初め多少食指が動いたのであつたが、余を世話して呉れた先輩達は、皆此赴任に反對したので、遂に斷然之を辭退することと定めて、其代りに余よりも有力なる故人を赴任せしむべく協力勸誘することを約し、且つ同時に爾今東豫出身の縣會議員等をして、新院長を援助せしめて病院の伸展に向つて大に努力せしむべく盡力するを約して、之を故人に交渉することにしたのであるが、故人も亦初めは前途に大志を抱けるの故を以てその勸誘を退けて辭退されたが、それでも種々手段を盡して、勸誘を續けたので、終に斷然義侠的精神を發揮して、翌年四月より、縣立松山病院に赴任することとなつたのである。而して故人は遠からざる内に松山病院に赴任するを以て、其準備のため内科

外科及び其他の諸科を練習することとなり、初めはスクリバ教師の外科醫局に、後にはベルツ教師の内科醫局に助手となつたが、余は前年歸朝して、第二醫院の外科教室の指導者の任に就かれたる佐藤三吉先生の助手に就任して、外科學專修の途に上つたのであつた。

かうして、先生は、明治二十二年十一月十一日、大學を卒業すると共に、同十二月三日、醫科大學の助手を拜命、月給貳拾圓を給與せられて、第二院勤務を申付けられ、新歸朝の佐藤三吉教授の許で外科を専修することとなつたのであるが、爾後七年、明治二十八年に至る薄給苦節の險難な助手生活が更に開始されるに至つたのである。

その間、明治二十八年末に助教となり、翌二十九年春、獨逸へ留學するに至る此の苦節七年の險難な生活過程は、先生の自叙傳の「第二院時代」の中に記録的に叙べられてをるから、先づそれをこゝに再録しておかう。

第二院時代

卒業すると同時に私は當時の第二院に勤めることになつた。此頃醫科大學にはスクリバ教授あり第一院に教鞭を取り、第二院には佐藤三吉教授が指導して居られたのである。私が佐藤三吉先生の教室に入つた時には先輩としては富山縣の人山田岩次郎氏の他、別科卒業の人二三が居たに過ぎなかつた。佐藤先生は間もなく醫局長に任ぜられたので先生に代つて外來患者も診察し細帯學の講義などもした。明治二十四年の十月には濃尾震災あり、救護班員として佐藤教授に隨行し、主として名古屋方面に於て多數の負傷者を治療し、歸來して東京醫學會に報告す。明治二十三年十二月結婚す。結婚問題の擡頭するや從來の如き下宿生活も成らず、本郷區森川町に吳秀三夫人嚴父三浦千春氏の所有家屋を借り受けて一家を構へ加藤弘之氏の媒酌にて精神病學教授榊俣氏の妹徳子を迎へた。この頃の私は給與月額二十五圓の一寒生で婚資に不足を生じた故、郷里出身の醫者から五十圓を借用して一時之に宛てた。そして一家を構へると到底生活費に餘裕がないから下谷の仲徒士町に移轉して、さゝやかな開業を始め外科を標榜して公務の餘暇を以て診療に従事したけれど、何しろ本職が多忙で餘暇とて充分得る事が出来ず、門前は極めて閑散であつたから之を閉ぢて本郷弓町の榊俣氏の住居せる後を襲ひ富座の住居と定めた。明治二十七年には日清戦役が勃發し、數軍の征清團が派遣され陸軍でも赤十字社の手では充分な救護が出来ないので、醫科大學にも醫師の派遣を要求したから醫科大學では宇野教授を主任として第一院から林藤氏、第二院から私を選び、私は仙臺の第二師團佐久間中將に隸屬して戦地に赴任し、明治二十八年一月二日威海衛方面に向ひ榮城灣に上陸して戦線を馳驅し、又軍に従つて旅順方面に轉戦した。而して此間第一野戦病院には、宇野、林の兩氏あり、第二野戦病院は私一曠であつたが、私の方が戦争が劇しかったので従つて負傷者

も多く、約三百の大砲小銃傷者を單獨に治療し、幾多の切斷術、切除術を行つたが當時私の上官軍醫監菊池常三郎氏は薬帶を發明し之を實地に用ひられ相當の成績を挙げたので戦役が平定して凱旋する途次私は小倉、廣島、東京等の衛戍病院を歴訪して嘗て取扱つた患者の経過を診察し薬帶の價値を視察し詳細に之を報告した、外科の助教に任命せられたのは凱旋後間もない事であつた。此の頃文部省では時世の風潮に驅られ帝國大學に耳鼻咽喉科の講座を開設するの議が起り、時の學長小金井良精氏に對して主任の候補者選定を依頼して來られたので、教授會では私が其選に該るべく議決せられた。そこで小金井學長は親しく私を訪問し其旨を告げられたが、元來私は外科を以て身を立てやうと思つて居て、現在まで其方針を以て進み幾多の努力を拂つて來たから、俄にお受けする譯にも行かず、一旦は之を辭したけれども教授會に對しても無下に謝絶する譯にも行かず、又他の方面では義兄楠俣氏や姻戚緒方正規氏や手に手を廻し間接射撃をやられたので、遂に素志を曲げて之を御受けすることになり、現職のまま歐洲に派遣せられることになつて、明治二十九年三月家を疊んで家族を里方の楠家に托して出發することになつた。

そこで、次に、その間、苦節七年の行程に於ける先生の活動及びその身邊に起つた事件をこゝに記してみよう。

一、東京醫事新誌編輯長就任

かうして、先生は、大學卒業と共に、明治二十二年醫科大學助手を拜命して、第二院佐藤三吉教授の下に外科学を専修し、歸朝間もなき同教授をよく補佐して勤務することゝなつたのであるが、又この期にチャーナリズムの世界にも雄飛する機會に際會されたのであつた。

即ち、明くれば明治二十三年は、我が國最初の國會の開設されるあつて、國運愈々隆昌に、また社會の發達漸く著しきものゝあつて、かくて他方には内國勸業博覽會の帝都に開催されるあり、全國人士の關心漸く東都に集まり且つは會するを機に、我が醫界にあつても、「夫ノ獨逸國萬有學會ノ例ニ倣ヒ本邦醫士學術會ヲ都府ニ開設スルノ經畫ヲ爲サンコト」が發議され、春も盛りの四月に全國幾千の醫家をこゝに總動員して、第一回日本醫學會が華々しく舉行される等、内外共に多事多

端にして、世相俄かに色めき立つ殷盛をみんとする折柄、先生にあつては、こゝに再び二神寛治氏の慇懃もだし難く、當時、斯界の權威として、醫事新聞、中外醫事新報と共に三社鼎立の尤なるものとして、醫事チャーナリズムをリードしてゐた東京醫事新誌に、森鷗外氏の跡を承け、若年二十七歳の身を以てその主筆の任に就かれたのであつた。

思ふに、先生の年少にして早熟、人事の交渉に當つては圓滑潤達、辯舌いとも爽やかに、健筆また流暢にして、着眼の嶄新、洞察の鋭利、よく時流の趨勢を適確に把握し、また衆を率ひて和合歸一せしめる才智に於て、同輩を擢んで、老成せるは、その學生時代の動靜よりするも明かであるが、その資性のまたチャーナリストとしても卓越せるを、當時二神氏はよく觀破し、當時不評の森鷗外氏をその主筆の任より黜斥すると共に先生をその後任に推して東京醫事新誌の發展を圖らんとしたのであつた。

由來、東京醫事新誌は、その創立者太田雄寧氏を始め、その歿後遺業を承繼せる門下生二神寛治氏といひ、亦その局外にあつて援助を惜しまなかつた岩井禎三氏といひ、何れも同じき愛媛縣人であつて、先生と同郷の士であり、且つは先生は大學在學中より二神氏の慇懃によつてその執筆に參與してをり、因縁淺からざるものゝあると共に、當時我が日新醫學の未だ啓蒙期にあつて、その醫學智識の普及と指導とは不可缺の緊要事であり、先生の健筆と活動に俟つ處また尠からざるものゝあり、而も學窓を出て間もなき氣鋭の霸氣満々として、爲す處大にあらんとする折柄、同誌上に據つてチャーナリズムの一角に據つて雄飛せんとするは、また先生の資性たる活動性を満たすにも餘りあつて、以て先生の快とする處であらねばならない。

かくして、明治二十二年大學を卒業すると間もなく、白面の先生は、鷗外森林太郎氏に代つて、同誌の主筆の位置につき、その全誌面の改革を圖つて、明治二十三年の正月、その第六百十四號より同誌の原著に治病要報に抄録に、將又雜録に八面六臂の健筆を揮つて、その編輯を主宰されることゝなつたのである。

かくして、爾來七年、明治二十九年先生の獨逸留學に至る迄、一方には大學に職を奉ずると共に又他方には東京醫學會雜誌の編輯にも携りつゝ、その多忙な研究生活の中に、よく同誌の編輯主筆の職にあつてその任を完ふし、その間、我が醫學社會の封建的遺風たる長袖者の氣風の刷新を圖ると共にまた學界の向上發展を期し、その知見の普及發達に資する處尠くないと共に、その卓越せる創意性を以てしては、また醫事ジャーナルの向上と發展とも甚大の貢獻をなしたのである。

この間の事情に就いては、昭和十一年九月、同誌が第三千號を出すに當つて先生の同誌への寄稿の中に詳しいから、それを左に掲げておかう。

東京醫事新誌は明治十年故太田雄孝先生が愛媛縣醫學校長を辭し上京されたる後、直ちに本邦最初の週刊雜誌として創刊されたる者と、爾來年を閱する事六十年、號を重ねる事三千號に達し今既に每號必ず醫學各科の原著から醫界全般の出來事に到る迄細大漏さず、然かも迅速に且つ豊富に収録して常に定期に違はず刊行して全醫界に貢獻するので、多數の醫人は之を本邦醫界に於て最も權威のある週刊醫學綜合雜誌として尊重し且つ愛讀する様になつて居るのは誠に貴局に對して慶賀に堪へない次第である。

併し貴局の今日あるは決して一朝一夕の産物にあらずして、過去数十年間には幾多の波瀾曲折があつて、就中明治二十年前後に於て當時の經營者故二神寛治君が常に多大の難局に直面したに係らず、同君の不斷の奮闘力と堪忍力とが遂に今日の順境に對する行路を開拓したに職由する者甚だ多きを確信して居るので、余は此機會に於て先づ故人二神寛治君の當年の事跡を偲び、次て同君の同郷者たる余が多少の微力を貴誌編纂の上に提げたるの経緯を記述して當時を記念する事とする。

創設者太田雄孝先生逝去後は先生の門下生であつた二神寛治君が其業を繼承されて、其經營にも又編輯にも全部の責任を負つて局に當る事になつたが、當時は尙ほ未だ醫界に研究者多からず隨つて週刊雜誌としての材料獲得者に常に多大の困難を感じずには居られなかつたのみでなく、殆んど同時代に當時の陸軍々醫監田代基徳先生の月刊雜誌醫事新聞と洋行歸りの開業醫原田貞吉君の中外醫事新報（月二回發行）との兩紙があつて正に三紙鼎立の實狀であつたが、田代先生と原田君は共に醫人であつて共に醫界に多くの友人知己を持つて居て材料獲得に極めて便宜の位置に在つたに係らず、獨り二神君のみは醫人でなかつた爲めに一層強く材料獲得に困難を感じられたので

あつた。併し同君の高尙なる人格と温順なる性質及び東奔西走の努力を決して惜まれなかつた事等に依つて辛ふじて多少の材料を得て定期的發刊を繼續して居つたが、明治二十一年頃、時代の進運に伴ふて大に紙面の擴張と改良とを計られ新に中外新説、學報、摘録、海外通信等の諸欄を設けたので、同君は當時醫科四年生に在學中なりし余の許に來られて爾今學業の餘暇を割て學報摘録と海外通信との一部に執筆すべく獎勵されたので、余は當時其任に適せざるを十分に自覺して一旦之を辭したのであつたが、後同君の眞意は余の窮蹙、即ち夙に兩親と死別し、寄る邊なき孤獨の一貧學生である點に同情を寄せられて、余の學資の一部を得させんが爲めの極めて親切なる勸誘に在つた事が明かになつたので、遂に之を諾して驚馬に鞭ちて獨逸醫事雜誌中より實地醫界に有益と信じたる學報を抄録したり、海外特に獨逸諸國より送り來る論文を翻譯したりして材料に提供する事となつたのが余の本誌に關係した第一歩であつたのである。加之ならず同氏は百尺竿頭尙一步を進めて紙上内容の充實を期せんが爲め同誌主筆として森林太郎君即ち後の陸軍々醫總監、文學博士、醫學博士森林太郎として有名であつたばかりでなく森鷗外居士としても文學界に其名を轟したる森氏を聘して執筆を委嘱したので、同氏は明治二十二年一月初刊號より同氏の隨筆文を掲載せんが爲め巻頭に「緒論」欄を新設して爾後各號の本欄は必ず同氏の博覽強記の豊富なる材料同氏獨得の美文麗語を以て成る隨筆文を以て飾られて實に錦上添花を添へる事となつたのである。斯くして二神君の經營努力は漸く酬みられ毎號編輯上の材料に乏きを憂ふる事なく、隨つて大に讀者間の好評を博する様になつて來たのであつた。然るに二十二年末に到りて森氏は公務上の都合にて強て退局誌上執筆の責任を辭されたので、於之、二神君再び當時大學を卒業して第二醫院に於て佐藤先生の助手を勤めて居つた余を訪はれて爾今同誌の主筆として森氏の後を繼承するのであるから尙ほ一層強く其任に適せざる事を痛感して之を固辭したみでなく、彼の有名なる博學敏腕の名噴々たる森氏の跡を繼承するのであるから尙ほ一層強く其任に適せざる事を痛感して之を固辭したけれども、同君は陰かに余に謂ふに森氏が緒論欄に掲載せしめたる論文は其引用も該博であり文章も立派であつたので一部の讀者が尙かに之を欣んで愛讀したのは事實であるに相違ないが、併し其内容は多少衛生學に關係する者がなかつたが、其大部分は餘りに實地臨床醫學に縁遠いもの計りであつたので、讀者中の實地醫師の聲としては寧ろ臨床上の診斷治療に關する記事を尙ほ一般豊富ならしむる事を要望する様になつたのを認識したから、爾今余をして其局に當らしめて主として臨床醫家の要求に應ずべく疾病の診療に關する記事に主眼を置いて執筆して行かるとならば森氏の跡を襲ふ事が出来なくとも、必ず他の方面に於て其損失を補ふ事決して至難でないと思ふから、是非此委嘱に應ぜよと、熱心に勸誘されたので終に之を諾して、二十三年一月初刊號に余の施政の方針否編輯の方針を「明治二十三年の東京醫事新誌」なる題下にて世間に披露して、其中に爾今「緒論欄」を廢して更に「治病要報」なる一欄を新設して毎號余

自らが執筆するか、又は余の學友に依頼して必ず診断治療に關する實驗事項を簡單要約的に記述して報道する事等を宣傳し、次で之を實行したのであつた。然るに森氏は當時他の雜誌にて「惡聲」と題したる長文を發表して余が「緒論欄」を廢したる行爲を大に非難し且つ之を森氏に對して喧嘩買であると認定されたので、余は本誌同年二月二十二日號に於て「喧嘩買は何處にか在る」と題して緒論欄は森氏が筆を執られたが爲めに成立した者であるので、森氏去つて本誌と編輯上の關係を絶たれた以上は自ら誌上に其跡を絶つのは蓋し已を得ざる結果である事を述べて、余が斷じて同氏に對して喧嘩を買つたものでもなく、又決して惡聲を放つた者でもない事を辯明したのであつた。併し森氏が緒論欄にて發表されたものは統計論、ベツケル氏阻業の醫斷、アーマルチン氏穩婆制度改良意見、新僧醫、ルーツーが少時の病を診す、ベツテンコーフェルの逸事、市區改正は果して衛生上の問題に非ざる乎、エミール・ドユボアレモンの傳等であつて、何れも皆な讀んで面白味を感じ又得る所少くないものゝみであつたに相違ないが、併し其大多數は實地醫學に餘りに縁遠いもの計りであつた事と、當年の余の如き青二才で然かも臨床醫學一點張りに力を傾けて居つた者の到底之を踏襲し得ないものであつた事とに依つて、余の編輯時代に於て緒論欄の消滅したのは誠に已を得ないことであつたのであつた。

其後余は約六ヶ年間毎に驚馬に鞭ちて與へられたる任務の爲めに微力を提げたのであつて、原著の不足した場合には其都度原著をも起草し又治病要報欄と醫科雜抄欄とに於ては殆んど毎號實驗材料と獨塊新刊雜誌等の抄録とを掲げ、又明治二十四五年の頃獨逸に於て「ロベルト・コッホ氏」がツベルクリンを發見して結核の診斷と治療とに大なる貢獻があつたとの公報のあつた際には、其問題は餘りに重大であつたので、其研究調査の爲に時の政府當局も忽然と當時の内科教授佐々木政吉先生と病理學助教授たりし山極勝三郎氏とを獨逸に向つて特派したと云ふ程の騒ぎであつたので、隨つて本邦各方面の臨床醫家は毎日一日千秋の思を以て獨逸國からの臨床上應用の成績の確報を編首期待して居つたので、余は此時に當りては殆んど毎日夜を日に繼いで獨逸兩國に於て發刊されたる雜誌上に報告されたるツベルクリンに關する論文を殆んど皆翻譯したり又は抄録して本誌上に掲載して讀者の期待に順應すべく微力を致した事もあつた。斯して二十七年々末、外科教授宇野朗先生に隨つて日清戰役に從軍して清國に行き、次で二十八年末には官命に従ひて耳鼻咽喉科學專修の爲獨逸に留學する事となつたので、此期に及びて編輯主筆の職を學友宮本叔氏に譲り後事を托して一時其關係を斷つたのであつたが、留學中も精神上の關係を絶つ事なく彼地より屢々通信したり、モスコウ市に開かれたる萬國醫學會やロンドン市に開かれたる萬國耳科學會等に參列した際の旅行記等を寄送して材料の一端に提供したのであつた。

それ故に歸朝後も相次で多少の微力を提供せねばならなかつたのであつたが、歸朝後は教室の新設やクリニククの經營のみでなく専門學會の統率等の爲めに常に忙殺されて居つた爲めに事豫期に反して常に疎遠に經過して今日に到つたのは甚だ申譯けなき次第であると痛感して貴局に對して深く謝罪するのである（下略）。

〔東京醫事新誌が三千號に達したるを祝し且つ同誌と余との過去に於ける關係を序述して當年を偲ばん〕昭和十一年九月二十六日發行第三千號

三、森鷗外氏との論争

かうして、先生は森鷗外氏に代つて東京醫事新誌の編輯主筆の任に就くや、明治二十三年一月初刊號の同誌第六百十四號に「明治廿三年の東京醫事新誌」なる一文を掲げて、その編輯方針を明かにしたのであつた。が、これが端なくも森鷗外氏との論争を惹起する因をなしたのであつた。

◎明治廿三年の東京醫事新誌

岡田和一郎

寶曆改リテ年茲ニ新ナリ會議ノ開設大政ノ改革斯年ニ在リ政事新聞當ニ多事ナル可シ焉ゾ醫事新誌ニシテ亦多事ナラサルノ理アラシヤ看ヨ衛生論ハ政事家ノ關係スル所ナキ乎裁判醫學ハ刑事ニ必要ナキ乎是皆政トノ進歩ト相隨從シテ益ス深キニ入り愈ヨ遠キニ達シテ以テ當局者ヲ介ケザル可ラザル者ナリ是レ醫事新誌ノ將ニ多事ナラントスル所以ナリ又看ヨ日本醫學會ノ組織成テ日本刀圭家ノ都下ニ群集シ名士ノ高論學者ノ卓説ノ誌上ニ發表サルモ亦斯年ニ在リ是醫事新誌ノ將ニ多事ナラントスル所以ナリ又新藥日ニ加リテ治方日ニ新ナルハ桂林現時ノ狀態ナリ脚氣ノ原因ト治方ハ未タ一致セズシテ蒼生爲メニ安セズ結核「パチルレン」ハ益ス猖獗ヲ極メ内科醫者ノ擧テ其力ヲ根治法探求ニ盡ス是醫事新誌ノ益ス多事ナル所以ナリ夫レ醫事新誌ノ多事ナルコト已ニ如斯何ソ此時ニ當テ適當ノ改良ヲ加ヘ臨機應變其正鵠ヲ達スルニ好方便ヲ求メザル可ラザルナリ

昨明治廿二年ハ一月以降彼ノ有名ナル博識家ナル文章家ナル衛生學者ナル余ノ尊敬スル鷗外森醫學士ノ編輯其事ヲ擔當サレ更ニ緒論欄

ヲ設ケ或ハ「ベツケル」阻業ノ醫斷トナリ或ハ統計論トナリテ學士平生ノ技量ヲ顯ハサレ醫事新誌爲メニ其影響ヲ蒙リ一種特異ノ高評ヲ博シタリ是余ノ同學士ニ向ヒ深ク其勞ヲ謝シ併セテ同學士ノ半途ニシテ其關係ヲ絶チシヲ惜ム所ナリ

森學士ハ緒論欄ヲ設ケ醫事新誌ニ一定ノ方針ヲ定メタリ今ヤ新誌局一人ノ緒論子ヲ失ヘリ敢テ之ヲ倒シタルニ非ス倒レタルナリ緒論已ニ倒レタリ焉ゾ醫事新誌將來ノ方針ヲ一變スル所ナキヲ得ンヤ然レバ則チ時勢如斯新誌ノ改良ヲ催シ編者ノ更迭ハ方針ノ變化ヲ來シ明治二十三年ノ東京醫事新誌ハ其體裁コソ舊ヲ守ルト雖モ其内容ニ到テハ大ニ面目ヲ改メザルヲ得ザルコト、ナレリ今ヤ其大要ヲ舉テ讀者ニ告グルアラントス

- (一) 原著 是レ從來ノ者ト異ナルナキモ只一ハ本局特ニ醫學博士及醫學士ノ諸氏ト約シ毎回其特約者ノ實驗說ヲ掲載スルト二ハ何人ノ手ニ爲ルモ苟モ自家ノ實驗ニ係リ稍ヤ確實ト認ムル者ハ悉ク茲ニ編入スルトニ依リ其掲載事項ヲ増加スルト、セリ
- (二) 投書 是レ特ニ本局ニ寄送サレタル短小ノ實驗說及ビ時事ニ關スル論文ヲ掲グル所ニシテ編者其責ニ任セザル者ナリ
- (三) 治病要報 是レ新説ノ一欄ニシテ本年ノ醫事新誌專ラ其力ヲ盡サント欲スル所ノ者ナリ又其方針ヲ示ス者ナリ其記スル所ハ最モ精確ナル治病法ニシテ蓋シ是レニ由テ實地家ニ益センコトヲ計リ又是レニ由テ有益ノ治法ヲ社會ニ廣布セント欲ス
- (四) 抄録 是レ獨米英佛及本邦ノ醫事ニ關スル諸雜誌ヨリ最モ有益ト認定シタル新論奇說ヲ悉ク簡短ニ抄シテ其所ニ掲載シ醫學進歩ノ一斑ヲ知ラシメント欲スル者ナリ
- (五) 雜錄 是レ前年ノ緒論ト等ク桂林百毅ノ事ニ關シ特ニ論議ヲ要スルコトアレバ本局論者ハ該欄ニ依リ不偏不黨ノ精神ヲ以テ正々堂々タル論陣ヲ張り悉ク之ヲ論破シ以テ輿論ヲ喚起セント欲シ又自他醫事ニ關スル文章ニシテ適當ノ欄ヲ得ザルトキモ此所ニ掲グルコト、セリ
- (六) 史傳、(七) 批評、(八) 會報 等ハ時々其必要ニ應ジテ初メテ設クル欄ニシテ每號必ズ掲グル者ニアラズ
- (九) 雜報 是レ亦本年度醫事新誌ノ最モ注意スル所ノ者ナリ何者醫事新誌ハ週報ナリ故ニ社會ニ現ハル、事々物々之ヲ迅速ニ報道スルニ最モ方便ヲ得タレバナリ於之本局ハ醫科大學陸海軍醫學校及ビ醫學ニ關スル各官衙等へハ特ニ探訪者ヲ出シテ早ク新事業ヲ探知シ得ンコトヲ計レリ

夫レ明治二十三年ノ東京醫事新誌ハ上記ノ如キ方針ヲ取レリ讀者是レニ由テ利スル所アレハ編者ノ幸何物カ之レニ如カシ

(六百十四號雜錄)

このやうにして、先生は、時勢の赴く處を達觀して改革の止むなきを論じ、前主筆鷗外森學士の努力を多としてその徳を頌し併せてその創始なる緒論欄を廢して、原著以下九箇條に亘る編輯項目を明示して、以て今後の方針を明かにしたのであつたが、當時獨逸留學より歸朝早々にして、尙ほ少壯氣鋭、文壇ヂャーナリズムに、また醫界のヂャーナリズムに之を馳驅して、大に爲す所あらんとして虎視耽々、前二十二年には、譯詩「於母影」を『國民之友』に發表し、また『志がらみ草紙』を創刊しては文藝批評の筆を縦横に揮ひ、二十三年には「舞姫」「うたかたの記」等を出して文壇を壓倒した鷗外は、同じく二十二年には、『衛生新誌』を創刊し、また東京醫事新誌に據つては緒論欄を設け高論卓説を逞ふしては低調の醫界を啓蒙これ努めて霸氣滿々たる折柄とて、不評の故を以て東京醫事新誌退局のやむなきに立ち到りしもさらなり、自己の創設になる緒論欄を抹殺されるに於ては默せんとするも默する能はず、而も、當時未だ名も成さざる一介年少の新醫學士輩に之れが敢行を企てられ、「敢テ之ヲ倒シタルニ非ス倒レタルナリ緒論已ニ倒レタリ焉ゾ醫事新誌將來ノ方針ヲ一變スル所ナキヲ得ンヤ」と言はれるに於ては、その全文の條理を辯ずるの理非も分かつた、これを一概に惡聲として受け取り、憤懣やる方なかつたのである。剩さへ身は軍事官僚の一員、さなきだに官僚辭の強き鷗外にあつては五里夢中、一身の恥辱を公開せられたるかの觀があつたのであらう。

されば、新誌局を退局すると同時に、新しく創刊した自己の『醫事新論』に直ちに筆を執つて、これに應酬したのが彼の「惡聲」一篇であつた。即ち――

樂毅云はずや「古之君子。交絶不出惡聲。忠臣去國。不潔其名。」と。余の東京醫事新誌局と關係を絶ちしや未だ局に對して一言をなさず、怎にも本論の初號に於て「余の醫林に於けるや現に敗軍の一將たり」と云ひ、「世間多少の我運動を阻格せんとする分子は陰に其謀を行ひ、密に其を網を布き、積威の加はる所遂に我可愛の緒論欄を倒すに至れり」と云ひぬ。其所謂、世間多少の分子の東京醫事新誌局に於ける、何の關係かあらむや。

至竟、新聞雜誌の本性として、その載する所の文章は讀者の顧盼に待つことあるものなり。又或る有力者の保庇に待つこともあらむ。

其記事にして一般の讀者の憤焉たることあらむか、此新聞は必ず倒れむ。若し又然らざるも一般の讀者はこれを暗讀するも或る保護者がこれを憎みて、當業者を威嚇するが如きことあらば、此雜誌の運命は實に當業者の一斷に任せたり。當業者は復た其保護を仰がざらむとする勇あるか、則ち雜誌、未だ必ずしも亡びず。彼にして此勇なからむか、則ち雜誌は滅びむ。新聞雜誌の外境のために左右せらるゝこと其れ此の如し。その倒れ又滅ぶることあるも、必ずしも當業者の罪に非ず。蓋記事は高尚に過ぎて讀者を憤焉たらしむることあり、正直にして保護者を激することあり、當業者の故らに之を卑俗にするに意なく、又故らに之を婉曲にするに意なき時は、彼は其業を絶たむのみ、自愧づることを要せざるべし、是事や新聞雜誌の全體に於て其然るを見る、其一部に對しても、亦未だ嘗て然らずんばならず。

余の曰く「世間多少の……分子は……緒論欄を倒すに至れり」と。岡田學士が「明治廿三年の東京醫事新誌」と題したる文に曰く、「森學士は緒論欄を設け醫事新誌に一定の方針を定めたり。今や新誌局、一人の緒論子を失へり、敢て之を倒したるにあらざりたるなり、緒論欄既に倒れたり」云々と。余は當時之を一讀して以爲らく、古、霸氣の盛なるや俠客と稱するものあり、其氣慨大に觀るに足るものありしが、氣を負ふの餘りに己れに關せざる争をも身に引受けて贊助し、其事を斷ずるや正邪曲直を以てせずして、比朋黨典を以てす、是を「喧嘩買」と謂ふ、何ぞ其れ岡田學士の喧嘩買に似たるやと。岡田學士の「敢て之を倒したるに非ず」といふ語には、尋常の文脈より云へば主（「ズブエクト」）なし。然れども前の「今や新誌局」といふ語を承けたりとすれば、是れ新誌局が緒論欄を倒すことを敢てしたるに非ずといふ辨護の語なり。借問す、何者か新誌局の緒論欄を倒したりといひて、論者の辯護を求めたりや。論者は那邊よりして余が所謂「世間多少の分子」の新誌局なることを知得たりや。余が世間多少の分子に向ひて發したる語を突然、身に引受けて喧嘩買の所爲に出づるは何のためにする所ありてぞ。

論者又曰く「倒れたるなり、緒論既に倒れたり」と。是れ或る物、若くは或る事のこれを倒したるにあらざるといふ義ならむ。然れども「倒る」といふ一運動も、宇宙間の通則に従て必ず或る原動力の做得たる結果なるべし。唯「倒れたり」といふは、此原動力の外に存せずして緒論欄自家に存すといふならむ。然らば則ち緒論欄中の自倒の原動力は果して何物ぞや。論者は單に「時勢」の二字を撰出し來て更迭變化の源となしたり、想ふに緒論欄中には時勢に逆へるものありとの事ならむ。

論者が目今の時勢は果して奈何。彼は其觀察の結果を三段に記したり。

- (一) 大政の改革、會議の開設は政の進歩なり。醫學（衛生論、裁判醫學等）を看よもこれと相隨從すべし
- (二) 日本醫學會の組織成りて、都下の醫況は繁多ならむ

(三) 新藥方の探求、忙ならむ

此時勢の三方嚮は果して緒論欄と「ハルモニレン」すること能はざるか、曰く否。苟も公平なる眼を以て視れば、第一點は緒論欄の起れる原因にして、大に緒論欄の命脈を輔けしものなり、第二點も亦然り。第三點は緒論欄と殆痛痒相關せざるものなり。

第一點は緒論欄の起れる原因を包藏す。此欄の最初に出し、は余が市區改正論なり。此論は公衆衛生上の問題に係り、政治と醫事との握手したる間より發生せり。第一點は又大に緒論欄の命脈を輔けしものあり。緒論子は嘗て曰はずや、「余等は自ら進で立法體の行歩と行法體の規矩とを觀察し、以て日本國の醫民たる本分を竭さんと欲する者なり」（千載の一遇）と。此言や公明正大、毫も曖昧模稜の痕蹟なし以て徵すべきなり。第二點も亦第一點に似たる約束あり。緒論子が「日本醫學論」は最精確なるものなりしを人は人も許し、我も許す所なり。岡田學士は當時、何れの處に潜伏して何事をか沈思したりしや。田代學士と云ひ入澤學士と云ひ皆な争て筆鋒を試みしとき、論者は隻字を立てざりしにあらざや。之を西儒に聞く「天下一事をもなきざるものは其一事をもなきざることを功となす」と。是れ事を成さざれば譽もなければ毀もなきを謂へり。是れ豈眞の譽れならむや。第三點は緒論欄と痛痒相關せず。藥方の探求等を記するには、當初より原著抄録等の諸欄ありて今に至るまで交替なければなり。治病要報は其最精なるべき者を臆想するときはシニミット年報の「オリギナル、アブハンドリング」に亞ぐべきものなれば、余が新誌と關係ありし間に於てはこれを原著に入るゝことを踴躍せざりしなるべく其小なるものは抄録のみ、何にもせよ緒論を倒す原因をこゝに求むべきにあらざり。

斯く論ずれば緒論欄中に岡田學士の觀察せられたる時、勢に順ふものこそ充分に見ゆれ、之に逆ふものは秋毫も存在せず、倒欄の原因は決してこれを此に求むべきにあらざるなり。

之を草し畢れるとき新誌の新號は出でたり其「正誤」に依れば、岡田學士の文は素と左の如くなりしといふ、曰く、「森學士は緒論欄を設け醫事新誌に一定の方針を定めたり、今や新誌局一人の緒論子を失へり、之が倒し（恐らくは「れ」の誤植ならむ、唯「正誤」の「正誤」は未だ見えず）たるにあらざり、敢て倒したるなり、緒論既に倒したり」云々と。此文の語を成さざることは小學教師を待て而して知らざるべし。「之が」とは何を承くるか、緒論欄ならむとは末句に依りて推すのみにて、文脈は毫も通ぜず。「敢て倒したるなり」とは何が何を倒したることか、新誌局が緒論欄を倒すことを敢てしたりとか、是も推すのみにて文脈は毫も通ぜず。「緒論、既に倒したり」とは緒論をば既に倒したりとの意ならむ、是も未だ語に熟せざる兒の口吻ならむかと思ゆ。然れども斯文中には自ら道理の存するあり、斯くてこそ岡田學士の達眼は見はれたり、何ぞや。新誌局には「發行人兼編輯人」あり、欄を起さむも欄を倒さむも其權に在り。故に東京醫事

新誌に緒論欄の亡びたるは「發行人兼編輯人」の之を倒したるものなることを誰か敢て否すといはむや。唯彼「發行人兼編輯人」は前後同一の二神寛治氏なるが故に、緒論欄を倒し、人は即是緒論欄を起し、人なるのみ。是故に余は緒論欄の興滅を探討するに當て此直接の原動力に注目せずして、此直接の原動力を喚起したる間接の原動力に注目せり。蓋岡田學士の云々する所の時勢は新に緒論欄の倒後に生ずべきものなりとするも、其萌芽は分明に緒論欄の將に起らむとする時にありき。當時國會開設の期年にはあらざりしが、憲法發布の期年なりしにあらざや。日本醫學會開設の期年にあらざりしが、日本醫學會創立の期年なりしにあらざや。新藥方の事は則當時と今と又何をか擇ばむや。然らば則岡田學士の云云する所の時勢にして彼、起欄倒欄の大権力ある「發行人兼編輯人」を驅て緒論欄を倒さしむる程ならば、彼時勢は既に當時に於て此欄を起さしめしめしなるべし。若し又此時勢の觀察は明治二十三年に入りたる後、二神若くは岡田の明眼にて新に做得たるなりと云はゞ、余は將に「發行人兼編輯人」が緒論欄中の文を讀まざりしを信ぜんとす。何となれば彼所謂時勢は常に此の欄の論題となりて見はれたりければなり。

由是觀之、緒論欄の滅亡は、此東京醫事新誌國中の最も勇壯なる最驍悍なる一隊の戦没は——決して岡田學士の云々する所の時勢に依るに非ず、別に世間にこれを倒したる分子あるなりき。唯此分子は余の明言するを辱とせざる所なりき。余は獨り新聞雜誌の紙上に於てこれを言はざりしのみならず、余が局と關係を絶ちたりしとき、初め余を此局に紹介せし松本良順翁に與へたる書にも、唯俯仰愧づることなき事情ありてこれと絶つと云ひしのみ。松本良順翁は余の隻語も聞かず、局の某が訴ふる所に依て余を誹責したれども。余は古君子に非ずと雖も亦惡聲を出さむことを辱とせざるものなり。古忠臣に非ずと雖も亦其名を諱うせんと欲せざるものなり。

唯其れ然り、故に余は東京醫事新誌の此の如き惡聲を出すを見てこれに驚き、其岡田學士といへる仇にもあらざ友にもあらぬ人の手を借りたるを見て又これに驚きたり。抑も岡田學士は何爲者ぞや。余が東京醫事新誌に負はしたりといふ「一種特異の高評」は學士に於て何かあらむ。岡田學士は何等の名義を以て軀を東京醫事新誌に執るか、是れ余の與り知る所にあらず、されど學士の文の此誌に出で、改革を唱へ方鍼を説きしは余が關係を斷ちし後なり。余の受けたる毀譽は毫も學士の身上に影響せず、其所謂「高評」は彼に於て果して何か有らむ。

このやうにして鷗外は「明治廿三年の東京醫事新誌」を執筆せる先生を目して一概に「喧嘩買」となし、その文章を以て自己の誹謗を事とせる惡聲と見做して、その片言隻句をも忽にせざるが如き神經質な抗議をなしたのであつたが、この騎虎の勢に驅られた問責も心靜かに先生の意味する處を解することによつて、自己の大人氣ない氣負ひに恥入つたものか

同時に『ひらき封一通』を掲げて自己辯護してゐる。

「惡聲」の一篇は已に前半を拆きて印刷に附せしが、後に思へば貴君は「緒論已に倒れたり」と云ひ乍ら、後に「雜錄、是れ前年の緒論と等しく」云云とせられたり。然らば緒論を倒して緒論と等しき雜錄を起し玉ひしことにて、名を以ていはゞ緒論を倒して雜錄を起しぬと、手柄顔にいはるれど、實を云はば緒論を倒しても見たり又起しても見た事にて、殆これを「棚の達磨さん」視したりといふも、敢て左右に問ふ。二月中津 鷗外生

岡田醫學士さま 楮下

然し、大量大度の先生にあつては、この重箱の隅をほじくるが如き局促たる問責を潔しとしないと共に又、自身の一文の投じた意外の波紋とこの先輩の苦衷をも察してか、次號に六號を以て「喧嘩買ハ何處ニカ在ル」といふ一文を記して、自己の眞意を明かにすると共にその應酬の打切りを宣して之を軽く一蹴したのであつた。

鷗外森先生此節惡聲と題したる長文を草せられ種々様々と私の書きたる明治廿三年の醫事新誌でふ文章を批評せられました實に御多忙中御加意の段恐縮至極に存じます成程文章の所は正誤文の又た誤りし爲め甚だ都合の個所多く是れ只私の不注意を謝するより他無けれ共時勢に就ての御議論と緒論を倒したる原動力の御推量に至りては依々として貴命に従ふことが出来ません故に其事餘り小にして敢て貴重時間を費して議論を爲すにも及ばず只世間の公評に一任し去りて十分とは思へども先づ一度文は忍んで六號活字を以て其服する能はざる理由だけを開陳致します又序ながら一言す以後先生より此事に關し如何なる御議論を差向けらるゝも私に於ては決して是れに應ずることを致しません

借て先生は私の申したる時勢を三段に分ち第一（大政の改革、會議の開設は政の進歩なり醫學（衛生論、裁判醫學等を觀よ）もこれと相隨伴すべし）と第二（日本醫學會の組織成りて都下の醫況は繁多ならむ）は共に緒論欄の起れる原因にして大に緒論欄の命脈を輔けたりと論ぜられたるが私の考ふる所にては國の政治の進歩を來したればとて學術的の雜誌東京醫事新誌の緒論欄の命脈を輔くべき者とは思はれません（……立法體の行歩や行法體の規矩を觀て彼是れ評論せば新聞條例に觸るゝを如何せん、机上の衛生論は醫學に益なし。詩歌を載せば文學雜誌と間違へらる……）何者醫學者も政事と相隨從して益す其學術を研究して其蘊奥を極め（學者の本分）以て政事を助くることゝなりすから却て原著の欄が繁多になり緒論欄は持て餘さるゝことゝなるでしやう。衛生論や裁判醫學説と雖も眞に學術的の

者ならば原著に入れるを至當とす。復た日本醫學會の組織成らは何故緒論の命脈を助くる材料でありますか、日本醫學會を開く可し、或は開く可らず等の議論を以て緒論の職分とすれば已に開きたる以後は用なきに似たり（如何にも私は昨年日本醫學會論の起りし時沈黙し居れり論するも譽れとするに足らざればなり）只私の思ふ所にては日本醫學會を開設せば高論卓説を包持せる數千の國手等都下に會合して演説に談話に其論説を發表さるゝことならん。果して然らば原著も繁を加へて治病要報も版數なり、又た雜報も面白くなることでありませう。此時に當り記事多きも紙數に限り有れば其結果は却て緒論の命脈を短縮するやも計られませぬ。故に倒欄起欄の如何に係らず兎に角明治廿三年の醫事新誌は時勢の爲改良を促されました。而して恰も此改良に際し曾て先生の愛顧を垂られし緒論欄は同時に或る原動力の爲に倒されました。抑も其原動力とは如何なる者乎と云ふに只一ある而已他無し。嗚外森先生の東京醫事新誌局と關係を絶ちし事は是れなり。先生一度筆を投げて初めて誌上に緒論起れり。先生以前に緒論無し、復た先生以後にもこれなる可し嗚呼緒論は先生に隨ふものなり、緒論欄の一例一起は先生の去就に關す故に先生關係を絶つことなくんば時勢私の思考する如く切なるも必ずや緒論欄の擴張こそすれ決して倒すことは致されまじ、倒欄の原動力何ぞ之を遠く世間に求むるを要せんや。然れ共先生を去らしめし原動力に至ては先生の所謂世間多少の分子か將た何か余は茲に言ふを欲せざるなり。

終りに臨んで尙ほ一言す。私の書きたる彼の文章は決して先生に對して惡聲を出す積りならず、又喧嘩を買ふ爲めにもあらず一には先生の勞を謝し、二には新誌改革の筋道を明かにせし而已故に惡聲、喧嘩買等の文字は一と先御返却申し置きますから眞の喧嘩買は何處に在る乎近く御探りあらんことを望む。

然し當時少壯にして氣負ふことの人一倍強く、官僚癖の身に泌みて神經質なる鷗外にとつては、敗將の既に兵を談じ、而して自己の不明を公にせられ、年少後輩の先生に軽く一蹴せられるにあつては、妥協し黙せんとするには餘りにも自尊心の強く、仲々に諦められかねたものらしく、更に「惡聲絶」の一文に於て、服部某の自己への阿諛的追従贊辭を羅列せしめて、以て體裁を作り、自己の虛榮心を満足せしめて自慰せざるを得なかつたのである。

「惡聲」出でて惡聲に應じたるこだまの響きこえぬ、惡聲を出すもの今や自ら誓ひて復聲を出さじといふ。こだまも亦應に黙すべし。何ぞいはむや緒論の止みしは余が東京醫事新誌と關係を絶ちしためのみと明言せられたるをや。又何ぞ況んや服部霞峰氏のいたく惡聲を嫌ひ耳を掩ひて走らむとしたるを聞けるをや。惡聲よ、惡聲よ、復こだまをして叫ばしむること莫れ。

Reconciliator.

服部霞峰

拜啓鷗外森君足下。當時足下の名望は「飛ぶ鳥も羽を收る」程の御勢力、實に世人の羨望仕候事に御座候。特に日に月に進みつゝある此の多事なる醫海に於て、後進の爲め勞を厭はず、益御盡力被下候儀、我曹醫苗輩に取ては欣然の至りに御座候。然乍既往に照して足下を評するならば、醫學上より寧ろ文學上に於て最も其望を占らるる者ならんとは、讀者一般の許す處にして足下も亦或は甘受せらるるの傾きあらんかと被存候。「人は二藝を極め難きもの」との諺は、君に於て其價値を失ふにまで至り候。そは「廿三年の文學界は鷗外、露伴二子の専有する所ならん」との評論に徴しても明亮なる事と被存候。嗚呼足下の如き、身醫學士にして文學の大家となるもの幾人有之候や。而して足下は猶之に満足する所なきか。榭紳紙の出づるあり、衛生新誌の出づるあり、續て醫事新論を發兌し、（助力家あるにせよ）益氣焔を吐き運筆自在、恰も猿猴の木枝に上るが如く、人をして啞然たるに至らしめ候。雖然余の足下を賞する如此が故にあらずして、只左の一事に御座候。

余の醫林に於けるや現に敗軍の一將たり、伶仃孤立狼の狼を失ひしが如く、海月の蝦を離れしが如し、何の幸ぞ諸賢の眷顧を辱ふして、既にその末班に列することを得、又數行を初號の首に題することを許さる。余が喜び夫れ何如ぞや。

此は足下が醫事新論第一號に於て、天下の醫士に告ぐるの語にてありし。嗚呼其謙遜、其敬虔、實に可感、可慕、又他人の尤も習ふに苦しむ所に御座候。足下の名望又原因なきにあらず。本紙の第一號を追ふて其數を増加するは當然の事と感服の外無之候。月を重ねて第三號の出づるに及び、取敢へず一讀仕候へば、豈斗らん此溫和なる、貞潔なる紙上に於て、突然、しかも最も可惡惡聲てふ文字こそ出現するに至たれ。不思議に絶えず候故、其由来——禍之作。不作於作之日。亦必有所由兆。の古語も有之候故——那邊に基する事かと注意仕候に、東京醫事新誌の寄書家（ならん）中、其名を知られし岡田醫學士君と文章上少々（或は）の纏れより、止むなく此に及ばれし事かと被存候。惡聲の全班は未だ偵ふに由なしと雖も、容易ならざること略被推候。岡田君其人は未だ一面の議を辱くせしことも無之候へども、兎に角醫林の俊髦なるとは推察仕候。左すれば共にこれ醫海の燈臺、後進の望を屬する人士に御座候へば何れに毀譽有之候も快しとせざる處に御座候。而已ならず、醫海に於ても爲めに一波瀾を來すこと明かに御座候。左れば古昔の言にも今兩虎共闘。其勢不俱生。吾所以爲此者。先國家之愈而後私譽也。

と有之候通り、足下よ、余が拙を笑ふなくんば、其筆を修めて兩全、俱に後進の爲めに計られんことを。足下云はずや

吾舌は尙ほ在り、未だ嘗て爛れざるなり、我筆は猶在り、未だ嘗て禿せざるなり、と。嗚呼知る人ぞ知る足下の氣性、何ぞ余が言を待つものあらんや、世人此事を以て足下を評せざることは、余の信じて疑はざることに御座候也。

明治二十三年二月下游

服生再拜

森 鷗 外君

硯北

かゝる鷗外の冗々しき自己疏辯、辯解がましき自畫自讃も、また負け惜しみの強い事實の歪曲も、豪腹な先生には反つて兒戯とも映じ、寧ろその心底に憫憐を催すものあつてか、それには何ら答へる處もなく、一笑に附し去られたものゝ如くであるが、この鷗外の見當違ひの應酬によつて、反つて先生の名聲一時に當時のチャーナリズム界に喧傳され、その毅然豪氣たるの大度は識者の間に深く之を認識せしめて、社會への門出の第一歩に於て、既に當時文名嚇々としてその名も高かりし鷗外森氏と早くも對等の地位に立たざるゝに到つたのである。

かくて、小心翼々とし、狹量なる鷗外にとつては、この論敗——といふより、對人關係に於ける人間的な自己の卑小さの自覺は自慰せんとするも自慰すべくもなく、東京醫事新誌並びに先生の一言隻句と雖も、その論難の對象ならば、これに喰ひ下り論破せんものと敢々乎として私に狙つてゐたものゝ如く、先生が同じく三月廿九日の同誌第六百二十六號に左の如き「第一回日本醫學會ニ就テ」(同會々員諸君ニ告ク)なる小文を載するや、得たり賢しと既往にも遡つて再び冗々しき反駁を試みたのである。

日本醫學會!日本醫學會!余其開會ヲ待ツ事久シ、抑モ余ガ開會ヲ待ツヤ彼ノ角力ノ取組然タル在京名家ノ講義ヲ聽ンガ爲然ルニアラズ、又府下ニ設置シアル諸官衙、官私ノ病院學校等ヲ見ンガ爲然ルニアラズ。又限リアルノ少時間ニ制限ノ下ニ立テ立食スルヲ以テ然ルニアラズ、只其開會ヲ待ツ所以ノ者ハ全國ノ同業者互ニ知識ノ交換ノ目的ヲ以テ府下ニ會合スル。云フ一事是ナリ。實ニ余ハ夙ニ同業者相會シテ知識ヲ交換スルノ主ニシテ講義參觀宴會等ノ賓ナルヲ信シタキ故ニ其主ナル目的ヲ助ケンガ爲ノ賓ナラバ講義モ余ノ聽カ

ント欲スル所ナリ參觀亦余ノ願フ所ナリ、況ヤ宴會ヲヤ故ニ一朝賓主其所ヲ異ニシ余ガ會テ開會ヲ待ツ所以ノ原動力ニシテ已ニ烏有ニ歸シタリトセバ余豈失望ノ嘆ヲ發セサルヲ得ンヤ、又會員トシテ一言以テ之ヲ議セザルヲ得ンヤ。

乙酉會員相謀テ本年四月一日ヨリ府下ニ第一回日本醫學會ヲ開カント廣告セシハ實ニ昨春秋ノ頃ナリキ、當時杏林物議紛々此所ニ乙酉會員ノ所爲ヲ難シ彼所ニ醫學會ノ性質ヲ評シ當時吾人ハ其開會ニ至ルマデ如何ナル事變ノ釀成スルヤモ計ラレズト陰ニ之ヲ憂慮セシガ、流石ガ經歷家ト博識家トヲ網羅シタル乙酉會員丈ケアリテ萬難ヲ凌キ屈セズ、撓マズ、敢テ其衝ニ當リ終ニ余ノ所謂善良ノ目的ヲ有シ爲ニ會テ一日千秋ノ思ヒヲ爲シテ待チニ待チタル第一回醫學會ヲ府下ニ開會スルノ彼岸ニ達スルヲ得タル。是レ他事ニ關セズ一ニ乙酉會員カ熱心ノ強キト技量ノ大ナルトノ致ス所ト深ク感謝セント欲スル所ナリ。

天下同業者ノ府下ニ群集スル此會ノ如ク多キコト古來未曾テアルコトナシ、又將來ニ於テモ何ノ時カ如斯機會ニ接スルヲ得ベキヤ計ラレズ時失フ可ラズ、此時ニ始メテ同業者ノ知識ヲ交換スルヲ得可シ、故ニ時恰モ彌生ニ際シ墨堤東臺、櫻花開キテ爛漫世人ノ見テ狂スルガ如キモ余ハ之ヲ顧ミズシテ來會ノ同業者カ積年保持セル至貴至重ノ實驗說ヲ府下ニ齎シ醫學ノ花ヲシテ燦然トシテ開カシメシコトヲ樂シメリ又同業者相議シテ醫風改良ノ果ヲ結バシメシコトヲ喜ベリ、然ルニ余前日發布セラレタル「第一回日本醫學會日割一覽」ナル者ヲ通覽スルニ少ク意ニ滿タザル所アリ、嗚呼此ノ如クバ賓客既ニ其所ヲ異ニセリ余ノ開會ヲ待チ余ノ樂ミ、又余ノ喜ビシ所以ノ者今ヤ去テ殆ド跡ナク彼一覽ハ遂ニ余ヲシテ「是レ全國同業者相會シテ知識ヲ交換スル者ナラズ、一ニ同業者ヲ集メテ知識ヲ分與スルノ會ナリ」トノ評言ヲ發セシムルコト、ハナレリ。看ヨ第一日ハ彼我相識ハ先哲ノ祭典ヲ主トシ其他ノ六日ハ厚生館ト帝國大學講義室トノ二ヶ所ニ於テ午前八時ヨリ正午十二時ニ至ル四時間宛講演及談話ニ充スコト、セリ。

人或ハ之ヲ以テ知識交換ト云ハシカナレ共余之ヲ信ゼザルナリ、何者此ノ僅々タル四時間ニ三人四人若クハ五人ノ講演ヲ完了センコトスラ尙ホ覺東ナシ、然ルニ二千内外ノ會員ニテ其談話時間トシテ其内ノ三十分ヲ割ケバトテ何條會員ノ談話ニ花ヲ開カヌヲ得ンヤ況ヤ此三十分モ都合ニヨレハ設ケザルノ定規ナルニ於テヤ、果シテ然ラバ今回ノ知識ノ交換ハ一ニ講演ノ手段ニ依ル者ノ如シ。而シテ余其講演者ノ姓名、演題及配置法等ヲ見ルニ河原、大森、小林學士ヲ除クノ他四十七人諸君ハ皆在京ノ博士學士ドクトル等ノ名家ニシテ而モ發企人若クハ招聘員ノ名其中ニアラズ、而シテ其講演セラル、題目ヲ見ルニ皆諸君ノ平生ニ似ズ(中ニモ未定ノ者アレ共)概シテ學科ノ講義ニシテ嶄新ノ學說ヲ發表スル者トモ思ハレズ、又其配置法ヲ見ルニ主トシテ只外表的ニ出デシ者ニシテ在京ノ名家トアレバ當ニ演說ニ慣レザル人デモ敢テ實驗報告ヲ爲スノ必要ナキ人デモ悉ク之ヲ集メ其專術ノ學課ニ仍テ角力ノ番附然ト配置セシ者ナリ。故ニ余ハ是ヲ

知識ノ交換ニアラズシテ寧ろ知識ノ分與ト云フ、非乎、然リト雖モ陰ニ按スルニ該回ノ講演者ハ概ネ余ノ尊敬スル實驗醫學者ナリ。此等ノ諸君ニシテ嶄新ノ實驗說ヲ演スルノ要アラバ何條其演題ノ乏シキヲ憂ヘンヤ、然ルニ拙ヒモ拙テ演題平易ニ出デタルハ必ズ原因アリテ然ルナラン、余會員諸君ノ爲之ヲ言フヲ欲セザルナリ、又五日ノ演說會ニ會員ノ演スル者僅カ二三ニ過ギズ他ハ招聘員等ノミナルハ或ハ是敢テ當路者ノ本意ニアラズシテ會員ノ申込者ナキガ爲不得巳ノ結果ナランカ、思フテ拙ニ到レバ余ノ失望甚大ナリ。然リト雖モ余ハ敢テ當路者ヲ詰リ又講演者ヲ責メズ只彼ノ蒼々タル天ヲ仰テ「日本醫學尙ホ幼稚ノ域ニアルカ」ト嘆ズルヨリ他ナキナリ。噫日本醫學果シテ東京人士ノ意思スル如ク幼ナルカ將ダ然ラザルカ之レヲ知ラシムル此會ニ在リ來會ノ諸君地方ニ於テ實驗シ他年間胸裡ニ包持セル明論卓說アレバ何タルニ拘ラズ屈セス搦マス之ヲ東京人士ニ聞カシメヨ、諸君ニシテ之ヲ欲スル者多ケレバ當路者ニ謀テ尙ホ一日ノ談話會ヲ開カシムルモ難カラズ、諸君果シテ茲ニ意アラバ余敢テ斡旋ノ勞ヲ吝マザルナリ、況ンヤ本會ノ趣旨蓋シ知識ノ交換ニアリトスレバ當路者諸君モ爲ニ欣然トシテ此請ヲ許サルベキニ於テヲヤ、諸君如何々々、敢テ來會ノ日本醫學會々員諸君ニ謀ル（明治廿三年三月廿九日第六百二十六號雜錄）

これに對しても、既にして含む處のある森鷗外は、先づ長文の「第一回日本醫學會と東京醫事新誌と」なる論難を寄せ更らに盛大なる第一回の日本醫學會の終了の後には「第一回日本醫學會餘波の論」を同じく醫事新論に掲げて反噬し來つたのであるが、その區々たる小事に拘泥せる執拗なる喧嘩賣りには、それを買ふ可く餘りにも先生は老成してをり、且つは多忙の故に、先生は相變らず、終始黙殺の一手を以て酬ひられたのであつた。

かうして、兩者の論争は、先生が相手にならぬ儘に、鷗外の獨角力と化して遂に喧嘩にはならなかつたのであるが、これが機縁にや、先生と森氏との間には、聽て親交が結ばれ、後明治三十四年、森氏の小倉第十二師團軍醫部長時代に、先生御夫妻の媒酌にて鷗外は大阪控訴院長荒木博臣氏の令嬢茂子を娶つて再婚されることとなつたのであるが、また、先生等の學生時代の挿話にヒントを得ては、明治四十四年、雜誌「スバル」第三年第九號より小説「雁」を執筆掲載され初めたのであつた。

尤も、鷗外氏の小説「雁」の主人公岡田は先生の盟友北川乙治郎氏がそのモデルであるといふが、その主人公の謹直重厚なる性向、體軀は先生を思はしめるものもあつて、先生と北川氏の遭遇した事件を粉飾して、この兩者を捏ね合はせ

て、岡田なる主人公に仕立てたものかとも考へられるが、いづれにせよ先生の學生時代の一挿話として微笑ましいものがある。

かうして、遂には岡田家と森家とは懇親を重ねるに至つて、後には又鷗外氏の令嬢茉莉子さんの結婚にも、先生御夫妻が媒酌する等、先生の寛容大度の資は、よく論敵をも容れて反て之れを自己の内に抱擁するに至つたのである。

またその他、森鷗外と上田敏博士との雜誌「藝文」に於ける提携にも、先生がその間に介在してをられるのではないかとと思はれるが、因みに上田敏博士夫妻の先生はまた仲人でもあられたのであつた。

四、先生の結婚

これより先き、先生の本職とする第二院外科部の方の勤務も漸く大多忙を感ずるに至つたのであつた。

即ち、二十三年の正月以來、入院、外來共に患者は激増を來たし、増築した病室も常に満員の盛況を呈して、剩さへ同僚の醫局員は他に轉出する者の簇出する等あつて、さなきだに職員の手薄にて繁忙を極めてゐた醫局は、先生と橋爪敬三郎氏との二人で外來患者の診察、入院患者の廻診は勿論、その他醫務一切を擧げて先生等の兩人で切り廻さねばならぬ状態にあつたのである。

こゝに、當時の有様が同年五月下旬の東京醫事新誌の雜報欄に掲げられてゐるから、その一斑を紹介しておかう。

第二院外科 醫科大學第二院外科部は本年一月以來入院外來共に患者大に増加し先頃病室を増築せられしも尙ほ患者常に満員し隨て同所に奉職の職員諸氏は非常に多忙を加へしにも拘らず下平氏は曩に轉じて第一院に行き、山田氏は去て富山へ赴かれ、今や僅かに橋爪氏と岡田氏あるのみにて外來患者の診察（……佐藤、高木諸氏の外來診察の他に……）入院患者の廻診は云ふも更なり、爾他諸種の雜務に至るまで皆右兩氏にて負擔せられ、且當直は隔番にて之に當り爲めに兩氏共に當時殆んど寸刻を得ざる程の繁忙なりと聞く。

と。而も、その橋爪氏さへも六月の下旬には秋田縣の大館病院長に招聘せられて赴任し、後に獨り取り残された先生は文字通り寸暇もなき大多忙の中に八面六臂の活動をつげねばならなかつたのであるが、生來苦勞を厭はず、困難が重畳し來れば反つて勇氣百倍して之を克服するを快しとする先生は、恪勤勉勵、外に向つては流達の筆を揮つて併せては薄給の資を助けると共に、内職務にあつては又自己の職責と研究とに邁進して、些かも佐藤教授の補佐に怠りなかつたのである。

こゝに、佐藤三吉博士の當時の追懷談を掲げておかう。

岡田君といふ人は、物事に遭遇して面倒だとか危いとか、又は難しいとかいふやうなことを少しも感じない人で、何事でも相談すれば宜しいとくる。困るとか、難しいとかいふやうなことは少しも口にしなかつた。その清朗な頭腦と澄潤たる精神とを以て、物事を判断するに機敏で、萬事テキパキと巧みに處理してゆき、誠に頭を返え返つた處があつて、恰も鋭いメスの如くであつた。

従つて、何をやるにも岡田君の處へゆかねば出來ないし、又何をもつていつても引受けてグン／＼やつてゆく、全く良い意味に於て遠慮のない人で、よく人の世話もし、學問といひ、世才といひ、何でもあの清朗の頭腦で處理してゆくのので、自分等は萬事非常に頼りに思つてをり、終始自分の良き相談相手としてゐたが、かうしてその助手時代に感じてゐた事はやがて先きに行つて一層明瞭になつてその爲人が大成されていつたのである。

かうして、當時の先生は、未だ年少若輩の中から、上佐藤教授の信頼を得、下院内の人の望を集めて、多忙な佐藤教授をよく輔け、外科部を一人で切り盛りしてゆき、その十二月には、月給も五圓昇給して「自今月給貳拾五圓給與」の辭令を受けたのであるが、この先生の薄給の中にもめげぬ刻苦勉勵とその學才、世才に於て並び長けたる活動ぶりとはいはたく周囲の人々の注目する處となり、同じくその年の暮れに加藤弘之氏の媒酌にて精神病學教授神俣氏の令妹徳子嬢を迎へて新婚生活に入ることゝなつたのである。時に明治廿三年十二月二十八日のことであつて、先生二十七歳、新婚二十六歳の時であつた。



新婚當時の先生と夫人

新婦徳子夫人の父は神俣といひ舊幕臣、生來書畫を能くし多藝多能の達識の士で、幕末より明治初年にかけては銀板寫眞術並びに活版石版術を我が國に初めて輸入紹介した人であり、維新後には沼津兵學校の教官をし、また後太政官地誌課出仕を最後として官を辭し、爾來博物標本製作を志して、舊帝室博物館備附の動物骨格は主としてその製作に關はるといふ。

その長子が、神俣博士であつて、我が國精神病學の創始者たるは周知のことであり、次子順次郎博士は産婦人科醫を開業し、長女小梅は我が國衛生學・細菌學の泰斗緒方正規博士に嫁し、千葉醫大細菌學教授たりし緒方規雄博士はその嗣子である。かくて、末子が後の九大醫學部教授の神保三郎博士であつて、先生の新婦徳子夫人は實にその次女であり草創期のお茶ノ水女子高等師範學校出身の才媛であり、内にあつては家事に細心にして、夫君の研究業務に理解深く、内を顧みる暇なき先生をして後顧の憂ひなからしむると共に、外にあつてはまた女ながらに寛仁にして大度の器量人であつて、人の世話をよくみると共に社會的公共事業

に献身して天晴れ賢夫人の譽れ一世に高かつたのである。

かくて、こゝに於て、幼にして母を喪ひ、又學生時代にあつては父を失つて、天下孤獨の身を嘆ぜし先生も、こゝに好き生涯の伴侶を得、又、互に慰め鼓舞し合ふよき内助者を得て、研究に職務にまたその社會的の活動に従來に幾層倍化する。

る勇氣の源泉を得られたのであつて、その靜謐溫和な家庭生活は、先生の生涯の爲人並びにその業績の圓熟大成を將來せしめる上にも與つて力あつたといふべきであらう。

しかのみならず、義兄俣氏を初めとする榊家一家の理解ある抱擁とその精神的物質的な鼓舞援助は頼る可き肉親なき先生をして如何ほど慰藉、感激せしめ、又その内面的生活をして多彩豊富なものたらしめたか、蓋し餘人の想像に餘りあるものがあつたらうと思はれる。

こゝに於て生涯の良きベターハーフを得た先生は、第二の人生の門出に先づ快心の出發を劃したのであつたが、これより先、先生はこの結婚問題が具體化するや、月給二十五圓の一寒生のことゝて婚資にも事足り、郷里出身の某醫より金五十圓を借りて一時之に宛て、従來の索漠たる下宿生活に袂別して本郷森川町の吳秀三氏夫人の嚴父三浦千春氏の所有家を借り受けて、新婚の一家を構へたのであつた。が、何分長い素寒貧な、而も物事におほまかな先生の獨身生活の事とて、世帯道具の一切も夫人の生家から整へられたのであるが、而も、正月になつて餅を焼くに金網のないのに大笑ひしたといふ挿話すらあつて、これを以てするも當時の先生等の結婚生活の一端を窺ひ知るを得るであらう。

従つて、かうして一家を構へてみると、東京醫事新誌その他の原稿執筆等とその健筆を揮ふとはいへ、第二院の月々の給與だけでは生活費に餘裕がないので、先生御夫婦は下谷仲御徒士町に移轉して、さゝやかながら外科を標榜して開業を始め、公務の傍ら診療に従事したのであるが、何分、本職の方が前述の如くに繁忙を極めて餘暇として十分に得られぬ状態にあつたことゝて、門前雀羅を張つて極めて閑散であつたので、總て之を閉ぢ、本郷弓町の義兄俣氏の居住せる跡を襲ひ、明治二十九年その獨逸留學に至る迄こゝに住居せられたのであつた。然しその間に於ける先生等若夫婦の薄給裡の生活との苦闘といふものは、當時如何に物價が安かつたとはいへ想像に餘りあるものがあつたらしい。殊にも徳子夫人にあつては、富裕な家庭生活の中に成長し、何ら不自由なき環境裡にあつたことゝて、この苦闘七年の貧窮の生活は堪へ難きも

のもあつたらうが、かゝる苦勞は苦勞ともせず愚痴の一つも洩らさず、互に鼓舞し勵まし合つて、夫の大成を待つて隱忍自重、只管先生の研究、勉學に支障なきを期して家事の内外に、また先生の研究業務に粉骨碎身して内助の功を致されたものであつた。

かくて、公務に忙しき先生の勞苦を想つては夜を徹して原稿の清書をなし、或は學會での講演に必要な圖録の製作をなす等、夫人の苦心にも一方ならぬものがあつたが、また先生の友人同僚の續々として地方の大病院に高給を以て迎へられまた先生にも松本の病院や若松病院等を初めとして次々と地方の大病院より高給招聘の口がかゝり、その周圍よりも懇懇勸説あつて責め立てられたに拘らず、先生等若夫婦は大學教授に成るを目的として一切これに耳を傾けず、互に弱き心を勵まし合つては目的完遂に長期抗戦の一途に出でられたのであつて、誠にこの夫にしてこの妻ありともいふべくこの點に於ても、生涯の似合の夫婦であられたのであつた。

かくて、こゝによき生涯の伴侶を得た先生の前途には譬へるにもなき光明が差し初め、一段の活氣がその研究生活に賦與せられたといふべきである。

五、濃尾大震災と先生

明くれば、明治二十四年には、安政二年十月の大地震以來絶えてなかつた大震災がその十月二十八日の未明に全国各地を襲つて七千二百餘名の死者を出し、就中、その激震地なる濃尾地方の惨状は天下の耳目を聳動せしめ、三重、愛知、滋賀、岐阜及福井五縣の死者四千餘名を算して、殊にも愛知、岐阜二縣の如きは災禍最も甚だしく、岐阜、大垣、笠松、竹ヶ鼻、琵琶島地方の如きは之に大火が更らに加はつて、時正に晩秋の風蕭々たるの季、鬼哭啾々として慘慘の状は目を覆はしむるものあり、死傷者道に横りて敷知れず、爲めに救療の醫員に不足を告げ、日本赤十字社を初め中央の醫療機關に救

護員の派出方を要請し來つたのである。此の頃に及んで我が國の救護機關も漸くに完備され、先づ岩井禎三、小宮山權六の兩氏の看護婦數名を帶同して二十九日午後九時五十分新橋を出發せるを初めとして赤十字社救護班の續々と出動するを機に、帝國大學醫科大學、内務省、宮内省侍醫、慈惠醫院、陸軍醫務局等々の中央の諸機關を中心に、また順天堂病院、明治生命保險醫員等を初めとする民間特志救護班が陸續として濃尾の地に派遣されたのであつて、これ實に天變地異による我が國最初の救護派遣であつたのである。

かくて、醫科大學に於ては、第一院の外國教師スクリバ、第二院の教授佐藤三吉の兩氏に命じて該地方へ出張せしむることとなり、有志の助手田代義徳、岡田和一郎、關場不二彦、寺田織尾の四學士及び四年級の學生十餘名が之に隨行して三十日の夜九時三十分の汽車にて震災地に向つて出發することとなつたのである。

かうして、先生は佐藤博士の下に、寺田學士と共に學生四名を率ひて西下し、十一月一日岐阜縣下山縣郡高富村に本部を置き、上願村、太郎丸村等に夫々出張所を設けて負傷者の治療に従事されることとなつたのであるが、凡そ一週間許りにして四百餘名に施術し、就中、切斷術、切除術等の如き大手術を要せしものも數多あつたといふ。それより更らに大垣に移り、八日迄に前後約六百名許りの患者を治療せられたのであつた。

こゝに當時明治生命保險會社の醫員として該地に派遣されてゐた和辻春次氏の岐阜通信があるからそれを次ぎに掲げておかう。

岐阜縣震災に就き負傷者救療として來岐せるは、帝國大學より教師スクリバ、同助手田代、關場兩學士は十一月一日午後學生數名を率ゐて大垣へ向け赴き、同教授佐藤博士同助手岡田、寺田兩學士は學生四名を率ゐて同日午後一時高富東部地方に向ひ、同西部地方は余及び縣より派出したる村醫二名にて救療巡廻を爲せり。鶴田醫學士は同日北方地方に向ひ、高橋、岩佐、桂三侍醫は午後二時來岐、本巢郡地方に向ひ、赤十字社、大坂醫學校、同高安病院等より派出せる醫員も皆昨二日來岐せり。逸見學士は明治生命保險會社より派し尾州一宮地方にて救療に従事せり。(以下略)

このやうにして當時、この震災地には東京、京都、大阪等を初めとして、千葉、滋賀、群馬、長野等の各府縣より諸醫員陸續として馳せ集まり、當時我が國の外科醫は、岐阜、愛知の兩縣下に悉く蟻集してその技を競ふといふ盛況を呈したのであつた。

かくて、是等の諸醫員は皆各自その擔當の方面を分擔しては夫々便宜の市町村に救療所を開設し、外來患者の治療に従事したのであつて當時の各治療所の配置を参考までに掲ぐれば次の如くである。勿論その擔當者は時々變更あり、又その治療所の移動ありしも同然である。

◎愛知縣下に於ける救療出張所の配置一覽表(十一月四日調)

西春日井郡	琵琶川町	名古屋好生館
新川郡	清洲町	
丹羽郡	小折村	日本赤十字社、其他軍醫諸氏
犬山郡	山崎町	
岩倉郡	倉山町	
栗原郡	黒田村	醫科大學教師スクリバ氏一行
中島郡	一宮町	醫科大學教師スクリバ氏一行
	起宮村	明治生命保險會社醫員
	奥宮村	愛知醫學校生徒
	祖江村	慈惠醫院
稻澤村	父江村	
三宅村	三宅村	第一高等中學醫學部

海東海西郡津島町 愛知醫學校、群馬縣醫士吉竹南洋氏
甚目寺村 日本赤十字社

◎岐阜縣下に於ける救療出張所の配置一覽表(十一月七日調)

原見郡加納町	菊地二等軍醫正及陸軍々醫學校學生醫官
西ノ波村	岐阜縣地方醫指田氏、大阪府醫士加古氏、長野縣醫師橫關氏等
近ノ島村	日本赤十字社
芥ノ見村	侍醫桂秀馬氏
各務郡鷺沼村	侍醫桂秀馬氏
羽栗郡笠松町	日本赤十字社
中島郡竹垣町	大阪醫學校井上平造氏等
安八郡大垣町	東京赤坂病院長川上昌保氏、愛知醫學校生徒其他 佐藤醫學科大學教授一行、京都醫學校猪子止文之助氏、日本赤十字社京都支社、 京都醫會
美江寺町	日本赤十字社
今尾町	藤井氏
大野郡古橋村	日本赤十字社
本巢郡北尾谷	侍醫岩佐登彌太氏 陸軍々醫田中彌太郎氏
山儀郡關縣	滋賀縣醫士、陸軍々醫諸氏
武儀郡高津町	日本赤十字社
下石津郡高津町	東京麻布區聖慈病院長小島春庵氏

醫學博士佐藤進先生の一行は兩縣下の各治療所を巡視せられ便宜手術を施し或は治療所を督せらる。

尙ほ此處に、先生の所屬した佐藤教授一行の「震災負傷者治療概報」の記事があるから次にそれを掲げておかう。

醫科大學教授佐藤三吉氏より帝國大學總長へ差出されたる岐阜縣出張中震災負傷者の治療概報によるに同教授は岡田、寺田兩學士及學生六人を伴ひ去月卅日當地を發し十一月一日岐阜縣に着し治療に従事し本月十一日夜歸京されたるが滞在中數ヶ所に於て治療したる患者總數は五百二人にして内六十四人は重症なりしと、負傷の種類は軀幹及上下肢の打撲最も其多きを占め、其他は挫傷、裂傷、創創、上皮剝脫、頭蓋、顔面、推骨、骨盤、鎖骨、肋骨、肩胛骨及四肢諸骨の單純或は複雜骨折及諸關節の脱臼等にして創傷は悉く化膿の狀を呈し既に蜂窠織炎を起し或は膿毒症、羅斯等の傷創傳染病を繼發したる者ありしと云ふ。(東京醫事新誌十一月廿八日、第七百十三號)

かくして、先生は救護の任を果たして歸京するや、同十一月二十六日の東京醫學會の例會に於て「震災地ニ於テ實驗シタル患者ニ就テ」といふ報告演説をされたが、それは更らに翌二十五年の東京醫學會雜誌第六卷第一號より第二號に亘つて掲載されてゐるから、それをこゝに轉載して參考に供しておかう。

◎震災地ニ於テ實驗シタル患者ニ就テ(昨年十一月例會演説)

醫學士 岡田 和一 郎

本年十月廿八日ノ震災ガ、尾濃地方ノ人民ヲ未曾有ノ慘況ニ陥レシハ、當時新聞紙等ノ報ゼシ所ニ由リ、諸君ノ夙ニ知了セラル、所ナルベシ。情アル者誰カ之ヲ聞テ驚カザル者アラナヤ。去レバ我帝國大學ハ速ニ我恩師佐藤教授ニ命シテ、岐阜縣下ノ患者救療ニ從事セシメ、加フルニ余等ニ許スニ、同君ニ隨行シテ以テ患者ノ救療ニ從事スルコトヲ以テセリ。仍テ余等ハ教授ト共ニ十月三十日午後九時三十分ノ汽車ニテ岐阜縣下ヘ向ケ出發シ、十一月一日初メテ同縣下山縣郡高富村ニ於テ負傷者ノ診察ニ從事スルコト、ナレリ。余先ニ以爲ク這回ノ如ク同一ノ原因ニテ同時ニ多數ノ外傷患者ヲ出スコトハ、復タ再ビアルコトナシ、故ニ實地ニ臨ミ研究セバ、必ズヤ外科學上得ル所大ナルベシ。又時機失フ可ラズト。然ルニ總テ豫想ト反シ、一日ニ數百人ノ負傷者ヲ診察且ツ治療セザルベカラザルノ場合ナリシヲ以テ、到底學術的研究ノ目的ヲ以テ精細ノ觀察ヲ爲スニ違ナク、且ツ滞在日數ニ制限アリシガ爲十分ナル材料ヲ集ムルコトモ能ハザリキ。是レ余ノ甚遺憾トスル所ナリ。然レ共當時各地方ヨリ該地方ヘ出張セラレタル同業者ハ、何レモ當時ノ名家ノミニテ、然カモ其數甚多カ

リシヲ以テ見レバ、必ズヤ早晚外科學上ニ裨益アル大著述ノ出ヅルコトアルハ、余ノ信ジテ疑ハザル所ナリ。故ニ余ハ只余ノ觀察シタル患者、特ニ骨傷患者ニ於テ左ノ諸件ノミヲ報告シテ以テ他日ノ參考ニ供セント欲ス。

第一 震災地ニハ皮下創傷ノ多カリシコト

余等ハ岐阜縣下山縣郡高富村、太郎村及ピ上願村等ニ於テ負傷者ノ救療ニ從事シタリシガ、此等ノ地方ノミニテ治療シタル患者ノ數ハ合計三百七十六人(他地方ニ於テ治療シタル者、記載ノ不明瞭ナル者、及ビ再來シタル者等ヲ除ク)ニシテ今之ヲ大別セバ、

出血性創傷	百二十一人	三二・一八%
皮下創傷	二百五十五人	六七・八二%
又其内骨傷患者ノミニ就テ調査スルニ、全骨傷患者數ハ七十五人ニシテ、之ヲ大別セバ		
複雜骨傷(轉症ノモノヲモ加入シテ)	二十人	三六・三六%
單純骨傷	五十五人	六三・六四%

夫レ震災時ノ創傷ハ、何レモ俄然非常ノ強力ヲ以テ家屋轉倒若クハ破潰スルノ際ニ於テ來ルモノナルヲ以テ、皮下創傷ヨリハ却テ出血性創傷ノ多カラザルヲ得ザルガ如シト雖、實際上ノ調査ハ之レニ反シテ、皮下創傷ハ出血性創傷ヨリ二倍以上ノ多キヲ占メタリ。是レ如何ナル理由アリテ然ル乎。余案ズルニ是レ蓋シ該地方ノ住家カ概ネ粗ナル木造ニシテ、且ツ茅葺屋根ヲ有セシニ職由スルナラント。抑モ茅葺屋根ヲ有スル家ハ、其全家ノ重點ヲ屋中ニ有スルヲ常トスルヲ以テ、如斯家ガ一朝劇烈ノ地震ニ逢フコトアレバ、必ズヤ潰倒ヲ免ル、コト難カルベシ。然レ共如斯茅葺屋根ハ、瓦屋根若クハ木板屋根等ノ如ク決シテ倒潰ノ際、粉々破潰シテ片々飛散スルコトナク、概ネ先少墜落チ柱折レテ後、屋根ハ有形ノ儘ニ墜落スルモノナリ、是レ余ガ親ク現場ニ就テ證明シタル所トス。故ニ人若シ不幸ニシテ棟梁等ノ爲メニ壓セラレ、トキハ、其重力却テ甚大ナルヲ以テ、往々壓死スルニ因ルコトアルモ、其他ノ者ニ在リテハ墜落シタル屋根ヲ以テ全ク覆ハル、コトアルモ、幸ニ微傷ダニ蒙ラザルコトアリ。假令負傷スルコトアルモ、割合ニ輕症ノモノ多シ。特ニ難ヲ屋外ニ遭レシ者ニ到リテハ、人家稠密ノ都市ニ於ケル如ク、飛ビ來ル屋瓦ノ爲メニ出血性重症ヲ受クルガ如キ場合ナクシテ、僅ニ壁若クハ柱等ノ倒ル、ニ際シテ之レニ壓セラレ、若クハ打撲セラレ、コトアルノミ。約言セバ瓦屋根等ハ倒潰スルノ際シ、概ネ銳器トナリテ負傷セシムルコト多キモ、茅葺屋根ハ一般ニ大ナル鈍器トナリテ創傷ヲ來スモノ、如シ。是レ余ガ該地方ニ於ケル皮下創傷ノ比較的多カリシ所以ト認ムルノ所以ナリキ。

ナリ。然レドモ素ヨリ精細ノ調査ヲ遂ゲテ得タル事實ナラザルヲ以テ、誤リアラバ大方ノ致ヲ乞ハシム。

第二 震災地ノ創傷傳染病

余等ノ患者ニ初メテ接セシハ、十一月一日即チ負傷後第四日ナリシガ、當時已ニ出血性創傷殆ド一般ニ化膿ニ陥リ、甚シキハ一指ノ挫傷ノ爲メ、全上肢ノ腐敗性「フレグモーン」ヲ起シ、又極メテ小ナル創ヨリ已ニ全下腿ノ膿瘍ヲ來シ、以テ治ヲ仰グコト、ナリシ者等アリキ。加之皮下ノ創傷トイヘドモ溢血ノ化膿シテ大ナル膿瘍ヲ作り、且ツ特ニ膿毒症ニ陥ラントセシ者等ニ多カリキ。實ニ震災地ニ於ケル創傷ハ、一般ニ化膿ニ陥リ易キ傾向ヲ有セシハ、蔽フ可カラザルノ事實トス。而シテ丹毒破傷風等ノ如キ疾患ハ、余ノ滯在中ハ時期未ダ來ラザリシ爲メカ、一回モ余ノ目撃ニ達セザリシト雖、他ノ諸君ノ報告ニ由レバ、是レ亦決シテ少キニアラズ。夫レ如斯創傷傳染病ノ多カリシハ、其原因夥多アリテ存ゼシナレ共、一ハ家屋倒潰ノ爲メ全地方ノ空氣非常ニ不潔トナリ、且ツ負傷者アルモ、先ヅ之ヲ救護スルモノナク、又タ負傷者自ラモ狼狽ノ餘リ輕小ナルモノ、如キハ、敢テ意ニ介セズシテ、徒ラニ此不潔ノ空氣中ニ創面ヲ露出セシメシト、一ハ初メ醫師ノ治療ヲ仰グコトアリシモ、繃帶材料ノ不足ヲ告ゲテ十分ノ目的ヲ達シ得ザリシトチ以テ主因トス。故ニ後來又如斯場合ニ接スルコトアラバ、先ヅ化膿性創傷ノ多キヲ豫想シ、其目的ヲ主トシテ、防腐及ビ排膿ヲ完全ナラシムル様、消毒藥排膿管等ヲ十分携帶セシコトヲ希望ス。(東京醫學會誌第六卷第一號)

第三 骨傷ノ種類

余等ガ震災地ニ於テ實驗シタル患者ノ中ニテ、最も多キハ打撲症ニシテ、骨傷之レニ亞グリ。然レ共余ハ主トシテ骨傷ニ就テ述ブル所アラント欲スルヲ以テ、先ヅ骨傷ノ種類ヲ擧ゲン。即チ左表ノ如シ。

部	頭		骨	名	單	複	小	計	總	計
	下	眼								
肩	頸	頭	骨	蓋	純	雜	小	計	總	計
五	六	一	一	一	七	一	一	七		九

ヨリ若キ者及ビ七十年ヨリ老ヒタル者ニ甚少シ。然レ共三十年ヨリ若キ者ノ骨傷少キハ、骨質弾力性ニ富メルニ職由スト説明シテ、吾人ハ了解レ得ルトイヘドモ、獨リ七十年以上ノ高老老者ニシテ如斯骨傷ノ少キハ、マルゲーン氏ノ言ノ如ク余ノ大ニ怪ム所ナリ。何トナレバ此年齡ニ於テ骨傷者ノ少カリシハ、實際骨傷ヲ來スベキ人間ノ少キニ由來セシヲ想ハザルベカラザレバナリ。故ニ余ハ更ニ地震ノ爲メニ受ケタル負傷者(余ノ治療シタル者)全體(コレヲ負傷スベクアリシ人ノ數ト見做ス)ノ年齡表ヲ作り。後之レト上記ノ骨傷患者年齡表トヲ比較シテ、以テ其數ヲ計算セシニ、左ノ如キ成績ヲ得タリ。

全負傷者	全負傷者ニ對スル骨傷ノ%數
齡一年乃至十年	二十二
同十一年乃至廿年	一三・八三%
同廿一年乃至卅年	一八・九一%
同卅一年乃至四十年	四一
同四十一乃至五十年	一一・五〇%
同五十一乃至六十年	一五・六八%
同六十一乃至七十年	一四・四九%
同七十一乃至八十年	一八・九六%
同八十一乃至九十年	二六・〇〇%
同九十一乃至九十九年	三〇・四三%
同八十一乃至九十年	六
同九十一乃至九十九年	三三・三三%

由是觀之、該表ハ實ニ少數患者ニ就テ得タル統計ナレバ、素ヨリ大ナル價值アル者トハ信ゼザレ共、ポイエルノ理論ノ當ヲ得タルト、マルゲーン氏ノ人口數トノ比例説ガ、實際ニ於テ當ニ然ルベキトヲ、計數上ニ於テ證明シ得タル者ナリ。何者比較的骨傷患者ノ最モ多キハ卅年乃至六十年ニアラズシテ四十年乃至九十年ナリシヲ以テナリ。

第五 骨傷ト男女兩性ノ關係

マルゲーン氏ノ調査ニ由レバ、骨傷ハ幼年者(即チ齡二歳ヨリ五歳ニ到ルマデ)ヲ除クノ他ハ、一般ニ男性ニ多クシテ、女性五ナレバ女性ニノ比例ナリ。余ハ左ニ余ノ實驗シタル全骨傷患者ニ就テ、兩性ヲ區別セシニ

男性	女性
三十九人	五二人

女性

三十六人

四八%

ナリ。故ニ平時ニ於ケル骨傷統計ハ、彼ノ如ク男性ニ多クシテ女性ニ少シト雖モ、震災ノ如ク全地方ノ全人民、同時ニ同一ノ危境ニ投入スルトキハ、其際ニ於ケル骨傷患者數ハ、決シテ男女兩性ニ由リテ大差アルコトナシ。是レ蓋シ骨質ノ男性ナルト女性ナルトニ由リテ骨傷素因ノ異ナルモノニアラズシテ、平時ニ在リテハ骨傷ニ罹ルベキ危境ニ投入スル者ノ男性ニ多キガ爲メ然ルモノナラン。

其六 一 二 骨傷患者

余ガ實驗シタル骨傷患者ハ、上記ノ如ク其數六十餘名ニシテ、就中平時ニ在リテ容易ニ實驗シ難キ稀有ノ骨傷決シテ少カラズ。今其一ニ症ノ大要ヲ茲ニ記シテ、以テ他日ノ參考ニ供セン。

其一、耻骨々傷、頭蓋穹隆部挫創化膿、卅一歳ノ女子、家屋倒潰ノ際、先ツ背位ニ倒レ、其下腹部ヲ斜ニ布カレタリト云ヘリ。患者ハ戸板ニテ送ラレ、余先ヅ其一般ヲ檢スルニ、脈百餘ヲ算シ、熱高ク、患者ハ甚シク衰弱セリ。於之其局部ヲ檢スルニ、左脚少シク外轉シテ且ツ外方ニ開キ、少シク延長セルガ如キ觀アリ。且ツ鼠蹊部特ニ左側大陰唇ヨリブーパールト氏靱帶ノ上下部ニ當リテ、兒頭大ノ腫物アリ。表皮紫褐色ヲ帶ビ、軟ニシテ著シキ波動ヲ示ス。外皮ハ毫モ創面ヲ認メズローセ、ネラトニ線ヲ檢スルニ、脱臼ノ徵ナク大腿ヲ取リテ運動ヲ試ムルニ、大腿ノ骨傷徵ヲ示サズト雖モ、患者ハ劇痛ヲ訴ヘリ。於之余ハ骨盤、特ニ耻骨ノ骨傷ナラント信ジ、腔内ヨリ檢スルニ、溢血腫此所マデ擴張シテ、骨傷ヲ觸知スルヲ得ズ。由テ試ミニ鼠蹊ノ腫脹部ヲ穿刺セシニ、多量ノ膿液ヲ得タリシヲ以テ、切開術ヲ猶豫スベカラザルヲ信ジ、直ニ其ノ最下部、即チブーパールト氏靱帶下ヲ切開シテ、膿ヲ排除シ、後指端ヲ挿入シテ上方ヲ檢セシニ、耻骨水平部ニ骨傷ノアルヲ認メ、且ツ該膿腫ノ大陰唇並ニ腔壁ノ方ニ向ツテ擴大セルヲ知リシヲ以テ、大陰唇ニ對孔ヲ作り、排膿管ヲ挿入シ、十分消毒洗滌シテ後、大腿ヲ復位シ、以テ耻骨々折端ヲ互ニ近接セシメテ固定縛帶ヲ施シ置キタリ。是レ骨盤骨傷中ニテ比較的多キ骨傷ナレ共、平時ニ於テハ蓋シ容易ニ目撃シ難キモノナリ。

第二、耻骨縫合ノ離開、兼肋骨々傷、齡二十一ノ男子、彼ハ避難ノ際、外傷ヲ耻骨部ニ受ケタリ。一般症候凡テ良ナリ。局部ヲ檢スルニ耻骨縫合ハ左右ニ開裂シテ、以テ指端ヲ入レシム。而シテ此所ニ溢血アリテ陰囊及ビ會陰ニ擴ガレリ。加之該溢血ハ已ニ全ク化膿シテ蜂窩織炎ヲ起セリ。由テ佐藤教授ハ之レニ數個ノ對孔ヲ作り、排膿管ヲ挿入シテ、固定縛帶ヲ施シタリ。夫レ耻骨縫合離開ハ最モ數バ婦人ノ分娩時ニ起ルモノニシテ、如斯外來ノ直達重力ノ爲メニ來ルコト全ク無キニアラズト雖、甚ダ稀ナリ。故ニ茲ニ記ス。

第三、兩側肋骨々傷兼大腸骨傷、齡七十五ノ女子、背臥ノ際、棟其胸上ニ落チ傷ク。余之レヲ檢スルニ、左側ハ前腋窩線ニ於テ、第四

肋ヨリ第九肋ニ至ルマデ骨折シテ、其骨傷端ハ鈍角ヲ爲シテ連繫ス。又右側ハ第四肋ヨリ第十肋マデ後腋窩線ノ前ニ於テ骨折シ、左側ト同一ノ様ヲ呈セリ。患者ハ毫モ呼吸困難、咯血等ヲ訴エズ。只僅ニ深呼吸ニ際シテノ疼痛ト、壓サレテ骨傷痛トヲ訴フルノミ。

是レ肋骨ノ兩側骨傷ニシテ、是レ最モ稀有ナリ。何トナレバ肋骨々傷ハ、多クハ間接的重力ノ爲メニ來ルモノニテ、一個先ヅ骨折ヲ來セバ、此所ニ其重力ハ其勢ヲ失シテ、最早他側ノ骨傷ヲ來スコト少ナシ。只稀ニ胸ノ前面ヨリ左右兩側ニ向ツテ平等ノ重力ヲ以テ壓セシトキニ於テノミ、兩側骨傷ヲ來スモノナリ。余ノ該患者ノ如キハ、即チ其一例ナリ。記シテ以テ大方ニ報ズ。(東京醫學會雜誌第六卷第一號二號)

六、和子嬢の誕生と第三回學士會學術通俗講談會の講演

かうして、慌しくも明治二十四年が過ぎ去ると翌二十五年には、新緑も目に爽やかなる六月ともなれば、先生等新婚の御家庭にも、結婚後約一ケ年半にして新しき家族の一員がふへ、先生等御夫婦にも人の子の親となるの楽しみを味ふ幸福に恵ぐまれるに到つたのである。

これ實に先生の二十九歳の初夏のことであつて、この可憐な長女和子嬢の出生は、その靜謐な家庭生活に更らに生の愉悅を一つ加へ、そのつゝまじやかな生活をして躍動せしめて生の滋味を擴充し、以て困窮の研究生生活の上にも、愛す可き一輪の美しい花を挿し添えて、一層の慰めと勵げましとを與へられたものであつた。

かうした生への幸福感の中に、更らに七月には同十九日より二十一日の三日間に亘つて仙臺市に於て開催された第三回學士會通俗學術講談會に招聘されて、當時各學界一流の權威と相並んで、先生は醫學部門の講演を請はれ、その專攻とする外科學の進歩に就て述べ、併せて「醫學は東西兩派を分つ可からず」を論じられたのであつた。



明治二十八年三月三日
先生と和子嬢

抑々、この學士會學術通俗講談會なるものは、去る二十三年の內國勸業博覽會の開催を機に全國より帝都に蝟集し來たれる一般地方人士の爲めに、地方にあつて學術上の講演を聴くの機會の得難きを以て、こゝに通俗的な學術講談會を開き、展開、發達途上にある我が學術智識の普及啓蒙に資せんとして、各學界の權威者を網羅して開催されたものであつて、その盛會なりし成果はこれを一回限りのものとせず、引き続き成る可く全國主要の各都市に於て繼續開催すべしとし、翌二十四年には名古屋でその第二回を開き、この二十五年には東北地方で開會せんものと、仙臺市の招聘に應じてこゝに第三回の通俗講談會を開會することになつたのである。

従つて、これには數ヶ月前より仙臺にある學士諸氏によつて準備がなされ、當日は仙臺市を中心としてその地方の顯貴紳が三日間に亘つて熱心に傍聴したものであつた。

- 參會員ヲ來聽者ニ紹介スル演說
- 第三回學士會通俗學術講談會ノ來歴
- 第三回學士會通俗學術講談會開會ノ趣旨
- 電氣ノ話
- 國語及漢文ニ就イテ
- 外科學現時ノ進歩

- | | | |
|------|--------|--------|
| 仙臺市長 | 遠藤 | 治君 |
| 委員 | 工學士 | 青木大三郎君 |
| 醫學士 | 大澤謙二君 | |
| 工學士 | 山川義太郎君 | |
| 文學士 | 高山津三郎君 | |
| 醫學士 | 岡田和一郎君 | |

- 工學ノ進歩
- 水産事業ノ擴張
- 電話ノ談
- 東洋ニ於ケル歐洲諸國ノ附庸
- 倫理ニ就テ
- ばくてりあノ話
- 生物ト外界トノ關係
- 經濟學ノ定義並ニ其分科
- 河川ノ話
- 地震(尾濃震災)
- 日本貨幣史談
- 電氣事業ノ將來
- 歴史談
- 告別ノ辭

工學博士、理學士	石黒五十君
理學博士	箕作佳吉君
理學士	澤井廉君
文學士	平沼一郎君
文學士	棚橋一郎君
醫學博士、醫學士	緒方正規君
醫學博士、理學士	石川千代松君
法學博士、文學士	金井延君
工學士	近藤虎五郎君
理學士	大森房吉君
文學士	三上參次君
工學博士	藤岡市助君
文學博士	重野安釋君
文學士	阪谷芳治君

以上、十六名の諸學界の權威と相伍して、專攻とする外科學の部門を擔當し、堂々として例の雄辯をふるはれた、若輩二十九歳の先生の得意や想ふ可きものがあらう。

こゝに於て先生は、現時の外科醫學の進歩を「第一ニ古代ニハ非常ニ危險ナモノト信ジテ容易ニ手ヲ付ケナカッタ所ノ病氣ヲ今日ハ安心シテ手術的ニ癒スル事ガ出来ルヤウニナツテ來タ」事「第二ニハ從來外科的ノ病氣デナカッタモノヲ今日ハ内科等ノ病氣トセズシテ外科ノ病氣トシテ治療スルコトガ出来ル、即外科ノ領分ヲ擴ゲテ行ツタ」事「第三ニハ人類ノ動作ヲ大變自由ニスルト云フコトヲ結果トシテ來タ」事「第四ニハ不足ヲ補フ事即不具、生レナガラニシテ身體ノ不完全ナ人が随分世ニアル、サウ云フ風ナ不足ナ所ヲ外科ノ力ニテ補フコトガ出来ルヤウニナツタ」事等の四項目に分けて、それらを一々事例を擧げて詳細平易に説明し、然らばかゝる

進歩は如何なる方法に依れるか、第一には之を助くるに爾餘の學問の進歩があり、第二には外科醫師の研究の進歩があつて兩々相俟つものとし、前者に於ける解剖學、生理學、藥物學、病理學、細菌學等の進歩を擧げ、後者の手術の方法の進歩並びに器械の發明、改良等を擧げてその相關性を強調すると共に、最後に然らば斯くの如き外科學の進歩は誰れの手によつて爲されたものかといふ問題を提起して結論とされてゐるが、こゝにはその注目すべき結論のみを掲げてみよう。即ち、

斯ノ如ク外科ノ如キ醫學ガ進歩シタノハ誰レガ進歩サセタカト云フ問題ヲ一ツ設ケテ見ル、サウスルト當時世間ノ或ル一部ノ人ハ西洋學者ガ進歩サセタル西洋派ノ學問デアルト云ヒ、サウシテ之レニ對スル或ル一ツノ派ヲ以テ東洋派ト名ツケヤウト思ツテ居マス。私ハ少シク時事問題ニ這入ツテ醫學ハ東西ヲ分ツコトハ出来ヌト云フコトヲ申サウト思ヒマシタガ、時事問題ハ宜シクナイト云フ所カラシテ唯終ニ臨ンデ一言申シテ境ヲ下ラウト思ヒマスノハ、斯ノ如ク醫學ヲ進歩サセタノハ西洋人バカリデハナイ、東洋ノ人デモ亞弗利加ノ人デモ斯ノ如キ人類ヲ助クル所ノ醫學ニハ皆關係シテ居ル、我々ハ日本ニ居ルガ外科ガ是レ程マデニ進歩シタノハ私達モ與ツテ幾分力アルモノデアル。少ナクトモ之レヲ助クルダケノ仕事ハ我々ハ實地ニシテ居ルト思ヒマス。即醫學ハ或ル學者ガ言ウタル通り世界ノ共有物デア、醫學ハ人間ニ用キル所ノ學問デアルカラシテ醫學全體ヲ進ムル爲メ人間ノ住ンデ居ル所即世界中一致シテ進歩サセヤウトシテ居ル、其レダカラ決シテ是レ程進歩シタル醫學ヲ西洋ノ專有物ニスルト云フノハ我々ハ甚殘念ト思ヒマス。我々ハ寧ろ、出來ルコトナラ此ノ進歩シタル醫學ヲ東洋ノ專有物ト致シ以テ優勝劣敗ノ世ニ立タムト欲スル者デス。併シ是レハ出來ヌ望デアリマス。ダカラシテ今世間デ所謂西洋派東洋派ヲ分ケヤウト云フ東洋派ノ學問ト雖モ解剖學モ明ルク、生理學モ明ルク、藥物學モ明ルク總テ自分ノ仕事ヲスルニ不都合ノナイ學說デアレバ之レヲ東洋西洋ト分ツニ及バヌ、我々ハ一緒ニシテ宜イノミナラズ之レヲ世間ノ醫學トシテ遵奉致シマス若シ此ノ事ナクバ私ハ決シテ醫學ト認メマセヌ然シ本日ハ前ニ述ベタル如ク時事問題ニ入ラヌ積リデアリマスカラ、其ノ詳シキ議論ヲ止メマシテ是レダケニテ此ノ演說ヲ止メマス。

と、當時尙未だ西歐の文物文化の移植輸入に忙しく、歐米文化に心酔せる時代に、かゝる確信を堂々と披瀝し、而も正鵠なる批判とそれによる達識、自覺を内に確把せる先生の抱負は蓋し一世の奇觀、壯觀と稱すべきであらう。

蓋し、歐化時代の明治二十年代の半ばにあつて、歐米心酔派となることはいともた易い事であると共に、またその反動として井中の蛙と化して國粹派たることも容易な事であつたらうが、日本人としての正しき自覺にあつて、そのいづれをも排除し、その自覺の中に自己の力を眞に確信し、外來とされた科學を、又その文化を自己の中に生かし、自己のものとなせるは眞に遠見、達人ともいふべく、かゝる自覺の域に到達するには、我が日本人は實にその後約半世紀の歲月と道程とを経ねばならなかつたのである。

而して、こゝにもみられる如き、先生のかゝる大乗的な遠觀、事物の総合的な確把力こそが、先生をして如何なる時處に置くも、毅然として敢て卑屈卑下することなく堂々として對處せしめる素地を作り、又その學問研究に於ても西歐先進諸國の人々の間に伍して敢て劣らざるの態度、業績を挙げしめたものに外ならないのであつて、その「尿道カテーテル兼ブージー」の發明といひ、コカイン局所麻酔の用法に於ける創見といひ、之等のものは一つとしてその現はれならざるはなかつたのである。

七、尿道カテーテル兼ブージーの發明

かくて、この明治二十五年の年には、先生は兼ね／＼その臨床上に於て思ひ付いてゐた從來の尿道カテーテルとブージーとの使用上の弊を是正せんものとして、その各々の長短を考究し、各その長を採つて兼用にせる「尿道カテーテル兼ブージー」を發明し、これを同年九月二日の東京醫學會の總會の席上に於て發表演説されると共に、本郷三丁目の萬木九兵衛商店にその製造販賣方を一手に引受けさせ、之を「岡田氏發明尿道カテーテル兼ブージー」と命名して一般市場に賣り出させたのである。

その如何なるものかに就ては、先生の講演筆録があるからそれを次ぎに掲げておかう。

男子尿道「カテーテル」使用法並ニ自家考案ノ新製「カテーテル」ニ就テ

(九月二日總會演説)

醫學士 岡田 和 一 郎 述

凡ソ實地醫家タル者ハ、其内科タルト外科タルト問ハズ、一般ニ尿道「カテーテル」ヲ常ニ坐右ニ備ヘテ、以テ臨時ノ急ニ應ゼザル可カラズ。何者彼ノ尿閉症ニシテ、膏ニ尿道炎症、尿道有機的狹窄、若クハ尿道周圍ノ壓迫等ノ爲、尿ノ通路ノ閉塞セラレテノミ發起スル者ナレバ、實地家ハ常ニ之ヲ専門家ノ手ニ托シ、敢テ「カテーテル」ノ使用ヲ顧ミザルモ或ハ不可ナシト雖、如何ニセン實地家ガ常ニ我材料トシテ治療スル所ノ疾患、即チ脚氣若クハ脊髓病等ノ如キ膀胱麻痺ヲ起ス疾患、或ハ痔核、肛圍炎ノ如キ尿道接近ノ發痛性炎症等ニ於テ、最モ數バ突然トシテ尿閉症ヲ續發シ、當局ノ實地家ハ義務上又名譽上「カテーテル」ヲ挿入シテ以テ患者ヲシテ排尿ノ快ヲ取ラシメザル可カラザル場合多ケレバナリ。故ニ余ハ「カテーテル」挿入法ヲ以テ決シテ専門家ノ業トナサズシテ、寧ロ一般實地醫家ノ執行セザル可カラザルノ法ト認メタリ。然ルニ從來ノ「カテーテル」ハ膏ニ使用ニ不便ナルノミナラズ、復數バ弊害ノ之レニ隨伴スル所少カラズ。是レ余ノ甚ダ遺憾トスル所ナリ。於之余以爲ク從來ノ「カテーテル」ヲ一新シテ、一ハ使用法ニ便利ヲ與ヘ、一ハ隨伴ノ弊害ヲ除カバ、ソノ實地醫家ニ與フル利益決シテ鮮少ナラズト。余ハ遂ニ載籍上ノ事實ト自家ノ經驗トニ徴シ、從來使用セシ「カテーテル」ノ不便ト弊害トヲ顧慮シテ、新ニ「カテーテル」ヲ製シ、以テ之ヲ實地ニ試ミ初メテ余ノ希望ヲ満足スルヲ得タリ。然レ共是レ未ダ余ノ一家言ニ過ギザルノ満足ナレバ、諸君幸ニ余ノ新製「カテーテル」ヲ實地ニ試ミラレ、果シテ満足ノ結果ヲ得レバ、醫學進歩ノ一ト認定セラレ、尙ホ改良スベキ所アラバ續々改良案ヲ出シテ以テ共ニ斯學ノ進歩ヲ謀ラル、事コソ余ガ希望ニ堪ヘザル所ナリ。

諸君余ハ先ヅ「カテーテル」使用法ニ就テ一言センニ、吾人ノ挿入スル法ニテ、即チ術者ハ患者ノ左側ニ立チ、左手ノ拇指ト示指トニテ陰莖ヲ持チ右手ノ拇指ト示指トニテ「カテーテル」上端ヲ持チ、且ツ中指ニテ之ヲ支エ、或ハ上端孔ヲ閉ヂ、後其下端ニ石炭酸「オレ」油ヲ付ケテ尿道外孔ニ入レ、右手ハ「カテーテル」ヲ腹壁ト水平ノ位置ニ保チ、左手ハ陰莖ヲ「カテーテル」ニ向ヒテ牽引スル事恰モ英人ノ所謂釣針ニ何ヲ刺スガ如クシ、(wie Wurm an die Fischangel) 而シテ其下端ノ尿道球部ニ達スルヤ否ヤ、直ニ右手ハ上端ヲ鉛直ニ起シ、(第二期)以テ「カテーテル」固有ノ重力ニテ膀胱内ニ達セシム。是レ吾人ノ最モ數バ使用スルノ法ナリ。其二ハ全廻轉ノ法(Meistertour, Tour de Maître 佛國ノ大家ガ稱用シタル法)ニテ、即チ「カテーテル」ヲ兩脚間ニ水平ニ保チ、其下端ヲ尿道孔ニ入レ固有ノ重力ニテ尿道球部マデ達セシメ、後「カテーテル」上端ヲ左脚前ニ沿フテ上方螺旋狀ニ廻轉シ、以テ第一法ノ第二期ノ位置ニ移ラシ

ム。是レ座腹、下腹膨大等ノ場合、若クハ尿道後壁ノ粘膜ニ疾患ノ占居スル場合等ニ用ユ。其三ハ半廻轉ノ法 (die halbe Mastour, demi tour de Maitre) ニテ、即チ陰莖ヲ一側ニ向ヒテ牽引シ、而テ其牽引セラレタル一側ノ脚前ヨリ「カテーテル」ヲ球部マデ挿入シ、後第二法ノ如ク螺旋狀廻轉ヲ爲シテ第一法ノ第二期ノ位置ニ達セシム。是法ハ尿道粘膜ノ側壁ニ疾患ノ存スル時ニ於テ用キラル。カク該三法トモ何レモ指端ニカヲ用キテ積極的ニ挿入スルヲ嚴禁シ、只陰莖ヲ牽引スルト「カテーテル」ノ重力トノミヲ要セリ。然レ其通常ノ「カテーテル」ハ柄ヲ有セザルガ爲メ、之ヲ挿入スルニ當リテハ、自ラ指指示指ニテ固持シ、且ツ多クハ中指ヲモ加ヘテ固定セザルヲ得ズ。故ニ指端ニカヲ用キザラント欲スルモ、殆常ニ用ユルノ傾アリ。況ヤ術者ハ常ニ「カテーテル」ノ重力ニ價値ヲ置クモ、如斯「カテーテル」ハ空洞管ニシテ、未ダ十分ノ重力ヲ有セザルガ爲メ、決シテ常ニ意ノ如ク容易ニ膀胱ニ達セシムルモノニアラザルニ於テヲヤ。サレバ吾人ハ金屬「ブージー」ノ使用シ易ク且ツ弊害ノ少キヲ以テ、一ニハ柄ノ付着シテ良ク之ヲ指指示指トノミニテ持チ、且ツ挿入ニ際シテハ其柄ヲ指上ニ載セテ指指ヲモ離ス事ヲ得ルト、一ニハ其空管ナラザルガ爲メ十分重力ニ富メルト、一ニハ其清潔ニシ易ク、消毒ニ便ナルトニ歸セント欲ス。而シテ如斯モノ皆「カテーテル」ニ於テ缺如ス。是レ「カテーテル」ノ缺點トスル所ナリ。

若シ「カテーテル」ニシテ法則ノ如ク、主トシテ消極的動作、即チ陰莖ノ牽引ト「カテーテル」ノ重力トノミニテ挿入セラレズシテ、一ニ指端ノ力、即チ積極的動作ニテ挿入セラル、時ハ數バ官フベカラザルノ弊害ヲ來スモノトス。何者健康ナル尿道トイヘドモ「カテーテル」通路ニ四個ノ障礙、即チ第一ニ耻骨縫合、第二ニ會陰中筋膜層、第三ニ尿道球部竇 (Glandula) 及ビ第四ニ攝護腺竇等アリテ、若シ強力ヲ以テ「カテーテル」ヲ挿入セラル、トキハ、「カテーテル」ハ上記ノ部ニ支エラレテ膀胱ニ達セズ、却テ或ハ所謂假尿道ヲ作り、數バ直腸、攝護腺等マデ穿孔スルガ如キ事アリ、或ハ少クトモ尿道ニ挫傷、若クハ挫創ヲ作りテ出血ヲ來ス事アリテ、患者ヲシテ徒ニ苦痛ヲ加エシムル事アリ。況ヤ「カテーテル」ヲ使用スルノ場合ハ、概ネ尿道ニ病的變化ノ存在シテ、「カテーテル」通過ニ多少ノ抵抗ヲ爲スニ於テヲヤ。故ニ人若シ「カテーテル」ヲ使用セント欲セバ、宜シク徐々トシテ使用シ、務メテ「カテーテル」表面ヲ滑澤ニシ、其重力ヲ利用シテ以テ其抵抗ニ打ち勝タザルベカラズ。是レ從來「カテーテル」ヲ改良セザルベカラザルノ第一原因ニシテ、余ノ考案モ又之ニ基ケリ。

尿道ヲ通過シテ膀胱ニ達セシムル器械ニ二アリ。一ハ「カテーテル」ニシテ、他ノ一ハ「ブージー」トス。而シテ二者其使用目的ヲ異ニスル爲自ラ異リタル構造ヲ有セザル可カラズ。今二者ノ使用目的ヲ左ニ擧ゲン。

尿道「カテーテル」ノ使用目的ハ次ノ二トス。

- (一) 尿、膿、血液、瓦斯等ヲ膀胱ヨリ排除セン爲
- (二) 水若クハ藥溶液ヲ膀胱内ヘ注入セン爲

又「ブージー」ノ使用目的ハ次ノ二トス。

- (一) 尿道若クハ膀胱ヲ検査セン爲
- (二) 尿道若クハ膀胱ノ手術ヲ施サン爲 (尿道擴大法、結石手術、尿道外切開等)

トス。甲ハ診斷上及治療上ニ使用セラル、モ、常ニ或ル一物が其器中ヲ通過スルヲ主要トス。故ニ該器ハ必ズ空洞管ヨリ成ルヲ要ス。反之乙ハ診斷上及治療上管ニ空洞ヲ要セザルノミナラズ、却テ其充實セルヲ至便トセリ。(尿道擴大、探否等ニ於テ) 故ニ「カテーテル」ハ「ブージー」ノ代用ト爲シ難ク、「ブージー」ハ決シテ「カテーテル」ノ目的ヲ達シ得ザルモノナリ。實地家タル者常ニ「カテーテル」ト「ブージー」トヲ所有シテ、以テ其適應ナル病症ヲ選ビ、之ヲ使用セザルベカラザルハ、現時ノ狀況ナリトス。然レ共二者共ニ利害アリ。次ニ之ヲ述ブベシ。

「カテーテル」ノ利

- (一) 其確實ニ膀胱ニ達シタルヲ知リ易シ。何トナレバ其膀胱内ニ達スルヤ、直ニ尿等ヲ排除シ來ルヲ以テナリ。(假尿道ナラザルノ證)
- (二) 尿道内ノ膿液等ヲ膀胱内ニ竄入セシムルモ、排尿ト共ニ直ニ排出セシム。是レ膀胱炎ヲ防グヲ得ベシ。
- (三) 直ニ膀胱ヲ洗滌スルヲ得。(「カテーテル」若シクハ「ブージー」ヲ挿入シタル後、數バ洗滌ヲ要スル事アリ。殊ニ余ノ經驗ニ由レバ、「カテーテル」熱ヲ起シ易キ病者ニハ、「カテーテル」若シクハ「ブージー」挿入後、常ニ微溫弱防腐藥溶液ニテ膀胱ヲ洗滌スルヲ以テ、良キ豫防法ナリトス。)

「カテーテル」ノ害

- (一) 空洞管ナルヲ以テ、其内面不潔ニナリ易ク、特ニ其下端盲端部ニハ、種々ノ不潔物蓄積シテ、甚ダ消毒ニ不便ナリ。
- (二) 重量少キガ爲メ、挿入ニ不便ナリ。
- (三) 膀胱内ヘ空氣ヲ送入ス。何トナレバ空洞管内ニハ、常ニ空氣ヲ以テ充實スレバナリ。
- (四) 其他貯藏ニ不便ナルト、診斷用ニ適シ難キ等ノ害アリ。

「ブージー」ノ利

- (一) 消毒シ易ク、清潔ニ保ツニ便ナリ。
- (二) 重量多クシテ、使用ニ便ナリ。
- (三) 膀胱内ニ空氣ヲ竄入セシメズ。
- (四) 貯藏ニ便ニシテ、膀胱尿道等ノ診断用ニ適ス。

「ブリージー」ノ害

(一) 其膀胱ニ達スルヤ否ヤヲ知り難シ。何トナレバ吾人ハ通常「ブリージー」下端ノ自由ニ動キ、決シテ周圍ヨリ固定セラレザルヲ見テ、之ヲ想像スト雖、未ダ排尿ヲ見ザルマデハ之ヲ確乎ナリト定メ難シ。是レ「カテーテル」ニ及バザル所トス。

(二) 數バ膀胱内ニ尿道膿ヲ送入スル事アルモ、之ヲ排尿ト共ニ去ル事能ハズ。

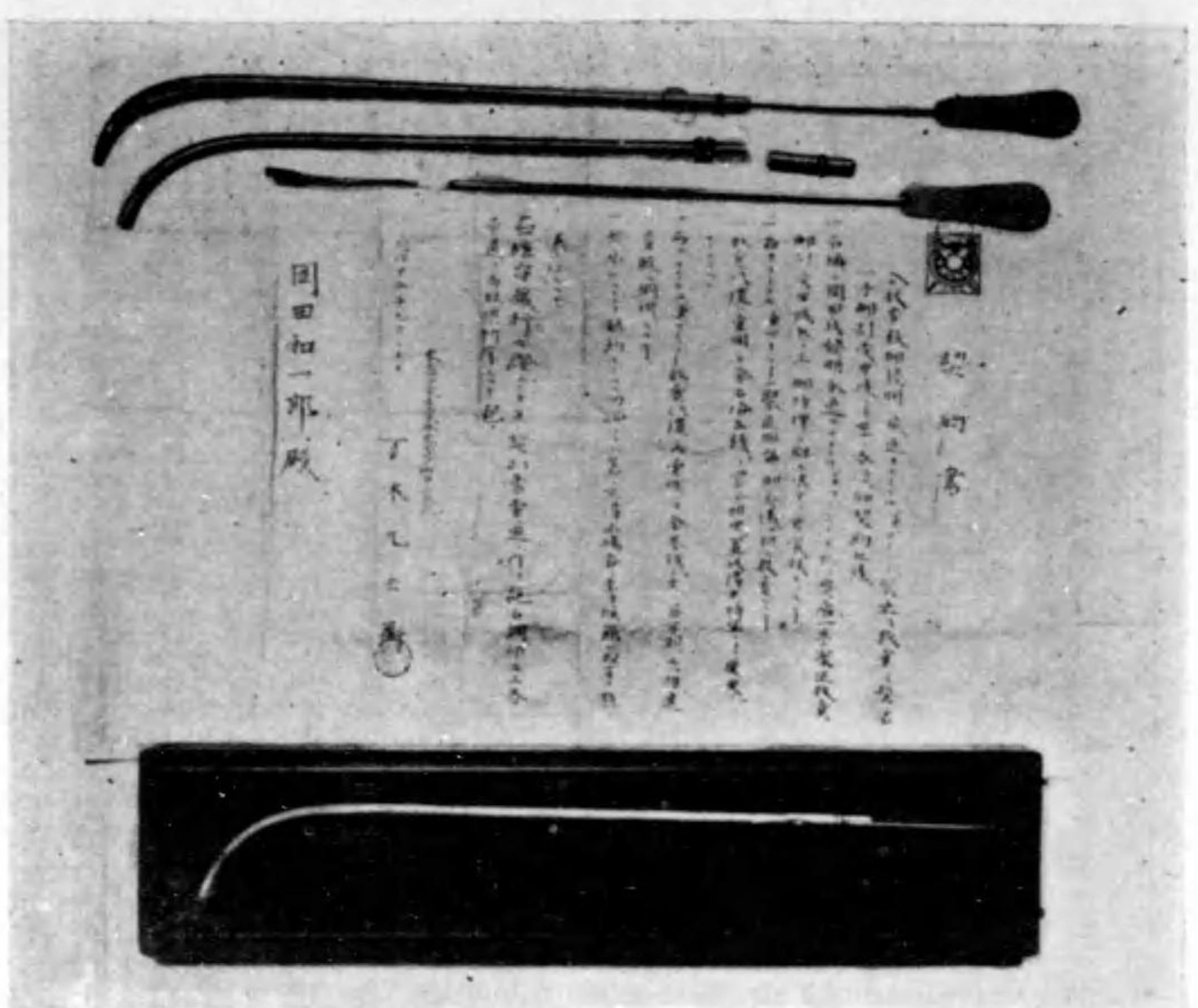
(三) 膀胱洗滌ノ必要ヲ感ズルモ、直ニ之ヲ施シ難シ。

依是觀之二者全ク正反對ノ位置ニ在リテ、「カテーテル」ノ利ハ「ブリージー」ニ缺グ、又「ブリージー」ノ利ハ「カテーテル」ニ缺グ。二者共ニ多少ノ缺點ヲ有セリ。故ニ人若シ「カテーテル」ト「ブリージー」ト混合セル一新器ヲ發見シテ、以テ「ブリージー」ノ利ト「カテーテル」ノ利トヲ兩ガラ存ゼシメ、且ツ「カテーテル」ノ害ト「ブリージー」ノ害ト兩ガラ除ク事ヲ得バ、其實地上ノ利益蓋シ鮮少ナラザルベシ。是レ從來「カテーテル」ヲ改良セザル可カラザル第二原因ニシテ、余ノ考案コレニ基ケリ。

尿道外切開ヲ施スニ際シテハ、吾人先ツ「ブリージー」ヲ狭窄部迄挿入シ、其下端ヲ正鵠トシテ尿道ヲ切開スルヲ常トセリ。然ルニ余ハ此場合ニ於テ佐藤教授ノ講筵ニテ、常ニ手術後持續「カテーテル」ニ挿入シ置クヲ法トスルヲ以テ、一回「ブリージー」ヲ挿入シタル後再ビ之ヲ同大ノ「カテーテル」ト變更セザル可カラズ。是レ余ガ從來甚ダ不便トセシ所ニシテ、「ブリージー」ノ直ニ持續「カテーテル」ノ用ヲ爲シ得ルモノ發見セラルレバ、以テ此弊ヲ除クニ足ラン。是レ「カテーテル」改良ノ第三原因ニシテ余ノ考案ハ又コレニ基ケリ。

於之カ余ハ第一ニ「ブリージー」ノ如ク重力ニ富ミ、使用ニ便利ナル、第二ニ「ブリージー」ノ如キ總テノ利益ヲ供ヘテ、同時ニ「ブリージー」ノ用ニ適シ且ツ第三ニ永久「カテーテル」トシテ直ニ「ブリージー」ヨリ變化シ得ル一種ノ「カテーテル」ヲ作ラン事ヲ企テ、遂ニ次ノ如キ「カテーテル」ヲ製シタリ。

余ノ考案ニ成ル新製「カテーテル」ハ、第二圖ニ示ス如ク、外管(ロ)内軸(ホ)及ビ固定管(ニ)ノ三個ヨリ成リ、今該三個ヲ連繫セバ宛然一個ノ金屬「ブリージー」第二圖(イ)ヲ組織ス。故ニ之ヲ以テ診断上或ハ手術上等ニ「ブリージー」トシテ使用スルヲ得ベシ。而テ其「ブ



先發發明カテテラテ兼ブリージー
並にその製造販賣權を一せしむる木九兵衛商店との契約書

「ブリージー」トシテ膀胱内ニ達スルヤ、直ニ其内軸ヲ抜ケバ、立ロニ「カテーテル」ト化シテ、或ハ尿等ヲ排除スルヲ得ベク、或ハ膀胱ヲ洗フヲ得。又持續「カテーテル」トシテ永ク膀胱内ニ挿入シ置クヲ得ベシ。

然リ而シテ余ハ是レヲ製スルニ當リ、左ノ諸點ニ注意シタリ。

第一 該「カテーテル」ヲ使用スルトキハ「ブリージー」(三個連繫シタルモノ)トシテ使用スルヲ以テ、消極的ニ挿入スルニ其重力満足ス。即チ余ハ「カテーテル」ニ「ブリージー」ノ如キ重力ヲ付與スル事ヲ注意シタリ。

第二 該「カテーテル」ノ内腔ハ第二圖(ハ)ノ如ク其下端ハ金屬ヲ以テ填充シ、(決シテ通常「カテーテル」ノ如ク、空虚ナル盲端ナラズ。)且ツ其他ノ部分ハ中軸ヲ以テ充實セラル、ヲ以テ、平時ニ於テモ不潔物ノ其内腔中ニ貯留スル事ナク、又用時ニ於テモ防腐シ易シ。即チ余ハ「カテーテル」ノ不潔ニナリ易キヲ防ギタリ。

第三 通常ノ「カテーテル」ヲ膀胱内へ挿入スル時ハ、必ず空氣(空洞内ニ存セシモノ)ヲ共ニ膀胱内へ送入ス。然ルニ余ノ「カテーテル」ハ内軸充實ノ儘ニテ、膀胱内ニ挿入シ、其尖端ノ膀胱内ニ達シタル時其

内軸ヲ拔去シ、初メテ「カテーテル」トナルモノナレバ、決シテ空氣ノ膀胱内ニ竄入スル事ナシ。

第四 余ノ「カテーテル」ハ「ブージー」トシテ診断用或ハ治療用トシテ使用セラル、ヲ得。何者其重量其形狀全ク「ブージー」ト異ナル事ナケレバナリ。

第五 余ノ「カテーテル」ヲ「ブージー」トシテ用ユル時ハ、其膀胱内ニ達セルヤ否ヤ直ニ確知スルヲ得。何トナレバ其内軸ヲ拔ケバ、直ニ排尿シ來ルヲ以テナリ。是レ從來ノ「ブージー」ニ優ル所ナリ。

第六 余ノ「カテーテル」ヲ「ブージー」トシテ用ユル時ハ、「ブージー」挿入後直ニ膀胱ノ洗滌或ハ排尿ヲ要スル事アルモ、更ニ通常ノ「カテーテル」ト差シテ代フル事ヲ要セズ。直ニ「カテーテル」ノ作用ヲ來シ得ルナリ。

第七 尿道外切開ヲ施スニ當リ「ブージー」トシテ手術時ニ用キ、後直ニ持續「カテーテル」ト爲ス事ヲ得。

第八 持續「カテーテル」ト爲シ、或ハ膀胱ヲ洗滌スルニ際シテハ、吾人ハ「カテーテル」上端ト護尿管トヲ連續セザル可カラズ。然ルニ「カテーテル」ヲ膀胱内ニ挿入シタル位置ニテ、其上端ニ彈力ニ富メル護尿管ヲ連繫セント欲セバ、必ズ「カテーテル」下端ニテ膀胱内壁ヲ衝キ、數バ甚ダ刺撃スル事アリ。故ニ余ハ特ニ固定管（第二圖ニ）ヲ作り置キ、用ニ臨ミテ此固定管ヲ「カテーテル」ヨリ取り除キ、其固定管ノ一端ニ護尿管ヲ繋キ、後固定管ノ内面ニ油ヲ附ケテ「カテーテル」ノ上端ト連繫セバ、容易ニ其弊ヲ除クヲ得ルナリ。

余ハ之ヲ製セシメ已ニ數十ノ患者ニ就テ實地ニ試験セシニ、果シテ豫期ノ如ク十分ニ從來ノ弊害ヲ除キタルヲ證シタリ。從來ノ實地家タル者ハ常ニ「カテーテル」ト「ブージー」ト兩ガヲ坐右ニ備ヘザル可カラザルニ、余ノ「カテーテル」ヲ備フルトキハ一個ニシテ兩者ノ用ニ應ズルヲ得ベク、且ツ其價モ「カテーテル」「ブージー」兩者ヲ購求スルニ比スレバ甚シク廉ナリ。（余ハ萬木九兵衛ニ其製造ヲ命ジタリ。）故ニ余ハ實地家諸君ニ「カテーテル」使用法ヲ決シテ等閑ニ付ス可カラザルヲ望ミ、同時ニ如斯器械ヲ試ミテ、以テ之レニ隨伴スルノ弊害ヲ除去セン事ヲ希望ス。

終ニ臨ミ尙ホ附記セザル可カラザル事アリ。即チ余ハ如斯混合性「カテーテル」「ブージー」ヲ余ニ先チテ已ニ使用シタル者アルヤ否ヤヲ「リテラツール」ニ就テ索メシニ、少ナクモ余ノ知り及ブ所ニテハ從來未ダ曾テコレト類似ノ「カテーテル」ヲ報告シタル者ナキ事ト余ニ贊助ヲ與ヘラレシ醫科大學器械係大西氏ト寫畫ノ勞ヲ取ラレシ同僚寺田學士トニ向ヒテ深ク留意ヲ表スル事トナリ。（東京醫學會雜誌第六卷第十九號）

八、コカイン局所浸潤麻醉の業績

かうして生來發明心に富む先生は一方にカテーテル並びにブージーに就て一新機軸を出されると共に又、當時漸く世に持囃されたコカイン局所麻醉法についても深く意を用ひ、その用法の改善を圖る處あつて、それを翌明治二十六年春四月四日から十日まで一週間に亘つて、開催された第二回日本醫學會の第四日目、四月七日に「コカイン局所麻醉の試験成績」なる題下に發表されたのである。

これより先、麻醉藥の發見並びにその應用法の發達改良は外科學の進歩發展に甚大の影響を與へたものであつたが、當時に於けるコカインの局所麻醉法の發見は、従前のクロロホルムに依る全身麻醉法より更に格段の進歩を齎らしたものであつた。とはいへ、尙ほ當時のコカイン使用法に對する知見の未熟はコカイン中毒並びにその中毒死による危険を伴ひ、その改良進歩が切實化されてをたのであつた。

處で、何事によらず事に當つて熱心にして、思考の銳利、且つ嶄新の着想をこゝとされる先生は、こゝに於ても、コカインを溶液體として組織に浸潤する方法に着想され、その改良發見に成功せられたのであつたが、未だその發表に至らざるに先立ち、偶然にも獨逸のシュライヒによつてそれが世界的に公開され、惜しくもその功を讓られたのであつたが、而も、事に恬淡なる先生は彼に先鞭をつけられたに拘らず、その意外なる時合的な業績の世界的成功を佐藤三吉教授と快哉を以て笑ひ興じられたといふ。こゝに佐藤三吉博士の追憶があるから、それを左に引用しておかう。

岡田君は何事によらず熱心で、頭腦が良かったので、研究心が強かつた。それで、從來のクロロホルムの全身麻醉より更に局所麻醉としてコカインが使用された時でも、當時岡田君は、それはコカインに限らず、それをぐつと薄くして、他の溶液體に稀釋してもよいと唱道してゐた。要するに、それを以て組織を浸潤さへすればよいので、従つて、流動水を以てすればよいではないか、と大分力を入れて研

究してゐた。それ等も學界に發表してゐたら世界的になつてゐたらうが、それも偶然に獨逸でシュライヒのやつたこと、一致してゐて先鞭をつけられたが、この偶然の一致には二人で笑ひ合つたこともあつた。

これを以てするも、先生の發明の才に富み、事に當つて熱心なる資性が分ると共に、當時先生の關心が、このコカインの局所麻醉法にあつたことが分る筈であり、この第二回日本醫學會に於ては、その研究成績の一端を公表されることゝなつたのである。

そして、かうした日頃の研究の一端こそ聽て後年獨逸留學の途次、紐育大學に於て、コカインの局所浸潤麻醉によつて、當時未だコカイン局所麻醉法を知らなかつた亞米利加の醫學者連をして瞠若たらしめ、頸部アテロームの手術を美事完了して以て我が日本外科學の爲めに萬丈の氣焰を擧げしめたものであつた。

然しこゝに於ては、當時の先生の研究發表の全文を掲げる譯にはゆかないから、その講演の主要部分を抄録しておくことにしよう。

先生は先づ劈頭「外科學上古往今來常ニ第一流ノ要地ヲ占ムル藥物ハソレ唯ダ麻醉藥アルノミ」として、その應用發達の軌近外科學の進歩に大影響あるを前提し、その用法に於ける全身麻醉法と局所麻醉法との區別をなして、前者に於ける六大弊害を指摘して「若シ如斯弊害ヲ悉ク除去サル、ヲ得バ其實地上ニ及ボス利益ノ廣大ナルハ蓋シ火ヲ觀ルヨリ明カナリ、然シ寧ロ余ハ局所麻醉法ニ就イテ之ヲ索メント欲ス」とし、更らに此の「局所麻醉法モ亦弊害ニ富メリ、故ニ人若シ之ヲ以テ全身麻醉ニ代ヘント欲セバ宜シク其弊害ヲ除カザル可カラズ於之余ハ局所麻醉トシテ最モ廣ク且ツ多ク使用サル、コカイン」局所麻醉ニ就テ次ノ如キ事項ヲ設ケテ調査並ニ試驗ヲ爲シ遂ニ其弊ヲ除キ、且ツ其用路ヲ少ク擴張シタリト信ズルニ到レリ乞フ之ヲ報告セン」とて、以下

- 第一 「コカイン」局所麻醉ノ危險
- 第二 本邦人ニ於テ局所麻醉ヲ起スベキ「コカイン」ノ最低量
- 第三 局所麻醉ニ最モ適當ナル「コカイン」%量
- 第四 使用法

第五 適應症及禁忌症

の五項目に分つて、その試験成績を發表されてゐる。即ち、從來のコカイン用法による中毒又は死亡によつてその用路の縮少を來たし、或は更らにはコカイン恐る可しとしてその使用を放棄する等の原因たる危險性を點檢し、「歐洲ノ醫史中ヨリ集メタル百七十九人ノ中毒者ヲ使用法ニ由リテ區別シ之レニ最モ用量ト最少用量トヲ附記シテ」圖表にして掲げ、更にその五%の九名の死亡者の死亡表を並記し概説して以て、「故ニ「コカイン」中毒ヲ全ク豫防シ得ルノ策ヲ講ゼズンバ其局所麻醉如何ニ佳良ナリト雖モ吾人ハ決シテ之ヲ安ジテ實地ニ使用スルヲ得ザルベク於之余ハ醫史ニ就テ從來企テタル局所麻醉ニ於ケル「コカイン」中毒ノ豫防策ヲ案ズルニ其數甚ダ多シ或ハ「コカイン」中毒ハ「コカイン」ガ血中ニ吸收サレ延テ腦髓中ニ達シテ發起スルモノナリ故ニ「コカイン」ヲ注射セント欲セバ宜ク其中樞部（例バ手腕ニ注射セント欲セバ上膊ニ）ニ驅血帶ヲ置キ次デ血流ヲ遮斷スベシ、然ル時ハ一ニ中毒ノ虞ナクニ「コカイン」ノ効力ヲ強クスト云ヘリ（余ハ其人名及ビ書名ヲ忘却シタルヲ遺憾トス）是レ或ハ可ナラン、然レ共余ハ之ヲ採用スルヲ欲セザルナリ何トナレバ其理論上ノ當否ハ暫ク不問ニ措クモ精神及知覺ヲ有スル人體ニ驅血帶ヲ施シ血流ヲ遮斷スルハ之レ殆ンド手術自己ニ優ル苦痛ヲ患者ニ感ゼシムルモノナレバナリ。又 Dr. Wüller ハ「コカイン」中毒ハ注射ヲ施シタル身體部位ト關係ス即チ「コカイン」ハ腦髓ニ直達シテ中毒症ヲ起スモノナレバ頭面部口腔等ノ如キ腦髓ニ近キ部位ニハ〇・〇二瓦ヨリ多ク注射スベカラズ反之腦髓ニ隔リタル軀幹及四肢ノ如キ部位ニハ五%溶液ヲ注射スルモ可ナリト云ヘリ（Wien. med. Wochenschrift No. 18, 1889）是レ又余ノ採用スルヲ欲セザルモノナリ何者「コカイン」中毒ハ主トシテ個人的關係ニ出ヅルモノニシテ上記中毒表ノ示ス如ク腦髓ニ隔リタル身體各部分ト雖モ頭面部ト等シク極メテ少量ノ「コカイン」注射ニテ中毒ヲ來セシ事アリ加之 Mauret ハ試驗上ニテ「コカイン」ノ中毒ハ其血中ニ吸收サレテ白血球ヲ斃スニ由ラス故ニ「コカイン」ハ如何ナル場合ト雖モ濃厚ナレバ中毒症ヲ起スモノナリト報シタレバナリ（Therap. Monatsheft. 1892, S. 617）サレバ余ハ「コカイン」局所麻醉ニ於ケル中毒豫防ハ唯ダ用量ヲ減少スルノ一アルノミト信ズルニ至レリ」と斷じ、更らに「於之余ハ世人ノ局所麻醉ニ使用スル「コカイン」%量ハ幾何ナル乎ヲ探グルニ古來概ネ一〇%、五%、二%ニシテ現今ト雖モ多クノ實地家尙五%一%ヲ使用スリ（Albers, deutsche militärärzt. Zeitschrift 1889 Hft. 1; Fr. Wölter, Wien. med. W. 1889, No. 18; Trzebiński, Wien. med. W. 1891 No. 38; J. Aubert, Centralbl. f. Chirurgie 1893, No. 14 等枚舉ニ違アラズ）然ルニ近時ニ到リ世人ハ漸ク「コカイン」中毒者ノ多キヲ看破シ、%量ノ多キニ失スルヲ唱道スル事トナリ Schleich 千八百九十一年十一月ノ柏林醫學會ニ於テ局所麻醉ノ「コカイン」量用甚ダ多キニ失スルヲ戒メ且ツ通常〇・五%溶液ニテ良ク局所麻醉作用ヲ起シ得ヤント述ベ（Therap. Monatsheft. No. 1, 1892）次ハ Hahn ハ

○・四%溶液ニテ稍々大ナル手術ヲ施シ得ルシト報ズ (Therap. Monatsheft. No. 6, 1892) 次ハ Schleich ハ昨年ノ第二十一回獨逸外科醫學會ニ於テ一層用量ヲ減ジ「コカイン」ノ局所麻酔作用ヲ起シ得ル最低量ヲ定メテ○・二%トナシ、且ツ蒸溜水ハ局所麻酔作用ヲ有スルトモ同時ニ刺激性ニ富メルガ爲メ用ユベカラズ。又○・七五%食鹽水ハ生理水ナルヲ以テ刺激性ヲ有セズト雖モ同時ニ局所麻酔作用ヲ缺グ故ニ兩者ノ中間即チ○・二%食鹽水ハ刺激性ナクシテ且ツ幾分ノ局所麻酔作用ヲ有スルモノナリ故ニ之ヲ用ヒテ「コカイン」溶液ヲ製ス其局所麻酔作用ヲ檢セシニ○・一% (一萬倍) ニテ已ニ完全ナル局所麻酔ヲ爲スヲ得タリ。サレバ小手術ニハ○・一%溶液ヲ用キ中手術ニハ○・二%溶液ヲ用キ大手術ニハ○・一%溶液ヲ用キルヲ至當トナシ、爲メニ「コカイン」局所麻酔ヲ乳癌切斷術、開腹術、ヘルニア手術、氣管切開術、陰囊手術等ニ完全ニ使用スルヲ得ルニ到リト大聲疾呼シタリ (Bericht ueber die Versammlung der Deutschen Gesellschaft für Chirurgie XX Congress 1892) 於之余以爲 Schleich ノ第二報告ハ少ク極端ニ失スルモノニシテ、而シテ實際如斯稀薄ニセザル可カラザルノ必要ヲ見ズ何者「コカイン」局所麻酔ハ一般ニ小中ノ手術ニ甚ダ適當スベシト雖モ大手術ニハ却テ全身麻酔ニ數歩ヲ讓レバナリ、併シ從來ノ用量ノ甚ダ多キニ失スルハ毫モ疑ヒナシ。故ニ余ハ本邦人ニ就テ (個人的關係アルヲ以テ) 局所麻酔ヲ起スベキ「コカイン」最低%量並ニ其適當ナル%量ヲ一定セン事ヲ企テタリ」として、かくて「夫レ「コカイン」ヲ局所麻酔ニ使用シテ其中毒ヲ防禦セント欲セバ宜シク先ヅ「コカイン」ガ局所麻酔ヲ起シ得ル最低量 (%量) ヲ一定シ次テ之ヲ中毒量ト比較シテ以テ一定ノ方針ヲ立テザル可カラズ。余ハ其最低量ヲ定メン爲メ同一%ノ「コカイン」蒸溜水溶液ヲ作り之ヲ種々ノ手術ニ使用シテ患者ノ疼痛ヲ感ズルヤ否ヤヲ檢シタリ。而シテ余ガ○・六%食鹽水ヲ使用シタルハ近時蒸溜水ノ局所麻酔作用ヲ説クニ到リ從テ「コカイン」蒸溜水溶液ノ局所麻酔作用ハ果シテ「コカイン」ノ作用ナル乎大ニ疑ナキ能ハズ。爲メニ余ハ局所麻酔作用ヲ有セザル生理水、即チ○・六%食鹽水ヲ選用セシニ由ル併シ蒸溜水溶液ハ實地上便利ナルヲ以テ余ハ常ニ同%ノ蒸溜水溶液ヲ同時ニ試用シテ其良否ヲ對照スルヲ怠ラザリシ」として先づ○・五%食鹽水溶液を十四人 (○・五%蒸溜水溶液を二人) に、○・三%食鹽水溶液を二十二二人 (○・三%蒸溜水溶液を二人) に、○・二%食鹽水溶液を十人 (○・二%蒸溜水溶液を三人) に、○・一%食鹽水溶液を二人 (○・一%蒸溜水溶液を四人) に夫々使用して頗る佳良なる成績を得たりとしてそのコカイン局所麻酔試驗成績を夫々數表に記シ「故ニ余ノ試驗ニ由レバ本邦人ニ於テ局所麻酔ヲ起シ得ル「コカイン」ノ最低%量ハ○・一%即チ千倍ニシテ之レヨリ濃厚ナル溶液ハ一般ニ良ク局所麻酔ヲ致スモノナリ」と結論を下し、更らに「局所麻酔ニ最モ適當ナル「コカイン」%量」としては「從來ノ如ク濃厚ナル溶液ニテ用ユルハ毫モ利ナクシテ弊害ニ富メルモノナルヲ認定ス」として、第二院の外科手術場若くは外科外來診察所に於ては

(一) ○・五%コカイン蒸溜水溶液或ハ○・六%食鹽水溶液

(二) ○・三% 同 上

(三) ○・二% 同 上

の三種の溶液を供へて使用してゐる旨を公開して夫々の用法を述べ、而シテ余ハ溶液ヲ斯ノ如ク濃厚三種ニ區別セシハ決シテ特別ノ理由アリテ然ルモノニ非ズ、寧ロ○・二%溶液ニテ已ニ完全ナル局所麻酔ヲ致シ得ルヲ以テ、或ハ之レノミヲ使用スルモ敢テ不可ナシト雖モ「コカイン」ノ効力ハ個人的關係ノ爲メ多少場合ニ由リ差異ナキ能ハザルヲ以テ○・五%溶液ノ未ダ○・一%ヲ超過セザル以上ハ却テ小手術ニ之ヲ用キルヲ安全ナリト爲セシニ過ギズ」と註釋し「今余ノ使用量ヲ從來諸家ノ用キシモノニ比スルニ Wölfler, Freudenberg, Albert, Tizbicky 等ノ五%ニ比スレバ正ニ十倍餘稀薄ニシタルモノナリ。又近時「コカイン」用量ノ多キヲ戒メテ立案シタル T, Auber, No. 2%ニ比スレバ正ニ四倍餘薄クシタル者ナリ。而シテ更ニ之ヲ Schleich ノ第二報告即チ○・一%・○・二%・○・一%ニ比スルニ尙ホ甚ダ濃厚ニ失スルガ如シ、然レドモ前章ニ於テ已ニ述べタル如ク余ハ一萬倍ノ溶液ニテ完全ナル局所麻酔ヲ來ストノ説ヲ信ぜズ、何者余ハ千倍ノ溶液ニテ常ニ患者ヲシテ微痛ヲ感ゼシメタレバナリ。去レバ余ハ現時ノ所ニテハ○・二%乃至○・五%溶液ヲ使用スルヲ以テ最モ適當トナシ、且ツ Schleich ノ如ク%量甚ダ減少セズトモ余ノ%量ニテ實地上毫モ不都合ヲ感ゼザルヲ信ズ、何者ハ余ノ%量ニテ已ニ良ク中毒ヲ豫防シ得ベク且ツ百筒二百筒ヲ要スベキ大手術ハ格魯兒仿爾爾麻酔ニテ施サル、ヲ却テ優レリトスレバナリ (但シ余ハ未ダ Schleich ノ○・二%食鹽水ニテ溶解シタル「コカイン」ヲ試ムルノ域ニ達セズ、故ニ該法ノ當否ハ他日更ニ報ズル事アルベシ」として次いで使用法及適應禁忌症に就いて詳述する處あつてその報告を終つてゐる。

而して尙ほ、その翌年の二月には、先生は東京醫事新誌にその所説の追加を載せてをられるが、これを以てするも明かなやうに、先生の獨創の才に富み研究に熱心にして、而も世の權威に敢て屈する處なく、堂々として先進西歐諸國の同僚に伍して劣らざるの自己確信の氣魄こそがこの遅れたる我が醫界の水準をして、世界的に昂からしめた所以のものであらう。

九、象皮病研究と「外科手術關鍵」の譯著

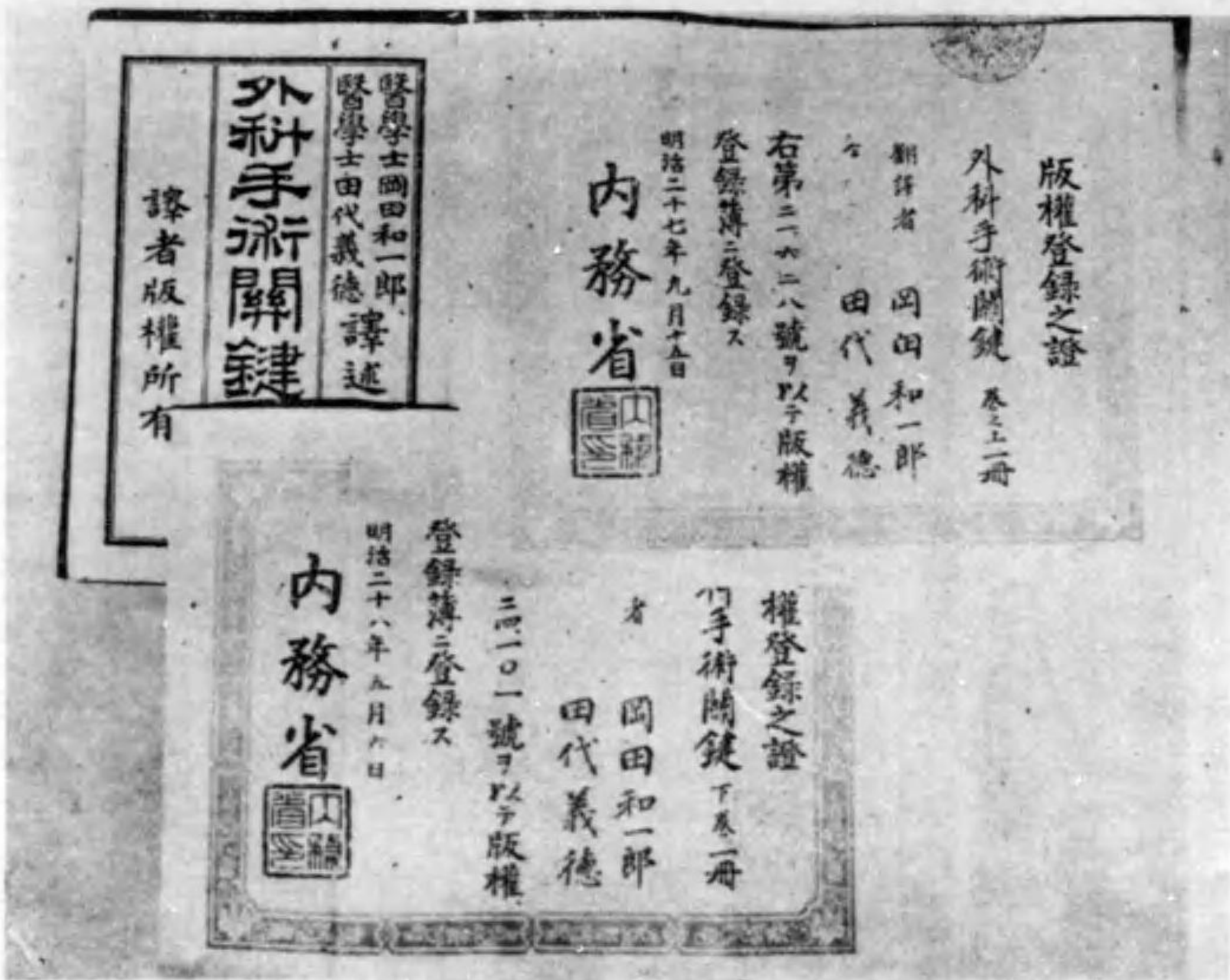
かくて、この二十六年の七月十三日には、先生は又大學から「象皮病取調ノ爲伊豆大島出張ヲ命」ぜられる事になつたの

以テ密ニ軍陣外科ニ於ケル實用的好手術書タルノミナラズ平時ノ外科ニ之ヲ用キ又學生講學ノ資ニ供シテ毫モ遺憾ナカラシメシヲ期シ」(當時の廣告文に據る)、これを上下二巻に分つて、「外科手術關鍵」として世に公にせられたのであつた。かくて「卷之上」は明治二十七年九月に「下巻」は翌二十八年の五月に夫々引續き發刊されたのであつたが、こゝに先生の本書に附せる緒言があるから、それを次に掲げておかう。

外科手術關鍵緒言

醫學士 岡田 和 一 郎

夫レ良巧ナル外科醫ガ其疾病ニ對シ手術的療法ヲ施スヤ其施術ノ大小難易ヲ論ゼズ必ズ常ニ一定ノ規則ヲ遵守シ最良ノ法式ヲ選擇セザルコトナシ、故ニ挫創ノ小ナルモノト雖モ決シテ之ヲ安ニセズ小心翼々毎ニ過失アラントトテ之レ恐レ斷絶切除内臓抽出ノ如キ危險重大ナルモノト雖モ決然刀ヲ下シテ決シテ躊躇スルコトナク奮前敢爲必ズ治術ノ目的ヲ達セザルコトナシ。蓋シ小心慎重ト放膽敢爲トハ則チ外科施術ノ神髓ニシテ、外科ノ科條ハ則チ先輩諸氏ガ經營刻苦ノ結果タル規則ト法式トニ外ナラズ、世ノ外科醫ニシテ規則ヲ守ラズ法式ニ遵ハズ惟ダ豪放之レ裝ヒ大言壯語シ



テ外科ノ手術誠ニ易々タルノミ、四肢ノ離斷、腹壁ノ切開吾ニ於テ何カアラント稱スル者アリ、是レ實ニ無責任ノ外科醫ニシテ所謂盲者ノ蛇ヲ避ケザルモノナリ。吾人ハ甚ダ其取ルベキヲ見ズ、又或ハ刀ヲ執テ脚斷シ血ノ逆ルヲ見テ狼狽シ施術ノ前ニ逡巡却却スルモノアリ此ノ如キハ則チ我分ヲ知ラズシテ、徒ラニ醫タルノ義務ヲ放棄スルモノニシテ吾人ノ共ニ齒セザル所ナリ、彼ノ良醫ト稱スベキハ必ズヤ良ク規則ヲ守リ法式ヲ選ビ小心事ニ從ヒ輕小ニ過ヒテ毫モ忽ニセズ、重大ニ過ヒテ決シテ怖ル、ニ足ラザルモノナリ。其心ヲ小ニシテ其事ヲ慎マシムルモ規則法式ナリ。其膽ヲ大ニシテ其事ニ阻マザラシムルモ規則法式ナリ。外科醫ノ重ズベク知ラザルベカラザルモノハ其規則法式ナリ。余ハ故ニ嘗テ外科手術ニ關スル凡百ノ規則法式ヲ集録シテ一冊子トシテ之ヲ實地家及斯學講習者ノ參考ニ供スルノ必要ナルヲ感ジ之レガ著作ニ從事セント欲スルコト久矣。然レドモ公務多忙ニシテ其志ヲ遂グルコト能ハズ、常ニ以テ遺憾トセリ。頃者征清ノ事件起リ我忠勇ナル同業並ニ醫生ハ皆奮フテ軍陣ニ臨ミ醫務ヲ盡シテ以テ國恩ノ萬一ニ報ズル所アラントシ、余ヲシテ益簡明完全ナル外科手術書ノ今ノ世ニ必要ナルヲ感ゼシメタリ。於是學友醫學士田代義徳君ニ謀リ彼ノキールノエスマルヒ氏ガ獨逸ノ女帝ニシテ普國ノ女王タルアウグスターノ懸賞問題ニ應ジ一等賞ヲ受領シ、伯林ノフオン、ランゲンベック、維也納ノビルロート氏、バーゼルノソテン氏等ヲシテ後ヘニ贈若タラシメシ有名ナル軍陣外科手術書ヲ譯述シ、以テ余ガ從來ノ希望ノ一部ヲ滿サント期セリ。蓋シビルロート氏ノ此書タルヤ其主意ハ忠勇ナル軍醫ヲシテ彈丸雨注ノ中ニ在リテ從容トシテ法式ト規則トヲ遵守シ、責任アル外科手術ヲ全フセシメントスルニ在リ、故ニ其編文字少クシテ圖畫多ク人ヲシテ一目ニシテ良ク法式ト規則トヲ了解スルコトヲ得セシメ、其用意ノ周到ナル蓋シ他ニ其比ヲ見ザル所ナリ。故ニ余ハ田代君ト共ニ之ヲ全譯シ其圖畫ノ如キハ特ニ一モ之ヲ削除スルコトナカリシナリ。然レドモ日進月歩昨是今非ハ輒今外科ノ常態ナリ、焉ゾ其書ヲ全譯シテ以テ安シトスベケンヤ。余ハ即チ其書ニ贅頭シ其欄外ニ於テ輒今内外醫籍ニ登リタル外科的療法ニ關スル進歩ノ事蹟ト教授醫學博士佐藤三吉君ノ講義ニ侍シ、自家多年ノ經驗ニ徴シテ確實精當ト認メタル成績トヲ詳記シ或ハ以テ其足ラザルヲ補ヒ或ハ以テ其書ノ平時ノ外科ニモ用ヲナサント計レリ。故ニ余ハ此書ノ行文甚ダ流暢ナラズ、譯語或ハ當ヲ失シ以テ著者ノ意ヲ損スルコトナキヲ保シ難シト雖モ、又自ラ其大過ナキヲ信ジ特ニ力ヲ欄外ノ記載ニ盡シ、遂ニ之ヲ世ニ公ニスルコト、セリ。讀者若シ之レニ由リテ良ク外科ノ規則ト法式トヲ知り所謂外科ノ神髓ヲ養ヒ機ニ應ジ變ニ處シ或ハ小心翼々毫髮ノ過失モナキコトヲ期シ、或時ハ奮前敢爲施シテ滯礙ナキコトヲ得バ余ノ幸何者カ之レニ如カン。(醫事新誌第八百六十二號、明治廿七年十月六日)

而して、當時尙未だ斯界に好参考書の餘り出なかつた頃のこととして、その刊行は世の好評を博したが、それが軍陣外科に

偏せるの憾みあるを以て、一般治療家にも適應する如きものを續刊せんとして、同じ著者の「外科手術書」Chirurgische Technikを又全譯して「外科手術關鍵篇」としてこれを明治廿九年十二月に刊行されたのであつた。

こゝにその「緒言」をも参考の爲めに引いておく。次の如し。

余輩はニ基耳大學教授依馬爾弗 Prof. E. v. Farnach 氏ノ有名ナル著書 Handbuch der Chirurgischen Technikヲ譯補シ外科手術關鍵ト題シテ世ニ公ニセリ、其書大ニ江湖ノ歡迎ヲ博シ爾來盛ニ實地醫家及學生ノ間ニ行ハレツ、アルモ、原書題號ノ標示スル如ク記スル所ノ手術軍陣外科ノ範圍ニ偏局スルノ憾アルヲ免カレズトス、原著者依氏モ亦之ニ憐焉タラズ爾後更ニ其補遺タル Chirurgische Technikノ一書ヲ編述シ以テ前編ニ漏脱セル一般ノ外科手術ヲ網羅シ益々其適用ノ區域ヲ擴充センコトヲ期セリ。余輩關鍵ヲ譯行スルノ後亦原著者ト同一ノ感ヲ抱キ茲ニ再ヒ舊管ヲ揮フテ該補遺ノ全卷ヲ翻譯シ外科手術關鍵編ト名ケテ世ニ問フコト、ナシヌ。此舉ヤ嘗ニ前編ヲ愛讀セル刀圭社會ノ好意ニ酬フルノミナラズ、亦原著者依氏ノ本意ニ副フモノナリト信ズ、本書特殊ノ性格ハ其用語ノ明白短截ヲ主眼トシテ尋常教課本ニ見ルガ如キ蛇足ノ贅辯ヲ省キ寫實的ノ描圖ヲ掲ゲテ一瞥ノ間讀者ノ理會ヲ博取セントスルニ在リ、此譯書亦能ク原書ノ特性ヲ寫シ得テ本邦外科學ノ進歩ヲ助クルノ微功ヲ奏センニハ豈只余輩ノ幸慶ノミナランヤ。

かうして、先生は、内にあつては公務に研究に、また外に向つては啓蒙と指導に極めて多忙なる生活を送つてをられたのであるが、その明治二十七年九月には、内閣から十九日附を以て「醫術開業試験委員ヲ命」ぜられ、同十二月二十四日に内務省より、その爲めの「手當金貳拾圓給與」の辭令を受けられたのであつた。が、同じくその二十七日には「醫科大學教授醫學博士宇野御用有之戰地へ被差遣候ニ付隨行ヲ命ス」といふ辭令を受けて、渡清、戰地に赴かれることゝなつたのである。

十、日清戰役と先生

これより先き朝鮮半島に於ける日清兩國の係争は、明治二十七年五月韓國東學黨の蜂起による朝鮮内亂勃發を機として急變し、遂に我が國は干戈の間に彼と相見ゆるに至つたのであつた。即ち、六月五日、我が國では京城に於ける公使館及び居留民保護の爲め第五師團より臨時混成旅團を韓國に派遣し、七月に入るや豊島沖の海戰と共に成歡、牙山の戰捷相次いで成り、八月一日宣戰の布告と共に第五師團を總動員出兵して、こゝに明治二十七八年の日清戰役が開始されたのである。

かくて、九月平壤の戰開始すると共に大本營は廣島に進營され、黃海の大海戰が終了すると共に翌十月には第一軍司令部義州に到着し、相次いで第二軍司令部また滿洲の地に上陸して戰果愈々擴大し、九連城、大東溝、鳳凰城と相次で陥り翌十一月には、大迫支隊の大孤山占領、第二軍の金州城攻略、また大連灣、旅順口諸砲臺の攻取占領となつて、戰局の進展は一方に皇軍、滿洲の野を壓すると共に山東作戰の機漸くに熟し來たつたのである。

これよりさき、我が軍陣醫事衛生の部門に於ては石黒野戰衛生長官大本營幕下に在つて之れを統率し、現地前線にあつては小池正直氏の督勵奮闘する處あつて、我が醫人の關心は上下舉つて大陸に向つて切なるものがあり、就中、この空前ともいふべき近代戰に於ける軍陣外科學の研究は頗る緊要なものがあつた。

茲に於てか、我が帝國大學に於ても、戰時下に於ける軍陣外科學研究の爲めに教授一名、助手二名を戰地に派遣することゝなつて、教授宇野朗博士、助手岡田和一郎、林曄の兩學士を之れに任命し、明治二十七年十二月二十七日發令すると共に翌二十八年一月二日戰地に向けて出發せしむることゝなつたのである。

この曠古非常の秋、先輩同僚の陸續として戰地に向へるを脾肉の嘆に堪へずして打眈めてゐた先生の、この人選任命を受けた時の胸中は正に歡喜そのものゝ如く、同廿九日には帝國大學有志者の上野精養軒に於ける盛大な送別會を初めとして、同夜はまた下谷伊豫紋に於ける第二醫院の送別會、或は翌三十日花月樓に於ける十日醫會の送別會等々の壯行の激勵を浴びて、年改まると共に二日午前十一時四十五分、大學關係の人々、知己友人及び府下の醫家等、無慮數百人の歡呼の聲に送られて勇躍新橋驛を發し廣島に向つたのである。

こゝに當時の東京醫事新誌の報する處を参考に供しておかう。

○帝國大學宇野、岡田、林三氏送別會

臘月二十九日帝國大學の諸氏は清國に航し斯道の爲めに身を硝煙彈雨の下に投ぜられんとする宇野博士、岡田、林二學士の爲めに送別會を上野精養軒に開かれたり。此日會せられたるは濱尾大學總長、小金井、菊地、山川、外山、松井の各分科大學長及各科該教授助手及醫科大學々生諸氏等無慮九十餘名にして席定まるや、緒方教授は單簡に開會の趣旨を述べられ次に濱尾總長及び學生總代高橋氏の送別の辭あり、宇野博士の答辭あり、岡田博士は先づ斯行の經過を述べて後結ぶに「流行病、彈丸、寒威共に危險は則危險なり、然れども之れ皆予輩に初めより期する處にして充分に之が防禦の備をなせり。然るに不幸にして戦争なき部分に投じ初志を達せず、空しく清國見物をなして歸朝するが如きことあらんこと予輩の尤も氣遣ふ處なり。」云々の數言を以てせられたり。宴終りて喫煙室に入り快談數刻にして散會せられたり。記事を終るに當て謹んで博士、二學士の健康にして好結果を齎らして凱旋せられんことを望む。(廿八年一月五日第八百七拾五號)

十日醫會岡田學士送別會

十日醫會々員諸氏も臘月三十日花月樓に於て醫學士岡田和一郎氏の爲めに送別會を開かれたり。席上會員諸氏の演說岡田學士の答辭寓意の茶番等ありて頗る盛會なりき。又同夜同會の爲めに屢々解屍の勞を取られたる山林助教をも招待せられたりと云ふ。

○醫科大學研究員の出發

軍陣外科研究の爲め戰地出張を命ぜられたる醫科大學教授宇野博士及び其隨行員同大學助手岡田、林兩學士は豫定の如く愈よ去る二日午前十一時四十五分新橋發の汽車にて發途せられたり。此日の見送り人は大學總長を始め教授、助教、助手、事務官、學生を初め府下の博士學士開業醫知已等無慮數百名許りなりき。(廿八年一月五日八百七十五號)

かくて、先生等一行は、翌三日夜刻六時無事廣島に着くと共に翌朝大本營に出頭して石黒野戰衛生長官の訓示を受け、先生は三等軍醫の資格で従軍することとなり、出發迄向ふ一週間、廣島豫備病院に於て佐藤進院長の下で醫務に従事することとなり、翌五日より出勤、専ら重症外科患者を引受けて得意のメスを揮はれたのである。

かくて十日には、第二師團第一野戰病院付三等軍醫として翌十一日御用船名古屋丸に乗込むこととなり、十一日午前

六時廣島を發し、宇品港に赴き、第一野戰病院、第二野戰病院、衛生豫備院及び輜重縱列の各將校並びに兵士等千百餘名と共に名古屋丸に乗船、十一時半戰地に向つて出發したのであつた。

この先生の所屬せる第一野戰病院並にその所屬の第二師團に關係せる軍醫には、岡田國太郎、鶴田禎次郎、平賀精次郎、佐瀬丑八、加治安正の五學士があつて、船中も同行にて先生にも諸事至極好都合であつた。こゝに九日付の先生の書信を掲げておかう。

○岡田學士の書信——戰地出張員の動靜

軍陣外科研究として戰地出張を命ぜられ去る二日當地新橋を出發せられし宇野博士、岡田、林兩學士の一行は去る三日無事廣島に着し、爾來廣島豫備病院に於て入院患者の治療に従事し、傍ら準備を爲し居られしが、愈よ去十日清國戰地へ向け出發せられたりと左記の書信は岡田學士より出發の前日即九日付を以て弊局二神に宛て送り越したるものなり、右一行の廣島滞在中の動靜を詳記するを以て茲に掲げて讀者に示す。

前略……生等着廣後は先づ大本營に出頭し石黒野戰衛生長官閣下に面會し種々差圖を受け出發時日の定まる迄當分廣島豫備病院の治療を助けよとの命ありしを以て、余は林學士と共に毎日同病院本院に出頭し佐藤院長の差圖にて余は第三號病室(外科重症患者室)にて内臟銃創、四肢及關節銃創の多くある室)を受け持ち、林學士は四號室(是れ又外科患者室)を受け持ち治療醫長たる二等軍醫醫學士田中苗太郎氏の差圖を受けて廻診手術等を日々爲し、且つ余等は一時軍醫たるの職に従事する者なれば軍醫の爲すべき諸規則等を知るの必要ありしを以て日々餘暇を以て田中醫學士より其説明を聞き最早一通り其大意を知るを得たり、然り而して余等宇野博士一行は第○師團第一野戰病院附として其師團軍醫長石坂軍醫監の配下に置かれ、去る七日石黒野戰衛生長官閣下が其師團軍醫諸氏を豫備病院庭園内に招き出征後の注意を説き、次で佐藤軍醫監には出征後軍陣外科に於ける注意を述べられ、終りて立食の饗應ありしが、余等も亦た幸に其宴に招かれ且同師團軍醫諸氏に紹介し呉れたり、實に同師團には一等軍醫岡田國太郎君、二等軍醫鶴田禎二君、同平賀精二君、三等軍醫佐藤丑八君、同加治某の五醫學士ありしを以て余等は大に力を得たる思を爲せり。斯くて去る八日には當地在留の學士軍醫諸氏は互に送別及留別の意を表せんか爲め自由亭なる西洋料理店に會合せり。會する者岡田國太郎、平井政道、鶴田禎二君、平賀精二君、田中苗太郎、佐瀬丑八、加治某、宇野朗、林暉の九人と及び余なりき、談笑數刻何れも渡清後の談に及び愉快極まれり。特に平井學士は會て第一軍

に従ひ辛酸を嘗め前日山縣大將と共に歸朝されたる者なれば其經驗を話すに到りて興最も深かりき。此夜已に余等の出發時期の甚だ切迫せるを知り翌十日には出發日及び船名並に乗込員等悉く一定し今や行季を整へ其出發時刻の來るを俟てり。
右御報知申上候也 (廿八年一月十二日第八百七十六號)

かうして、十一日午前十一時半、宇品港を出帆し、十二日には有名な波荒き玄海灘を乗り越へて、十四日夕刻七時頃無事大日本新領地大連灣に着き、十六日初めて上陸して柳樹屯に出で、同地兵站病院に森軍醫部長を訪ひ、また和尚島の砲臺見學、或は市内見物等を試み、十九日午後再び船は大連を出帆、二十日未明、目差す山東省榮城灣に入港し、午後三時頃より山東作戦軍の山東半島上陸が開始されたのであつた。

元來、この地は海が遠淺なので遠くより舢舨で上陸したのであるが、當時は僅かに大砲の遠音を耳にするのみで無事上陸を完了し、その夜は落風溝に夜營し、翌二十一日は高家庄に宿泊して、二十二日に榮城に到達するを得たのであつた。

この間の紀行に就ては、宇野朗博士より石黒長官への書翰に詳しいから、それを左に引用しておかう。

謹啓 寒成凜冽離凌候處閣下益々御清務公務に執掌被爲在候段欣喜之至爲邦家奉賀候。降て小生無異消光罷在候乍憚御省慮可被降候然者出發前得拜願度貴宿へ御何申上候處御上阪中の由にて不得其儀遺憾無強空しく歸宿仕候。在廣中は百事御厚配を蒙り千萬悉く奉深謝候。以御蔭無滞去十一日午前宇品港解纜玄海黃海の劇浪怒濤を凌ぎ過十四日午後六時半我占領地命州大連灣に投錨す碇泊中寒威猛緩不同平均氣溫攝氏十度去十七日は朝來寒風吹凌候夜に入て氣溫俄に降り十八日早朝甲板に出れば海面は果して薄氷の爲に封鎖せられ波紋全く消失し舢舨の操作大に困難なりしと聞く、小生等十七日は柳樹屯に上陸し兵站病院砲臺等を一覽して後兵站監部内軍醫部を訪ひ森博士に會見す、氏は不相變健全なり十九日午後一時戰闘序列に従ひ軍艦十二隻運兵船十九隻順次縱列をなして大連灣を出帆し目的地に發向す。二十日未明山東燈明臺を右側に見て徐々榮城灣に入る此際時々股々として遠雷の如く海面を掠て砲聲の耳朶に觸るゝあり、これ我先頭艦隊の陸戰隊敵兵と交戦したるなり我名古屋丸に乘入たる野戰病院(第一、二)糧食縱列の一部は午後三時頃より上陸を始め小生等は四時頃龍村に上陸し風雪を衝て前進し一小山を踰て集合地たる龍睡島の一漁村に着し、命令に従て五時同所を發し積雪を踏み朔風を犯して落風溝に向ふ沿道兩側は兵卒軍夫等盛に溝を焚き炎焰空を衝て騰り宛然大火の如し、一小時にして舍營地に着す。此地は戸數八十人口五

百未滿の寒村なれども人民は頗る狡猾なり、誓所は一村の會葬堂とす。佛壇棺臺等あれども甚だ不潔にして恰も冢舎の如し寒氣猛烈確當を以て先づ第一に薪材を集め火を焚き黍壳を敷て褥となし火を圍て暖を取る、暫くして諸隊の夫逐次に來着し焚火を盛にし喧争の聲爆竹の響風雪に和して四邊に迫り再び燒熱修羅を現出し園村の婦女子狼狽周章所爲を知らず只啼泣悲鳴する而已嗚呼慘の慘たる者乎此地は氣溫零下廿二度膚衾は冷て鐵の如く手足厥冷して把握自由ならず暖を取らんとすれば煤烟室内に充塞し眠吭を刺戟し耐る克はず戸を圍て煙を驅除せんとすれば無情の雪風威を恣にし亦耐る所にあらず、漸く疲勞して睡眠催すや再び寒冷の爲に醒來り寒烟と終宵抗戦し遂に曉天に達す。起き來れば結膜炎の爲に兩眼の焮衝を訴ふるあり煤煙の爲に顔面一變して銀冶の手間取然たるあり、可笑もあり、氣の毒にもあり、實に戰爭なる者は無情なる者也此夜枯草のみにて好燃料なき爲め啼々棺臺一脚を火葬し了りしは無慘なりき。翌廿一日早朝携帶口糧たる道明寺糍一袋を喫了し匆々同地を發し二里許にして高家庄に着す、此庄は農八分漁二分の一貧村にして戸數六十人口二百五十營所は魏氏家祠の扁額ある一堂宇なり、新築なれども昨夜宿泊したる五聯隊の諸兵門扉戸障子等を破壊し盡く燃料に供せし爲め寒風の侵入を防ぐ可きなし、依て村民を招き陳き壞れ帆や破戸を以て窓戸を塞がしめ僅に寒を凌ぎ昨家燃殘したる薪材を收集して燃料に供し、枯草及アムベラを敷て席を設け爐を假設し火を焚き温を取る例の如し、併し昨夜と違ひ本夕は豕汁あり米飯あり、頗る盛饌なりと言ふべし。又防寒具附着したる爲夜も大に暖に亦眠むるを得たり。其設は四邊の鼾聲雷の如きあり、廿二日同地に滞留す、村民病院の標示あるを見て大に尊敬の意を表し朱塗の卓子椅子等を持來る又創傷患者一名肺結核患者一名を伴ひ來て診を乞ふ軍醫諸氏懇切に診断し相當の處方否薬を投與せられたれば彼等非常に悦し情迫り啼泣するに至れり。實に皇軍仁慈の名に背かざるなり。廿三日同地を發す其際該村の長老閭門まで送來る該村の人民は前村の土民に比すれば頗る質樸にして能く命に服し、食料を需めて代價を拂んとするも受くるを肯せず、譯官をして各々其家に就て料金を還したるに暫にして長老を先にし來り先きに置く處の金錢を返却して啼て曰く、我儕は最初より賣却するの心にあらず全く獻呈したるものなり、一錢たりとも御受領するの理なし、殊に貴官の所爲仁義に則り下民等心服感謝する所なれば愈々代價を受け難し、とし一同歡喜して去れり。同日午前榮城に入る、此地は戸數五百人口三千に近し一千の清兵ありたるも一戦にして敗走し戦利品には大砲衣服銀鎗の類、死屍數名捕虜廿餘名、我軍は一兵を損せず今回の如き不可思議の戰爭は恐くは稀有なる可し。去二十日以來連戦連勝は勿論の事なれども一兵卒の負傷するものなく爲之野戰病院開設の要なし小生等一行の如き浩歎に堪へず、其所以は一は小生等目的の要領を得るに至らず一は清兵の怯弱なる是なり去れども漸次威海衛に近くに従て優勢の敵兵に遭遇するならん、其時こそ病院開設を見るに至らんことを樂とし只今の所にては日々飲食を事とするのみ。熟々生等今日の境界を見るに或は會葬堂に或は祠宇に宿し室の内外には

諸種の荷物山積家骨鶏毛各所に散亂し諸氏は毛布の防寒衣を着け焚火を圍んで團欒する狀異形奇裝恰も稗史演劇に見る匪賊の山寨に據るものに似たり、實に面白き事に存候疾に罷札拜呈可致管に有之候處之と申し候御報道可申上事項も無之僅に紀行の一部を認め貴覽に供し度如此御座候。勿卒の際辭序を失ひ亂筆字を爲さず宜しく高察を乞ふ恐々頓首

明治廿八年一月廿四日

大日本帝國占領地清國山東省榮城縣に於て

第二師團野戰病院内

宇野 朗

石黒衛生長官閣下



明治二十八年八月二日海衛署ニテ後列右端ガ先生

(東京醫事新誌第八百八十一號、明治廿八年二月十六日號)

これより先き、大山軍司令官の榮城縣到着と共に威海衛進攻部署が定められ、右縦隊は黒木爲楨第六師團長之れが司令官となり、左縦隊は佐久間左馬太第二師團長之れが司令官となつて、先生等一行は後者の第一野戰病院に屬して威海衛の背面攻撃に向ふこととなつたのである。

かうして先生等一行は二月の初めには佐久間第二師團の左縦隊に従つて威海衛より二里半許り手前の温泉湯村に進撃して大山大將等と共に此地に滞在してゐたのであるが、二月一日來漸く戰鬪が行はれるに至り、負傷者が續出し初めたので、先生は宇野教授等と別れ別働隊となつて、大寺

少將の率ゐる第二旅團に従つて、それより約半里許りの劉家村に移り、同地開設の野戰定立病院に入つて外科患者を一手に引受け銃創砲彈創の手術及び取調べを開始したのであつた。また宇野教授、林助手の一行は細井小使を引具して器械類一切を携へ第一旅團に従つて、第一野戰病院と共に東羊村方面に向はれたのであるが、これは活動家たる先生にあつては、さしたる戰鬪もなき陣營の無聊に苦しみ、好んで激戰地の方を選んで單身別働隊となつて赴かれしに由るといふ。

この地に於ける先生の活動振りは、第二醫院外科宛ての先生の手紙の中に詳しいから、それを次ぎに掲げておかう。

拜呈 爾來各位御多幸奉賀候次ニ生等一行無事奔走致居候間御安心被下度

前便申上候後ハ拙者等軍隊ト共ニ前進シ、温泉湯村ト申ス威海衛ヨリ二里半手前ノ村へ來リ大山大將等ト滞在致居候處前日來此近邊ニテ戰争ノ爲メ負傷者五六十名有之候ニ付小生ノミハ此村ヲ去ル半里許リノ劉家村ニ移リ同地ニ開設中ノ野戰定立病院ニ入り外科患者ヲ一手ニテ引受け合計五十三名ノ銃創及砲彈創ノ手術及取調べヲ爲シ、目下尙ホ滞在中ニ候。實ニ同村ハ寒村ニテ所謂九尺二間ノ葺屋ノミニテ室内ノ不潔名狀スベカラズ、加之毎日大雪ニテ寒氣肌ヲ裂クカ如キ有様ナルヲ以テ防腐法ヲ嚴行シ込ミ入りタル手術ヲ爲スハ甚ダ困難ヲ感ジ候。併シ色々工風ヲ致シ藥丸及精糸靜脈ノ銃創ニ「カストラチオン」ヲ施シ眼球貫通銃創ニ眼球抽出ヲ行ヒ、其他肩胛骨ノ切除術及ビ二三ノ關節切除術ヲ施シタルニ成績ハ先ヅ佳良ノ積リト雖、又腦ノ砲彈創ニ穿術ヲ一回施セシモ從來既ニ人事不省ノモノナリシガ一夜ニシテ斃レタリ(是レハ局部剖見セリ)等ノ如キ處置ヲ致スヲ得タリ。併シ小生ハ宇野博士ト分離別働隊トナリシガ爲メ施術ニ臨ミ器械ナク(「レーベル」「ハーケン」等サヘ皆無)極メテ心配致シ候御推察ヲ乞フ

又明日孤山後ト申ス處へ移リ同地ニテ五六十名ノ銃創者ヲ取調べル等ニ候

威海衛ハ既ニ我手ニ入り目下海軍ニテ軍艦攻撃中ニ候今朝ノ如キハ曉ヨリ砲聲連發耳ヲ聳スル程ニ有之

當地ノ寒氣ハ朝夕零下三―二度位ニテ手ハ既ニ霜ヤケダラケトナリ下婢ノ手宜敷ト云フ有様ニ相成候

食物ハ極メテ不便ニテ毎日糧食隊ヨリ運ビ來ル米ヲ食フノミニテ菜ハサツマ芋ヲ煮テ食フコト多シ併シ稀ニハ牛、豚、鳥ヲ微發シテ喰フコトアリ其時ノ佳味名狀スベカラズ

小生ハ學士岡田太郎氏ト同宿致居候同氏モ健康ニ候

宇野博士等モ目下東羊村ト申ス處ニ在リテ三、四十名ノ銃創者ヲ取調べタル管ニ有之候

右御報道ニ及ビ候間乍失敬此手紙ヲ拙宅へ御廻ハシ被下度候也

二月二日

第二院外科 御中

岡田和一郎

そして、この前後頃よりして我が山東作戦の完了に近づくと共に彼我の戦闘は漸く酣となつて、諸處に激戦が展開されそれに伴つて先生も零下二十度といふ極寒のさ中、醫療器械もなき不自由の中にあつて、單身醫療救護の大活動を續けられ、劉家村の定立病院に於ては院長茂木二等軍醫及岡田一等軍醫の好意で、外科患者の治療を依託され五十有餘名の銃創患者の手當を濟ますと、次いで八日頃よりは威海衛より直徑一里許り距たつたる孤山後といふ海濱の一村落に設立された定立病院に於て院長丸山一等軍醫の好意で百餘名の負傷者の治療にあたられたのであつたが、こゝからは灣内の軍艦の行動、海戦の様も手にとる如く見え、大砲の股々たる響も間近に聞かれたが、時によると砲彈の飛來して先生等の仕事を妨ぐる事があつて、これには流石の先生も妙からず閉口されたものゝ如くである。

然し、皇軍の嚮ふ處常に大勝利に歸し、二月二日には一と先づ山東作戦軍の威海衛軍港陸岸全部の占領成り、残るは敵艦攻撃の爲めの海戦が毎日續けられ、三日には我水雷艇隊は威海衛港口の防材を破壊し、五日には日島、劉公島の敵艦を襲撃し、翌六日には敵艦來遠、威遠の二艦と水雷艇敷設航寶筏號一隻を轟沈し、更らに九日靖遠をも撃沈して、清國北洋艦隊の掃蕩着々として成り、遂に提督丁汝昌も十一日には毒を仰いで自殺し、十二日にはさしも豪勢を誇つた北洋艦隊も白旗を掲げて降服を求むるに至つて、こゝに我が山東作戦も海陸共に一應の完了を告げることゝなつたのであるが、先生等醫師は毎日百餘名の負傷患者の診察手當に多大忙を極めねばならなかつたのである。

而して、この間先生の屬した第二旅團の旅團長大寺少將が九日に戦死するといふ悲壯な事件もあつたが、またその間には野外に遺棄せられた支那兵の屍體からその首を切り取り、油紙に包んで歸國する人に托してかねて依頼されてゐた小金井博士に之れを送り届けられたのであつた。

然し、この孤山後の野戦定立病院も十一日には閉鎖されたので、先生は再び劉家村に歸つて負傷者の治療に當られ、廿一日には宇野教授、林學士の一行に合せん爲め威海衛に出でられたのであつたが、宇野氏一行は已に第一野戦病院と共に遼江丸に乗込んで旅順に向つて出帆せんとしつゝある由を聞き、危く山東省に一人置き去りを喰ふ處であつたが、幸運にも間に合ひ、遼江丸に乗り込んで廿二日早朝威海衛を出で、夕方六時に旅順に着し、翌二十三日滿洲の地に第一歩を印せられたのであつた。

その間の消息は、佐藤教授を初めとす第二醫院の僚友へ宛てた手紙の中に詳しいからそれを次に掲げておかう。

時下春暖相催シ候處各位益々御壯健御奉務奉賀候ニ々生等一行モ亦幸ニ無恙奔走致居候間乍憚御安心被降度候

述者生ハ前便申上候通り山東省孤山後ニテ百名程ノ銃創及砲創ヲ觀察且ツ治療致シタル後本月十一日ヲ以テ同地定立病院ノ閉鎖シタルガ爲、再ビ温泉湯村附近ノ劉家村ニ於ケル定立病院ニ歸リ不相替學士岡田太郎氏ト一小民家ニ宿營シ一坪足ラズノ坑(ランドルノ事)上ニ起臥シ且ツ在來ノ負傷者ニ向ツテ治療ヲ施シ(其重ナルモノハ膝關節離斷術、下腿切斷術等)其經過ノ先ツ「アゼブチツシユ」ニ經過シタルヲ認メタル後、去ル廿一日ヲ以テ宇野先生等ニ追ヒ付カントテ人夫ヲ一人雇フテ毛布ヲ負ハシメ、降ル大雪ヲ侵シテ六里ヲ歩ミ威海衛ニ達シ宇野先生ノ所在ヲ尋ネシニ師團軍醫部ノ某氏ハ宇野氏竹島(威海衛ヲ去ル凡ソ二十町)ニ在リト告グ。於之其地ニ向ハント欲セシガ偶々足ニ塵埃水泡ガ出來テ痛ミ強キガ爲、先ツ暫ク休マントテ一時間計愚頭々々セシガ、折柄他ノ一軍醫來ラレ宇野氏ハ既ニ第一野戦病院ト共ニ遼江丸ニ乗込ミ將ニ旅順口ニ向ツテ出帆セントスト告ゲラル。於之小生驚一驚休息處ニアラズ動モスレバ小生獨リ山東省ニ置キ去リヲ喰フ仕儀ナリ、足病顧ミルニ足ラズト直ニ起テテ十五六町ヲ隔テ馬頭街ト云フ一市街ニ行キ同地ニ在ル波渡場ニ行キ便船ヲ索メシニ恰モ好シ山砲縱列所屬ノ鈴木三等軍醫等ガ數百ノ兵及軍夫等ヲ遠見丸へ送ラントスルニ會ス、於之小生事狀ヲ告ゲ同船ヲ乞ヒシニ同氏及縱列長等ハ小生ノ乞ヲ入レ同船スルコトヲ承諾セラル、小生此時ノ喜ビ比スルニ物ナキ程ニ有之候、然ルニ北風肌ヲ裂クガ如キ威海衛ノ波渡場ニ午後一時ヨリ七時マデ六時間立チタル儘ニテ出船ヲ俟テシハ困却致候七時頃右ノ諸氏ト通船ニ乗込ミ直ニ遠見丸ニ入り上等客室ニ入りシニ宇野先生林學士等ハ第一野戦病院長以下從軍々醫諸君ト共ニ其所ニ在リテ生ヲ迎ヘ何レモ皆小生ノ到着シタルヲ歡

ビ吳レ候斯クテ其日ハ威海衛内ニ泊シ翌二十二日早朝太陽ノ昇ルト共ニ船ハ黒烟ヲ吐キテ出港セリ、干時ニ遠クハ威海衛附近ノ陸地各砲臺ヲ「ダイナマイト」ニテ破潰スルノ響ヲ聞キ又近クハ劉公島前ニ在ル我軍ニ分捕ラレタル支那艦隊並ニ沈ミ掛ケタル定遠等ヲ瞰ミツ、我皇軍萬歳ヲ唱ヘテ山東省ヲ去ルノ心持好サ實ニ名狀スベカラザル程ニ有之候。船ハ漸ク進ミ同日午後四時三十分ニ盛京省旅順口外ニ着シ靜ツ、港内ニ入り全ク備ヲ投ゼシハ六時頃ニ有之候由テ此日ハ上陸スルモ到底宿舎ナキヲ知レルヲ以テ船内ニ宿泊スルコトニ決シ候得共、八時頃兵站部某氏ヨリ清人芝居ヲ觀テハ如何トノ案内アリシヲ以テ直ニ軍醫諸君ト共ニ上陸シテ先ヅ其某氏ノ舎營ニ行キ例ノ鐘詰、スルメ等ニテ一杯ヲ與ヘラレ次デ九時頃芝居ニ行キタリ。小屋ノ體裁ハ先ヅ日本ノ芝居小屋ニ類似ス役者ハ何レモ滑稽ナルコトヲノミ演ゼシモ其意味ハ殆ンド分ラザリシ小生等ハ一節ヲ觀テ直ニ去リテ船ニ歸リ翌二十三日ヲ以テ一同ト共ニ船ヲ離レテ上陸シ、直ニ命令ノ宿營地タル當地(旅順口ヨリ六里)ニ進行セリ。先之生ハ旅順ニ上陸スルヤ先ヅ酒保ニ就キテ買物ヲ試ミシニ菓子アリ酒アリ其價不廉ナラズ仍テ干菓子一袋(十錢)巻烟草百本箱二十錢ヲ求メ之ヲ手ニシテ一同ト共ニ進ミ同日午後六時頃當地ニ安着候當地ハ既ニ民政廳ノ配下ニ在ルモノナルヲ以テ徵發等ハ困難ニ候得共又タ一方ニハ旅順口ノ酒保近キガ爲メ買物ニ便利ナルノ利益有之候既ニ小生モ前日使ヲ以テ「コンデンスミルク」「牛肉罐詰」「源氏豆、乾鮮鮎、葡萄酒等ヲ購求シ數ヶ月目ニ初メテ飽食致シタル次第ニ候

ソコテ當地ヘ來リテモ當分生等ノ目的タル負傷者ニ接スル機會少カルベシト信ジタルヲ以テ此度ハ宇野先生ガ林氏ヲ伴フテ旅順口ノ兵站病院ニ赴キ又場合ニ由レバ金州ノ兵站病院ヘモ行キ負傷者若クハ病者ノ觀察ヲ爲シ又治療ヲ助ケントノ意ニテ今二十七日早朝當地ヲ出發致候併シ小生ハ第一野戰病院ニ殘リテ同地軍醫諸君ト共ニ進行シツ、我目的ヲ達スル積リニ候

右前便以後本日マデノ經過ニ候
又去ル十九日ニハ威海衛ニ於テ第二軍戰捷祝宴ヲ開カレ大山大將、佐久間中將、伊藤海軍中將等ヲ初メ陸海軍各將校悉ク之レニ臨マレ生等一行モ其席末ニ列シ天皇陛下萬歳ヲ唱ヘ候

又昨二十六日ニハ當第一野戰病院ニ於テモ各兵卒看護人等ノ慰勞ト祝意トヲ表スル爲メ令營前ノ庭園ニテ宴會ヲ開キシニ兵卒ノ中ニハ演説スルモノアリ、劍舞ヲ演ズル者等アリテ甚ダ愉快ニ有之候就中輪幸某ガ次ノ獨々逸ヲ歌タ時ニハ大喝采ニ有之候(御承知ナラ失敬)

支那の旗棒
北京と折りて

早く日本にしてみたい

生等着後常ニ壯健ニ候得共小生ハ一度腹痛下痢ヲ起シ、林氏ハ一度四十度餘ノ發熱ヲナシ、宇野先生モ風邪ノ氣味アリシガ何レモ服藥スルニ到ラズシテ全癒致候只林氏ノ發熱ニハ一時大ニ心配致シタレ共是亦タ單純ノモノニ有之候
本日當地ヨリ十町許リヲ歩行シテ渤海灣ノ海岸ニ行キシニ海上尺餘ノ氷ニテ一里許前ニアル島ヘ徒歩ニテ渡ルコトヲ得ル有様ニ候又生等研究ノ經過ハ現今マデ二百名計ノ負傷者(宇野先生及小生ノ分合シテ)ニ就テ爲シタルニ過ギザレ共中ニハ大ニ注目スベキモノアツテ材料ハ先ヅ可ナリ集メタル積リニ候
第二師團ノ將校ニテ負傷セシハ唯一人ニシテ而シテ其一人ハ我同業者タル三等軍醫高木玄了氏ニ候同氏ノ創ハ右肩胛骨部ノ砲彈創ニテ一時甚ダ危険ナリシガ、定立病院長藤木政則氏ト共ニ肩胛骨截除術(一部)ヲ施シ且ツ止血ヲ散シタルガ爲メ今ヤ大ニ快ク歩行モ自由トナリ、加之前日本國ヘ後送スル運ビニ相成候實ニ喜ブベキ事ニ候
拙生ハ今ヤ平賀精二郎氏ト同宿致シ居候餘ハ他日ニ讓ル
乍失敬此手紙ヲ一寸拙宅ヘ御示シ被下度奉願候(手紙ヲ出スニ制限アルカラ困ル)

二月二十七日

岡田和一郎

- 佐藤博士殿
- 寺田各學士殿
- 津本各學士殿
- 松本各學士殿
- 内科各學士殿

かうして、先生等一行は廿三日に旅順口に上陸し約六里許り距つた第一野戰病院の舎營地たる雙臺溝に舎營して、休息をとつたのであるが、廿七日早朝、宇野博士、林學士の一行は旅順口の兵站病院に向け出發、先生はまた一行に分れて單身第一野戰病院に居残りその行動を共にすることとなつたのである。が、同地滞在數日にして金州にある第二軍々醫部長土岐軍醫監からの招電に接し、前日來大連灣柳樹屯に在る宇野教授一行にその旨打電すると共に、先生は細井小使と共に陸路十二里、金州に赴き、三月七日金州兵站病院に院長大西秀治學士を訪ふと、そこに宇野林兩氏も先着しあり、共に負傷者の治療を手傳ひ、或は市中見物を試みて、八日、命令を受け兵站司令部より牛車一輛を借り受けて行季を整へ悪路

五十餘里の中を蓋平へ向け出發したのであつた。

かくて、途中、北三十里堡、普蘭店、季家店等三個處の兵站司令部に宿泊し、四日を費ひやして十一日復州に到着、同地兵站病院に院長林德門二等軍醫正を訪ひ、大に歓迎されて、同病院の銃創患者を悉く一任され、翌日より診療に従事し研究日限三日限りなるを更らに二日間延期して後ち十六日再び此地を出發し十九日夕蓋平に到着したのである。

然し、こゝにも滞在一週餘日にして金州よりの電報にて、再び蓋平を出發し、四月二日金州に到着したのであつた。

春暖之候各位御多御奉職奉賀候ニ々當地ニ於テハ宇野博士ヲ初メ拙者等一統壯健ニ候間乍憚御安心被下度候備テ拙者共ハ前便度々申上候通り初メ第二師團第一野戰病院ニ屬シ、山東省ヘ赴キ威海衛附近ニ於テ負傷者ノ救療ニ從事候得共劉公島占領敵艦滅後ハ第二師團ト共ニ盛京省ニ移リ旅順口ニ上陸シ、六里許ヲ進行シテ雙臺溝ト申ス所ニ合營致シ居候ヒシガ素ヨリ此等地方ニ於テハ何モ爲スコトナク只當時凍瘡及凍死セントスル者ヲ多少治療スルニ過ギザル有様ニテ毎日平賀學士等ト喚フ事ト眠ルコトヲノミ、專務ノ如ク爲シ實ニ困却致シタリ然ルニ在テ金州ノ土岐第二軍々醫部長ヨリノ電報ニテ至急金州ヘ出頭セヨトノ命令アリシヲ以テ余ハ直ニ行季ヲ整ヘ(宇野、林兩氏ハ當時既ニ大連灣頭柳樹屯ノ兵站病院ニアリ)陸路金州ニ赴キ途中南三十里堡ニテ第二野戰病院ヲ訪ヒ鶴田積二郎氏ノ許ニテ泊シ翌金州ニ着シ暫時金州兵站病院ノ大西秀治氏ノ許ニテ負傷者治療ヲ手傳ヒシガ、土岐軍醫部長ノ命令ハ余等ヲシテ蓋平ニ赴カシムルニ在リシヲ以テ直チニ旅裝ヲ整ヘ五十餘里ヲ隔ツル蓋平ニ赴クコト、ナシ牛車ヲ借り入レ荷物ト身體トヲ積ンデ雪路ヲ進ミシニ路悪クシテ動搖甚ク林氏ハ一回車上ヨリ墜落セシモ怪我ナク種々ノ困難ヲ犯シテ復州ニ着シ、同地ニハ林二等軍醫正ノ院長タル兵站病院アリシヲ以テ暫ク同院ニ留ツテ負傷者ノ治療及觀察ヲ爲シ次第再ビ牛車ヲ借りテ同地ヲ發シ四日ニシテ蓋平ニ着シ、又同地ハ盛京省有名ノ都會ナレバ城壁モ廣ク市中家屋モ大ナリ。此地ハ第一師團司令部ノ合營地ナルヲ以テ同軍醫部ニハ菊池常三郎氏アリ、第一合營病院ヲ開ケル第一野戰病院ニハ院長用吉二等軍醫正ノ輩下ニ安藤慶次郎、田村光顯ノ二氏アリ、第二合營病院ナル、第二野戰病院ニハ院長賀古鶴所氏ノ輩下ニ北村除雲林睦禮ノ二氏アリ。其他定立病院ニハ現今學士コソナケレ院長立山軍醫正初メ軍醫一統ハ大ニ余等ヲ歡迎シ吳レ、諸事大ニ便宜ヲ得、戰地ノ事ナレバ不自由勝トハ云ヘ思ヒノ馳走ヲ爲シテ余等ヲ饗應シ吳レタリ。借テ以上ノ博士學士ノ何レモ壯健ニテ一生懸命ニ盡力中ニ有之候而シテ第一、第二兩合營病院及定立病院ノ三院ハ共ニ市内ニ在リテ何レモ患者數百人宛チ有シ(多クハ凍傷)第一合營ニテハ安藤學士外科患者ヲ擔當シ第二ニテハ賀古、北村兩氏ニテ外科ヲ擔當セリ、其他學士海野、戸塚、山口、小池等ノ諸氏ハ何レモ隊付軍醫ト

シテ城外ニ散在セシガ余等ハ諸氏トモ面語スルコトヲ得タリ。諸氏亦健全トス

此地滞在中鎮魂祭ニ臨ミシニ一寺院ノ壯觀恰モ日光ノ如ク美ナリ。又第一師團懇親會ニ山東團會ト云フ寺院ニ行キシニ此寺ハ一層壯觀ニシテ實ニ其精巧ニ驚ケリ、然ルニ市中ハ一般ニ不潔ニシテ街上屎ハ積ンデ山ヲ爲シ、尿ハ流レテ川ヲ爲セリ。此時暖氣ヲ催セシ爲メ市中ノ雪解ケテ泥濘深ク、晝尙ホ街上ヲ歩行シ難キ有様ニ候又一夜司令部ニテ支那芝居ヲ履ヒシヲ以テ余等モ席末ニアリテ一覽セシニ貴女ニ扮シテ美聲ニテ歌ヒシ(男役者)ニハ感心セシモ曲半バニシテ手鼻ヲカミシニハ驚入候

蓋平滞在一週餘日ニシテ又金州ヨリノ電報ニ接シ至急金州ヘ立戻ルコトニ相成リ再ビ從前ノ路ヲ進ンデ去ル四月二日當地ニ着シ今尙ホ

金州兵站病院内ニ在リテ毎日少々ノ患者ヲ見テ無聊ニ暮シ居候

拙者等ハ斯ノ如ク陸路五十餘里ヲ往復シタルガ爲或ハ足ニ「マメ」ヲ出シ、或ハ顔色土ノ如ク黒クナリ着替ナケレバ衣服モ破レ且ツ汚

レ毛髮ハ長シ、三人共一見恰モ別人ノ如ク相成候得共身體ハ益々壯健ニシテ食物ハ何チ喰フテモ甘ク爲メニ大ニ肥滿致候

金州ハ占領地中ニテ最モ繁華ノ地ニテ土人既ニ我ニ服シ商業ヲモ平時々如ク營ミ且ツ日本酒保モ多ク有之候故諸事不自由ナク昨日ノ如キハ支那料理(一人壹圓)ヲ喰ヒシニ其家不潔ナレドモ其味ノ借樂園ノ料理ニ劣ラザリシ

右拙者等ノ近況ニ候處只拙者等ノ目的タル負傷者少ク研究材料ノ不足ナルニ困却致候先ハ御不音ニ打過ギシヲ謝スル爲メ得貴意如斯拜

四月六日

第二醫院内外科醫局 御中

岡田和一郎

これより先き、蓋平にありし先生等一行への金州よりの招電は、四月上旬大連より新作戦地なる臺灣方面へ赴く可き旨の内命を傳へし爲め、先生等一行は急遽三月廿八日蓋平を發し、四月二日金州に到着したのであつたが、その間に事態は急轉し休戦となつて、こゝに留まらざるも徒らに時日を空費することゝなる爲め、遂に先生等は意を決して一旦歸國することゝなつたのである。

かくて、四月九日大連灣で御用船佐渡國丸に乗り込み、同夜出發、翌十日大孤山港に着し、一寸上陸の上、大孤山港並

に同地定立病院を一覽し小蒸汽船にて歸航するも、同日より暴風雨にて本船は海洋島に避難して在らざる爲め、その小蒸汽船内にて四日間を過ごし、漸く本船に乗り込んで直ちに出發、翌朝鮮の魚隱洞に着き、同地の病院醫に知人居る爲め上陸して、朝鮮人家並に病院を一覽の上本船に歸つて直ちに破損船社寮丸を伴つて同地を出帆、朝鮮海を進行せしも、二十三日尙ほ暴風雨の惧あるを以て朝鮮所安島に碇泊し、翌二十四日夜同地を出でて二十六日朝下關に着し、同夜廣島に無事安着、實に四ヶ月ぶりであり故國の土を踏むことゝなつたのである。

拜呈 其後ハ格別御覽ニテヤ 生等儀曾テ申上候通り蓋平ニ於テ研究ニ從事候處四月上旬ニハ大連灣ヨリ新作戦地へ赴ケトノ内命アリシ爲急ギ金州へ歸リ候處其間ニ休戦ニ相成候故暫ク金州兵站病院ニ在リテ治療ヲ手傳居候得共曠日瀟久時日ヲ徒費スルハ生等ノ好マザル處ナルヲ以テ内々諸方へ開キ合セタルニ一ト先ヅ歸國スルヲ良策ナリトスル者多カリシヲ以テ去ル九日大連灣ヲ發シ大孤山港及朝鮮魚隱洞ニ上陸シ各地ノ兵站病院ニ就テ專概況ヲ一覽シ後御用船佐渡國丸ニテ歸航シ昨二十六日馬關ニ着シ、昨夜當地ニ安着仕候宇野博士、林學士モ共ニ壯健ニテ今回ハ三人共一回モ發病セズ良ク困難ニ堪ヘ仕合ニ有之候

就テハ直ニ歸京致度存意ニ候得共當地豫備病院ニ於テ取調チナシ京都ノ大本營へ出頭シ後歸京ノ積リニ候間何レ不違拜眉ニ接シ萬端御談可仕候先ヅハ安着ノ御報マデ得貴意候也

四月二十七日

第二醫院内外科醫局 御中

岡田 和 一 郎

かうした先生等一行の歸國の長道中の間に、十一日には金州に占領地總督部が開設され、十三日には征清大總督府宇品を發し、十七日下關條約締結されて、日清兩國の間に全く和平成つたのであるが、二十三日には我が國內を聳動せしめた獨佛露の三國干渉が行はれて、我が新日本領地遼東半島遼陽の止むなきに立ち至つたのである。

かくて、また先生等の歸國の翌日には大本營が京都へ移轉となつて車駕廣島を御發轅になり、京都に向はされたのであるかくて、宇野教授一行は廣島に滞在中取調べを終了し、五月四日廣島を出發し、京都の大本營に出頭して一二泊の上再び同地を發し、七日の正午過ぎ盛大な歡迎裡に新橋に着し歸京せられたのであつたが、先生のみは、一行と別れ五月一日宇品を發し松山に立寄り繼母を初め故郷の親類縁者に逢つて、それより九州に向ひ、戦地に於て取扱つた患者のその後の經過を診察し、且つは當時の上官軍醫監菊地常三郎博士の發明に關はる薬灰繻帯の成果を視察して五月の十六日無事歸京せられたのであつた。

○岡田學士の歸京

軍陣外科研究として宇野教授と共に戦地へ出張中なりし助手岡田和一郎氏は四月廿七日廣島に安着後直に歸京の途に就く筈なりしも豫て戦地に於て診察せし患者の各豫備病院に送還しあるを以て之が經過等を觀察せん爲め、同廿日迄で同一行と共に廣島豫備病院に於て患者を觀察し又春和園に於ける慰勞會に臨み本月一日同地を發し小倉豫備病院へ赴き村中一等軍醫正に就て患者を觀察し夫より福岡に到り大森博士と共に熊本に赴き豫備病院に於ける入院患者を悉く觀察し終り、縣立病院を參觀夫より再び福岡に歸り先づ豫備病院の患者を見次で福岡病院を參觀し手術を見又た醫學士諸氏の催に係る慰勞會に出席、此地に滞在する三日間にして同地を出發十日京都に到着二泊の上同十六日午後五時無事歸京せられたり、當日新橋へ出迎へられたるは小金井、宇野、緒方、楠の諸博士を初め學士、開業醫等の諸氏なりし。(東京醫事新誌第八百九十四號五月十八日)

かうして、先生が華々しく凱旋、歸京せられると共に川上元治郎氏外敷名の發起に關はる十日醫會の柳橋魚清樓に於ける歡迎會が廿二日夜行はれたるを初めとして、醫科大學學生、または帝國大學教授、助手諸氏等の歸朝祝宴が富士見軒に或は上野精養軒等に於て盛大に催され、その無事歸朝の勞を稿つたのであつた。

かうして、慌しく明治二十八年も暮れんとする十二月の七日、こゝに先生は助教教授に任ぜられて、苦闘七年の助手生活に別れを告ぐるこゝとなつたのである。

第五章 醫科大學助教時代

一、助教授拜命と耳鼻咽喉科主任候補の交渉

明治の廿八年は、東洋の一小島國日本が、封建の重衣をかなぐり捨て、甦生の若々しき力もて、東洋の老大國清國を打破り、世界史的な檜舞臺に躍り出で、東亞の世界に力強くその制覇の第一歩を印した、我が國民にとつて忘る可からざる年であると共に、また我が岡田先生の生涯に於ても個人的に忘る可からざる年であつた。

思へば、明治廿二年十一月大學を卒業すると共に同十二月三日醫科大學助手に任命せられて以來足掛け七年、滿六箇年間の所謂萬年助手時代が漸くこゝに終りを告げて、此の年の十二月七日遂に醫科大學助教に榮進し、叙高等官七等の辭令を拜受されたのであつた。かくて、本俸四級俸、職務俸金貳百圓が下賜せられることとなり、先生の前途には豁然として坦々たる希望の大道が打ち開かれ、精神的にも物質的にも生活の安定が得られるに至つたのである。

顧みれば、先生の二十六歳より三十二歳に至るこの七年間の生活といふものは既往十年間の學生生活に比して優るとも劣らざる險惡多難の荆棘の道であつたといふべきで、當時いかに物價の安かりしとはいへ月二十圓の俸給にては一家三人の生計を立つるに於て決して十分のものでなく、況んや派出好きな實際家たる先生に於てをやである。

而も、かゝる物質的な苦難にもまして、その所謂萬年助手時代はいつ果つるともなく、前途の甚だ暗愴たるものゝあつて、その間には、同僚知己の地方の大病院に高給を以て續々と召聘せらるゝにも拘らず、先生御夫婦は互に勵まし慰め合つて生計の足らざるは原稿稼ぎを以て補ひ、弱氣の出でんとする時は互の力強き愛情を以て鼓舞し合つて、長き不遇の時

に在つても尙ほ且つ不平の弱音一つも吐かず、常に應揚豁達に致々として自己の研究、職務に精進し、また學界に言論界に長廣の辯を振ひ、遠大の筆を揮つて、蚊龍の一と度び雲を得ずんばあらざる態の雌伏をつゞけられたのであるが、二十年の華々しき歸京凱旋の直後漸くこゝに雌伏時代を脱して助教授に榮進すると共に、こゝに雲を得た蚊龍の天に向つて馳け上らんとするの秋、回春の好運は再び先生の許を訪れたのであつた。

即ち、凱旋に次ぐ昇任の喜びの裡に慌しく二十八年が過ぎ、希望に輝く二十九年の新春を迎へて、祝宴つゞきの多幸なる前途を祝ひ合へる春も三月に入ると間もなく、當時の醫科大學々長小金井良精教授より、新設されんとする耳鼻咽喉科の主任に推されて、獨塊への洋行留學の交渉を受けるに至つたのである。

これより曩き、我が帝國大學に於ては明治二十六年九月勅令第九十三號を以て講座制が布かれ、次にみられる如き二十三講座が設けられたのであつたが、耳鼻咽喉科學は當時尙ほ未だ之を缺いてゐたのであつた。

解剖學	二講座	外科學	三講座
生理學	一講座	眼科學	一講座
醫學	一講座	皮膚病學、微毒學	一講座
病理學、病理解剖學	二講座	精神病學	一講座
藥物學	一講座	衛生學	一講座
內科學	三講座	法醫學	一講座
產科學、婦人科學	一講座	藥學	三講座
小兒科學	一講座		

然るに、我が日新醫學の向上發展は、その内容の擴充複雑化と共に専門分化を愈々急ならしめ、曩きに産科學、婦人科學、眼科學、小兒科學等の分化獨立をみると共に又こゝにあつては皮膚病學、微毒學等の新設をみ、今更らに耳鼻咽喉科

學、齒科學等の獨立増設が懸案となつて、差當り耳鼻咽喉科學設置の議が定まり、今その教授候補者として岡田先生が推されたのであつた。が、當時は日清戰役の關係で國家財政の緊急を要するものが多く、文部省の海外留學生も一時中絶の止むなきにあつて、容易に官費洋行等の出來かぬ時代で、多くは皆私費で洋行し、たま／＼官費留學生があれば、法醫理工文の各分科大學で奪ひ合ふ有様であつて、仲々に難しかつたものである。然るに、この年に於て俄かに文部省留學生の派遣人員が増加され、醫科大學に於ても學長小金井教授は極力その一名を醫科大學關係者にとらんものと奮闘し、かねて囑目せる我が岡田先生を之れに當てんとして、耳鼻咽喉科學研究といふ名目に於て遂ひにその獲得に成功したのであつた。然るに、かゝる評議會に於ける決定も、何ら事前に小金井學長と岡田先生との間に打ち合せをしてゐなかつたので、三月三日評議會の決定をみるや翌四日早朝、小金井學長自身、本郷弓町の先生の許を訪れてこの寢耳に水の議決を齎したのであつた。こゝに當時の學長小金井良精博士の回顧談を掲げておかう。

私は明治十八年に歸朝し、この時病理學教室が出來て解剖學の講義を開始したのであるが、ツツメが半分許り済ませた後を九月の新學期から始めたので、その後半を岡田君等が聴いた譯けである。

何分學生時代の岡田君は東京醫學會を作るに色々と盡力し、何事をやるにも勞を厭はぬ人であつて、寧ろ勞を求めて働いたとも云はうか、辯舌も達者なら書く事も達者であつた。例へば當時學生は各中の墓地等をよく散歩したものであるが、岡田君等はさうした時にも早速墓の碑文を見て廻つて、面白いものは書き抜いてくるといつた調子で、學生時代から卒業して後もよく働いてゐた。卒業すると歸朝早々の佐藤三吉氏の下で下谷の方の外科をやリ、日清戰役に從軍して凱旋すると助手時代七年を経て外科の助教授になつたのである。

處で、明治二十六年の九月に私が醫科大學の學長になつた頃に、醫科大學に科を増設せねばならぬ事が決り、皮膚病、梅毒科、耳鼻咽喉科と齒科を置かうといふのであつたが、尤も皮膚病、梅毒科の方は別に科としてではなく宇野則氏が講義をしてゐたが、それも獨立させねばならぬとし、夫々擔當者を定めて洋行させねばならなかつたのである。

處が、當時は、金がなくて、官費留學等は容易に出來ない時で、留學生は皆私費洋行であつて、土肥慶藏君の如きも最初は私費洋行で、田かける前、時の總長渡邊洪基氏と同藩の誼みかて内々の話合ひでもあつたものか、後に渡邊氏が總長をよしてから來訪されて土肥君の盡

力を頼まれ、途中から官費留學生として皮膚病、梅毒科の擔當者にしたのであつて、當時はかういふ風で猪子吉人、三浦謙之助等々の諸君も全て私費で留學したのであつた。かういふ有様であつたから、よしんば留學生を派遣するにしても、五つもある各分科大學が互に奪ひ合ふといつた調子で仲々難しかつたが、廿九年三月の初め三日に大學の評議會があり、留學生の件が議題になつて銘々話し合ひ、當時一擧に三人派遣出來ることになつた。それを五大學で奪ひ合ふことになつて難しかつたけれども、結局、醫科大學で一名探ることになつたものの年度の關係その他で評議會の方も仲々に難しく、耳鼻咽喉科の新設といふ名目でとつたものである。

然し、かうして内々岡田君を洋行させる積りで耳鼻咽喉科の名目で取つたもの、それも前以て岡田君と打合せをしておいてからの話ではないので、その點甚だ心配してゐたのであつた。もと／＼岡田君は外科なのだが、耳鼻咽喉科の名目を以てせねば洋行させられなかつたので仕方ないといふもの、内意を聴いておく暇もなく、年度の關係で全く不意に急いだ話のこと、若し岡田が承知せねば困ると思つて内々心配してゐた、それで評議會が終り次第話さうと思つてゐたが、評議會の方が長くかゝつて、夜になり、遅くなつたのでその夜訪ねるには遅すぎたから、翌朝早くかけつけたものである。處が、岡田君は早速承諾してくれたので誠に安堵したものであつた。

何分岡田君は助手は長くやつてゐるし、腕もたつしや候補者としても適當の人と思はれた。かうして、皮膚病、梅毒科は土肥氏、また齒科は、次期の學長濱田玄達氏に引繼いでから、當時の外科の助手の石原君が擔當することになつて洋行したのである。

かうして、先生の耳鼻咽喉科主任候補への推薦並びにその留學は、事前に何らの交渉もなく全く寢耳に水の電撃的な決定によつたもので、二十九年三月三日の大學評議會で決定すると共に、同十二日には「耳鼻咽喉科研究ノ爲メ滿三年間獨留學ヲ命ズ」といふ辭令が下り、同二十七日に、エンプレス・オブ・ジャパン號に乗船して留學の途に上ることゝなつたのである。

かくて、外科を以て身を立てんとして長年間汝々として努力を拂つて來た先生は、こゝに於て遽かに耳鼻咽喉科に轉向するの止むなきに到つたのであるが、然し、この長い年月に於ける先生の外科學に於ける倦まざる切磋琢磨とその蓄積せられた知見、技能こそが、當時勃興しつゝあつた外科的の耳鼻咽喉科學の新傾向によく適應し生かされて、先生をして斯

界に於ける權威者たらしめ、且つは幼稚なりし我が國の耳鼻咽喉科學をして歐米諸國の水準にまでよく之を引上げしめたのであつた。

この點に就て佐藤三吉博士の言葉をこゝに引いておかう。

岡田君は近來の我が醫界に於ける偉人であつた。何を以てか偉人となすと言へば、その足跡をみれば明かなやうに、第一に耳鼻咽喉科學の統領となり、次に昭和醫專を残したことにあるが、その耳鼻咽喉科學に於て偉大な事蹟を爲したに就ては、勿論、同君の努力によるが、それに多少とも助けしものもあるかと思ふ。

岡田君が歸朝してより、その努力によつて斯界の開拓發展に尠からざる貢獻をなしたが、それに與つて力のあつたものは、岡田君が從來七年間も佐藤教頭にあつて外科をやつて來たといふ一事で、それが、その出世を尠からず助けたのである。

當時、耳鼻咽喉科學の學問の風潮といふものが獨逸でも著しく變はつてきて、舊來のものとなつて新風潮との違ひが現はれたものである。即ち、在來のそれには手術がなかつた。それで、例へば、耳を洗つたり、掃除をしたりして、單に藥をつける位のものであつたが、岡田君の留學並びに歸朝當時にあつては、漸次に外科的になるやうになつてきたので、岡田君等には極めて好都合になつてきたのである。

従つて、從來斯界に在る者には、外科的な新傾向はなかつたことゝて長い間手術等を必要とせず、金杉初め舊來の遣り方でもやつてゐたのに對し、六年間も外科をやつて來た岡田君にはこの新風潮に乗じて、その年功を修めた手腕を次で手術を以てしたので順風に帆を上げることが如き有様で斯界を捲席したものであつて、外科をやつてゐたことが、偶然同君の成功の土臺となつたのである。

従つて、この先生の外科より耳鼻咽喉科への當時の轉向も、先生に幸こそすれ何らの不自然さをも齎らさなかつたのみならず、反つて、その故にこそ、一方に本邦の斯界に於ける鼻祖、權威者としての名譽を贏ち得さしむると共に、こゝに於ては益々その前途をして多幸ならしめたのである。

かくて、先生は、小金井學長を初め、近親知己一同の理解ある勸告に従つて、歐洲に派遣留學されることゝなつて、家を疊んで御家族を里方の辯家に託し、慌しくも三月廿七日午前七時三十分新橋發の汽車にて、大學の教授、助教、助手

開業醫、知友等無慮百有餘名の盛大なる見送の裡に東京を出發されたのであつた。茲に當時の世評の一端を耳鼻咽喉科雜誌の「雜事片々」の中から抜いて参考に供しておかう。

岡田和一郎氏 氏ハ久シク醫科大學ニアリ風ニ敏達ノ開アリシガ今同耳鼻咽喉科專修ノ爲メ滿三ヶ年間獨逸二國へ留學ヲ命セラレ去月二十七日出發セラレタリ外科ノ素養アル氏ノ如キニシテ此科ヲ修ム是ヨリ知ル我ガ耳鼻咽喉科界尙ホ一層ノ光彩ヲ放ツベキナ余輩ハ翹首シテ氏ノ歸朝ヲ俟ツ者ナリ

○帝國大學ヨリ耳鼻咽喉科専門留學ヲ命セシハ實ニ一大慶事ニシテ本邦醫學歴史上大書ス可キ出來事ナリトス西園寺侯ノ御恩召カ濱尾總長ノ御氣付カ小金井學長ノ御考ヘカ宇野佐藤兩博士ノ御骨折リカ此一學科ヲ加フルノ運ビニ至ラシメタルハ抑誰レナリヤ

○岡田和一郎氏ハ立派ナ外科醫ニシテ其技量亦駿秀ナルトノ事ナレバ今日外科醫拂底ノ折柄世間モ外科ニテ留學サセタク思ヒ自身モソレが大望ナリシナランカ儘ナラヌガ浮世トヤラ是非ナキ次第ナリ(第二卷二・三號合併) 明治二十九年五月發行



明治二十九年三月五日歐直前外科醫局員のと別記念景影

一、留學の途次紐育にて異彩を放つ

かうして、先生は、明治二十九年三月二十七日朝東京をたつて、横濱に着き、エンプレス・オブ・ジャパン號に乗船し

て、翌二十八日の未明に解纜出帆、亞米利加經由で歐洲に向はれたのであつたが、この行には、工學部の山川義太郎、理學部の塀和爲昌、文學部の大塚保治等の諸氏が同伴し、またその同船者には、日本鐵道會社技師足立太郎、三村周、平岡良之助、日々新聞主筆朝日奈知泉、大阪紡績會社技師工學士菊地於三、其の他豪商愛久澤晋、吉田某等々の諸氏約二十名近くの日本人があつて、四月三日の神武天皇祭には、先生の發企によつて、之等の日本人は會費五弗を出し合つて船内にて宴會を催し、爾來、毎日互に相會し談じ合つて、氣樂な船旅をつゞけられ、四月八日、四千七百哩の海路を無事パンクパーに安着し、それより陸路を汽車にて亞米利加大陸を横斷し、諸處を見學しつゝ、紐育に向はれたのであつた。

その間の行に就ては先生の自叙傳の中にあるから、それを次に引いておかう。

第七 歐洲留學の途中

私の留學に赴くやうになつた経緯は先きに申上げた通りであるが、此頃は國家多事の折であつたから、文部省の留學生も日清戰爭中は一時杜絶して居て先に留學した藥物學の猪子吉人氏を始め三浦護之助、近藤次繁、土肥慶藏の諸氏も悉く私費を以て留學せられたのであつた。然るに私の行く時になつて俄然文部省から派遣せられる人が増へ、私の船には工學部から電氣の山川義太郎氏、理學部から純正化學の塀和爲昌氏、文科から美學の大塚保治氏等があり、私と都合四人が一時に留學するといふので世間の耳目を愕かせた、そしてこの一行の乗るのは「エンプレス・オブ・ジャパン號」で三月二十七日横濱出帆パンクパーに向ふのであつた。

内、文科の大塚氏は蒲柳の質であつたから出發に臨み、夫人閑秀歌人楠緒夫人から、醫者として私に呉々々健康上の保護を依頼せられた、ところが船は現今と異り僅か五千噸級のもので、航路は北寄り、殊に冬期であるから横濱出帆以來難航を續け十四日を費さねば目的地に到着せず、大塚氏は解纜以來一食をも口にせぬのみならず吐き續けであつて衰弱甚しく、パンクパーに着いた時は抱かねば上陸出來ない位であつたけれど陸地を踏むや否や元氣恢復し、支那料理屋で豆腐を蟹腹詰め込むやうな譯で一同熱眉を開いた。又船中では更に面白い出來事があつた。されど吾々一行は貧弱なる留學生であるから二等船客として乗り込んだが、この船には特別室というて一等の三倍を拂ふと一人で占領出來る豪華な「キャビン」があり、それに贅澤を極め込む或る日本人が乗つて居た、當時其人物の何者なるやは判らなかつたが、同じ船に乗り込んで居て同朋を見下して挨拶もせぬのは怪しからんといふので、私は抽籤の結果談判に行く役目に當りそんな贅澤三昧をする金があるなら少しは吾々を勞らつたら良からうと振言込むで御馳走をさせ船中の徒然を慰めた、ところが船が着くと

パンクパーの「ニュース」に Prince Akusawa arrived の記事あり、扱ては又彼の男が法螺を吹いて「プリンス」の名を騙つたか一同は大に憤慨して再度の談判をやり遂に記事取消をやらせた。然るに歸朝して私が三番町に居を構へると此の當の相手と塀を並べて町内住居するやうになり、某日奇縁を語り合ふた時、實はあの際は日本人は私一人かと思ひ恐怖心に驅られて特別室に乗り込んだが、船中で諸君に御目に掛り大に意を強うしたと後日の笑話の種になつた。扱て四月九日パンクパーに上陸した同行四人は兎に角ニューヨークまで行動を共にすることになり、途中シカゴを経て四月十七日無事紐育に着いた。そして塀和君が英語に達者であつたからいつも通譯を兼ね「コロンビヤカレッジ」の「ホスピタル」を參觀したら、その外科の教授は私の名刺を見て怪しげな顔附で患者を示し、この患者には罌丸が三つ有るがよく診て試みよと云ふ、こちら人も人を馬鹿にしてゐると思つたから、之は「ヒドロチエール」ではないか、日本にはそんな病氣はザラにある、米國ではそんなに稀有なるやと反問したら、初めて先方でもほん當の醫者だといふ事が判り、俄かに態度を更へて丁寧にして呉れ、改めて貴殿のお手並が拜見し度いから明日午前中に手術を見せて呉れないかと申込まれ即刻受諾したら同行の諸君は若し失敗でもしたら困ると云ふたけれど私は決して御心配なさるなと軽く引き受けて、翌日早朝病院へ行つたら私に渡された患者は十八九歳の幼齡の婦人で病氣は深在性の頸「アテローム」である。そこでいざ手術に取り掛らうとするとこの患者はワイワイ啼き出す、よくその譯を訂すと患者はあんな眞黒なインデアンやうな人の手術を受けたら一命も危からうと恐怖心を起したので、先方の外科醫も之は有名な日本の外科の大家で今度獨逸へ行く途中紐育へ立ち寄つて日本外科の妙技を示さうとするのだから、こんなチャンスは又と無い、そのチャンスに當つた貴嬢は將に果報者だとアメリカ式におだて上げてやつと納得させいよいよ手術に取り掛つた、元來自分は長年この手術には自信があり、且つ國際的名譽にも拘るのだから細心の注意を拂ひ、同行の人も立ち合せて、僅かの時間に全部殆んど無血的に剔出し學生始め一同の喝采を博したら翌日のニューヨーク新聞にこの事が「ニュース」として掲げられ計らずも日本外科の爲に萬丈の氣焔を擧げた、斯くして紐育から英國リバープールに渡り四月二十九日獨逸に入つたのである。

この紐育のコロンビア大學に於て、日頃先生の研究してをられたコカインの局部浸潤麻酔によつて頸部アテロームの手術を見事に供覽し、當時エーテル全身麻酔のみを使用して、コカインの局部麻酔を知らなかつた米國の醫界を驚かし日本醫學の爲めに萬丈の氣焔を吐かれた得意の事件に就ては、別に先生の詳しく書かれた短文があるから、それをもこゝに引いておかう。

『明治二十九年四月十七日ニューヨーク着同市滞在中コロムビア大學醫科醫院外科ニテ小生ハ當時稀薄「コカイン」液浸潤麻痺ニテノ外科手術ヲ研究後ナルヲ以テ同市ノ外科ニ於テハ全部「エーテル」全身麻酔法ヲ使用中ナリシヲ以テ時ニ外來患者ノ小手術ニハ至極便利デアル事ヲ説明シタ後チ其當局ノ教授ハ是非其手術ヲ一見致シ度シトノ希望ニテ頭側深在「アテローム」(中略)ヲ示シタルニ依リ之ヲ〇・三%「コカイン」液浸潤注射ニテ無痛のニ短時間ニ抽出シテ傍觀ノ學生等ヲシテ拍手セシメタ事ガアリ且ツ翌日、ニューヨークノ新聞上ニ記載セラレタ』のであつて、蓋し、先生の得意や思ふべく、また何處にあるも、何人に伍するも自信満々として、常に人に先んずるの優越感を以て對處する先生の面目のこゝにも躍如たるものがあらう。

かうして、紐育滞在六日にして、その翌々日の二十二日正午、一萬二千噸の「チュートニツク號」によつて紐育を發し、同二十九日の午後英國のリバプールに着き、直に汽車にて倫敦に向ひ、こゝに留ること四日にして五月三日倫敦を發し、クインボロー港より和蘭のフリツジゲンに渡り翌四日午前七時三十九分、目的地たる伯林のフリードリッヒ・ストラッセ驛に安着されたのであつた。

三、獨逸留學

明治二十九年五月四日、先生等一行は、朝日奈知泉氏より電報したる公使館書記官富岡氏、梶和爲氏より電報したる川北工學士等の出迎へを受けて、無事伯林に到着するや、先生は川北氏の案内でシャルロツテンブルグのグロール町に赴き投宿一泊し、長い旅路の疲れを癒やすと共に、その翌日、フリツツプ街の片山芳林氏の許を訪れたのであつた。が、その宿は嘗て先生の恩師佐藤三吉教授の留學當時滞在せられてゐた處であつて、片山氏の外に理學博士長岡半太郎、工學士今泉嘉一郎の兩氏が下宿してゐて、尙ほ未だ小さい一室があつたので、先生もこゝに下宿し、以上の諸氏と同居することとされたのである。

かくて、その夜は片山氏等の世話になつて、久しぶりで牛鍋日本食をとり、翌六日、アレキサンデルウーフエルのアイノルドの許に三輪學士及び宇都宮氏を訪ね、直に三輪氏と大學に赴いて、夏期入學の時期であつたから、入學手續を済ませ、馬車を雇ふて、フリツツプ・ストラッセ二三番地の前記の下宿に荷物を運んで、伯林滞在中の住居とされたのであつた。



明治二十九年九月二十日伯林留學中の先生先づけるに於て居る寓の街ブツリイフ

このフリツツプ街のバレストットの下宿は、長年日本留學生を世話してゐたので、日本人にも理解があり、先生等も愉快な生活を送ることが出来たのである。即ち、前記片山、長岡、今泉の三氏と先生の四人は、朝は珈琲とパン、晝は肉、魚にスープ、ケーク等で済ませ、夜は牛鍋で日本食をとり、米飯は下宿のミンナ嬢が極めて上手に炊いてくれ、四十マルクの下宿代で快適な日々を送つたのであるが、先生等の伯林到着と同時に聞かされたことは、文部省留學生の支給額二百四十マルクでは衣食住のみで、研究勉學には未だ尙ほ五六十マルクを要し、同じ陸軍省、宮内省關係の留學費四五百マルクと比較するも甚だ僅少であつて、之等の留學生と對等に交際すると非常な不足を感じるといふ事實であつた。

これ後に、先生が文部省留學生の學資増額運動を企圖された所以であるが、最初の中は、この二百四十マルク、即ち邦貨百餘圓を以て伯林生活を初められたのであつた。

かうして、研究の方は、大學に行つて、耳科をルーツエ氏に、喉頭學をフレンケル氏に、外科學をベルグマン氏に夫々就いて、そのクリニツクで毎日四五時間宛勉強されたのであるが、こゝに當時金杉英五郎氏に送られた先生の書翰の中に、その研究の豫定表が示されてゐるから次に掲げておかう。

拜呈爾來益々御盛大奉賀候 生田發ノ節ハ色々御厚情ニ預リ千萬恭ク奉拜謝候着後早速御禮ノ手紙差出可申管ノ處多忙ノ爲メ延引今日ニ至ル多罪御許容被下度候當地ニテハ「フレンケル」「ルーツエ」兩氏トモ幸ニ親切ニ致吳候爲メ其好都合ニシテ追々何カ「アルバイト」ヲ致度心掛中ニ有之候然シ「ルーツエ」氏ハ曾テ多ク「アルバイト」ヲ出シ其名聲ノ高キニ似ズ今ヤ已ニ老衰シテ其「クリニツク」ノ如キハ殆ンド價値ナク爲メニ之ヲ聽ク者甚ダ少ク時トシテ小生一人ノ事屢々有之英雄ノ末路甚ダ氣ノ毒ニ存候然レドモ其助手トシテ當時耳科的科ヲ以テ名ヲ博シ居ル「ドツェント・ヤンセン」氏アリテ一生懸命ニ勉強セルヲ以テ材料ハ日ニ多キヲ加ヘ生ノ研究ニハ最モ好都合ニ有之候

「フレンケル」氏ハ之ニ反シ當時ノ流行役者ニシテ患者モ聽講者モ共ニ多ク甚ダ盛大ニ候
生ハ二三學期間當伯林ニ留リ可成ハ一二ノ「アルバイト」ヲ爲シ後「ハルレー」ノ「シユワルツエ」氏「ミユンヘン」ノ「マツオールド」氏「ウキーン」ノ「ボリーツェル」氏等ニ就キ又時アレバ「プレスラウ」ノ「ゴツトスタイン」「ハイデルベルグ」ノ「ユーラー」等ヲ訪ヒ何レモ半期若クハ一期宛滞在ヲ爲シ其處ヲ習得致度心得ニ候(下略)

かうして、先づ先生は、専門上に關する學理並びに手術法等を最初に廣く研究の上、次いでアルバイトにかゝり、更らに轉じてはハルレー、ミユンヘン、ウキーン等獨逸各地の諸大家を歴訪して、その獨特の實地を研究して、他日歸朝の曉には日本の耳鼻咽喉科クリニツクをして世界に冠たる模範的なものたらしめんといふ一大抱負を懷いてをられたのであつた。

かくして、七月には、ルーツエ、フレンケル兩氏の一學期が終り、夏期休業中は、耳科、喉頭科の外來診察所へ行つて診療を手傳ひ、又は外科手術の傍觀に日を送つて専ら實地を研究し、又、特に大學講師ヤンセン氏と共に動物試驗を初め十月に入つてフェリエンクルツスが開講されると共にグエンテル氏の細菌學及びイスラエル氏の病理學の演習をとつて、休業後になすべき耳科並に喉頭科に於ける病理學的若くは細菌學的研究に着手し、冬學期から開始すべき「アルバイト」

の下地を徐々に堅められたのであつた。

かうして十一月冬學期が始まると先生の研究生生活は漸く多忙となつて、今度は咽喉學を十分研究する爲め、特に高い謝金を拂つて助手の位置をとり、大いに研學の効あつて、實地上的の研究も大略進歩したので十二月にはフレンケル氏から問題を與へられて愈々アルバイトに着手し、又耳科の方もルーツエ、トラウトマン兩教授の許にあつて實地研究を怠らず、この方も問題を得て、年が明ければ早々アルバイトに着手する豫定であつた。

因にこの二十九年末の先生の研究學科は、同十二月十五日附の手紙によると左の如くである。

生目下研究中ノ學科左ノ如シ

- プロフエツソール フレンケル 鼻咽喉科クリニツク
- 同 外來患者ノ診察 (生モノノ椅子ヲ得テ診察)
- 同 鼻及喉頭検査法 (是レハ學生ニ教ユル者ナレトモ) (他日ノ參考ノ爲メ聞ク)
- プロフエツソール ルーツエ 耳科クリニツク
- プロフエツソール トラウトマン 耳科クリニツク
- 同 耳科實地演習 (已ニ手術演習ヲ終リ候)
- 同 臨牀細菌學 (已ニグエンテル氏ノ細菌學ヲ終リ更ニ之ヲ學ブ)
- 同 鼻咽喉病組織鏡檢法 (已ニ是レハ前週ニ終リタレバ此人ト共ニ「アルバイト」ヲスル約束ニ候)
- プロフエツソール ベルグマン 外科クリニツク 毎日
- 同 キヨイニヒ 外科クリニツク 時ニ出席ス

かくて明ければ明治三十年、一月には、アルバイトは耳科、鼻科共に病理上の問題で主として顯微鏡上の仕事を取扱ふべくそのリテラツールの蒐集に着手されたのであつた。かうして二月も末には冬學期も匆々の裡に終りを告げ、留學六學期中の二學期を送られたのであつたが、その間に先生の今は唯一の近親者であり、理解者であつて、その學問上の、又は

生活上のバトロンともいふべき義兄榊俣博士の重患が傳へられ、先生をして焦心措く能はざらしめつゝ遂に二月六日喉頭痛にて食道狭窄を起し逝去せる旨の悲報が報じられて先生を痛恨せしめたのであつた。然し先生はその悲嘆痛恨の裡にも故國の家族を勵ましつゝ休暇中にも、午前は鼻咽喉科の外來を引受けて毎日四五十名の患者の診療研究に従事し、午後は實驗室にあつて顕微鏡上の研究に従事され、五月夏學期の始まる頃にはアルバイトも大部進捗し、その夏には、ロシアのモスコイで開かれる第十二回萬國醫學會に出席することを楽しみに、専らアルバイトの完成に意を注いでをられたのである。然し、六月も半過ぎてても、同宿の芳賀榮次郎氏には陸軍側より萬國醫學會へ出席するやう石黒軍醫總監よりの内命が傳へられて來たに拘らず、先生の方には文部省より何の通知もなく心甚だ平らかならざるものがあつた。

然し研究の方は相變らず午前中は患者の診療、手術等専ら實地研究を進め、午後は實驗室にあつてアルバイトに専念して筆を進め、本年中には尙ほ二三のアルバイトをも公表する心意氣であつた。

處で、七月に入ると、大學の方では、先生の義兄緒方正規博士と先生とを露國行きに豫定に人選のことと思つてゐた處が、六月三日付で文部省より「露國モスコイ醫學會出張ノ件裁許ニ及ビ難シ」といふ辭令書を受取つて失望落膽一方ならぬものがあつたが、これもローゼンベルグ氏其他同僚の懇懇勸告に従つて、旅費三百マルクを一時立替へて買つて、八月の十六日柏林大學の喉頭科の教授連と共にモスコイへ自費出張して、研究發表をされる決心を固められたのであつた。

そして、その間に「鼻茸の病理」に関する先生の第一のアルバイトも漸く完成して、それを近く開かる可きモスコイの萬國醫學會で演説、公表し、且つは又、フレンケル氏寶函に登載する豫定であつた。

かうして、第一のアルバイトが終ると共に、更に第二段のアルバイトに着手し、その考案中の三つのアルバイトを本年、又は來年の春までに完結する積りで専念されたのであつたが、八月に入ると間もなく、その七日には文部省から、モスコイ出張を命ぜられた義兄緒方正規博士が柏林に到着し、先生の許に投宿するを始めとして、海軍軍醫少監鈴木重道氏、



影撮念記の爲の者席監會學醫國萬府一コヌモ國露て於に林伯日十月八年十三治明

内務技師高木友枝氏、白井海軍大軍醫、又少し遅れては陸軍の小池正直氏等、萬國醫學會出席の人々が續々と先生の許を訪づれ先生の宿に同宿勢揃ひして、同十六日、先生が緒方、高木兩氏並に柏林大學の同僚諸氏と發足せるを最後として、いづれもモスコイへ向つて續々と出發したのであつた。

かうして先生は、十七八日頃にモスコイに着き、コンGRESに出席して、同地に一週間許り滞在の後、ペーテルスブルグに出て、九月上旬柏林に歸られる豫定であつたのである。

四、第十二回萬國醫學會出席

この萬國醫學會 (Congrès International de Médecin) は、第十回を一八九〇年(明治二十三年)八月四日より九日迄柏林で開き、第十一回は一八九三年(明治二十六年)九月二十四日より十月一日まで羅馬で開催して、この第十二回が一八九七年(明治三十年)の八月十九日より二十六日までモスコイで開催されることとなつたもので、これには露國皇帝ニコラス二世が賛助員長となり、露國全帝國を擧げてその開催準備に忙殺され、全世界各國の代表者、醫界の權威、碩學がこれに雲集して、その權威あるアルバイトの講演發表に妍を競つたのであるからして、柏林にあつて野心に燃ゆる先生の坐視せんとして坐視するに忍び難かつたことは察するに尙ほ餘りあるものがあらう。

かくて一貧生たる先生の列席への熱望は無理解極まる當局の却下にも拘らず、敢然大枚三百マルク餘の借金を背負つて自費出張し、その研究成果を全世界の權威者の前に公表したのみならず、その擔當たる第十二部門の耳鼻咽喉科部會の名譽會頭の一人に推されるの面目を施し、而もこの會に於て世界の各權威者と親交を結ぶ機縁を與へられたことは又先生の一大收穫でもあつたのである。

當時の會況の一斑を東京醫事新誌のニュース欄からこゝに引用しておかう。

○第十二回萬國醫事會議開設準備一班

本年八月十九日より二十六日まで莫斯科府に於て開設せらるべき第十二回萬國醫事會議の準備は目下殆ど全く整頓を告ぐるに至れり會議の組織上内部の順序に關する重要な問題を審議するの任務を帯へる準備委員と共に莫斯科に於て既に其事務を執れる開設委員の中に頃日新に同府大學の博士若干名を加へたり。

今回の會議は單に醫師のみに限らず員外の名儀を以て著名なる或る種の學者及齒科醫藥劑士及獸醫にも參列を許す筈なり而して參列を許容せられし留の納金を拂ひたる者は議事に參與するの權利並に報告類其他議事録等を受領するの權利を有す議場の討論に附すべき問題及報告等の提出に關する申込期間は七月十三日までとす

議場に於て爲すべき一事件の報道時間は二十分より多きに上るを許さず會議の公式語は佛語を以てす但し總會に於ては爾他の歐洲國語をも使用するを得べし又部會議に於ては佛語、獨逸語、英語及露語の四國語を使用するを得べし會議の議事は十五部に別れり其部別左の如し

- 第一 人體學、解剖學、組織學
- 第二 生理學、生理的化學
- 第三 病理學、病理解剖學
- 第四 治療學、藥劑學
- 第五 內科
- 第六 小兒科
- 第七 神經病學、精神病學
- 第八 皮膚病學、微毒學
- 第九 外科、齒科
- 第十 軍醫科
- 第十一 眼科
- 第十二 耳、鼻、咽喉科
- 第十三 産科、婦人科
- 第十四 衛生學、衛生統計、傳染病學
- 第十五 裁判醫學

既に開設委員の許に露國の醫學博士其他の醫學專門家より會議に提出すべき問題及報告等の通告狀を發送し來りたる數は頗る多きに上れるのみならず外國よりも同様の申込を爲し來れる者尠からず露國の鐵道は勿論佛蘭西、伊太利、西班牙、澳匈國、諸威及土耳其の鐵道は參列員のために無料乗車の利便を與へ又大西洋、地中海其他の海路に於ては船賃の三割乃至五割の割引を爲す筈であり其他開設委員は參列員のため莫斯科に於て都合三千餘の宿房を準備し其一半は代料を拂はしめずして他の一半は非常の減價を以て宿泊せしむる目的なりとす。

彼得堡に於ては博士パレウーチン委員長と爲り參列員接待のため特に事務所を設定し彼得堡居住の總醫師をして接待の事に當らしむる筈なり外國參列員の彼得堡に到着するは閉會後即ち八月二十八日の豫定にして當日は夕景より貴族會館へ招待し醫學會の代表者若干名をして専ら接待の事を擔當せしめ翌二十九日はホテルゴーフ及カーメンスキ、オストロフへ案内し其翌日即ち三十日は「ピロゴフ」外科博物館の開場式を行ふ日取なるを以て此式場へ招待し此夜は特に參列員のため夜會を催す趣向なりとす(本年五月廿日又廿九日露國官報)

列國醫事會議

列國醫事會議は本日八月十九日莫斯科に於て開會しセルギユス大公は露國皇帝に代り開會式を執行せられたり參列員は都合七千三百人に達し其半數は外國人に屬せり副議長に當選したる諸人の内には北米合衆國よりの派遣員ドクトル、テイロル及ドクトル、ピリンダの兩氏も加れり(八月十九日莫斯科電報)

莫斯科中央醫學會

八月十九日を以て開會、初め文部大臣「アルヤノフ」侯爵に挨拶の辭を述べ……次で「コレレル」氏は獨逸の代表者として喝采裡に演説を終へたり、又獨逸より名譽首坐として擧げられたるは「ウキルヒオー」「ライデン」「チムセン」「ワルダイエル」の諸氏にして殊に「ウキルヒオー」氏の名の呼ばれたる時は喝采の聲しばし鳴りも止まざりき其式を終りて後「ウキルヒオー」及び「トマスロスター」「ブルントン」二氏の演説ありたりと云ふ。

かうして、コンGRESは十九日の午前十時より開會され、晝食後、午後からは各國代表の演説に交つて我が芳賀榮次郎氏も日本代表として一場の演説をなし、翌二十日から各分科會に入つたのであつたが、先生等の一行は途中ワルシヤウで緒方、高木の兩氏と別れ一泊したので遅れて、開會式當日の十九日の午後三時モスコに到着したのであつた。こゝに本コンGRESに出席、活躍した日本人の氏名を参考までに掲げておかう。

萬國醫學會に於ける本邦人出席者及演説者

本年露國「モスコ」府に開かれたる萬國醫學會へ出席せられたる本邦人は從來になき多數にして殊に有力家の代表者多かりし爲め大に好評を博したりと云ふ今左に本邦人の出席者並に演説者の氏名を掲ぐ

出席者

究と名けて巡廻旅行を許可され或は何會臨席と稱して英佛の出張を命ぜられ三年の留學期中同一人にして二回三四の旅行を企つ然るに余獨り未だ此巡廻旅行を爲さざるのみならず此重要な時に際し此熱心を以て企てたる學會出張をすら終に許可の恩命を蒙る能はざるは抑も何の事かと自ら陰に不遇を嘆じ意らく余は宜く傍觀者の位置に立つべし余不幸にして斯學會に列するを得ずと雖も我れに錯々たる政府委員あるあれは事已に足矣如かず余は尙ほ靜に伯林に留まりて専ら斯學の研究を續けんにはと即ち出張を中止し我同僚教授講師助手等の諸氏に其旨を傳へたりき衆皆強て自費出張を勸告して已まず就中余が益友伯林大學鼻咽喉科講師ローゼンベルグ氏及耳科講師ヤンセン氏余に告げて曰く兄の朋友政府委員として四五名露國に出張せば邦家の光輝を放つ素より論なし然れども皆な一方に偏す即ち四名の内二名は衛生微生物學者にして二名は軍陣外科學者なり去れば此等の諸氏或は衛生學部及軍陣學部に於て遠來の新説を述べて大に議論を上下する事ありと雖も他の十部門に於て日本醫學の進歩を知るに由なし又兄今出張を中止して日本醫學の發揚を特派の委員に一任したりと諸氏は決して兄に代りて我部門に於ける日本醫學を紹介し得る者にあらず兄宜く勇を鼓して予等と同行し大に日本醫學の進歩を我部門に於て論述する處あれと於是余も亦大に心を勵まし曰く余微力素より其任に當らずと雖も今余にして出張せんば我部門に於ける進歩を知るに由なし故に余と雖も之に臨み諸大家の論議するを聴き且つ少くとも我邦の體面を汚さず且つ勉めて日本の醫學の幾分を國際界に紹介するを得ば此行千金を費すとも何かあらんや況や學會參列者は露國皇帝及政府の特殊なる保護に由り旅費を甚く節減し得るに於てをや乞ふ兩君余を伴へよと心一決直に莫斯科府萬國醫學會總書記長教授ロート氏に向つて會員たらんことを申込み同時に會費獨逸貨二十マルクを拂込み又學會參列者宿處委員長教授ナエルウキンスキー氏に向つて莫斯科に於ける宿處の準備を依頼し日ならずしてナエルウキン府私立耳鼻咽喉科病院院長ルニン氏に向つて益友ローゼンベルグ氏の手を傳へてナエルウキン氏の宿處を依頼し日ならずしてナエルウキンスキー氏は余に「ホテル、ジュフランセ」を指定しルニン氏自宅に於て賓客として待つべしとの答詞を與へければ爾來惟だ總書記長ロート氏より會員證と鐵道無賃乘車券とを送附し來るを俟つのみならず光陰は白駒の如く馳せ余未だ會員證と乘車券とを得ざるに已に本邦特派委員高木技師は七月下旬を以て余等の許に安着し宿を余と同ふし又た從來同宿せし芳賀博士は前きに命令を得たるを以て先着として八月二日を以て伯林を發し「ハートルスブルグ」に進み又後ち數日にして自費出張を企てし海軍大軍醫白井氏も亦た倫敦より余の許に來り宿亦た數日にして緒方教授は「マルセーユ」巴里を経て鈴木海軍少監は米國「ロンドン」を経て何れも安着し皆余の許に集れり八月十三四日の頃鈴木高木白井及伯林より自費出張を企てたる藤浪學士等の諸氏は皆無賃乘車券を得たるを以て鈴木白井藤浪の三氏は已に十四日を以て旅裝を調へ伯林「フリードリヒ」街停車場より莫斯科に向つて出發し又余は同僚ローゼンベルグ氏と十六日を以て俱に共に出發するを約せるを以て之を緒方高木兩氏に語り余等と共にせん事を請ひ諸氏之を諾す然り而て余は十四日午後にも尙ほ未だ無賃乘車

券を手にはせず調らく官費出張の有無敢て意に介するに足らずと雖も寒生にして然かも自費出張を企てつゝある余に在りては之れを得ると得ざる經費上に關する事決して少ならず豈寸時も猶豫するを得んやと直に電報を莫斯科府萬國醫學會總書記官長ロート氏に發し至急の發送を促したり然るに同書記官は之れに對して初め乘車券已に盡きたりとの返電を與へ余をして失望の極俗諺の所謂泣面に群蜂とは即ち余の事にして天此寒生を憐ますして却て徒らに余をして他より二三百圓多く消費せしむる乎噫已矣との嘆聲を發せしめ斯くて余は金囊を披らき豫算案に改正を加へん考一考するに余には文部省より仕給の月額資金の他に一文も余裕なし如かず憾を遺して今日の出張を中止せんにはと再び其由を同僚に報げんと將にローゼンベルグ氏を訪んと欲せし瞬間即ち十五日夕莫斯科萬國醫學會書記官長ロート氏より電報あり昨日乘車券を發送したりと於是予再び愁眉を開き天未だ全く之を捨すと喜び再度中止を思ひ留り茲に行李を調へ旅行の準備に手を着け又即ち十六日は朝來郵便脚夫の乘車券を配付し來るを俟ちつゝ先づ露國境アレキサンドロフまでの巡歴旅行乘車券を購ひ露國領事館に就て旅行券の奥書調印を依頼し杯して時は益々進んで出發の時刻は近きぬ然れども余が希望せる無賃乘車券は終に十六日午後七時に到るも余の許に達せず於是三度び甚だ失望せしも事茲に到りて女々敷出張を中止することを得ず況や已に獨領乘車券まで購ひ了したるに於てをや即ち緒方高木兩氏と共に伯林フリードリヒ街の寓宅を出てフリードリヒ街停車場に到り同僚ローゼンベルグ氏に會す、聞く前數日毎に莫斯科行の上中列車は非常に充滿にして發車時の混雜前代未曾有と稱す此日恰も萬國醫學會開會の前日にして此日出發せば正に開會の當日莫斯科に到着し得るの最後の「日なりき去れば此日此列車に乗して莫斯科に行かんと欲する同僚却て前日より多く其混雜得て名狀すべからず數百の同僚は競て其席を索め後れて來れる者は已に數日前場處を購ひ置ける者と雖も終に其場處を他人に奪はれ容易に席を得る能はざりし就中ケハイムラート、フォン、ベルグマン氏の如きは余とローゼンベルグ氏の隣席を已に數日前より購ひ置たるに氏來れる時已に他の同僚其席に在りベルグマン氏乘車券を示し其席に就かんとせし先着同僚の此席を失へば他に席を求め難きをを知るを以て容易に立ちて席を讓ることを爲さず於是ベルグマン氏怒聲雷の如く停車場長を呼んで取締の不都合を責め且つ自ら此席に就くの權利を有するを主張し余も側らに在りて彌次馬的にベルグマン氏を助け漸くにして同氏席に就くを得たりき以て其混雜の甚しかりしを證するに足らむ去れば余等三人（緒方、高木兩氏と）の席を同ふするが如きは思も由らざる事にして即ち余とローゼンベルグ氏は一ヶ月前ロート氏の手にて注文し置きたる中等寢車に在りて緒方高木兩氏は最後の上等列車に飛込みぬ斯くて車は時刻を違へず一聲の汽笛を合圖にフリードリヒ街を出發し予等は予等を送り呉れたる山形石川伊藤三輪今居桐淵増山佐多田野の諸氏に別を告げ車に乗せられて進む予時午後九時なりしを以て同室の獨逸人等は皆な車内料理店より食物「ビール」を取寄せ余は費用節減の爲め下宿より持參せる紙のみの辨當を開き共に俱に夕食を取り後ち談笑數刻盡きて皆な既定の床上に臥しぬ然しども余は乘車後緒方高木兩氏を見ず兩氏の久しく歐洲の風に慣れず加ふるに此

混雑定めて普通列車内に在りて眠ることさへ難かるべしと案じ其動靜を知らんと欲すること切なりき然れども余は初め兩氏の處在を知らず唯だ徒らに思を勞するのみなりき斯くて夜半二時車は國境アレキサンドロポに到着露國の常習先づ巡査は各列車に來りて旅行券を受取り役處に持ち歸りて領事典書調印の有無を質し(コンダレス參列者は稍や寛大にして宗教の異同等は問はざりし)稅官々吏は多くの入夫をして携え來れる行李等を悉く一處に運ばしめ其「コンダレス」行なるや否やを質して參列者の荷物へは無檢査にて通行許可の證明書を張付け後ち荷物は再び車内に運ばれ旅行券は再び巡査より返付され凡そ三時間餘の停車にて再び進行を進めたり余は此際アレキサンドロポ及ワルシャワ間の中等乗車券を「六ルーブル」にて求め(無賃乗車券を持する者は此不幸なし)且つ緒方高木兩氏を余等の座車内に伴ひ甚だ厭からざれ共其普通列車に優る數等三人余の寢床上に列坐し坐睡を試みしに皆な良く眠ることを得たり。

十七日午前十一時車はワルシャワ市停車場に着すワルシャワ市萬國醫學會地方委員は懇ろに余等參列會員を停車場に迎へ「ホテル」の周旋などをせり於是余は直に某委員に乞ふて曰く余已に會費を納め會員たるの利を有せるに係らず終に無賃乗車券の送付を受けず甚だ困難を極む貴下幸に余の爲めに乗車券を索め呉れよと委員アレキサンドロフ氏は渠は甚だ不都合なり中央事務員は前日來甚だ混雑を極む爲めに事故に至る貴下乞ふ之を恕せよ君心を安せよ余必ず後刻を期して乗車券を呈すべしと答へくれ余等はローゼンベルグ氏と共に曾て豫約し置ける「ホテル・ブリュール」に投ず「ホテル」は公園に對する高樓にして樓上の眺望甚だ良し余等直に身體を清め衣服を改め珈琲を命じ休む事少時にして歐洲「ホテル」より余に電話を通ずる者あり余之を聞くに前の學會地方委員が直に來るべし乗車券を渡すべしと云ふにありき仍て余は緒方高木兩氏と共に馬車を命じて其「ホテル」に到り委員アレキサンドロフ氏を訪ひしに時刻遅れたるが爲め同氏已に其處にあらず於是乗車券汝ち焉ぞ如斯苦れを苦むる事の多きやと嘆聲一番直に人夫を案内として同委員を自宅に訪ひ刺を通じて來意を告ぐ主人不在なれども夫人其旨を覺り余等をしてくれく手續を爲さしめ午後四時を期して乗車券を渡すべしと言はれければ余等は再び曾を約し直に辭して露路公園を散歩し「ホテル」に歸り中食を取る斯くて緒方高木兩氏は政府委員なれば開會の當日に莫斯科に在らざるべからず然るにワルシャワ莫斯科間の行程三十一時を要する故二十八日一日ワルシャワに送るときは開會當日の出席甚だ覺束なしとて午後四時乗車券を得て直に五時發の臨時汽車にて出發することにしぬ而して余及ローゼンベルグ氏は他の一二伯林同僚と共にワルシャワに一泊することに決し余は緒方高木兩氏と共に地方委員の許に到り漸くにして乗車券を手にし次て兩氏を停車場に送り後ち「ホテル」に歸りローゼンベルグ氏と共にワルシャワ大學耳鼻咽喉科教授ヘーリツグ氏を訪ふ同氏已に莫斯科に出で、在らず單に「グロニツク」を一覽し去りて市内を散歩す市は露領ポーランドの首府にして人口六十萬の大都市なり市の中央にソキケル河が流れ之に架せるアレキサンデル橋は長さ五百迷突にして鐵造なり是れ當市壯觀の一とす爾他寺院官署等觀るべきもの多かりしも余等は之を觀るの時を有

せず午後七時當地第一の「ホテル」歐羅巴に到り其食堂にて晩食を取り終りて尙ほ少時市内を散歩し十時「ホテル」に歸り寢に就く此夜余は「三ルーブル」を投じて中等の客室を借りければ至は廣く家具は完備し裝飾亦た甚だ美なり必ず快く眠り得べしと信じたりき然るに半夜人靜り燈又た消へたる時に乗じ余の旅に勞れたるを好機となし群を爲せる「ワントエン」幾十となく余の身邊を圍み從つて觀せは從つて來り東天光を放つ頃に余は全身に刺斑を以て被はれ之に伴ふ搔痒と灼痛とは大に余を神經過敏となし爲めに余をして終夜迄も眠る能はざらしめたり是れ「ワントエン」攻撃に敗を取る第一なり翌十八日午前十時余はローゼンベルグ氏及他二三の伯林同僚と共に「ワルシャワ」停車場より無賃乗車券にて上等座車内に乗込み莫斯科に向つて進行す露國は殊に此地方に於て三ヶ月來毫も雨降らざりしが爲め道路甚だ乾燥し乾燥せる細砂は灰の如く風に送られて車内に飛來し寸時も車窓を開く能はず然れども燒が如き熱さと多人數の群集との爲め余等は車窓を開きて風を迎へ且つ空氣の交換を計らざるべからず去れば顔面手腕は恰も阿部川餅の如く細砂を以て覆はれ被服及携帶品は之に被はれて皆な本來の色を奪はれ是れ路上最も不快に感じたる一現象なりき然れども露國「コンダレス」委員の用意の周到なる即ち各停車場處在地に於ける實地家若くは軍醫等の家族は多くは接待委員に選ばれ汽車の停車場に着する毎に直ちに參會者を迎へて食事休息等に不便なからしむ此等の委員は男女共美き服を着し胸邊に接待委員の徽章を付し「ブラットホーム」に在りて或は佛語或は獨逸語或は英語を以て相接し飢へたれば喰、渴すれば飲めと余等參會者を食堂に導き周旋到らざる處なく余等露語を解せざる者をして毫も遺憾なからしめたり是れ途上余等の最も愉快に感じたる現象にして然かも此良現象は前に述べたる不快の現象を打ち消すに餘りありとまで感じたり斯くて身體衣服こそ細砂の爲め汚れたれども一語だも解せざる他郷に在りて飢もせず渴しもせず到る處に優待を受けつゝ車は三十餘時の長路を走りて十九日午後三時莫斯科停車場に着しぬ余及ローゼンベルグ氏は在莫斯科の一友人耳鼻咽喉科専門家ハッドリツグ氏に迎へられ(大學々生の接待委員章を付したる者も多く迎へたり)停車場上等待合室に入る此處に「コンダレス」宿處委員出張所あり余等は此處に到り來着を報じ且つ曾て配付されたる宿處券を示す於是委員は懇ろに之を記入し更に宿處指定證を與へ余等をして馬車に乗り「ホテル、ジュ、フランセー」に赴かしむ此時ハッドリツグ氏曰く本日已に開會式終れり、夕より「クレイメル、パツサージュ」にて宴會あり又入場券は「マナーセ」内中央事務所に於て渡さるべし故に兩君先づ指定の「ホテル」に行き直ちに其の料理店に來れ余は其處に於て兩君に會し晩餐を共にし終りて大宴會に同行すへしと余等は之を諾し再會を期し鞭高く馬を驅りてツウエルクスカー街の「ホテル」に到る凡そ三十分にして「ホテル」に達し委員の與へたる指定證を出し投宿の旨を告ぐ門番毫も獨語佛語を話さず然れども余等の聞く處にては夜來の混雑終に一室も餘さず乞ふ去りて他の「ホテル」を訪へと云ふ者の如し是余等六に怒り主人を呼ばしめ責て曰く「コンダレス」當時に於ける混雑は豫め人の想ふ處なり去れば此地には初めより宿處委員あり遠來の會員をして宿處混雑なからしめん事を計り余等も亦其今日

あるを豫知せるを以て已に一ヶ月前宿處委員に請ふて該「ホテル」を指定されたり然るに今にして各至充滿一室をも餘さずとは抑も何等の不都合ぞと主人低頭罪を謝し今や如何ともするなし仍て今より家僕を同伴せしめ他家を紹介すべければ兎に角其處に宿せよと余等已を得ず之を諾し家僕に導かれ馬車に乗りて進む凡そ一町計にして表面上「ホテル」の體裁をなし美装せる門番の來客を待つあり余等其處に到れば門番懇に余等を迎へ且行李をも運び入れぬ余等先づ安心し好「ホテル」を得たるを喜び直に「ルーブル」を馬車に拂つて階上に上り一の小さな待合室に入りて休息す暫時にして六十歳計の老婦仙人の如き顔色に秣末なる綿の衣を着して出て來り佛語を以て余等を迎ふ於是余等は室を一見し度しと望みければ室は二階と三階に十餘あり君其中より選べと當時余等陰に此莫斯科市混雜の時に際し如斯「ホテル」に尙は十餘の空室あるとは甚だ解せずと怪み直に老婦に隨て空室を巡覽す室は悉く脈小屋と等く板床にて絨氈を敷かず四壁素地を現はし一も裝飾なし唯だ室の一隅には且つ粗なる木製臥床一臺を備ふるのみ余等大に驚き去りて他の室を覽る概ね大同小異にして一も宿處に充つべきものなし於是余等相共に語りて曰く今や莫斯科に萬餘の醫士集會して「ホテル」下宿屋は素より多くの素人家に到るまで悉く其宿處に充てられ余等の如く遅れて來れる者は轉た宿處のなきに困める場合に際し獨り此家に限り十餘の空室を有し然かも一人の客人の有らざるは毫も怪むに足らずと又余等已に大に究すと雖も尙未豚群に伍するを耻つと直に去りて他に宿を索めんとせり時に前に伴ひ來れる家僕は去りて已にあらす門番をして行李を運び出さしめんとせしも彼れ怒りて命に應ぜず遂に已を得ずローゼンベルグ氏家内にありて行李を衛り余は家外に出て、馬車を雇ひ取者をして行李を運び出さしめ後ち共に馬車に乗りて去る然れども余等は其行く處を知らず考一考如かず先づ「コングレス」宿處委員の許に到り其不都合を責め更に宿處を索めんにはと再び三十分を費して停車場に到る時已に遅く前の委員出張所は閉ぢられて人跡なし於是炎天焼くが如きも室内に入りて休むを得ず飢渴迫りて眩する如きも之を醫するの法なく兩人馬車上に在りて徒らに長大息するのみ斯くてローゼンベルグ氏は遇々余等を停車場に迎へ喚れたるハワードリング氏の住所書を懐中より探し出し之を一見せしに露字にて記せし者なりしを以て余等は之を讀むことを得ず之を車夫に示せしに彼れ又た讀む能はず遂に停車場附近の巡查に之を示し同人をして車夫に行く所を命ぜしむ然るに其處は甚だ遠く凡そ四十分にして漸く達す余は車上に残りて行李を衛りロー氏車を出て二階に上りハワードリング氏住宅を訪ふ稍や十分時にしてロー氏悄然として余の許に來り噫已矣ハワードリング氏も亦た家にあらず而して家人毫も吾れを解せず最早如何ともするなしと於是余ロー氏に云ふて曰くハワードリング氏前に「マナーゼ」中央事務所云々と語れり余等宜しく「マナーゼ」に到るべしと即ち車に「マナーゼ」の一語を以て行く所を示す車夫之を解し直に馬に鞭を市の中央を驅りて「マナーゼ」に進む行く事二十分にして各國々旗の翻々として屋外に飛び京都三十三間堂より尙ほ大なる一堂あり門前幾百となく馬車群集し數十の警官其邊を戒して而して「フロツクコート」を着し高帽を戴き胸邊に會員證を掲げたる内外國人の織るが如く出入せるを

見車夫余等を其前に留め指以て其「マナーゼ」なるを示す余等門上に大書せる萬國醫學會中央事務所なる張札を見て其果して然るを覺ふ余は尙ほ車上に在りて行李を衛りロー氏は群集と共に屋内に入り住所委員を尋ね就て其由を訴ふ委員長ナエルウキンスキー氏大に其不行届を謝し直に余等に一素人家にして家人の良く獨語を解し得る者を指定し呉れたり由りてロー氏欣然として出て來り漸く安心の端緒に就けり乞ふ共に來たれと更に車夫に命じて指定の宿所に赴かしむ暫時にして其家に達し來意を告ぐ其時余等を迎へたるは妙齡の美形にして輕裝活潑良く獨語を解し且つ語る即ち同輩先づ余等に向つて遠來の勞を慰め紅茶を出し後ち室を示して曰く不意の尊來未だ室を清掃せず今ま少時を経ば母も歸宅すべく又室も整理清掃せらるべしと余等室の甚だ美ならざるを感ずと雖も貧生の余素より贅澤するのときにあらず況や住所選定の爲め已に大に疲勞したるときに於てをや直に満足の意を表し且つ陰に讓の良く獨逸語を解し得るを愉快に感じ車夫をして行李を家内に運ばしめ賃金「三ルーブル」を拂つて去らしむ余等は室に入り行李を解き身體を清め衣服を改め終れば午後七時なりき

余等は晚餐を取らんが爲め更に馬車を命じて料理店「セルウキンスキー」に到る大なる食堂五六百の客を以て充たし(多くは「コングレス」會員)漸く室の一隅に於て一卓を得兩人之れに對坐し食物を命ぜんとす給子來る一語も解せず給子長來る彼れ良く獨語を解す直に「ルーブル」の中食を命ず飢饉を患ふるとき何物か余等の爲め甘味ならざるなし運び來れる食物は悉く喰ひ盡し麥酒一瓶以て微醉を呼び直に去りて「コングレス」大宴會に赴くとせしも朝來の奔走甚だ疲勞を來し寧ろ歸宿一睡を取るに如かずと兩人歩して下宿に至る午後十時なりき下宿には主婦已に家にあり余等の室は良く清掃され表面上大に満足すべき良室なりき余とロー氏紅茶を喫し共に別れて寢室に入る別に臨んで共に語りて曰く神に謝す共に今夜こそ安眠せらるべしと余は寢臺上に臥し眠るに先だち明日よりの日程を通讀し何日何處にて演説すべき日割なるや等を尋ね概ね其要領を得消燈一番將に寢に就かんとす然るに須臾にして或は頸邊或は上肢下肢に交も癢痒を起し之を搔けば立ちて甚だ腫脹し腫脹せる部は灼熱疼痛甚く十二時を報ずるも二時を聞くも神經は益々鋭敏となり毫も眠る能はず於茲再び燭火を點じて床上を檢するに無數の「ワツツエン」蟲々として蛸集し加ふるに無數の虱の活潑に飛動せるを目撃し忽ちにして二十餘の「ワツツエン」と五六匹の虱とを捕獲し後ち眠らんと欲せば又た襲來を受け一起一臥の間に毫も眠る能はずして夜は消へて二十日となり又此日朝來疲勞甚しけれ共午前九時我耳科及鼻咽喉科部開會式を舉行され次で喉頭結核の宿題に就ての討議ある筈なるを以て強て出頭せざるべからず即ち七時余は室を出て主婦の室に到るロー氏已に余に先だち席に在りて甚だ不平の顔色を示す然れども初め其何の故たるを知らず主婦余を見て朝の挨拶を爲し昨夜安眠せしやを問ふ於是余毫も恕せず「ワツツエン」及虱の爲め終夜攻撃を蒙り終に一睡も取る能はざりしと答へければ主婦と嬢とは共に甚だ困れる顔色にて「ワツツエン」は露國の名物なり去れども妾等は最も清潔に掃除するが爲め妾等の許には「ワツツエン」のあらざるを信ぜり然るに足下の言甚だ疑はしと大に予を責むロー氏之を聽き傍らより之を助けて曰く

余前に單に種々なる差支起りて終に安眠するを得ざりしと言ひしは即ち此事にして余も亦岡田氏と等しく「ワンツェン」に攻められしが爲め眠る能はざりしなりと於是主婦顔色を失し答ふるに語なし漸くにして珈琲を終り時刻の來りしを以て兩人共に禮服を着し莫斯科大學書籍館圖書室内に開かれたる鼻咽喉科部に出席したり此日當置會頭莫斯科大學教授ステパノウ氏佛語を以て簡單に閉會演説を朗讀的になし次で伯林喉頭病學會代表者講師ハ、ハイマン氏を乞ふて名譽會頭席に就かしめ同氏其席に就き簡單なる挨拶をなしたて日程に上るべき旨を告げ萬國醫學會宿題たる喉頭結核局處療法の討議を爲さしむ巴里のユール氏紐育のグライツマン氏は最近一題に關する抄録を述べ次で佛のホライ氏は喉頭結核外科的療法に就て新「ナルレアン」のシエケレル氏は喉頭結核の電氣療法に就てメキシコの教授ゲヒノ氏は喉頭結核療法に就てベルー氏は喉頭結核の診斷に就て等の演説あり是れに次でウキンの教授ヒヤリ氏ハイデルベルグの教授ユーラース氏等の討論ありて局を結べり是を要するに喉頭結核の療法は初期に在りては局處藥物療法にて治癒することあるも後期の者即ち軟骨を侵せる者には外科的療法を要すると云ふにあり其外科的療法には種々説を異にせり(委細は學會記事に譲る)名譽會頭ハイマン氏は他に發言者なきを見て自ら演壇に上り喉頭加答兒の解釋と題したる演題に就て本症の病理解剖より論出して加答兒の名稱の不當なるを論破したり然れども余は格別の新説とは認めざりし終りて一二の討論ありて十二時閉會を告げぬ於是余は當置會頭ステパノウ氏に刺を通じて來着を報じヒヤリ、ユーラース、クラウゼ、カステス、ハイマン氏等の諸氏に自分を紹介し後余の演説に於ての打合せを爲し且つ會頭より今夕會頭の催さるべき晩餐會への招待状を受取りハイデルスブルグのルニン氏及莫斯科のハウドリッング氏に導かれて會場を去り中央事務處に到りて中食を取らんとす此時午後一時食堂は立錫の地なきまでに會員を以て充たし余等の到れるとき既に一卓ども餘さず余等奔走卓を索むる事久し遙か隔りたる一隅より日本人岡田氏來れ此處に席ありと大聲余を呼ぶ者あり余不意を打たれ驚き之を注視せば禿髮白髯の老翁伯林のケハイムラート、ゲルハルト氏なり仍て余は直に同氏の許に到り握手厚意を謝す曰く余一人なれば直に貴命に従ふ然れども余に三人の同伴者あり貴下此同伴者にも席を與ふる事なくんば如何ともするなしとゲル氏恰も卓邊四脚の空椅子を有し獨り之を専らにせるを以て余殊に斯く述べしもゲル氏は教授ライデン夫婦セナートル等諸氏の爲め先着此椅子を豫定せし者なれば之れに應ぜざりし仍て余は已むを得ず厚く禮を述べ辭して同僚の許に到り暫くにして一小卓を得たり去れば余等は一椀の肉羹汁に一片の牛肉とを命じ之を喰ふて去る此時ルニン及ハウドリッング兩氏余等の經過せる前夜の歴史を聞き大に余等の爲めに同情を表し直に適宜の宿處を索めん事を計らる即ち先づルニン氏の宿せる「ホテル、コンチネンタル」に到り見るに一の空室あれども佛醫某既に宿料を前拂して未だ到着せざるなりと聞き如何ともするなし於是ハウ氏は後刻までに余の病家たる知人の許にて室の有無を探り有れば止宿を頼む事となすべしと約し余等は兩氏と別れ午後集會に出席せんと欲せしも疲勞甚し如かず直に下宿に歸りて休息せんにはと馬車を雇ふて歸宿して手紙杯を認めむと爲せし際ハ

ウ氏の使者として來る者あり同氏の病家にて甚だ美且清潔なる客室を借り入れたり至急此者に行李を渡せ但し兄等は晩餐會出席の準備をなし其處に在りて余等の至るを俟と云ふにあり於是余等は速かに燕尾服を着し他の衣服は行李と共に使者に渡し主婦に移轉の旨を報す主婦及嬢は其不意なるに驚き甚だ不満足のものゝ如し余等も亦甚だ氣の毒の思をしたれども最早是非共去らざるを得ず即ち「三ループル」の宿料を拂ひ埃つこと少時にしてハウ氏來り次でルニン氏來り會す仍て余等は兩氏に導れて同家を出てロー氏はハウ氏と同乗余はルニン氏と同乗にして馬車を驅りペトロウスキー公園に行く時尙ほ早きを以て園内を徜徉し一茶店に息ひ杯して後七時を期して會場に到る會場は公園の一隅に在る「マウリタニア」と稱する料理店にして蓋し莫斯科第一流に屬す庭園廣く園内の樹木は無数の青紅色電燈球を以て裝ひ電燈此の處を照し白晝よりも明なり樹下に供へたる食卓には着裝せる男女三々五々群をなして集り各好みの飲食をなせり余等招待に應じ來れる者は本日の主人公たる會頭教授ステパノウ氏に迎へられ待合室に導かる此日此處に會する者六十餘名にて奥のボリツチエル、シユロツテル、ヒヤリ、獨のクラウゼ、ユーラース、ペルトホルド、ハイマン、佛のクラウス、リユール、米のクナツプ、グライツマン等當時斯學に於ける泰斗ならざるなし室後には陸軍軍樂隊奏樂ありて興を助け八時露國の例に由り先づ賓客を庭園内の一少屋内に導き卓上に山海の冷肉を山の如く盛り其傍に種々なる「シユナツプス」瓶を并べ以て隨意に之を取らしめ凡そ興の盡きたる時主人公の案内にて食堂に移り晩餐會に列席す酒には「シヤンパン」紅白葡萄酒あり食には山海の珍味あり先づ賓主共に順次に食ひ且飲んで其將に終んとするに及んで主人公ステパノウ氏佛語にて謝詞を述べ即ち氏は極て温順なる容貌と尊敬の語調を以て來會者に向て遠來を謝し且諸氏の盡力及熱心にて本會の無事に結了せん事を望む旨を述べ次で坐中の年長者として立て最上席を占たる奥のボリツチエル氏は獨語にて今回の優遇を謝し且つ當地教授たり又た本日の主人公たるステパノウ氏及スタイン氏等は皆な我門下に遊びし者なり今茲に同氏等に迎へられて此盛會に列するは余の最も愉快に感ずる處なりと得意の狀を示し次で獨のハイマン氏のシユロツテル佛のカステル及び日本の余も交も〳〵立て獨語若くは佛語にて謝詞を述べ即ち余は我國の耳鼻咽喉科は尙ほ甚だ幼稚なるに拘はらず今余が耳鼻咽喉科家として諸君の間に伍し且つ此盛會に參列するを得るは余の最も光榮とするところなり諸君の言ふこと爲すこと何れも余の爲めには好模範ならざるなし故に余は悉く之を精細に觀察し以て他日の參考に供せんと欲す云々」の意味にて極めて低く出で且つ終りに會頭并に來會先輩諸氏の健康を祈りて杯を舉し坐中の各先輩は交々〳〵席を離れて余の爲めに杯を舉げ或は日本醫學の幼稚ならざるを辯するあり或は精細の觀察後世に恐るべしと評する者等ありて一時大に賑はしかりし次で「メキシコ」以太利等の諸氏も謝辭を述べ後ち當地耳鼻咽喉病學會々長スコット氏立て來る月曜日當地耳鼻咽喉病學會にて催すべき遠足會に本日の諸君を招待すべければ必ず枉て出席せん事を望むと述べ書記をして入場券を分配せしむ後ち主人公の案内にて餘興室に移りければ此地有名名の「チヨイネル」(三十人一群となる)唱歌手舞又

た露國藝妓の唱歌數番あり余は之を見る半ばにして庭園に出で「チカレ」を吹しつゝ徜徉す時に樹下に一卓を圍める盛裝せる一美人と「ナリンテ」帽を戴ける二人の紳士との愉快に談笑せるを見る忽ちにして其内の一紳士余に近き先づ已れを紹介し曰く余は當地醫藥器械商なり尊下は日本の岡田氏なる乎と余氏の余を知れるを怪み君何が故に余を知れるやと問へば余は今夕當公園に遊び此所に来れる時は尊下晚餐會々場に於て演説さるゝ時なりき余等之を窓外に於て聽き大に君を敬慕するの念を起したり君乞ふ來りて余等の爲めに杯を採れと余之れに應じ卓邊に至れば彼の美人は此紳士の細君にして他の紳士は「ヘーテルスブルグ」大學眼科教授「ドーンベルグ」氏なりき余はそれ〴〵紹介を終り主人の供したる「シャンパン」を傾け快談數刻に及ぶ斯る時宴會の餘興も終りを告げ三々五々園内の散歩を爲す者多し遙かの一隅より手を擧げて余を呼ぶ者あり余之を注視せば「ボリツエル」、ヤンゼン等耳家の一群なりき仍て余は紳士等に向ひ本日の厚意を謝し一日紳士の住宅を訪問すべく約して去りて「ボリツエル」氏の許に到り茶を喫しつゝ學術的の談話をなし來年を期して「ボリツエル」氏を維納府に訪ふを約し杯して時移るを忘れたるに偶々同行の「ハワード」氏余を尋ね來り時已に一時なり乞ふ余と共に去れと仍て一坐に謝詞を述べ再びを期して別れ直にロー、ハワ及余三人にて同乗して公園を出て豫て「ハワ」氏の周旋し呉れたる新寓宅に赴きぬ主人は六十歳許の老婦にて時已に二時なれども彼は余等の來るを俟ちて未だ寢に就かず即ち余等を室に導き茶などを出して慰め又ロー氏と余は室の甚清潔に見へ且つ裝飾の甚だ美なるを見て大に心を安んじ今夜こそは必ず安眠し得らるべしと信じハワ氏に周旋の勞を謝したり斯くて同氏は直に自室に歸り余等は各自室に入りて寢に就きぬ然るに豈圖らんや着床二三分にして又余の頸圍四肢を刺す者あり痒痒灼痛甚だし是に於て余は復「ロン」公の襲撃なるかと蹴起燭を點じ之を檢するに果して然り立るに二十餘疋の「ワンツエン」を捕獲し得たり後ち眠らんと欲せば又襲はれ終に前夜と等しく寸時も眠る能はざりき

二十一日午前七時衣服を改め主婦の食堂に到る主婦余等に向つて例の如く「モルゲン」の相接に次て昨夜良く安眠せし乎と問ふ余直に昨夜の出來事を明に告げんと欲せしも今回の宿處は友人「ハワード」氏の周旋に由り得たるものなるを以て同氏に對し之を明言するを躊躇し寧ろ已を得ず然り安眠せりと答へたり斯くて珈琲を終り九時車を驅りて會場に出席す此日は米國紐育府の「グライツマン」氏名譽會頭の席に就き第一席に維納の教授「ヒヤッ」氏は喉頭痛腫の診斷及療法に就ての抄録を述べ次で討論に移り「クラウゼ」、ハエツク、ローゼンベッヒ等の討論ありて初期にありては喉頭内療法にありて後期にありては喉頭抽出術の已を得ざるを論定し閉會したり十二時「マナーセ」中央事務處に到り明日の日程及び本日夕莫斯科市醫會よりの招待に係る園遊會入場券を受取り後ち中食を取り午後六時「ロイ」氏と共に午後七時の集會に出席す伯林教授「クラウゼ」氏名譽會頭席を占め教授「ハッセル」氏の食道検査法に就ての演説及「アモンストラチナン」あり余等之を聽き終りて直ちに宿處に歸り少時の休息後豫て本會より指定されたる有名の浴場「サントイスキー」に出掛け入浴す是れ全世界中有名の

浴場にして其壯大なるを得て記すべからず即ち三層の大屋樓上には數百人を容るべき浴後休息處あり其兩側に數十の分室ありて是れ亦た上等の休息處とす浴場は最下層に在つて天井は高く窓多く室内は蒸氣を以て充たされ中に數十間の臥臺あり浴客此處に來りて之れに坐すれば浴槽直に來りて全身を洗滌し後ち一層高き一隅に裝置されたる温浴槽内に到り浴さしめ隣室に備へある濯水裝置にて或は足下より或は頭上より或は體側より自由に冷水を灌かしむれば休息處に導かれ其處に於て衣服を改め髪を潤へなどして七十五錢を拂ふて去る（是れ余等の試みし男浴室の記載なり他に各分離浴女浴等あり）干時午後六時半なりしを以て急ぎ宿處に歸り衣服を「フロツクコート」に改め馬車を驅つて園遊會に赴く會場は「ソルニツカヤ」と稱する處にして園内中央に一堂あり中に音樂舞踊の餘興あり數千の貴女紳士其周圍に列したる椅子に由りて之を觀る園内諸處に「ビール」店あり茶店あり參會者をして隨意に飲ましむ余とロー氏は初めより園内に於て夕食を取らんと豫期し空腹を忍んで出席したるに余等到れる時已に一も喰ふべき者なく唯だ「ビール」と茶とを以て凌ぎ得るのみなり去れば兩人は園内を急ぎ一回したるのみにて直に園を去り馬車を驅りて市内の或る理店に赴き漸くにして飢を醫し得たり斯くて余等と同一の境遇に在りし者甚だ多く已に余の知人の中にも佛の「ヤステス」獨の「セナートル」、ヒルシュベルグの三氏の如きは甚しき飢渴の爲め園内を一覽すら爲す能はずし余等に先だち其處を去りて此料理店に在り而て諸氏余を見るや直に來りて無事を祝し共に杯を擧げて談笑し時を移しぬ十一時歸宿余意らく今夜こそ豫め十分なる作戦防禦を施し以て安眠を取らんと即ち先づ燈を探りて床邊を探り二十餘の「ワンツエン」を捕獲し次で床の周圍並に壁等に防蟲粉を散布し後ち消光一番寢に就かんと試みしに夜は暗く人靜まるに隨つて「ロン」公續々我防禦線を超へて進撃を初め遂に再三蹴起對戦を試みしも終に衆寡敵せず大に敗れ一睡も取る能はずして一夜を送りぬ

二十二日 此日は日曜日なるを以て市内五百餘の寺院は早朝より一齊に鐘を銜き初めたり是れ露國第一の名物にして毫も怪むに足らずと雖も余等之れを慣れざるの外客にありては甚だ騒しくして轉た不快の感を起すのみなりき九時珈琲を終り衣服を改め將に會場に出席せんとせし時友人「ハワード」氏來り曰く本日は日曜日なるを以て先づ市外「雀が岡」に散歩し歸路一二有名の寺院を參觀すべし余案内の勞を取らんと於是余は本日「クラウゼ」氏の藝者聲帶運動に就ての演説あるを以て之を聞かんと主張せしも終に同氏等に導かれて雀が岡に出掛けたり雀が岡はモスコウを去る五キロ迷の處に在りてモスコウ河畔の丘陵なり聞く會て「ナポレオン」露國遠征の際此の丘上に在りてモスコウ市を觀察したりと人此丘陵に上れば迂曲せるモスコウ河を眼下に望み百萬の大都モスコウ全市を眼中に入れ金色銀光を放てる數千の寺塔天上に屹立し其風景の絶美にして眺望の佳良なるを得て筆すべからず余等直に丘上の一料理店に入り此佳良の眺望を好有物とし「ビール」を命じ午食を取り後ち丘下に降り一小蒸汽船に乗りてモスコウ河を市街に向つて一哩進み中途上陸エルロエセルキルに立寄り之を一覽す該寺はモスコウ市第一の寺なり即ちモスコウ河畔に屹立しアレキサンデル第一世の創意にてアレキサンデル第二世に到り成功せし者

なり其建築費千五百萬「ルーブル」を要したりと云ふ天に突出せる三個の塔は金を以て被はれ柱及外壁は大理石より成り内部の裝飾四壁に掲げたる畫像皆な美且妙ならざるなし後馬車を驅りて「コンGRES」中央事務處に到り翌日の日程及報告書類等を受取り歸宿休息す此日炎天燦くが如く室内の寒暖計九十二度を示す然るに余等終日家外に在りて絶へず奔走す爲めに疲勞を覺ゆること甚し僅かに「サウフア」上に在りて一睡を買ふを得たり夕七時ハワードリソグ氏の案内にて「エリミターセ」と稱する遊園に赴く園の前面に劇場あり料理店あり又た園内には多くの樹木と小池ありて無數の電燈之を照し園の中央に在る大なる舞臺には絶へず男女の遊劇舞曲音楽等あり而して此所に集れる數千の美裝せる男女は或は之を觀て樂み或は園内を徜徉して甚だ賑なり余等は一二の遊劇を觀後園内の料理店にて夕餉を取り十二時歸宿す余は連日の不眠と連日の炎熱の爲め甚だ疲勞を覺へたと余の演説の已に近日に在るとに由り今にして一夜の安眠を得て以て精神を爽快にせんと希望し即ち前夜の如く豫め床邊を精査して「ワン公」を悉く捕獲し猶ほ以て殺蟲粉を散布し點燈の儘就床せしに豫防寸效を奏せず須臾にして又た「ワン公」の來襲甚し於是か余は最早百方術盡きたるを以て蹴起直に「サウフア」に移り眠らんと計りしに此處に於ても亦近壁より襲ひ來る「ワン公」の夥くして毫も眠る能はず最後の策として室の中央に三脚の木製椅子を並べ其上に毛布を敷き僅かに横臥を試みしに今回は位置の不便なりしが爲め又た毫も眠る能はず唯だ困苦の中に夜は明けて二十三日となりぬ

二十三日 午前八時珈琲を終り九時會場へ赴く本日は小兒科咽喉科及衛生學科の合併會にして舊大學内に開かれ實扶里里血清療法に就ての演説討論ありたり即ち伯林のバキンスキー、クリスチヤニアのイヨハンネツセン、ブカレストのロムニチヤノ、ウインのモンチー等諸氏の多數の材料に就ての研究報告あり而して其所説多少の異同なきにあらざれども概して實扶里里症に於ける血清療法は佳良の成績を呈し無論兒科若くは咽喉科に於ける治療の一大進歩をなしたるを證明したるものありき十二時散會歸路ホテル「コンチネンタル」食堂に於て午餐を取り一時ロー氏、ハウ氏及ルニン氏と共に莫斯科耳鼻咽喉病學會々長スコット氏の催しに係る遠足會に赴く即余等參會者は一定の參會徽章を胸前に掲げ先づ指定集合所即ち油畫展覽會場へ集り凡そ三十分時間同處に在りて隨意に油畫を觀覽せしめ後一時四十五分を期して兼て門前に裝置せる鐵道馬車三輛に乗込み(主客凡二百名)凡そ二十分進行して一の汽車停車場に到る此所には兼て余等に乗せたる馬車の近づけるを見て門前に並列せる陸軍軍樂隊を奏し又た美裝せる藝妓整列して來賓を迎ふ斯くて余等は已に烟を吐きて今や遅しと待受けたる別仕立汽車即ち前二輛及後二輛の客車に乗込み次で陸軍樂隊は中央の前一輛に藝妓の一隊は中央の後一輛に乗込み汽車は車掌の號令と共に汽笛一聲進行を初めぬ而して樂隊は發車を期して極めて勇壯なる音楽を奏し客車内の賓客は尙ほ日來の討論を熱心に續けるもあり或は耳科家の常として靜に音楽の妙を評するもあり極めて陽氣なり斯くて午後四時車は「ペトロウスコフ」ハウンモウスコフへの公園に着して直に下車樂隊を先遣となし二列になりて進み一徑を経て兼て設け置きたる式場に到る式場は松樹鬱蒼とし

て茂り地は青苔を以て被はる處にして諸處に卓と椅子とを置き各種の冷肉と葡萄酒、麥酒、茶、珈琲等を供ふ余等先づ隨意に着席且つ隨意に飲食し樂隊の樂藝藝妓の唱歌絶へず興を助け興特に旺なるとき本日の主人公たる莫斯科耳鼻咽喉病學會々頭スコット氏立て獨語を以て謝詞を述べ即ち我會は尙ほ甚だ幼稚にして未だ學會に於て一も爲したる處なし然れども今日我會の催しに強る本會に歐米及東洋の諸大家悉く臨席されたるは甚だ名譽とする處なり云々と述べ來會者の健康を祝して杯を擧ぐ次で獨のハイマン嬢のチャリ佛のカステス米のカナツプ等各其國語を以て本會の優待を謝せり次で余は日本國代表者として場の中央に立ち諸君と「獨語」呼びければ滿場拍手を以て迎へられたり仍て余は先づ以上各國の人々と大同小異の意味にて謝詞を述べ次で曰く日本に於ける耳鼻咽喉科は尙ほ甚だ幼稚にして我大學に於てすら余の歸朝を缺ち始めて之れが「クリニツク」を開かるゝ位なり以て其幼なるを知るべきなり然れども東京には賀古金杉小此木の三氏あり大阪には堀内氏ありて皆な歐洲特に獨逸にて専修したる學術を以て各門戸を開き特に金氏の如きは夙に「クルズ」を開き多くの開業醫をして斯學の一般を理解せしむることを勧め小此木氏も亦た近時之を催せりと聞く又以上の諸氏の創立に創る東京耳鼻咽喉科學會は毎月一回の演説討論を催し今や已に數卷の學術的會報をも發行したり故に我日本に於ける耳鼻咽喉科の尙ほ甚だ幼稚なるは今敢て之を辯護せずと雖も我日本語をして若し國際的邦語ならしめば諸君は必ず今日よりも尙ほ多く日本語の多少進歩しつゝあるを得し得るを斷言す(拍手) 我は諸君の進歩を窺ひ知るを得と雖も諸君は吾れの進歩を知るに由なし是れ國際醫學界に參觀せる余等の最も遺憾とする處なり(拍手) 故に余は本日此國際的學會に臨み諸君の間に伍するの榮を得たるを機とし爾今專ら我國斯學進歩を國際的に記載し以て諸君と共に斯學推の責務を盡すことに力めんと欲す諸君後進の余を愛し且つ教へよ敢て望む余は本會々頭スコット氏副會頭ステパノウ氏及來會の歐米各國の先輩諸君の健康を祈りて杯を擧ぐと絶叫せば二百余の來會者一時に杯を手にして余の身邊に集り或は日本に於ける前途甚だ多望なるを祝し或は勇氣の頌歌を賞し或は日本醫學の幼稚ならざるを辯じ北里博士緒方博士等の名を擧るあり或は前途余の占むべき學術上の位置を豫想し羨む者ありて一時は次の演説を中止せし有様なり斯くて少時の後メキシコ、スペイン、英國等の先輩諸氏は何れも簡單に謝詞を述べ終りてスコット氏は再び立て曰く全世界の大家如斯一處に會すること蓋し稀れなり仍て余は記念の爲め寫眞師をして撮影せしめん諸君乞ふ一處に集れと即ち椅子を並べ机を置きたる處に到り塊のポリツェル氏を中央に置き其前後左右に各國の教授夫人を並列せしめ瞬時にして撮影し終りぬ於是スコット氏又立ちて曰く諸君公園内を散歩しては如何と即ち諸君之に應じ三々五々組を爲して園内を散歩し凡そ十町計歩せしに眼界の及ばざる程廣き花園あり今を盛りと咲き亂れたる草花美しく裝ふたるの美人の笑て遠來の珍客を迎ふるの風情あり園の傍には一大家屋あり是れなん官立農學校にして即ち彼の美き花園は此學校に屬す余等は學校内に入りて教室實驗場等を通覽す校内諸處に麥酒あり紅茶ありて大に余等を饗應す後ち歩して再び式場に歸り皆な席に復するを見て塊のポリツェル氏來會